

「秘蔵宝鑑」を読む

長
澤
弘
隆

「秘蔵宝鑑」を読む

目次

■まえがき

■「秘蔵宝鑑」(巻上) 原文・書き下し・註記・私訳・付記

■序

■本論の前文

■第一 異生羝羊心

■第二 愚童持斎心

■第三 婴童無畏心

■「秘蔵宝鑑」(巻中) 原文・書き下し・註記・私訳・付記

■第四 唯蘊無我心

■第五 拔業因種心

■「秘蔵宝鑑」(巻下) 原文・書き下し・註記・私訳・付記

■第六 他縁大乘心

■第七 覺心不生心

■第八 如實一道無為心

■第九 極無自性心

■第十 秘密莊嚴心

■あとがき

■まえがき

天長七年（八三〇）、仏教各宗の主眼とするところをまとめて提出せよとの淳和天皇の勅命に応え、弘法大師空海（以下、宗祖大師）が同じ年に著述していた『秘蔵曼荼羅十住心論』を要略して著わしたのが、この『秘蔵宝鑑』である。宗祖大師晩年、ご入定の五年前、五十七才の時の作である。

この時期、宗祖大師の消息を見ると、

天長五年（八二八）、『綜藝種智院式并序』を著わすとともに、東寺の東側にあった藤原三守所有の地を拝領し、日本初の庶民の子弟のための私立学校「綜藝種智院」を創設。

『十住心論』『秘蔵宝鑑』を著述した翌年の天長八年（八三二）五月、悪瘡つまりタチの悪い皮膚の炎症を発症した。癰だともいう。癰は黄色ブドウ球菌が毛包（毛穴の奥で毛根を包んでいるところ）や脂腺（皮脂を通す分泌線）に感染して増殖し、隣同士の複数の毛包や毛包のまわりに同時に炎症を起し、それが周囲の皮膚組織にも広がって黄色ブドウ球菌がつくるいろいろな毒素によって膿瘍ができる皮膚疾患である。今では抗生物質で治療するが、空海の時代はなすすべもなかったのだろう。皮膚の小さい傷や皮膚が湿った状態が長く続くと発症するらしく、高野山の草堂には湿気が多かったことを想像させるが、若い頃から山林修行中に道術で得た不老長寿の丹薬（硫化水銀）を常用していて、その副作用ではないかとの俗説もある。

同じく天長八年（八三二）六月、病を理由に大僧都の位の返上を申し出るが、容れられず留任となった。

同九月、最澄の弟子円澄たち十数名から密教の付法を請われ受け入れる。

天長九年（八三二）正月、宮中の「金光明最勝会」を修し国家鎮護を祈る。つづいて紫宸殿において論義を行う。

同八月、高野山ではじめての「万燈万華会」を行い、その願文に自らの人生の万感を記す。

同十一月、高雄山寺を實慧・真済らに任せ高野山に籠る。穀物を断って三昧の日々を送る。

天長十年（八三三）、高野山金剛峯寺を真然に託し、實慧に後見させる。

承和元年（八三四）二月、東大寺真言院において『法華經』と『般若心經秘鍵』を講じる。『法華經』の講釈は生涯最後の講釈にもかかわらず、詳細な講釈書をつくったという。『般若心經秘鍵』は、空海最後の著作である。

同三月、勅により六人の高弟とともに比叡山に上り、西塔院の落慶法要に列し咒願師の役をつとめる。

承和二年（八三五）正月八日より七日間、空海の願い出によって、毎年、年初に行われてきた「金光明最勝会」に代わり「後七日御修法」がはじめて宮中で行われた。正月から水分も断っていたといわれている。

同正月二十二日、真言宗年分度者三名を上奏、翌日認められる。

同二月三十日、金剛峯寺が定額寺として認められる。

同三月十五日、弟子たちに遺告を与える。

同三月二十一日寅の刻、入定。

同三月二十五日、仁明天皇は勅使を遣つて喪料を供え、淳和上皇は弔書を送る。

同十月、嵯峨上皇が挽歌を贈る。

すなわち、すでに独自の空海密教の事教二相を大成し、長安で恵果和尚から受法した金胎両部の密教を土台に日本に展開すべき新しい国家的な仏法はできあがり、高野山を拠点に、平安京の東寺を国家鎮護の中心に据え、高雄山寺をその補佐とし、また有縁の寺を運営し、朝廷や東大寺をはじめとする国家仏教の勢力とも手を組み、密厳国家の建設への盤石の態勢を調えた時期であつた。

そのような時期に、宗祖大師は『十住心論』『秘藏宝鑰』を書いた。とくに『十住心論』は、大書であるとともに代表作である。そこに、私たち人間の日常である凡夫・衆生の世界にはじまり、倫理道徳や宗教心が芽生えて仏教の道に入り、小乗（大乘を経て、人間として究極の価値世界である真言密教へ至る十の階梯、すなわち「十住心」を説いた。「十住心」は人間

の心品転昇、すなわち生命が意識を持ち、意識が我執に染まり、その我執の抑滅によって心が純化され、やがて人格が本有の「菩提心」を自覚して仏格になる筋書きを取りながら、一方では我執に生きる凡夫・衆生も、中国の儒家や道家の人倫の道も、インドの「六師外道」「六波哲学」・ヒンドウの神々そして中国の道教も、仏教の釈尊の初期仏教も小乗（部派仏教）も大乘（唯識・中観・天台・華嚴）もみな最終ステージの真言密教に総合化され包含されることが暗喩されている。西洋の哲学なら精神現象学と言うだろうか、アウフヘーベンと言うだろうか。ヘーゲルに先立つこと一〇〇〇年である。

日本古来の伝統教学では、第一から第九までの住心を顕教（九顕）とし、その「九顕」を一つ一つ否定して次の住心に上昇する解釈の仕方を「九顕一密」と言い、第十住心の真言密教に「九顕」がすべて包摂される解釈を「九顕十密」としてきた。私は「九顕十密」が宗祖大師の真意だと思っている。宗祖大師の好む華嚴の「一即多」「多即一」でもあるからである。

その「十住心」。具には、第一「異生羝羊心」、第二「愚童持齋心」、第三「婴童無畏心」、第四「唯蘊無我心」、第五「唯蘊無我心」、第六「他縁大乘心」、第七「覚心不生心」、第八「二道無為心」、第九「極無自性心」、第十「秘密莊嚴心」である、その意味するところが、『秘藏宝鑰』の冒頭に簡略に説かれている。

第一 異生羝羊心	凡夫狂醉	不悟吾非但念姪食	如彼羝羊
第二 愚童持齋心	由外因縁	忽思節食施心萌動	如穀遇縁
第三 婴童無畏心	外道生天	暫得蘇息如彼嬰兒	犢子隨母
第四 唯蘊無我心	唯解法有	我人皆遮羊車三藏	悉攝此句
第五 拔業因種心	修身十二	無明拔種業生已除	無言得果
第六 他縁大乘心	無縁起悲	大悲初發幻影觀心	唯識遮境
第七 覺心不生心	八不絶戲	一念觀空心原空寂	無相安樂

第八如實一道心 一如本淨 境智俱融知此心性 號曰遮那

第九極無自性心 水無自性 遇風即波法界非極 蒙警忽進

第十祕密莊嚴心 顯藥拂塵 眞言開庫祕寶忽陳 萬德即證

第一 異生羝羊心 凡夫は狂醉して、吾が非を悟らず。但し姪食を念うこと、彼の羝羊の如し。

第二 愚童持齋心 外の因縁に由つて、忽ち節食を思う。施心萌動して、穀の縁に遇うが如し。

第三 嬰童無畏心 外道は天に生れて、暫く蘇息を得。彼の嬰兒と、犢子の、母に隨うが如し。

第四 唯蘊無我心 唯し、法有を解し、我と人とを皆遮す。羊車の三藏は、悉く此の句に攝す。

第五 拔業因種心 身に十二を修し、無明、種を拔す。業生は已に除き、無言の果を得。

第六 他緣大乘心 無縁に悲を起して、大悲初めて發る。幻影に心を觀じて、唯識、境を遮す。

第七 覺心不生心 八不に戲を絶ち、一念に空を觀ず。心原は空寂にして、無相安樂なり。

第八 如實一道心 一如は本淨にして、境智を俱に融ず。此の心性を知るを、號して遮那と曰う。

第九 極無自性心 水は自性無く、風に遇いて即ち波だつ。法界は極まるに非ず、警を蒙つて忽に進む。

第十 祕密莊嚴心 顯の藥は塵を拂い、眞言は庫を開く。祕寶は忽ち陳じて、萬德は即ち證す。

である。これを私なりに今風に言い換えれば

第一「異生羝羊心」は、人間の日常である、我執に生きる「無明」の段階。

第二「愚童持齋心」は、節食・持齋などで他に施し、我執からの離れが芽生え育つ段階。

第三「嬰童無畏心」は、天上界に生まれることを求める、外教・外道の我執の段階。

第四「唯蘊無我心」は、人無我・法我の声聞の我執の段階（小乗）。

第五「唯蘊無我心」は、独力で「十二因縁」を觀想して覺るもそれを他に説かない、縁覺（獨覺）の我執の段階（小乗）。

第六「他縁大乘心」は、大乘の唯識無境（唯識派・法相宗）にも我執が残る段階。

第七「覺心不生心」は、大乘の「八不中道」（中觀派・三論宗）にも我執が残る段階。

第八「一道無爲心」は、『法華經』絶対の「法華一乘」（天台宗）にも我執が残る段階。

第九「極無自性心」は、『華嚴經』が説く「蓮華藏世界」「海印三昧」「真如」「法界」「円融」「無礙」「盧舍那仏」にも、我執が残る段階。

第十「秘密莊嚴心」は、法身大日如来が説く、「五相成身」「生仏一如」「煩惱即菩提」の密教世界。究極の段階。

である。

『秘藏宝鑰』は『十住心論』を要約したものと云われるが、實際に解読してみると、簡略になった分かえって意味を取り難い箇所が多くなっているのではないかと実感した。記述の方法は、自ら各住心の主題を説きはじまるのと質問者の「問う」に対して答える二つの方法であるが、自ら説きはじまるにしても「問う」に答えるにしてもかならず、『大日經』『金剛頂經』『菩提心論』『守護国界主陀羅尼經』『金剛頂經』系の儀軌などを引いて経証としている。その経証のなかでも『大日經』『住心品』『具縁品』が多いのが特徴的であるほか、目を引くのは『法華經』に詳しい点で、例えば宗祖大師は『法華經開題』を著わし、承和元年（八三四）二月には、東大寺真言院で綿密な講釈書をもとに『法華經』を講じていて、宗祖大師にとってはおそらく、護国經典の主要なものとして重要なものだったのではないと思われる。そのほか密教典籍では『金剛頂經』系の儀軌への目配りが目立ち、瑜伽觀法への言及も多いことも看過できない。

『秘藏宝鑰』でよく知られていることに、冒頭の「悠悠たり悠悠たり」ではじまり「生れ生れ生れ生れて生の始に暗く、死に死に死に死んで死の終りに冥らし」の頌と、第四住心「唯蘊無我心」の途中に突如挿入される「憂国公子と玄関法師の十四問答」である。「生れ生れ生れ生れて生の始に暗く、死に死に死に死んで死の終りに冥らし」は、宗祖大師の視座が生命史や生命論に及んでいることを暗示し、「憂国公子と玄関法師の十四問答」は国家論・君主論 すなわちこの『秘藏宝鑰』を受け取る淳和天皇や朝廷幹部への教誡でもある。『秘藏宝鑰』は単に、真言密教の仏教他宗への優越性を説くにとどまらず、真言密教が生命史や生命論までの視座を持ち、国家論・君主論の現実をも論じる宗教哲学であることを意味している。

この『秘藏宝鑰』を読むにあたって、「原文」を「大正新脩大藏經テキストデータベース版（大正No.2426）を依用した。しかしところどころ誤字があり、電子版「定本 弘法大師全集」所収の『秘藏宝鑰』を参照した。古来、原本には各種あつて、その比較対照研究も試みられているが、私は便宜上「大正新脩大藏經テキストデータベース版」を用い、同時に電子版「定本 弘法大師全集」を参照した。

「原文」に続いて「書き下し」を付けた。ほぼ電子版「定本 弘法大師全集」所収の『秘藏宝鑰』に依ったが、私なりに書き下したところもある。この「書き下し」については古来、高野山（古義）系の「南山読み」と新義系の「根来読み」とがあつて、それを「読曲（よみくせ）」と言うが、私の属する真言宗智山派にはまた、智積院（総本山・法流の源泉）なりの「読曲」がある。しかし、この稿は伝統教学の学術論文ではないので、それらの伝統的な「読曲」を頭に置きつつ、敢えて私が修得した漢文読みの「書き下し」を用いたところもある。

「書き下し」に続いて「註記」を付けた。専門語や難解な語の解説である。できるかぎり正確を期したが調べ尽くせないものや長くなるので簡略にしたものもある。とても時間を費やしたがご参考になれば幸いである。この「註記」は、先学の

ご労作にしばしば見られる、現代語訳の不明確さに首をかしげた経験に由来するもので、空海密教初学者の手助けになれば幸いである。

「註記」のあとに「私訳」を付けた。私なりの現代語訳であるが、意識による誤訳を避けるため、できるだけ原文に添って直訳した。これも、失礼ながら、先学の原文から離れた意識や、意味のよくわからない現代語訳にたびたび首をかしげた経験に由来する。

さらに、ご参考までに「付記」をとところどころ付け、私論を述べさせていただいた。

後期高齢による脳力・視力の衰えのせいか、パソコンの文字入力や漢字変換のミスに鈍感になった。誤字・脱字がありましたらご容赦のほどを。

今回はとくに、松長有慶博士の『訳注 秘蔵宝鑑』にお世話になった。とくに伝統教学の解釈や近代の密教研究者の解釈についての懇切な「用語釈」にとっても助けられた。学恩に至心感謝である。松長先生の現代誤訳はしばしば意識的であるが、伝統教学に疎い私には意識はまちがいやすく、ほとんど原文に添って直訳した。

難解な言葉や表現について、宥快の『秘蔵宝鑑鈔』（『続真言宗全書』）や、那須政隆博士の『秘蔵宝鑑』（『国訳一切経』・高井観海博士の『秘蔵宝鑑講義』）に教えられることがたびたびあった。こうした先学のご労作があつてはじめて、私のような在野の草学道が宗祖大師の著作が読めるのである。感謝のほかない。

■「秘藏宝鑰」卷上 原文・書き下し・註記・私訳・付記

■序（大意序）

【原文】

悠悠悠悠太悠悠 内外縑細千萬軸 杳杳杳杳甚杳杳 道云道云百種道
書死諷死本何爲 不知不知吾不知 思思思思聖無心 牛頭骨草悲病者
斷菑機車慙迷方 三界狂人不知狂 四生盲者不識盲 生生生生暗生始
死死死死冥死終

【書き下し】

悠悠たり悠悠たり、 太だ悠悠たり 内外の縑細、 千萬の軸あり

杳杳たり杳杳たり、 甚だ杳杳たり 道を云い道を云うに、 百種の道あり

書き死に、 諷み死に、 本何に爲ん 知らじ知らじ、 吾も知らじ

思い思い思い思うとも、 聖も心にかすること無し 牛頭草を骨めて、 病者を悲しみ

斷菑車を機つて迷方を慙れむ 三界の狂人は狂なることを知らず

四生^{ししよう}の盲者は盲なることを識らず 生れ生れ生れ生れて生の始に暗く

死に死に死に死んで死の終りに冥らし

【註記】

①縑緞…書物の表装に使われる薄い絹。転じて書物・書籍。

②杳杳…はつきりしない、深く暗い、遠い。

③書き死に、諷み死に、本何に爲ん…伝統教学では、「書死（た）え諷死えなましかば、本何にせん」と書き下し、「書くこと・読誦することが絶えてしまえば、（仏法の）本源はどうなるのか」といった解釈をする学匠が多いが、この読み方には無理があるという（松長有慶『訳注 秘蔵宝鑰』）。私はこれに従う。

④心すること無し…伝統教学に、この「心」は後世の写本の劣化で、もともとは「思」であるとする説と、そのまま「無心」とする説がある。私は松長先生の解釈に倣い、聖者でさえも經典の書写や読誦ではサトリが心に現前しない、と読む。

⑤牛頭…古代中国の伝承に出る炎帝神農。医薬と農耕を司るという。薬草と毒草を区別するため百草をなめたとされる。

⑥斷菑…中国、周の文王の子周公旦は、身体が枯れ木のように細く貧弱だったので、斷菑と言われた。斷ち切られた荒地という意味である。この周公旦は、賢者が訪れると食事中でも口から食べ物を出して対応したと言われる。ここは、来客に指南車という方角をまちがえないようにできた車を提供したという故事。

⑦四生…胎生（母胎生）・卵生・湿生（水辺で生まれる虫類）・化生（宿業で生まれる衆生）。

【私訳】

はてしない哉、はてしない哉、実に無限なる哉。仏教内外の書籍に、幾千万の書軸がある。

深くて暗い哉、深くて暗い哉、そしてはるかに遠い哉、サトリへの道をいろいろ言うが、百通りの道がある。経論を書写しては死に、經典を誦誦しては死をくり返しても、サトリの本源は如何ともし難い。

わからない、わからない、私にもわからない、思考し思考し思考しても、聖者でさえ心にサトリが現前することはない。

古代中国の炎帝神農は、百草をなめて藥草を選び、その煎じ藥を病氣の人に与えて哀れんだ。

古代中国、周の周公旦は、來客が帰る時、指南車という方角をまちがえないようにできている車を与え、迷って方角をまちがえないよう慫れんだ。

欲界・色界・無色界の三界で煩惱に酔う人は、自ら狂っていることを知らず。胎生・卵生・湿生・化生の生を受けたものは自ら道理が見えていないことに気づかない。

生れ生れ生れ生れて生をくり返すも、生の本初が見えず、死に死に死んで死をくり返しても、死の終りもわからない。

【付記】

「生れ生れ生れ生れて」で有名なこの冒頭の大意序には、伝統教学では古来さまざまな解釈と論議があるようだが、本書は學術研究ではないので、参考までにとどめ深入りしない。

【原文】

至如空華眩眼龜毛迷情。謬著實我醉心封執。渴鹿野馬奔於塵鄉。狂象跳猿蕩於識都。遂使十惡快心日夜作。六度逆耳不入心。謗人謗法不顧燒種之辜。耽酒耽色誰覺後身之報。閻魔獄卒構獄斷罪。餓鬼禽獸焰口挂體。輪迴三界跨跼四生。大覺慈父觀此何默。是故設種種藥指種種迷。意在此歟於焉修三綱五常則君臣父子之道有序不亂。習六行四禪則厭下欣上之觀勝進得樂。唯蘊遮我八解六通。因緣修身空智拔種。無緣起悲唯識遺境則二障伏斷四智轉得。不生覺心獨空慮絕則一心寂靜不二無相。觀一道於本淨觀音熙怡。念法界於初心普賢微咲。心外礦垢於此悉盡。曼荼莊嚴是時漸開。

惠眼破無明之昏夜。日月定光現有智之薩埵。五部諸佛擊智印森羅。四種曼荼住法體駢填。阿遮一睨業壽之風定。多擊三喝無明之波洄。八供天女起雲海於妙供。四波定妃受適悅於法樂。十地不能窺竅。三自不得齒接。祕中之祕覺之又覺。吁吁不知自寶狂迷謂覺非愚而何。考慈切心非教何濟。投藥在此不服何療。徒論徒誦醫王呵叱。爾乃九種心藥拂外塵而遮迷。金剛一宮排內庫而授寶。樂不樂得不得自心能爲。非哥非杜我心自證而已。求佛薩埵不可不知。摩尼燕石驢乳牛糞。不可不察。不可不察。住心深淺經論明說具列如後。

【書き下し】

空華眼を眩かし、龜毛情を迷わし、實我に謬著して、醉心封執す。渴鹿野馬、塵郷に奔り、狂象跳猿、識都に蕩るが如くに至つては、遂使じて十惡、心に快くして日夜に作り、六度耳に逆つて心に入れず。人を謗じ法を謗じて燒種の辜を顧みず。酒に耽り色に耽つて誰か後身の報を覺らん。閻魔・獄卒は獄を構えて罪を斷じ、餓鬼・禽獸は口を焰やして體に挂く。三界に輪廻し四生に踰跼す。大覺の慈父は此れを觀て何ぞ默さん。是の故に種種の藥を設けて種種の迷を指す。意此れに在るか。焉に於いて、三綱・五常を修すれば則ち君臣・父子の道、序有りて亂れず。六行・四禪を習えば則ち厭下欣上の觀、勝進して樂を得。唯蘊に我を遮すれば八解六通あり。因縁に身を修すれば空智種を拔く。無縁に悲を起し、唯識に境を遣れば則ち二障伏斷し四智轉得す。不生に心を覺り、獨空慮絶すれば則ち一心寂靜にして不二無相なり。

一道を本淨に觀ずれば觀音熙怡し、法界を初心に念ずれば普賢微笑す。心外の礦垢、此に於いて悉く盡き、曼荼の莊嚴、

是の時漸く開く。ハハの惠眼は無明の昏夜を破し、日月の定光は有智の薩埵を現す。五部の諸佛は智印を擎げて森羅たり。

四種の曼荼は法體に住して駢填たり。阿遮一睨すれば、業壽の風定まり、多隸三喝すれば無明の波濤れぬ。八供の天女は

雲海を妙供に起し、四波の定妃は適悦を法樂に受く。十地も窺窺すること能わず、三自も齒接することを得ず。祕中の祕、

覺のまた覺なり。吁吁、自寶を知らず、狂迷を覺と謂う、愚に非ずして何ぞ。考慈心に切なり、教に非ずんば何ぞ濟わん。

藥を投ぐることに此れに在り、服せずんば何ぞ療せん。徒らに論じ徒らに誦すれば、醫王呵叱せん。爾れば乃ち、九種の心

藥は外塵を拂つて迷を遮す。金剛の一宮は内庫を排いて寶を授く。樂と不樂と得と不得と自心能く爲す。哥に非ず杜に非

ず、我心自ら證するのみ。求佛の薩埵、知らずんばあるべからず。摩尼と燕石と驢乳と牛糞、察せずんばあるべからず、察せずんばあるべからず。住心の深淺、經論に明らかに説く。具さに列ぬること後の如し。

【註記】

①空華…「十喻」「十緣生句」の虚空華、空中に咲く花。あると思つても實際にないもの。

②龜毛…龜の毛。あると思つても實際にないもの。宗祖大師は『三教指帰』で儒家の思想を語る龜毛先生を登場させている。

龜毛先生は、幼少期から宗祖大師に漢籍を徹底して教え込んだ叔父の阿刀大足がモデルだと言われるが、すでに官僚への

出世街道を捨て仏教僧の道を選んだ宗祖大師にとって、儒家の思想は「虚空華」のようなもので、それを説く大足はないものに等しい亀毛だったにちがいない。

③十惡：「殺生」「偷盜」「邪淫」「妄語」「綺語」「惡口」「兩舌」「貪欲」「瞋恚」「邪見」。

④六度：六波羅蜜。

⑤三綱：「君臣」「親子」「夫婦」。

⑥五常：儒家の思想が説く君子の道の徳目。「仁」「義」「礼」「知」「信」。

⑦六行：インド古六師外道の六種の觀法。「苦行」「麁行」「障行」「淨行」「妙行」「離行」。前の三行が現世を穢土と見る觀法。あとの三行は天界の觀法（松長有慶博士『訳注 秘藏宝鑰』）。

⑧四禪：六師外道の、「六行」の觀法によって得られる色界における四段階の境地（松長有慶博士『訳注 秘藏宝鑰』）。

仏教では、「初禪」（欲界を離れ、尋・伺は残るも、離によって喜・樂とともにある境地）・「第二禪」（尋・伺がなくなり、内清淨によって喜・樂とともにある境地）・「第三禪」（喜を離れ、正念・正見によって樂とともにある境地）・「第四禪」（樂も消え、不苦不樂の受の境地）。

⑨八解六通：「八解脫」と「六神通」。「八解脫」は、『瑜伽師地論』では「有色觀諸色解脫」「内無色想觀外諸色解脫」「淨解脫身作証具足住解脫」「空無辺处解脫」「識無辺处解脫」「無所有处解脫」「非想非非想处解脫」「想受滅身作証具足解脫」。

「六神通」は、「神足通」「天眼通」「天耳通」「他心通」「宿命通」「漏尽通」。

⑩因縁：十二因縁とする。

⑪無縁：三種の慈悲（有情縁の慈悲・法縁の慈悲・無縁の慈悲）の「無縁の慈悲」（松長有慶博士『訳注 秘藏宝鑰』）。因縁所生を越えた真如を縁とする慈悲。

⑫二障：煩惱障と所知障。

⑬一道：法華一乘（天台）とする。

⑭ 日光と月光。真言行者は瑜伽道場に入る時、右目に「」を左目に「」を觀じ金剛薩埵の威儀に住する。

⑮ 五部：金剛界の五部。「仏部」「金剛部」「宝部」「蓮華部」「羯磨部」。

⑯ 駢填：並び満ちている。

⑰ 阿遮：不動明王（アチャラ Acala）。

⑱ 多隸：降三世明王（トライロークヤ・ヴィジャヤ Trailokya-vijaya）

⑲ 八供の天女：内供養・外供養の八供養の妃菩薩。

⑳ 窺竅：スキをねらうこと。

㉑ 二自：華嚴の行者。『釈摩訶衍論』が説く「三百一心摩訶衍」（松長有慶『訳注 秘蔵宝鑰』）。

㉒ 齒接：齒は並ぶ・列をつくる、の意で、同列に並ぶこと（松長有慶『訳注 秘蔵宝鑰』）。

㉓ 哥：目上の人。兄もしくは父。

㉔ 杜：母。

㉕ 薩埵：金剛薩埵ととる。

㉖ 燕石：燕山から出る玉に似た石。まがいもの。似て非なるものを珍重し自慢すること。小才の自惚れ。

㉗ 驢乳：ロバの乳。粗末なもの、の意。

㉘ 牛醐：牛乳からつくった醍醐。貴重なもの、の意。

【私訳】

第一 異生羝羊心

あると思っても実際にはない幻の「虚空華」は人の眼をくらまし、同じく実際にはない亀の毛は人の心を惑わし、事物事象の実体（実我）が実際にあるものと誤って執着し、酒に酔ったような心を閉ざしている。のどが渴いた鹿や野生の馬が陽炎

の水場をめざして乾いたホコリの地を疾駆し、粗暴な象や跳びはねる猿が思うがままに放蕩するように、人間もそうであるとするれば、とうとう「殺生」「偷盜」「邪淫」「妄語」「綺語」「惡口」「兩舌」「貪欲」「瞋恚」「邪見」の「十惡」が、心に心地よく日夜「十惡」に染まり、「六波羅蜜」など耳に逆って心に入らない。人を謗り法を謗り、本来具有の仏種を焼いてしまう罪を顧みず、酒に耽り好色に耽って因果応報を自覚しない。閻魔大王や獄卒は牢獄を用意して断罪し、餓鬼道に堕ちた者は口から火を噴き、畜生道に堕ちた者は身体に重荷を引っかけ、三界に輪廻して四生をさまようのである。

第二 愚童持斎心

サトリを得た仏（慈父）は、以上の異生羴羊心を見てどうして黙っていいようか。だから、さまざまな薬を用意してさまざまに迷妄を指摘するのである。その本意は異生羴羊心の衆生を我欲の苦から救うことにあるのである。

そこで、君臣・親子・夫婦の「三綱」と仁・義・礼・知・信の「五常」の徳を行えば、君臣・親子の道は秩序が乱れない。

第三 嬰童無畏心

六師外道が「六行」「四禪」を修習すれば、人間界を避け天界を望む觀法が進んで修せられ、安樂の境地が得られる。

第四 唯蘊無我心

私や事物事象はみな「色」「受」「想」「行」「識」の「五蘊」から成っていると考えて「我」（我執）を否定すれば、「八解脱」（『瑜伽師地論』では「有色觀諸色解脱」「内無色想觀外諸色解脱」「淨解脱身作証具足住解脱」「空無辺处解脱」「識無辺处解脱」「無所有处解脱」「非想非非想处解脱」「想受滅身作証具足解脱」と「六神通」（「神足通」「天眼通」「天耳通」「他心通」「宿命通」「漏尽通」）が得られる。

第五 拔業因種心

「十二因縁」に随つて觀法を修すれば、人法二空の智慧が我執の種を抜いてくれる。

第六 他縁大乘心

因縁所生を越えた生仏不二の真如を縁とする大悲心を起し、あらゆるものはアーラヤ識から転じたもので実体がない（無自性）と思えば、煩惱障と所知障の「二障」を断ち、世間の衆生の認識作用が「大円鏡智」「平等性智」「妙觀察智」「成所作智」の「四智」に変転する。

第七 覺心不生心

不生不滅などの「八不」を觀想して自心の本性を覺り、絶対空の境地で言亡慮絶すれば、心はなべて寂靜になり、相對的な二律の執着がなくなる。

第八 一道無為心

法華一乘を本来清淨と觀想すれば、觀世音菩薩は歡ぶ。

第九 極無自性心

初發心時にサトリの世界（「法界」）を觀想すれば、普賢菩薩は微笑む。

第十 秘密莊嚴心

心の外に固まつていた塵垢（第九住心まで）はここにおいてすべてなくなり、心中に具有された曼荼羅の飾り（第十住心）

が、この時ようやく顕現する。行者が瑜伽の道場に入るに、右目に日光の「na」を、左目に月光の「」を観想すれば、煩惱の本源である「無明」の闇夜を破り、両眼の日と月の光は五智をもつ金剛薩埵を光り浮かび上がらせる。「仏部」「金剛部」「宝部」「蓮華部」「羯磨部」の「五部」の諸尊は、それぞれの印を結んだり仏智の証しを持したりして森羅万象のように数限りなく、「四種曼荼羅」の諸尊はそれぞれ（絵図・種子・象徴物・動作など）の尊体に住して並び充ちている。不動明王（阿遮）が開いている右目で睨めば、宿業の風は止み、降三世明王（多隸）が調伏の真言を「吽・うん・hum」「吽」「吽」と三度誦すれば、「無明」の波浪は静まる。内供養・外供養の八供養の妃菩薩は、雲海のようににはてしなく多くの供物を如来に献じ、四波羅蜜の妃菩薩は（愛欲の快感が本来清浄であることに）満悦した喜びを自ら法樂として受持するのである。（この境地は）「十地」の菩薩（天台）もスキをねらうことができない。華嚴の修禪者も同列に並ぶことなどできない。秘中の秘であり、サトリのなかのサトリである。

ああ、（迷える衆生は）本性成仏という自分の宝を知らず、煩惱に染まって輪廻をさまようのをサトリだと言う。愚かではなくて一体何であろう。仏世尊はこうした迷える衆生を切に哀れんで仏法を説き、仏法はなくてどのようなにして衆生を救うのか。応病与薬、心の病にに応じて投薬するのである。薬を飲まずしてどうして治癒するだろうか。いたづらに仏法を論じいたづらに經典を誦誦すれば、医王の仏は叱るだろう。だから、（第九住心までの）九住心の薬（顕教）は外の塵を払って迷妄をなくすだけであり、一方密教のダイヤモンドのように堅固な宮殿は、その奥深い庫に秘蔵されている宝を（衆生に）授けるのである。この宝を楽しむか楽しまないか、自分のものにするかしないか、それは自分の心が決めることである。父でもなく母でもなく、自分自身の心が自ら（その宝を）証明しなければならぬ。成仏を求める修行者はこのことを知らなければ修行者たり得ない。如意宝珠（摩尼）と燕山から出る玉に似た石（玉のまがいもの）と、粗末なロバの乳と貴重な醍醐と、これらのちがいの察しがいかなければならない。心の在り様の深い浅いについては、経論に明かされている。詳しくは、あとで述べることにする。

【原文】

頌曰

歸命金剛内外壽 離言・垢過・等空・因 作遷慢如眞乘寂 制體・簾・光・蓮・唄・仁
日幢華眼鼓勃駄 金寶法業歌舞人 捏鑄剋業威儀等 丈夫無礙過刹塵

【書き下し】

頌曰

金剛内外の壽と 離言と垢過と等空と因と

作と遷と慢と如と眞と乗との寂と 制體と簾と光と蓮と唄との仁と
日と幢と華と眼と鼓との勃駄と 金と寶と法と業と歌と舞との人と
捏と鑄と剋と業と威儀等との 丈夫無礙にして刹塵に過ぎたるに
歸命し奉る

【註記】

①金剛内外の壽…金剛は金剛輪、金剛輪は地大、地大は「𑖀」、「𑖀字」は「本初不生」、「内外」は「有情」と「非情」。「寿」は「有情」「非情」の寿。すなわち大日如来の永遠のいのち（「本不生」）（松長有慶『訳注 秘蔵宝鑰』）。この文脈はわたしにはよくわからない。金剛輪は、転法輪（四輪）だとすると阿閼如来の法輪。

私は、ダイヤモンドのように堅固な「地大」を表象する「𑖀字」、すなわち「本初不生」を生の本源とする「有情」「非情」の生命（寿）、つまりは大日如来、と解釈した。

②離言…「𑖀字」、「水大」。

- ③垢過：「了字」、「火大」。
- ④等空：「𑖦字」、「空大」。
- ⑤因：「𑖦字」、「風大」。
- ⑥作：「𑖦字」、「作業 karya」。
- ⑦遷：「𑖦字」、「遷流 cyuti」。
- ⑧慢：「𑖦字」、「驕慢 janka」。
- ⑨如：「𑖦字」、「如如 rathata」。
- ⑩眞：「𑖦字」、「真諦 parama-artha」。
- ⑪乘：「𑖦字」、「乘 yāna」。
- ⑫寂：寂默＝「牟尼 muni」＝仏世尊＝如来。
- ⑬制體：「チャイトウヤ caitya」。仏塔。ストウーパ（卒塔婆）。大日如来の「法界体性塔」。
- ⑭簾：幢幡。宝幢如来の三昧耶形。
- ⑮光：如意宝珠の光明。開敷華王如来の三昧耶形。
- ⑯蓮：蓮の花。無量寿如来の三昧耶形。
- ⑰唄：ほら貝。天鼓雷音如来の三昧耶形。
- ⑱仁：「仁者・覚者 jina」＝仏陀＝如来。
- ⑲日：大日如来。
- ⑳幢：宝幢如来。
- ㉑華：開敷華王如来・
- ㉒眼：無量寿如来（蓮華眼）。

②③ 鼓…天鼓雷音如来。

②④ 勃駄…仏 Buddha＝如来。

②⑤ 金…金剛波羅蜜菩薩。金剛界曼荼羅「成身会」、大日如来の「四親近」、四波羅蜜菩薩。

②⑥ 寶…宝波羅蜜菩薩。金剛界曼荼羅「成身会」、大日如来の「四親近」、四波羅蜜菩薩。

②⑦ 法…法波羅蜜菩薩。金剛界曼荼羅「成身会」、大日如来の「四親近」、四波羅蜜菩薩。

②⑧ 業…業波羅蜜菩薩。金剛界曼荼羅「成身会」、大日如来の「四親近」、四波羅蜜菩薩。

②⑨ 歌…金剛歌菩薩。金剛界曼荼羅「成身会」、内の四供養妃菩薩。

③⑩ 舞…金剛舞菩薩。金剛界曼荼羅「成身会」、内の四供養妃菩薩。

③⑪ 人…「寂」・「仁」に同じ。

【私訳】

ダイヤモンドのように堅固な「地大」を表象する「𑖀字」、すなわち「本初不生」を生の本源とする「有情」「非情」の生命(寿)、つまりは大日如来、

「離言」(𑖀字・水大)・垢過(𑖀字・火大)・等空(𑖀字・空大)・因(𑖀字・風大)、すなわち「五大」を象徴とする五仏、

「作」(𑖀字)・「遷」(𑖀字)・「慢」(𑖀字)・「如」(𑖀字)・「真」(𑖀字)・「乘」(𑖀字)といった悉曇種字で表わされる「法曼荼羅」の「諸如来(寂黙)」、

「制體」(チャイトウヤ・仏塔)・「簀」(幢幡)・「光」(如意宝珠の光明)・「蓮」(蓮花)・「音」(ほら貝)で象徴される胎藏界「三昧耶曼荼羅」の「五如来(仁者)」、

「日」(大日)・「幢」(宝幢)・「華」(開敷華王)・「眼」(無量寿)・「鼓」(天鼓雷音)の胎藏界「大曼荼羅」の「五如来(勃駄)」、

「金」(金剛波羅蜜菩薩)・「寶」(宝波羅蜜菩薩)・「法」(法波羅蜜菩薩)・「業」(業波羅蜜菩薩)と「歌」(金剛歌菩薩)・「舞」(金剛舞菩薩)といった金剛界「大曼荼羅」の「八供養菩薩」など。
「捏」(塑造)・「鑄」(鑄造)・「剋」(木彫)で造られ、活動し規律正しく起居するなどの「羯磨曼荼羅」の諸尊、妨げなく無量無数のこれら諸尊に帰依いたします。

【原文】

我今蒙詔撰十住頓越三妄入心眞霧見光無盡寶自他受用日彌新較

【書き下し】

我れ今、詔を蒙つて十住を撰す。頓に三妄を越えて心眞しんじんに入らしめん。

霧を褰かげて光を見るに無盡の寶あり。自他受用、日に彌み新しんなり。

【註記】

①詔…淳和天皇の詔勅。

②十住…十住心。

③三妄…三妄執。「鹿妄執」「細妄執」「極細妄執」。

④心眞…凡夫・衆生が本来具有の菩提心の眞実世界。サトリの境地。

⑤自他受用…伝統教学に二説がある。自受用身と他受用身の妙なる活動という説と、両受用身とともに受用し修行し、密教

の繁栄を祈るという説（松長有慶『訳注 秘蔵宝鑑』）。私は、自受法樂にしても利他の説法にしても、とした。

【私訳】

私は今、淳和天皇の詔勅によって「十住心」について撰述する。すみやかに「疏妄執」「細妄執」「極細妄執」の「三妄」を越えて、凡夫・衆生を本来具有の菩提心の眞実世界に入らせたく思う。煩惱の霧を除いて差し込む光を見ると、そこには尽きないほどの無量の法宝（密教）が見える。自受法樂にしても利他の説法にしても、法宝は日々新たである。

■本論の前文

【原文】

較祖求伽梵幾郵到本床如來明説此十種入金場

已聽住心數請開彼名相心名後明列諷讀悟迷方

【書き下し】

較祖はつそにして伽梵はつそを求む。

幾郵いくんまやしてか本床に到る。

如來明らかに此れを説く。

十種きんじょうにして金場に入る。

已に住心の數を聽く。請う、彼の名相を開け。心の名は後に明らかに列す。諷讀して迷方を悟れ。

【註記】

①較祖：較は旅に出る時道の神を祀ること。祖ははじめ。旅の出發。転じて發心。

②伽梵：「薄伽梵 Bhagavat」、仏世尊。

③幾郵：郵は宿場・宿駅。

④十種：「十住心」。

⑤金場：金剛乘、第十秘密莊嚴心。

⑥心：住心。

⑦諷讀：味わって読むこと。

【私訳】

初發心時にすでに仏世尊になることを希求し、いくつ宿場（住心）を経れば本来具足のサトリの境地に到るのか。

如來はそれについて明らかに説いている。「十住心」を経て金剛乘（密教）に入るのである。
すでに住心の数は聴いた。その住心の名称・外形を聞かせてください。

住心の名称はのちに連名にして明らかにする。よく味わって読み、迷妄の何たるかを悟ることである。

【原文】

第一異生羝羊心	凡夫狂醉	不悟吾非但念姪食	如彼羝羊
第二愚童持齋心	由外因縁	忽思節食施心萌動	如穀遇縁
第三婴童無畏心	外道生天	暫得蘇息如彼嬰兒	犢子隨母
第四唯蘊無我心	唯解法有	我人皆遮羊車三藏	悉攝此句
第五拔業因種心	修身十二	無明拔種業生已除	無言得果
第六他縁大乘心	無縁起悲	大悲初發幻影觀心	唯識遮境
第七覺心不生心	八不絶戲	一念觀空心原空寂	無相安樂
第八如實一道心	一如本淨	境智俱融知此心性	號曰遮那
第九極無自性心	水無自性	遇風即波法界非極	蒙警忽進
第十祕密莊嚴心	顯藥拂塵	眞言開庫祕寶忽陳	萬德即證

【書き下し】

第一 異生羝羊心 凡夫は狂醉して、吾が非を悟らず。但し姪食を念うこと、彼の羝羊の如し。
第二 愚童持齋心 外の因縁に由つて、忽ち節食を思ふ。施心萌動して、穀の縁に遇うが如し。

第三 嬰童無畏心 外道は天に生れて、暫く蘇息^{そそく}を得。彼の嬰兒と、犢子^{とくし}の、母に隨うが如し。

第四 唯蘊無我心 唯し、法有を解し、我と人とを皆遮す。羊車^{ようじや}の三藏は、悉く此の句に攝す。

第五 拔業因種心 身に十二^{じふに}を修し、無明、種を拔す。業生^{ごうじやう}は已に除き、無言の果を得。

第六 他縁大乘心 無縁に悲を起して、大悲初めて發る。幻影に心を觀じて、唯識、境を遮す。

第七 覺心不生心 八^はに戲を絶ち、一念に空を觀ず。心原は空寂にして、無相安樂なり。

第八 如實一道心 一如は本淨にして、境智を俱に融ず。此の心性を知るを、號して遮那^{じやな}と曰う。

第九 極無自性心 水は自性無く、風に遇いて即ち波だつ。法界は極まるに非ず、警を蒙つて忽に進む。

第十 祕密莊嚴心 顯の藥は塵を拂い、眞言は庫を開く。祕寶は忽ち陳じて、萬德は即ち證す。

【註記】

①蘇息：ひと息つく。

②犢子：子牛。

③羊車：『法華經』「譬喻品」に説かれる「三車」（「羊車」「鹿車」「牛車」）の「羊車」。「声聞」「緣覺」「菩薩」の「三乗」の

「声聞」の譬喩。

④三藏：「經」「律」「論」。

⑤十二：十二因縁。

⑥業生：宿業の煩惱。

⑦無縁…唯識無境。無自性・空で実体がない幻影のような認識対象。

⑧八不…龍樹の『中論』に説かれる「不生不滅」「不常不斷」「不一不異」「不来不去」。

⑨一如…認識する主体と認識される客体の一体化。

⑩遮那…報身の盧遮那仏。

【私訳】

第一 異生羝羊心 凡夫・衆生は迷妄にさまよい、自分の非を自覚しない。それどころか性欲と食欲を充たすことに夢中で、まるで牡羊のようである。

第二 愚童持齋心 対外的な事由ですぐに節食を思い立ち、施食の心を芽生えさせる。穀物の発芽のようである。

第三 嬰童無畏心 外道の人は天に生れて、ようやくひと息つく。乳飲み子や子牛が母のそばでホッとするのと同じである。

第四 唯蘊無我心 法有を肯定し、自身の我と人我とを否定する。「声聞」(羊車)の教え(三蔵)は、ことごとくこの住心に含まれる。

第五 拔業因種心 「十二因縁」に随って観法を修すれば、人法二空の智慧が「無明」の種を抜いてくれる。宿業の煩惱は除かれ、無言の阿羅漢果を得る(縁覚道)。

第六 他縁大乘心 因縁所生を越えた生仏不二の真如を縁として悲心を起し、慈悲心が初めて起る。あらゆるものは実体がなく、幻影にすぎないことを観想して、唯識無境を会得する。

第七 覺心不生心 「不生不滅」などの「八不」によつて戲論を否定し、一心に一切諸法の無自性・空を観想する。心の本源は空にして静寂、かたちあるものなく、そして安らいでいる。

第八 如實一道心 相対的な対立關係にない一如円融の世界は本来清浄であり、認識知と認識の対象は対立關係になく一如である。この境地を知っているのが報身の盧舎那仏(遮那)である。

第九 極無自性心 水には実体（自性）がなく、ただ風に吹かれると波だつただけである。真如法界で一切法の真実は極まつたわけではなく、その戒めを受けてただちに次に進むのである。

第十 祕密莊嚴心 顕教の応病与薬は塵垢を払い、真言（密教）は誰もが具有する心の奥の宝庫を開く。秘された宝はただちに開陳され、その万徳が証明される。

■第一 異生羝羊心

【原文】

異生羝羊心者何。凡夫狂醉不辨善惡。愚童癡暗不信因果之名也。凡夫作種種業感種種果。身相萬種而生。故名異生。愚癡無智均彼羝羊之劣弱。故以喻之。

【書き下し】

異生羝羊心とは何ぞ。凡夫は狂醉して善惡を辨わきまえず。愚童は癡暗にして因果を信ぜざるの、名なり。凡夫は種種の業を作つて種種の果を感じ。身相萬種にして生ず。故に異生と名づく。愚癡・無智なること彼の羝羊の劣弱なることに均し。故に以つて之に喩う。

【私訳】

異生羝羊心とはどういうものか。世間の凡夫・衆生は酒に酔つたように善惡をわきまえず、節理を知らない子供は道理に暗く善因善果・惡因惡果を信じない、そういう意味での名称である。凡夫・衆生はさまざまな宿業を作つてさまざまな果報を受け、生れる時の身体の姿・かたちは千差万別である。だから異生と言うのである。愚かで道理も知らないことはあの牡羊の愚劣なことと同じである。だからこれに喩えたのである。

【原文】

夫生非吾好死亦人惡。然猶生之生之輪轉六趣。死去死去沈淪三途。生我父母不知生之由來。受生我身亦不悟死之所去。顧過去冥冥不見其首。臨未來漠漠不尋其尾。三辰戴頂暗同狗眼。五嶽載足迷似羊目。營營日夕繫衣食之獄。趁逐遠近墜名利之坑。

加以磁石吸鋼則剛柔馳逐。方諸招水則父子相親。父子親親不知親之爲親。夫婦相愛不覺愛之爲愛。流水相續飛焰相助。徒縛妄想之繩空醉無明之酒。既如夢中之遇還似逆旅之逢。泊如一二從道而展生。萬物因土而森羅。自在能生梵天所作未知生人之本誰談死者之起。遂乃豺狼狻虎咀嚼於毛物。鯨鯢摩竭吞歆於鱗族。金翅食龍羅刹喫人。人畜相吞強弱相噉。況復弓箭亘野猪鹿之戸絶種。網罟箠澤魚鼈之鄉滅族。鷹隼飛而驚鵠流淚。敖犬走而狐兔斷腸。禽獸盡心未飽。厨屋滿舌不厭。強竊二盜迷珍財而受戮。和強兩奸惑娥眉而殺身。四種口業任舌作斧。三箇意過縱心自毒。無慚無愧八萬之罪盡作。自作教他塵沙之過常爲。都不覺知一一罪業招三惡之苦。一一善根登四德之樂。有云。人死歸氣更不受生。如此之類名斷見。有云。人常爲人畜常爲畜。貴賤常定貧富恒分。如此之類名常見。或持牛狗戒。或投死恒河。如此之類曰邪見。邪見外道其數無量。不知出要祖習妄見。如是等類皆悉羝羊之心也。

【書き下し】

夫れ生は吾好むものに非ず、死もまた人の惡むものに非ず。然れども猶生まれ之き生まれ之いて六趣に輪轉し、死に去り死に去つて三途に沈淪す。我を生ぜし父母は生の由來を知らず、生を受く我が身もまた死の所去を悟らず。過去を顧みれば、冥冥として其の首を見ず、未來に臨めば漠漠として其の尾を尋ねず。三辰頂に戴けども暗きこと狗の眼に同じ。五嶽足を載せども迷えること羊の目に似たり。日夕に營營として衣食の獄に繋かれ、遠近に趁逐して名利の坑に墜つ。加以、磁石、鋼を吸えば則ち剛柔馳せ逐い、方諸、水を招けば則ち父子相親しむ。父子の親親たるや親の親たるを知らず、夫婦の相

愛たるや愛の愛たるを覺らず。流水相續^つぎ、飛焰相助^く。徒らに妄想の繩に縛られ、空しく無明の酒に酔う。既に夢中の遇の如く、還た逆旅の逢に似たり。一二道従りして展生し、萬物^三に因つて森羅たり。自在の能生、梵天の所作なりというが如くに泊^{いた}つては、未だ生人の本を知らず、誰か死者の起りを談ず。遂に乃ち、豺狼^{さいろうさんこ}狼虎は毛物を咀^くみ嚼^くい、鯨鯢^{けいけい}摩竭^{まかつ}は鱗^{りんぞく}族を呑^すみ歠^くる。金翅^{きんし}龍^{りゆう}を食^はみ、羅刹^{らくしやく}人を喫^くい、人畜相呑^くみ、強弱相噉^{くら}う。況んや復た、弓箭^{きゆうせん}野を亘^をれば猪鹿^{とほぞ}の戸種^{とほぞ}を絶ち、網罟^{ぼういつ}澤^こを籠^こむれば魚鼈^{ぎよべつ}の郷族^{さとやから}を滅す。鷹隼^{ようしゆん}飛んで驚鵠^{けいこ}涙を流し、敖犬^{ごうけん}走つて狐兔^{こたう}腸^{はらわた}を斷つ。禽獸^{けいじゆ}は盡るも心は未だ飽かず。厨屋に滿つるも舌は厭^{いと}わず。強竊^{かうせつ}の二盜^{にとう}は珍財^{ちんさい}に迷つて戮^{りく}を受け、和強^{わかう}の兩姦^{りやうかん}は娥眉^{がび}に惑つて身を殺す。四種の口業^{くしゆう}は舌に任せて斧を作り、三箇^{さんか}の意過^{いか}は心に縱^{ほしいまま}にして自^{おのずか}ら毒たり。無慚^{むぜん}無愧^{むぎ}にして八萬の罪を盡く作り、自作教他して塵沙^{ちんしゃ}の過^{とが}を常に爲す。都て、一一の罪業は三惡^{さんあく}の苦を招き、一一の善根は四德^{しとく}の樂に登るを覺知せず。有るが云わく、人は死して氣に歸り更に生を受けず、と。此の如くの類を斷見と名づく。有るが云わく、人は常に人たり畜は常に畜たり。貴賤は常に定んで貧富は恒に分れたり、と。此の如くの類を常見と名づく。或いは、牛狗の戒を持ち、或いは、恒河に投死す。此の如くの類を邪見と曰う。邪見の外道、其の數無量なり。出要^{しゅよう}を知らず、祖^そとして妄見を習う。是くの如き等の類は皆、悉く羝羊^{ていぎやう}の心なり。

【註記】

①三辰：「日」「月」「星」。「君臣」「親子」「夫婦」の「三綱」に重ねられる。

②五嶽：中国の名山。「泰山」「衡山」「嵩山」「華山」「恒山」。「仁」「義」「礼」「智」「信」の「五常」に重ねられる。

③趁逐：あちこち飛び回る。うろろ歩き回る。

④剛柔：男と女。夫婦。

⑤方諸：水晶。

⑥一二：『老子』「第四十二章」に、「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰を負いて陽を抱く。沖氣以て和を為す」とある。「無為」の「道」が一氣。そこから生じた天地・陰陽が二氣。それから生まれた人を加えて天・地・人（三才）で三氣。その三氣から森羅万象が生じるといふ。

⑦三：天・地・人。三才。

⑧豺狼狻虎：やまいぬ・オオカミ・獅子・虎

⑨鯨鯢摩竭：くじら・雌くじら・怪魚（大魚・鯨、マカラ）。

⑩金翅：金翅鳥・インド神話に出てくる神鳥ガルーダ。

⑪網罟：漁網。

⑫強竊：強盗と窃盗。

⑬和強の兩姦：女性と懇ろになることと腕づくで強姦すること。

⑭娥眉：眉の濃く長い美人。

⑮三箇の意過：「貪」「瞋」「痴」の「三毒」。

⑯無慚無愧：慚愧の心がないこと。恥知らず。

⑰三惡：三惡趣。「地獄」「餓鬼」「畜生」。

⑮四徳：「常」「楽」「我」「淨」。

⑯出要：生死をくり返す輪廻の世界から出るための要諦（松長有慶『訳注 秘蔵宝鑰』）。

【私訳】

そもそも、私がこの世に生を受けたのは私が好んで望んだものではない、死もまた人は嫌がるが、嫌がってもその時は来る。しかし（生ある者は）、生まれて生きて地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の「六道」に輪廻し、死んで死んで地獄・餓鬼・畜生の「三途」（「三悪趣」）に墮ち沈んでいる。私を生んだ父母は生のわけを知らないし、生を受けた私もまた死んだあと行く場所もわかっていない。過去をふりかえっても、暗くてその始めは見えず、未来を考えてもはつきりとせずその終りがわからない。太陽・月・星の「三辰」（の光）を頭上に戴いても暗くて犬の眼と同じである。泰山・衡山・嵩山・華山・恒山の霊山「五嶽」に登って足を山に載せても迷って羊の目にそっくりである。朝な夕なにもつぱら衣食のことにばかり夢中になり、遠くに近くにあちこち飛び回り、名譽と財貨の落とし穴に墮ちる。そればかりでなく、磁石が鋼をくつつけるように男と女は心はやって逢瀬を重ね、水晶が水を呼ぶように親子は互いに親しむ。（しかし）親子の親しみとはいえ、親しみの親しみたる所以を知らず、夫婦が相思相愛であっても愛の愛たる所以を自覚していない。流れる水が途切れもせず流れ、飛ぶ火焰の火も燃え続けるが、いたづらに（いつまでも続くという）妄想の縄に縛られ、空しく本能的な自己保存欲（「無明」）の酒に酔う。それは夢のなかで美人と遇うことはあっても（いつまでも続くわけではなく、旅で出会った人ともやがて別れることと似ている。（中国では道家の『老子』「第四十二章」に）「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰を負いて陽を抱く。沖氣以て和を為す」と言い、（インドではヒンドウの）自在天（イーシュヴァラ *Ishvara*）はよく世界を創造するが、梵天（ブラフマン *Brahman*）も世界を創造したという信仰もあるというに至っては、未だ生れる人のいのちの本源などわからないのである。だから死者の始源など誰が論ずるだろうか。そういうことであるからして、やまいぬ・オオカミ・ライオン・トラは他の野獣を咀んで食べ、くじら・雌くじら・怪魚（大魚・くじら、マカラ *makara*）は他

の魚類を飲み込み、神鳥金翅鳥（ガルダ Garuda）は龍を食べ、羅刹（rakṣas 惡鬼）は人を食ひ、人と畜生は互いに食ひ合ひ、強者も弱者も互いに食ひ合っている。ましてや、弓矢を持つて野を駆け回ればイノシシやシカの種族は絶えてしまひ、魚網を沢に入れば魚や亀の棲む場所がなくなる。タカやハヤブサが飛べば錦鶏やクグイは恐ろしさに涙を流し、猛犬が走るとキツネやウサギはつらくて耐えられない。（生ある者の食欲は）禽獸は尽きても心は飽きることがない。台所に食べるものが満ち溢れても舌は満足しない（殺生）。強盜と窃盜はもの珍しい財宝に血迷つて死刑となり（偷盜）、女性と懇ろになつたり腕づくで強姦したりは、美人に心を奪われて身を滅ぼす（邪淫）。妄語・綺語・惡口・二枚舌の四種類の口の利き方は舌に任せ、自分を切る斧を作り（口業）、貪・瞋・痴は心にほしきままにしているといつか自分の毒になる（慳貪）。懺悔慙愧の心なく数多くの罪をつくり、自ら作り他人に教えて数限りない罪過を常に犯す（瞋恚）。すべて、一つ一つの罪業は地獄・餓鬼・畜生の苦を招き、一つ一つの善根は常・樂・我・淨の安樂を得ることを自覺していない。或る人が言うに、「人は死んで（陰陽の）二氣に歸り、更に生を受けないのだ」と。この類いの説を斷見と言うのである。また或る人が言うに、「人は常に人であり、畜生は常に畜生であり。貴賤は常に決つていて貧富はいつも分れてゐる」と。この類いの説を常見と言うのである。或いは、「牛や犬の戒率を保ち、あるいはガンジス河に身を投げて死ぬのだ」と。この類いの説を邪見と言う（邪見）。邪見を説く外道はその数が無限である。生死をくり返す輪廻の世界から出るための要諦を知らないのだ。これが根本だと思つて妄見を身につけるのである。この類いはみな、ことごとく羴羊の心なのである。

【原文】

頌曰

凡夫盲善惡 不信有因果 但見眼前利 何知地獄火
無羞造十惡 空論有神我 執著愛三界 誰脱煩惱鎖

【書き下し】

頌に曰わく、

凡夫は善惡に盲て、因果有ることを信ぜず。但だ眼前の利を見るのみ、何ぞ地獄の火を知らん。羞すること無く十惡を造り、空しく神我有るを論ず。執著して三界を愛す、誰か煩惱の鎖を脱れん。

【註記】

①地獄火・地獄の炎熱。炎熱地獄。

②十惡・殺生・邪見の十惡業。「十善戒」で否定される惡業。

③神我・伝統教学に「神の我」「創造神」「宇宙の主宰者」「神とか靈魂とかアートマン」「實在の自我」「外道が説くアートマン（我）」などの諸説がある。私は六師外道などが説く「靈魂」ととる。

【私訳】

頌に曰わく、

凡夫・衆生は善惡の判断に暗く、因果応報があることを信じない。

ただ眼の前の利得を見るだけであり、（その結果としての）地獄の炎熱をどうして知ろうか。恥じることなく殺生・偷盜などの十惡を犯し、靈魂の實在を口にしては空めぐりしている。

欲界・色界・無色界の生に執著してやまない、誰が煩惱のワナから脱れられるのか。

【原文】

問。依何經建立此義。答。大日經。彼經何說。經云。祕密主。無始生死愚童凡夫。執著我名我有分別無量我分。祕密主。若

彼不觀我之自性。則我我所生。餘復計有時地等變化。瑜伽我。建立淨・不建立無淨。乃至聲・非聲。祕密主。如是等我分。自昔以來分別相應希求順理解脫。祕密主。愚童凡夫類猶如羝羊。龍猛菩提心論云。謂凡夫執著名聞利養資生之具。務以安身恣行三毒五欲。眞言行人誠可厭患誠可棄捨

【書き下し】

問う。何れの經に依つて此の義を建立するや。答う。大日經なり。彼の經に何をか説く。經に云わく、「祕密主。無始生死の愚童凡夫は、我名と我有に執著し無量の我分を分別す。祕密主。若し彼、我の自性を觀じざれば則ち我と我所生ず。餘は復た、時と地等の變化と、瑜伽の我と、建立の淨と、不建立の無淨と、乃至聲と、非聲有りと計す。祕密主。是くの如く等の我分は、昔自り以來、このかた分別と相應して順理の解脫を希求す。祕密主。愚童凡夫の類は猶し羝羊の如し」と。龍猛の菩提心論に云わく、「謂わく、凡夫は名聞利養資生の具に執著し、務るに安身を以つてし、恣に三毒・五欲を行ず。眞言行人は、誠に厭患すべし、誠に棄捨すべし。

【註記】

①大日經：『大日經』『住心品』。

②時：『大日經』『住心品』に説かれる「三十種外道」の時外道。

③地等：同じく地等外道。「実体」として「地」「水」「火」「風」「虚空」「時間」「方向」「アートマン」「意（マナス）」を説くヴァイシェーシカ学派。

④瑜伽の我：同じく相應外道。ヨーガ学派が説くサーンクヤ哲学の「プルシャ」。

⑤建立：同じく常見外道。

⑥不建立…同じく断見外道。

⑦聲…同じく声外道。「スポータ」説によつて声の實在を言うミーマンサー学派。

⑧非聲…同じく非声外道。声の實在を否定するヴァイシエーシカ学派・ニヤーヤ学派・ヨーガ学派。「三千種外道」の最後。

【私訳】

問う人が言うに、「そのような説は何の經典に基づいて主張しているのか」と。答えて言うに、『大日經』である」と。

(問い)「その『大日經』に何と説かれているのか」。(答え)『大日經』に、「秘密主よ、始めもわからない昔から生死をくり返す、愚かな子供のような凡夫は、自我意識と自我の所有物(自分のものと思ひ込んでいるもの)に執著し、はかりしない自我の領分を他のものと区別している。秘密主よ、もし彼の凡夫が、自我の実体(自性)を見極めてはいないから、我執と我執の対象が彼には生じる。その他、時外道(時論)と地等外道(ヴァイシエーシカ学派)の変化と、相應外道(ヨーガ学派)の我(プルシヤ、サンクヤ学派)と、常見外道の浄と、断見外道の不浄と、さらに声外道(ミーマンサー学派)と、非声外道(ヴァイシエーシカ・ニヤーヤ・ヨーガの各学派)など、三千種の我説(外道)を数える。秘密主よ、以上のような自我の領分は、昔から今日まで、自我との区別を理由にして道理にかなった解脱を希求してきた。秘密主よ、未熟な子供のような凡夫の類は、羝羊と同じである」と。龍猛菩薩の『菩提心論』に言うに、「凡夫というのは名声・外聞、蓄財・生活用具に執著し、もっぱら身の安樂につとめ、貪・瞋・痴(三毒)や色・声・香・味・触の「五境」(「五欲」)を氣ままにしている。真言行者はこういうことにならないように、こういうことは避けて捨てなければならない」と。

【付記】

凡夫・衆生、すなわち生ある者はすべからず、ケモノと同じように、食欲と性欲という生きる本能のまま生きていて、その本能の根源にある自我意識(「無明」)に縛られ、本来成仏の本覺を知らないことを力説するこの第一住心「異生羝羊心」の

最後に、インドの「六派哲学」の一部や「六師外道」やヒンドウの世界創造の神や「ブドガラ」を説く小乗の「犢子部」もこのケモノに等しい「異生羴羊心」に入れている。

しかし、たとえ自我意識に縛られるとは言え、ケモノと同様の凡夫・衆生と「六派哲学」「六師外道」「ヒンドウの神」「ブドガラ」説は、自ずから次元がちがう。私には宗祖大師の真意がわからない。ケモノに等しい「異生羴羊心」をなぜ説くのかという問いに答え、『大日経』『住心品』の「外道段」を引用し経証としたのだが、「六派哲学」も「六師外道」も「ヒンドウの神」も「ブドガラ」を説く「犢子部」も我説は説くが、禁欲主義者もいれば戒律を守る人もいる。私には宗祖大師が外道を羴羊の如しとする真意がわからない。

■第二 愚童持斎心

【原文】

夫秃樹非定秃。遇春則榮花。増水何必氷。入夏則泮注。穀牙待濕卉菓結時。至如戴淵改心周處忠孝。礪石忽珍魚珠照夜。物無定性人何常惡。遇縁則庸愚庶幾大道。順教則凡夫思齊賢聖。羝羊無自性愚童亦必不愚。是故本覺内薰佛光外射欸爾節食數數檀那。牙種疱葉之善相續而生。敷花結實之心探湯不及。五常漸習十善鑽仰。

【書き下し】

夫れ、かぶろ秃なる樹、定んで秃なるに非ず。春に遇わば則ち榮え花なり。かさな増れる水、何ぞ必ず氷ならん。夏に入らば則ち泮け注ぐ。こくが穀牙は濕を待ち、きか卉菓時に結ぶ。さいえん戴淵心を改め、しゅうしよ周處の忠孝の如くに至つては、ぎよしゆ礪石忽ち珍なり、魚珠夜を照らす。

物に定まれる性無し、人何ぞ常に惡ならん。縁に遇わば則ち庸愚も大道を庶いようぐ幾い、教に順わば則ち凡夫も賢聖に齊けんじようしきを思ふ。羝羊は自性無く、愚童は亦た必ず愚ならず。是の故に、本覺は内に薰じ、佛光は外に射して、こつじ欸爾に節食し、そくそく數數に檀那す。げしゆほうよう牙種疱葉の善相續して生じ、ふげけつじつ敷花結實の心探湯不及。たんとうきゆう五常は漸く習い十善鑽仰す。

【註記】

①戴淵…晋の官僚・武將。若い頃は遊興三昧で品行は極めて悪かった。盗みをくり返し、ある時他人の船を襲い略奪しよう

としたが、逆にたしなめられ諭されて、心を改め趙王に仕えて太守となる（『晋書』）。

②周處…西晋の武將。若い頃は粗暴で狼藉が多く、周囲の人に恐れられたが、老いた父に説諭されて改心し、呉王の忠臣となった（『晋書』）。

③魚珠…鯨の目。

④庸愚…凡庸で未熟。

⑤賢聖…賢人と聖人。

⑥欸爾…すぐ、即座。

⑦牙種庖葉…芽を出させる種、花芽を包む葉。

⑧敷花結實…花を咲かせ実を結ぶ。

⑨探湯不及…熱湯に手を入れてあわてて引つ込めること。悪から離れること。

⑩十善…「十善戒」。

【私訳】

そもそも、冬枯れの樹木は、いつまでも葉を付けないわけではない。春になれば葉が繁り花を咲かせる。重なり凍っている氷も、いつまでも氷ではない。夏になれば凍った氷も溶けて流れる。穀物の新芽は湿気の季節を待ち、草木も時がくれば実を付ける。（中国の故事の出でくる）晋の官僚で武將の戴淵は（遊興三昧の品行をやめて）心を改め、西晋の武將の周處は（傍若無人の乱暴を悔い改め）君子には忠、親には孝行を貫いたという故事にさかのぼれば、ただの鉱石も（かくれていた宝石が表に現われて）たちまち珍宝となり、鯨の目も（実は宝石で）夜の闇を照らす（とも言える）。物にはあらかじめ決まった属性というものはなく、人はどうしてずっと悪人でいられようか。何かの縁に出会えば凡庸で愚かな人も堂々とした人生の道を大道を熱望し、正しい教えに順えば凡夫とて賢人・聖人と同等だと思える。牡羊も（食欲と性欲という）決まった実体

はなく、未熟な子供もまた決して愚かではない。であるから、本来成仏という本覚は心の内に薫じられ、仏智の光は心の外を照らし、すぐに節食し、あちこちに施食をするようになる。ちようど、芽を出させる種、花芽を包む葉のような（施しの）善は次々と生じ、花を咲かせ実を結ぶ（施しの）心は、熱湯に手を入れてあわてて引つ込めるように、悪を捨て善の及ばざることを知るのである。仁・義・礼・智・信の「五常」をやつと習い、不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不綺語・不惡口・不兩舌・不慳貪・不瞋恚・不邪見の「十善戒」を鑽仰するのである。

【原文】

言五常者仁義禮智信。仁名不殺等恕已施物。義則不盜等積而能施。禮曰不邪等五禮有序。智是不亂等審決能理。信不妄之稱言而必行。能行此五則四序玉燭五才金鏡。國行之則天下昇平。家行之則路不拾遺。舉名顯先之妙術保國安身之美風。外號五常內名五戒。名異義融行同益別。斷惡修善之基漸脫苦得樂之濫觴。故經云。下品五戒生贍部洲。中品五戒勝身國。上品牛貨。上上及無我鬱單越。廣說之。四洲人民各有王者。王有五種。粟散・四輪王。此五種王必乘十善而來御。故仁王經云。十善菩薩發大心。長別三界苦輪海。中下品善粟散王。上品十善鐵輪王。習種銅輪二天下。銀輪三天性種性。道種堅德轉輪王。七寶金輪四天下。今案此文王者及民必行五戒十善得生人中。未有棄此能得。前生修善今生得人。此生不修還墜三途。春種不下秋實何獲。善男善女不可不仰不可不仰。十惡十善之報。聖王凡王之治。具如十住心論。

【書き下し】

五常と言うは仁・義・禮・智・信なり。仁は不殺等と名づく。己を恕して物を施す。義は則ち不盜等なり。積んで能く施す。禮は曰く不邪等なり。五禮序有り。智は是れ不亂等なり。審に決して能く理む。信は不妄の稱なり。言つて必ず行う。

能く此の五を行えば則ち四序玉燭しうじよきよくしよくして五才金鏡ごさいきんけいなり。國之行えば則ち天下昇平なり。家之行えば則ち路に遺を拾わず。

名を擧げ先を顯わすの妙術びようじゆつ、國を保ち身を安んずるの美風なり。外には五常と號し、内には五戒と名づく。名、異にして

義融じ、行、同じくして益別なり。惡を斷じ善を修するの基漸きぜん、苦を脱し樂を得るの濫觴らんしやうなり。故に經に云わく、「下品の

五戒は瞻部洲に生じ、中品の五戒は勝身國、上品は牛貨こけ、上上及び無我は鬱單越うつたんのつなり」と廣く之を説く。

四洲の人民に各々王者有り。王に五種有り。粟散ぞくさんと四輪王しりんのうなり。此の五種の王必ず十善に乗じて來御す。故に仁王經に云わ

く、「十善の菩薩は大心を發し、長く三界の苦輪海と別る。中下品の善は粟散王なり。上品の十善は鐵輪王てちりんのおうなり。習種じっしゆは銅

輪にして、二天下てんげ、銀輪は三天にして、性種しやうしゆしやう性なり。道種どうしゆけんごく堅徳の轉輪王は、七寶の金輪にして、四天下なり」と。

今、此の文を案ずるに、王者及び民、必ず五戒・十善を行ひ人中に生ずるを得。未だ此れを棄てて能く得るもの有らず。前生に善を修し今生に人を得。此の生に修せずば還つて三途に墜つ。春の種下さざれば、秋の實何ぞ獲ん。善男善女。仰がずんばあるべからず、仰がずんばあるべからず。十惡・十善の報、聖王・凡王の治、具に十住心論の如し。

【註記】

①五禮：「吉礼」（先祖の祭祀）・「凶礼」（葬儀）・「賓礼」（接客）・「軍礼」（戦争）・「嘉礼」（婚礼）。ここでは広く礼節の意味

(松長有慶『訳注 秘蔵宝鑑』)

②四序…四季。

③玉燭…宝石の輝き。

④五才…五行。「火」「水」「木」「金」「土」。

⑤金鏡…金の鏡。あらゆるものを映し出す。

⑥五戒…不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒。

⑦基漸…基本と由来。

⑧濫觴…盃を浮かべるほどの小さな水の流れ。始まり・起源。

⑨瞻部洲…古代インドの世界観で人間が棲む世界。世界の中心のそびえる須弥山を海が囲み、その海に須弥山を囲むように

七つの金の山がそびえ、その外側の四方に四つの島(四洲)がある、須弥山の南方にあるのが南瞻部洲。

⑩勝身國…須弥山の東方にある島。別名、毘提訶洲。

⑪牛貨…須弥山の西方にある島。

⑫欝單越…須弥山の北方にある島。別名、俱盧洲。

⑬四洲…以上の四つの島。

⑭王に五種…粟散王(粟粒のような小さな国の王)・鉄輪王・銅輪王・銀輪王・金輪王。

⑮習種…菩薩の修行位の「十住」。

⑯性種性…菩薩の修行位の「十行」。

⑰道種…菩薩の修行位の「十廻向」。

⑱七寶…「輪宝」「象宝」「馬宝」「珠宝」「玉女宝」「主蔵神宝」「主兵神宝」。

【私訳】

（儒家の思想が説く徳目の）「五常」とは仁・義・禮・智・信である。仁は（仏教で言えば「五戒」の）不殺生である。自分に照らしてよく考え、他人に物を施すのである。義は（「五戒」で言えば）不偷盜である。財を日頃から貯めておいて他人によく施すこと。礼は（「五戒」では）不邪淫である。吉礼・凶礼・賓礼・軍礼・嘉礼の「五礼」には礼儀・礼節の秩序というものがある。智は不乱（不飲酒）で、（何事も酒に酔ったように）心を乱さず詳細を明らかにして決定し、事を収めること。信は不妄語である。口にしたことは必ず行うこと。きちんとこの「五常」（「五戒」）を実行すれば、四季は時に随って順調に移り変わり、宝玉は光り輝き、火・水・木・金・土の「五行」は互いに融通無碍にかかり合って天地の森羅万象が活動し、その様子は金の鏡に映し出される。国すなわち君子がこの「五常」を実行すれば天下泰平となり、家すなわち家族がこれを行えば路の遺物を拾わない。名を知らしめ先祖を顕彰する絶妙の方法であり、国を守りお互いの身を安んじる美風である。

（これらを）仏教外には「五常」と言い、仏教内には「五戒」と言う。名称は異にするが意味は同じであり、行うことは同じでも得益は別なものである。（「五戒」は）悪をやめ善を行う基本であり、（煩惱の）苦から脱し心の安樂を得る始めである。その故に、ある經典に、「成仏の機根が下位の者が「五戒」を実行すれば、須弥山の南方の南瞻部洲に生れ、中位の者が「五戒」を実行すれば東方の勝身洲に生れ、上位の者は西方の牛貨洲に生れ、最上位と無我の境地にある者は北方の鬱單越洲に生れる」と広く説かれている。この「四洲」の国民にそれぞれ王がいる。王には五種類あり、粟散王と鉄・銅・銀・金の四輪王である。この五種の王たちは皆、前世で行った「十善戒」に乗って現世に王として生れたのである。その故に、『仁王経』に説くに、「十善戒」を実行した菩薩は大菩提心を發起し、長いこと「三界」の苦の世界と別れている。成仏機根の中位と下位の者が「十善戒」を行ったのが粟散王であり、上位の者が「十善戒」を実行したのが鉄輪王であり、「十住位」は銅輪王で二つ天下を治め、銀輪王で三つ天下を治めるのが「十行位」であり、「十廻向位」の堅固な徳をもつ転輪王は七宝具足の金輪王で、四天下を治める」と。今、この経文を考えると、王も国民も皆、前世で「五戒」「十善戒」を実行した行果によって、人間として現世に生を受けた。未だ「五戒」「十善戒」を棄てて人間の生を得たものはない。前生で「十善戒」を実行して、

今生に人間の生を得るのである。今生に実行しなければ逆に地獄・餓鬼・畜生の「三途」に墜ちる。春に種を土に蒔かなければ、秋の実りはどうして得られようか。善男善女よ、仏教の戒めを尊ばずにいられようか、尊ばずにいられようか。十善・十善の果報、聖王・凡王の統治については、具体的に『十住心論』に説いてあるので参照願いたい。

【原文】

頌曰

愚童少解貪瞋毒 欸爾思惟持齋美

種子内熏發善心 牙庖相續尚英軌

五常十善漸修習 粟散輪王仰其旨

【書き下し】

頌に曰わく、

愚童、少し貪瞋の毒を解し、欸爾に持齋の美を思惟し、

種子の内に熏じて善心を發す。牙庖相續して英軌を尚ぶ。

五常・十善、漸く修習し、粟散・輪王、其の旨を仰ぐ。

【註記】

①欸爾..すぐに、ただちに。

②英軌..すぐれた軌範。

【私訳】

未熟な子供でも、少し食いや怒りの害を理解すると、すぐに午後食事をしない節食の美風を思いつき、本来具有する仏種が心のなかで熟成し善心を発起し、芽生えてはふくらみが次々と続き、すぐれた軌範を尊ぶ。五常や十善戒もようやく修習して、粟散王も金輪王も、その軌範を尊ぶようになる。

【原文】

問此住心亦依何經說。答大日經。彼經何說。經云。愚童凡夫或時有一法想生。所謂持齋。彼思惟此少分發起歡喜數數修習。祕密主。是初種子善業發生。復以此爲因。於六齋日施與父母男女親戚是第二牙種。復以此施授與非親識者是第三疱種。復以此施與器量高德者是第四葉種。復以此施歡喜授與伎樂人等及獻尊宿是第五敷花。復以此施發親愛心而供養之是第六成果

【書き下し】

問う、此の住心は亦た何れの經に依つて説く。答う、大日經なり。彼の經、何をか説く。經に云わく、「愚童凡夫は或る時に一法の想い生ずること有り。謂わゆる持齋なり。彼、此の少分を思惟し、歡喜を發起し數數に修習す。祕密主、是れ初めの種子の善業の發生なり。復た、此れを以つて因と爲して、六齋日に於いて父母・男女・親戚に施與す。是れ第二の牙種なり。復た、此の施を以つて非親識の者に授與す、是れ第三の疱種なり。復た、此の施を以つて器量・高德の者に與う、是れ第四の葉種なり。復た、此の施を以つて歡喜して伎樂の人等に授與し、及び尊宿に獻ず。是れ第五の敷花なり。復た、此の施を以つて親愛の心を發して之を供養す。是れ第六の成果なり」と。

【註記】

①經に云わく…『大日經』「住心品」八心段。

②持齋…午後食事をせず節食し、その分を他に施す善行。

③種子…仏種。

④六齋日…毎月持齋を行う、八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・晦日。

【私訳】

問う人が言うに、「そのような説は、どんな經典に基づいて主張しているのか」と。答えて言うに、『大日経』である」と。
(問い)「その『大日経』に何と説かれているのか」。(答え)『大日経』「住心品」八心段に、「未熟な子供のような凡夫でも、ある時に一つの善法を思いつくことがある。いわゆる、午後は食事をせず節食し、その分を他に施す持齋である。彼は、この少しの分の施しの意味を考え、喜んで何度もうり返すのである。秘密主よ、これは初めて仏種が発芽して善行が行われたのである。また、これをきっかけにして、六齋日に父母・兄弟姉妹・親戚に施食する。これは第二段階の発芽である。また、この施食を家族や親戚ではない人に行うのである。これは第三段階のつぼみである。また、この施食を器量がある人や徳の高い人に行うのである。これは第四段階の新緑の葉である。また、この施食を歡喜して伎芸の人たちに行ったり、尊敬すべき年配者に提供する。これは第五段階の花が咲くことである。また、この施食によって、親愛の心で、これらの人たちを供養する。これは第六段階の果実である」と。

【付記】

この第二住心「愚童持齋心」は、「無明」のまま煩惱・迷妄に生きる凡夫・衆生にも「仏種」があり、その「仏種」は何かのきっかけで発芽し、つぼみとなり、葉となり、花となり、実となる。凡夫・衆生も、中国では君子や人民が「五常」を守るように、仏教が説く「五戒」や「十善戒」を守れば「三途」に墮ちることはない。「仏種」は、例えば「持齋」という節食・施食の行で開顯する、という趣旨である。

この「愚童持齋心」では「五常」「五戒」、「十善戒」、「仏種」、「持齋」（節食、施食）が説かれるが、それらの文脈が明確でない。また、第一住心に説かれた食欲・性欲と「五戒」「十善戒」の不殺生・不邪淫との関連への言及がなく、さらに「持齋」の施食についても「六波羅蜜」行の「布施」との脈絡が説かれていないことが気になる。

■第三 嬰童無畏心

【原文】

嬰童無畏心者。外道厭人凡夫欣天之心也。雖云上生非想下住仙宮。身量四萬由旬。壽命八萬劫。厭下界如瘡癰。見人間如蜚蠊。光明蔽日月。福報超輪王。然猶比彼大聖劣弱愚朦。似此孩兒。脫少分厄縛。故無畏。未得涅槃樂。故嬰童。

【書き下し】

嬰童無畏心とは、外道は人を厭い、凡夫は天を欣ねがうの心なり。上は非想に生まれ下は仙宮に住す、身量は四萬由旬よじゆん、壽命は八萬劫なり、下界を厭うこと瘡癰そうおの如く、人間を見ること蜚蠊ふゆうの如し。光明は日月を蔽おほい、福報は輪王を超えると云うと雖も、然れども猶、彼の大聖に比ぶれば、劣弱愚朦れつにやくぐもうなること此の孩兒がいじに似たり。少分の厄縛を脱するが故に畏れ無し。未だ涅槃の樂を得ざるが故に嬰童なり。

【註記】

- ①非想…非想非非想天。無色界の第四天。「三界」の最頂天。生死の世界の最上天。有頂天。
- ②仙宮…仙人が棲む立派な住居。
- ③身量…身長。
- ④由旬…一由旬が、牛の引く牛車の行程、一日分。
- ⑤瘡癰…膿やかさぶた。

⑥蜉蝣…かげろう。

【私訳】

婴童無畏心というのは、外道は人を避け、凡夫は天界に生れることを願う、そういう心である。上は生死の世界の最上界である非想非非想天に生まれ、下は仙人が棲むような立派な住居に住み、（そこに棲む者は）身長が四万ヨージュナ（牛の引く牛車の行程、四万日分）、寿命は八万劫（四十三億二千万年の八万倍）であり、下界を膿やかさぶたのように嫌い、人間を（命の短い）かげろうのようだと見ていて、（大きな身体から出る）光明は太陽や月を覆い、福の報いはは転輪王を超えるものである、と言つても、なお、あの仏世尊に比べれば、幼子のように劣つていて弱く愚かで道理がわからない。少しだけ厄災や呪縛から逃れているから（世俗的な）畏れはないが、まだ涅槃の安樂に至つてはいないから婴童と言つのである。

【原文】

問聞導淮犬高踏。費龍遠飛。並是藥力所致師術所爲。今此天等依何教就誰師。能得如此自在光明身壽命長遠樂。又天有幾種請示其名。高問來叩鐘谷何默。嘗試論之。夫狂毒不自解醫王能治。摩尼不自寶工人能營。所謂醫王工人豈異人乎。我大師薄伽梵其人也。如來德目萬種。一一德即一法門之主也。從彼一一身隨機根量說種種法度脫衆生。故大日經云。如來應供正遍知得一切智智爲無量衆生廣演分布。隨種種趣種種性欲。種種方便道宣說一切智智。或聲聞乘道。或緣覺乘道。或大乘道。或五通智道。或願生天。或生人中及龍夜叉乾闥婆。乃至說生摩睺羅伽法云云今依此文三乘及人天乘教並皆如來所說。若依教修行者必生天上。問若然者諸外道等所行皆是佛法歟。答。此有二種一合。二違。合者契合如來所說故。違者違乖佛說故。雖云元是佛說。然無始時來展轉相承字遺失本旨。或隨自見持牛狗等戒以求生天。如是之類並失本意。問。若是佛說者宜直說佛乘等。何用說天乘等。機根契當故。餘藥無益故。

【書き下し】

問う、ならく導、わいけん淮犬高く踏み、ひりゅう費龍遠く飛ぶ、並びに是れ藥力の致す所、師術の爲す所なり。今、此の天等は何れの教に

依つて誰の師に就いて能く此くの如くの自在光明の身、壽命長遠の樂を得ん。又、天に幾種いくばくか有る、請う、其の名を示す

べし。(答う)高問來り叩く、鐘谷何ぞ默す。しんろみ嘗試に之を論ぜん。夫れ狂毒は自ら解けず、醫王能く治す。摩尼は自ら寶な

らず、工人能く瑩く。みが謂わゆる、醫王・工人豈に人に異らんや。我が大師・薄伽梵、其の人なり。如來の徳は萬種を具す。

一二の徳は即ち一法門の主なり。彼の一一の身従り、機根量に隨つて種種の法を説き衆生を度脱す。故に大日經に云わく、「如

來・應供・正遍知は、一切智智を得て無量の衆生の爲に廣演分布し、種種の趣・種種の性欲しやうよくに隨つて、種種の方便道もて

一切智智を宣説す。或いは聲聞乗の道、或いは緣覺乗の道、或いは大乘の道、或いは五通智の道、或いは願つて天に生まれ、或いは人中及び龍・夜叉・乾闥婆に生まれ、乃至、摩睺羅伽に生まれる法を説く」云云と。

今、此の文に依らば、三乘及び人・天乗の教は並びに皆如來の所説なり。若し、教に依つて修行する者は必ず天上に生まれる。問う、若し、然らば、諸外道等の行ずる所は皆是れ佛法か。答う。此れに二種有り、一に合、二に違なり。合とは、如

來の所説に契合かいごうするが故に。違とは、佛説に違乖いけするが故に。元は是れ佛説と云うと雖も、然も無始の時より來、展轉相

承して本旨を遺失す。或いは自見に隨つて牛狗等の戒こくを持し、以つて生天を求む。是くの如くの類、並びに本意を失せり。

問う、若し、是れ佛説ならば、宜しく直に佛乗等を説くべし。何ぞ天乗等を説くを用いんや。(答う) 機根契當かいとうの故に。餘の藥は益無きが故に。

【註記】

① 淮犬：『淮南子』の編者で、淮南王の称号を持つ前漢の学者劉安。劉安は方術に長じ、飼っていた鶏や犬に丹藥を飲ませて天に昇らせたという故事。

② 費龍：費長房。後漢の方術士。費長房が乗った竹竿が龍になったという故事。

③ 高問：よい質問。

④ 鐘谷：鐘は撞木の種類や打ち方によって音色がちがい、谷にこだます響きに強弱・美醜があるように、聞かれたことに応じて答えること。

⑤ 大日經：『大日經』「住心品」三句段。

⑥ 応供：供養を受けるにふさわしい人。仏教の修行僧で最高の人。阿羅漢(arhat)。如来の十号の一つ。

⑦ 正遍知：遍く智慧ある人。原語「samyak-sambuddha」は「正等覺者」。如来の十号の一つ。

⑧ 五通智：「五神通」。「神足通」「天眼通」「天耳通」「他心通」「宿命」通。

⑨ 乾闥婆：インド神話に登場する半神半獣の伎樂神ガンドルヴァ(Gandharva)。香りだけを食べる。仏教では護法神「乾闥婆」。

⑩ 摩睺羅伽：インド神話に登場する人間の身体に蛇の頭を持つ精霊。蛇神・音楽の神。仏教では護法神「摩睺羅伽」。

【私訳】

問う人が言うに、「聞くところによると、中国では、淮南王の称号を持つ前漢の学者の劉安は方術に長じ、飼っていた鶏や犬

に丹藥を飲ませて天に昇らせ、後漢の方術士の費長房が乗った竹竿が龍になり遠く天に飛んだと言う。これは道術で用いられる丹藥の力によると、方士の道術の然らしむる所とである。今、この天などのことはどんな教えにより、どのような道士に就けば、このような自在で光り輝く身体となり、不老長寿の安樂が得られるのか。また、天には何種類かあるのか、(もしあるなら)それを教えてもらいたい」と。(答う)「良い質問が届いて門を叩いたものである。鐘は撞木の種類とか打ち方によつて音色がちがひ、谷にこだます響きに強弱・高低があるように、聞かれたことに応じて答えることがだいじで、黙っているわけにはいかない。試みにこういうことを論じてみよう。そもそも、猛毒はそれ自体解毒しない、医者は治すことができる。摩尼宝珠はそのままでは宝石ではない。宝石職人がよく磨くから宝石になるのである。いわゆる、医者・宝石職人は、人ではないだろうか。わが大師、仏世尊、(すなわち大日如来)その人である。大日如来の徳は万種を含んでいる。一つ一つの仏徳が一つ一つの法門の教主である。その一つ一つの仏身は、機根によつて種々法を説き衆生を済度する。故に『大日経』「住心品」の三句段に「如来・応供・正遍知は、サトリの智慧(一切智智)を得て、数えきれないほどの衆生のために広く法を説き示し、(相手の)さまざまな修行の過程や能力・意欲に従ひ、いろいろな方便を用いてサトリの智慧を説くのである。あるいは声聞道の教え、あるいは縁覺道の教え、あるいは大乘の教え、あるいは「五神通」の得益、あるいは天に生まれ、あるいは人に生まれ、龍・夜叉・乾闥婆に生まれ、引いては摩睺羅伽に生まれる方法を説く、云々」と。今この文によれば、声聞・縁覺・菩薩の「三乗」及び人間界・天界の教えはみな大日如来の所説く所である。もし、この教によつて修行する者は必ず天上界に生まれる」と。問うて言うに、「もしそうなら、諸々の外道などが行じているものもみな、仏法なのか」と。答えて言うに、「それには二通りあつて、一つは合、一つは違である。合とは、大日如来の説く所に合致していること。違とは、大日如来の説く所とは違つてゐることである。もともとは大日如来の説く所であるが、遠い昔から變転して言い伝えられているうちに、その本旨を失くしてしまつてゐる。あるいは自分の勝手な見解によつて牛や犬などのようにすることを戒しめとし、それにより天に生まれることを願つてゐる。このような類いも本旨を失つてゐる」と。問うて言うに、「もし、それ(外道の行じてゐるものが)が大日如来の説く所なら、ただちに大日如来そのものの教えを説くべきではないか。なぜ天

上界のことを説くのか。(答う)「聞き手の機根に合せたからである。他の業では効き目がないからである」と。

【原文】

問。已聞師及教。請示天數。天有三種謂欲・色・無色界是。初欲界有六天。四王・忉利・夜摩・都史・樂變化・他化自在是也。色界有十八。此有四別四禪各別故。初禪有三。梵衆・梵輔・大梵是。二禪有三少光・無量光・極光淨是。三禪又三。少淨・無量淨・遍淨是也。第四禪有九天。無雲・福生・廣果・無想・無煩・無熱・善見・善現・色究竟是也。無色界有四。空無邊・識無邊・無處有處・非想非非想是也。此是二十八種天去海遠近身量大小壽命長短等。具如十住心論。恐繁不述問。

【書き下し】

問う。已に師及び教を聞けり。請う、天の數を示せ。天に三種有り。謂わく、欲・色・無色界、是れなり。初めの欲界に六天有り。四王・忉利・夜摩・都史・樂變化・他化自在、是れなり。色界に十八有り。此れに四別有り、四禪各々別なるが故に。初禪に三有り。梵衆・梵輔・大梵、是れなり。二禪に三有り、少光・無量光・極光淨、是れなり。三禪に又三あり。少淨・無量淨・遍淨、是れなり。第四禪に九天有り。無雲・福生・廣果・無想・無煩・無熱・善見・善現・色究竟、是れなり。無色界に四有り。空無邊・識無邊・無處有處・非想非非想、是れなり。此れは是れ二十八種の天、海を去る遠近、身量の大小、壽命の長短等は、具さに十住心論の如し。繁を恐れ述べず。

【註記】

①欲界の六欲天…「四天王」「忉利天」「夜摩天」「都史天」「樂變化天」「他化自在天」。

「四天王」は、持国天・增長天・広目天・多聞天。

「忉利天」は、須弥山の頂上にある。帝釈天のほか三十三天がいる。

「夜摩天」は、「忉利天」の上方の空中にあり、光があふれ、昼夜がなく、歓楽にふける世界。

「都史天」は、兜率天。内院と外院がある。内院で弥勒菩薩が説法をしている。外院には天人が住む。

「樂變化天」は、化樂天。この天では、自己の認識対象（「六境」）を悦楽の対象に変える。

「他化自在天」は、欲界の大魔王波旬が住む。他人の楽を自分のものに自在にできる。男女が互いに見つめ合えば、邪淫が成り立つ。

②色界の四禪：「初禪」「二禪」「三禪」「四禪」。

「初禪」は、「覺」「觀」「喜」「一心」の境地。梵衆天・梵輔天・大梵天の三種がある。

「二禪」は、「内淨」「喜」「樂」「一心」の境地。少光天・無量光天・極光淨天の三種がある。

「三禪」は、「捨」「念」「慧」「樂」「一心」の境地。少淨天・無量淨天・遍淨天の三種がある。

「四禪」は、「不苦不樂」「捨」「念」「一心」の境地。無雲天・福生天・広果天・無想天・無煩天・無熱天・善見天・善現天・色究竟天の九種がある。

③無色界の四天：「空無辺天」「識無辺天」「無処有処天」「非想非非想天」。

「空無辺天」は、虚空は広大無辺である境地。物質的存在がない空間の無限の広がり境地。

「識無辺天」は、認識作用にはてしがない境地。外の虚空の境地から内の識に心を転じ、識の無辺を達観する境地。

「無処有処天」は、何も存在しないと観じる境地。

「非想非非想天」は、塵想はなく細想は無きに非ざる境地。外道はこれを最高処とし。仏教は生死の境とする。有頂天。

【私訳】

問う人が言うに、「すでに道術の道士及びその教えを聞いた。次に天の数を示しめしてもらいたい」と。（答えて言うに）「天には三通りがある。欲界・色界・無色界の「三界」である。最初の欲界に「六欲天」があり、四天王・忉利天・夜摩天・都

史（兜率）天・樂變化（化樂）天・他化自在天である。色界に十八あり、これに四つの別がある。四禪それぞれだからである。初禪に三あり、梵衆天・梵輔天・大梵天である。二禪に三あり、少光天・無量光天・極光淨天である。三禪に三あり、少淨天・無量淨天・遍淨天である。第四禪に九天あり、無雲天・福生天・広果天・無想天・無煩天・無熱天・善見天・善現天・色究竟天である。無色界に四あり、空無辺天・識無辺天・無処有処天・非想非非想天である。これら二十八種の天には、海の向うの須弥山世界との遠近、天衆の身長の大小、寿命の長短などがあるが、詳しいことは『十住心論』の通りである。重複を避けるために述べないでおく。

【原文】

問。既聞天名數重請示彼行相。答。諸外道等亦立三寶三學等名。梵天等爲覺寶。四吠陀論等爲法寶。傳授修行者爲僧寶。十善等爲戒。四禪那即定。此定由六行而得。六行者言苦・瞋・障・淨・妙・離。厭下界作苦・瞋・障・淨・妙・離。欣上天作淨・妙・離・瞋・淨・妙・離。由此觀故展轉上生。由他主空・三昧・空・惠發生。由此三學得上天妙樂。雖然道非究竟故不能出生死得涅槃。上射非想還墜地獄。譬如箭射虛空。力盡即下。是故不可樂求。

【書き下し】

問う、「既に天の名と數を聞けり。重ねて請う、彼の行相を示せ」と。答う、「諸々の外道等亦た三寶・三學等の名を立つ。

梵天等を覺寶と爲し、^{べいだ}四吠陀論等を法寶と爲し、傳授修行の者を僧寶と爲す。十善等を戒と爲し、四禪那は即ち定なり。此の定は六行によつて得。六行とは、言わく、苦・瞋・障・淨・妙・離、是れなり。下界を厭つて苦・瞋・障の想いを作し、上天を欣つて淨・妙・離の觀を作す。此の觀に由るが故に展轉して上生し、他主空・三昧によつて空惠發生す。此の三學に由

つて上天の妙樂を得。然りと雖も、道は究竟に非ざるが故に、生死を出て涅槃を得ること能わず。上、非想を射すとも還つて地獄に墜つること、譬^やえば箭の虚空を射すとも力盡きて即ち下るが如し。是の故に樂求すべからず」と。

【註記】

①梵天等…ヒンドウの創造神「ブラフマー Brahma」。仏教では、初禪三天の「大梵天」に住む護法神。

②四吠陀論等…「リグ・ヴェーダ Rg-veda」「サーマ・ヴェーダ Sama-veda」「ヤジュル・ヴェーダ Yajur-veda」「アタルヴァ・ヴェーダ Atharva-veda」のサンヒター (Sanhita) に「アイタレーヤ Aitareya」などのブラーフマナ (Brahmana)、「ブリハッド Brhad」などのアーラヌヤカ (Aranyaka)、「チャーンドローグヤ Chandogya」などのウパニシャッド (Upanisad)。ちなみに言えば、ウパヴェーダ (Upa-veda)・ヴェーダーンガ (Veda-anga)・ウパーンガ (Upa-anga)。

③六行…六行観。「苦」「匱」「障」「浄」「妙」「離」を観想する観法。

④他主空三昧…外道で、世界の創造神が創造したものを空だと観想する瞑想。

【私訳】

問う人が言うに、「すでに天の名と数を聞いた。そこで重ねてのお願いだが、天の在り様について示してもらいたい」と。答えて言うに、「さまざまな外道などもまた、仏教で言う仏・法・僧の「三宝」や戒・定・慧の「三学」という表現があてはまる。(すなわち)梵天などを仏宝とし、四つの「ヴェーダ」などを法宝とし、伝授を受けて修行する数行者を僧宝とする。(また)「十善戒」などを戒とし、四禪を定とする。この定は「六行観」によつて成就する。「六行」観とは、苦・匱・障・淨・妙・離を観想する観法で、下方の欲界を避けて諸法皆苦・粗雑な心作用・サトリの障礙を思い浮かべ、上方の天上界を願つて淨

土・妙法・離欲を觀じる。この觀想によつて轉じて上方界に上昇し、創造神が創造したものを空だと觀想する瞑想によつて空の智慧が生じる。この戒・定・慧の「三學」によつて上方の天界の絶妙な安樂が得られる。しかし、この道とて究極のものではないから、生死の世界を脱して涅槃に入ることできない。上は非想非非想天に上昇すると言つても、地獄に墜ちてしまふ。まるで放たれた矢が虚空を射たとしても、やがて力尽きて落下するのと同じである。であるから、天上界を願ひ求めでも仕方がない」と。

【原文】

問。諸外道同修三學生彼二界。證空三昧言亡慮絶。何由不得斷煩惱證涅槃。觀著一邊定帶二見故。問。同觀非有非無。何墮二邊二見乎。繫屬他主不知因縁中道故。因縁中道其意云何。觀因縁有故不墮斷邊。觀自性空故不墜常見。觀有空即法界即得中道正觀。由此中道正觀故早得涅槃。外道邪見人不知此義。是故不得眞圓寂。若聞此理即得羅漢。

【書き下し】

問う、「諸々の外道、同じく三學を修して彼の二界に生じ、空三昧を證して言亡慮絶すれば、何に由つてか煩惱を斷じ涅槃を證すること得ざらんや」と。(答う)「觀の二邊に著し、定の二見を帶るが故に」と。問う、「同じく非有非無を觀ず。何ぞ二邊二見に墮するや」と。(答う)「他主に繫屬して因縁・中道を知らざるが故に」と。(問う)「因縁・中道とは其の意云何」と。(答う)「因縁の有を觀じるが故に、斷邊に墮さず。自性の空を觀じるが故に常見に墜ちず、有空即ち法界と觀じれば即ち中道の正觀を得。此の中道の正觀に由るが故に早く涅槃を得。外道邪見の人は此の義を知らず。是の故に眞の圓寂を得ず。若し此の理を聞かば即ち羅漢を得」と。

【註記】

- ①二見・断見と常見。諸法が断続的に途切れて生じ滅すると見る断見。諸法が連続的に続いて生じ滅すると見る常見。
- ②非有非無・諸法は有るのでもなく無いのでもない、の意。

【私訳】

問う人が言うに、「諸々の外道（仏教修行者と）同じく戒・定・慧の「三学」を修して（欲界を離れ、）あの色界・無色界の二界に生じ、空觀の觀法を成就して言語や思慮を超えれば、煩惱を断ち涅槃に到ることがどうしてできないのか」と。（答う）「（空觀と言つても、外道は）諸法が断続的に続いて生滅するという觀（断見）と、諸法が連続的に続いて生滅するという觀（常見）の相對二項に執着し、觀想（定）において相對二項から離れないからである」と。問う、「しかし、外道も仏教修行者と）同じく、諸法は有るのでもなく無いのでもない（非有非無の中道）を觀じている。二辺や二見という相對二項への執着にどうして陥っているだろうか」と。（答う）「（外道は）仏教以外の創造神などに縛られ隸属して、因縁所生や不生不滅などの中道の道理を知らないからである」と。（問う）「因縁や中道とはどういう意味か」と。（答う）「（仏教では）因縁所生の諸法を現象態としては仮有と見るから（有でもなく無でもなく中道であつて）断見には陥らない。諸法は因縁所生の故に自性は空だと見るから常見にも陥らない。仮有も空も法界の眞実だと觀じれば、中道の正しい理解を得ることができる。この中道の正しい理解によるから、早く涅槃に到ることができるのである。外道の邪見を持つ人はこの意味を知らないのだ。だからほんとうのサトリの境地（円寂）を成就することができない。もしこの道理を聞いたなら阿羅漢位を得る。

【原文】

問。護戒生天有幾種。生天有四種。一外道如前說。二二乘亦生天上。三大乘菩薩必爲十天王故。四應化諸佛菩薩化作天王故。具如十住心論說。

【書き下し】

問う、「戒を護つて天に生ずるに幾種か有る」と。(答う)「天に生ずるに四種有り。一に外道、前に説くが如し。二に二乗、亦た天上に生ず。三に大乘の菩薩、必ず十天の王と爲るが故に。四に應化の諸佛・菩薩の、化して天王と作すが故に。具に十住心論に説くが如し」と。

【註記】

①天上：第四禪の「無煩天」「無熱天」「善見天」「善現天」「色究竟天」「五淨居天」。

②十天：欲界の「六欲天」と色界の四禪天。

③十住心論：『十住心論』。

【私訳】

問う人が言うに、「(戒・定・慧の) 戒を護つて天に生ずるとして、天には何種類かあるのか」と。(答う)「天に生じると四種類がある。一つは外道の天。これは前に説いた通りである。二つは声聞・縁覚の二乗、また第四禪の「無煩天」「無熱天」「善見天」「善現天」「色究竟天」「五淨居天」に生じる。三つは大乘の菩薩、必ず欲界の「六欲天」と色界の「四禪天」、すなわち十天の王となるからである。四つは応化身の諸仏・諸菩薩、変身して天の王となるからである。具体的には『十住心論』に説いている通りである。

【原文】

頌曰

外道發心願天樂 虔誠持戒覓歸依

不知大覺圓滿者 豈悟梵天龍尊非
六行修觀生無色 身心五熱徒自嘸
斷常空有願勝住 若遇世尊覺我違

【書き下し】

頌に曰わく、

外道は發心して天の樂を願ひ、げんじょう虔誠に持戒して歸依を覓もとむ。

大覺圓滿者を知らず、豈に梵天・龍尊の非を悟らんや。

六行修觀して無色に生じ、身心五熱して徒らに自らいた嘸む。

斷常・空有に勝住を願う。若し世尊に遇わば、我が違を覺らん。

【註記】

①虔誠：敬虔な気持ちで、の意。

②五熱：四方・上方から熱を浴びる苦行。タパス。

【私訳】

頌に曰わく、

外道の人は發心して天上界での安樂を願ひ、敬虔に持戒して創造神などへの歸依を希求する。

(しかし) 偉大な覺者で自利利他円満の大日如来を知らない。どうして梵天や龍神の非に気づくであろうか。

「六行」の觀法を習修して無色界に生じる人もいれば、身心は四方・上方から熱を浴びる苦行をしていたずらに自分を悲しみ苦しむ人もいる。

斷見と常見、空と有という相對二項に執着して勝れた住処を願ひ求める。もし、仏世尊に遇うことができれば、自分のまちがいに気づくだろう。

【原文】

問。今此住心亦依何經論解說。答。大日經菩提心論。彼經何說。彼經云。祕密主彼護戒生天是第七受用種子。復次祕密主以此心生死流轉。於善友所聞如是言此是天大天與一切樂者。虔誠供養一切所願皆滿。所謂自在天・梵天・那羅延天・商羯羅天・自在天子・日天・月天・龍尊等。乃至或天仙・大圍陀論師。各各應普供養。彼聞如是心懷慶悅。愍重恭敬隨順修行。祕密主是名愚童異生生死流轉無畏依第八嬰童心。又云。復次殊勝行隨彼所說中殊勝住求解脫惠生。謂常無常空。隨順如是說。祕密主非彼知解空・非空常・斷。非有非無俱彼分別無分別。云何分別空。不知諸空非彼能知涅槃。是故應了知空離於斷常解云。外道願出要種種苦身心。斷常空有教如搆角求乳。若知因緣空忽爾得解脫又云。祕密主世間因果及業若生若滅繫屬他主空三昧生。是名世間三昧道。又云。若諸天世間眞言法教道如是勤勇者爲利衆生故。龍猛菩薩菩提心論云。諸外道等戀其身命或助以藥物得仙宮住壽。或復生天以爲究竟。眞言行人應觀彼等。業力若盡未離三界煩惱尚存。宿殃未殄惡念旋起。當彼之時沈淪苦海難可出離。當知。外道之法。亦同幻夢陽焰也。

【書き下し】

問う、「今、此の住心は亦た何れの經論に依つて解説するや」と。答う、「大日經・菩提心論なり」と。(問う)「彼の經、何を説くや」と。(答う)「彼の經に云わく、「祕密主、彼れ戒を護つて天に生ず。是れ第七の受用の種子なり」と。復た、次に

「祕密主、此の心を以つて生死に流轉するに、善友の所に於いて是くの如き言を聞く。此れは是れ天なり、大天なり、一切の樂を與うる者なり。虔誠に供養して一切の所願は皆滿つ。謂わゆる、自在天・梵天・那羅延天・商羯羅天・自在天子・日

天・月天・龍尊等、乃至或いは、天仙・大圍陀論師、各各應に普く供養すべし。彼、是くの如くを聞いて心に慶悅を懷き、慙おん

重じゆうに恭敬し隨順し修行す。祕密主、是れを愚童異生の生死に流轉する無畏依の第八嬰童心と名づく」と。又云わく、「復た

次に、殊勝の行あり。彼の所説の中に隨つて、殊勝に住して解脱を求むる惠、生ず。謂わゆる、常と無常と空なり。是くの如くの説に隨順す。祕密主、彼、空と非空、常と斷を知解するに非ず。非有非無は俱に彼の分別を無分別とす。云何が空を分別せん。諸空を知らざれば、彼能く涅槃を知るに非ず。是の故に應に、空を了知して斷常を離るべし」と。(解して云わく、

外道出要を願つて種種に身心を苦しむ。斷常・空有の教は角しかを搆たづつて乳を求めるが如し。若し、因縁の空を知らば、忽爾こつじに

解脱を得) 又、云わく、「祕密主、世間の因・果及び業、若しは生、若しは滅、他主に繫屬して空三昧生ず。是れを世間の三昧道と名づく」と。又、云わく、「若し、諸天、世間の眞言法教の道は是くの如くの勤勇者、衆生を利せんが爲の故なり」と。龍猛菩薩ほ菩提心論に云わく、「諸外道等は其の身命を戀んで、或いは助くるに藥物を以つてし、仙宮に住壽することを得。

或いは復た、天に生ずるを究竟おもと以爲う。眞言行人は應に彼等を觀みずべし。業力の若し盡き未だ三界を離れざれば、煩惱尚

存し、宿殃未だ殄しやくおうびざれば、惡念旋り起る。彼の時に當つて、苦海に沈淪して出離すべきこと難し。當に知るべし。外道の

法は亦た幻夢・陽焰に同じなり」と。

【註記】

①菩提心論…龍猛作と言われる密教の綱要書『菩提心論』。

②彼の經…『大日經』『住心品』八心段。

③那羅延天…インド古典で、「ナーラーヤナ Nārāyaṇa」。古くは「プルシヤ Puruṣa」（原人）と同一視され、のちに世界の創造神「ブラフマン Brahman」と同一視される。一般的にはヴィシュヌ（Viṣṇu）神の別名で、仏教では怪力の護法神。

④商羯羅天…インド古典で、「シャンカラ Saṅkara」。古くは暴風神「ルドラ Rudra」と同一視された。大自在神「シヴァ Śiva」神の別名。仏教では護法神。

⑤天仙…天界の仙人。神仙。

⑥大圍陀論師…ヴェーダに通じた学匠。

⑦慳重…ねんごろに、手厚く。

⑧無畏依…畏れなき帰依者。

⑨又、云わく…『大日經』『具緣品』。

⑩勤勇者…勤め励む者。大日如来。

⑪菩提心論に云わく…『菩提心論』。

⑫宿殃…前世の宿業の果報。

【私訳】

問う人が言うに、「今、この第三の嬰童無畏心は、どんな経論を根拠に解説しているのか」と。答えて言うに、『大日經』と『菩提心論』である」と。（また、問うて言うに）「その經典は、どんなことを説いているのか」と。（答えて言うに）「その『大日經』『住心品』八心段にはこう説かれている。「秘密主よ、彼れら（外道）が持戒して天上界に生ずるのは。第七段階

の実りの果報を享受している、その種子である」と。また、「秘密主よ、この実りの果報を享受している心で生死をくり返している間に、善良で人格の高い友人の所で以下のようなことを聞いたことがある。「これは天界だ、偉大なる神だ、あらゆる安樂を与えてくれる。心をこめて供養すると、あらゆる願いごとがみな叶えられる。いわゆる、自在天・梵天・那羅延天・商羯羅天・自在天子・日天・月天・龍尊など、そして天仙・大圍陀論師たちまで、それぞれ一人残らず供養するとよい」と。このように聞いた彼は、心によるこびを懐き、ねんごろに恭々しく敬い、神々に随つて修行した。秘密主よ、これを、未熟な子供のように生死をくりかえすなかでの畏れなき帰依者という意味で、第八段階の嬰童心と言うのである」と。また、次のようにも説かれている。「また次に、（外道にも）ことにすぐれた修行がある。彼らが説く所に従つて、ことにすぐれた修行に専念すると解脱を求める智慧が生じる。いわゆる、常と無常と空である。彼らはこのような説に従っているのである。秘密主よ、彼らは、諸法が空であるとか空でないとか、常であるとか断であるとか、思考力で理解しているわけではない。非有非無（の中道）を相対する二項に区別するのを（仏教で言う）無分別だと思つている。どのようにして空を区別できるのか。諸法がみな空であることを知らなければ、彼らは涅槃を知ることができない。だからまさに、空を明確に知つて断常から離れるべきである」と。

（―以上を解釈して言う、外道の人が出離を願い、さまざまな苦行などを行つて身心を痛めている。（しかし）断常・空有の相対二項の考えは、牛の角を縛つて無理やり乳を出せと責めるようなものである。もし、因縁所生の空を知れば、ただちに解脱を得るのである―）

また、次のように（『大日経』『具縁品』に）説かれている。「秘密主よ、世間（外道）は、因・果・宿業の生滅は神などに属することとして空觀を行う。これを世間の觀想法と言ふ」と。また、「もし天界の神々や世俗の考えであつても、真言の教えや觀法が許容する道は、以上のように勤め励む大日如来が衆生を利益するためだからである」と。（また）龍猛菩薩が『菩提心論』で言うに、「諸々の外道などは、その身命を惜しんで丹藥を服用し、仙人の棲む宮殿に住んで長生きをしようとする、あるいはまた、天上界に生ずることを究極だと考える。真言行者はまさに彼らをよく觀察すべきである。宿業の影響が尽き

まだ「三界」を離れられないから、煩惱はなお残り、前世の悪業の果報がまだなくならなければ、悪念がまためぐり巡って生起する。そうになると、（彼らはまた）苦の海に沈み世俗から離れ出ることができない。當に知るべし。外道の教えは幻のような夢やかげろうと同じである」と。

【付記】

第二住心「愚童持齋心」で、六齋日（「持齋」）の施食を例に「仏種」の芽生えから結実までを説き、その第八段階の嬰童心は、世間の凡夫で言えばまだ迷妄のなかでの空（無私）の行いであり、天上界に生じることを希求する外道の場合は、神々という実在の固定原理を前提とした空観であつて、まだまだ涅槃には遠いが、これも機根に応じて密教の立場から説いている、というのがこの第三住心「嬰童無畏心」である。

蛇足だが、宗祖大師には大變失礼ながら、宗祖大師は遺誡で、ご入定後、この第三住心が説く「六欲天」の一つ兜率天に往生して弥勒菩薩のそばに侍し、五十六億七千万年のちに下生して自分が残した真言密教がどうなっているかを見たいと言っている。第十住心にあるべき宗祖大師が第三住心に死後下生する、これはどう解釈するべきか。

■「秘藏宝鑰」（巻中） 原文・書き下し・註記・私訳・付記

■第四 唯蘊無我心

【原文】

若夫鉛刀終無鑢耶之績。泥蛇豈有應龍之能。燕石濫珠璞鼠名涉。名實相濫由來尚矣。然則勝數諦名梵延佛號。長爪實相犢子絕言。徒勞解脫之智未知涅槃之因。

【書き下し】

若し夫れ、鉛刀終いに鑢耶の績無し。泥蛇豈に應龍の能有らんや。燕石珠に濫じ璞鼠名涉る。名實相濫ること由來尚し。

然れば則ち勝數の諦の名、梵延の佛の號、長爪の實相、犢子の絶言。徒らに解脫の智を勞して未だ涅槃の因を知らず。

【註記】

①鉛刀…鉛の刀。

②鑢耶…中国の名劍、干将・莫耶夫婦が造った劍。

③泥蛇…泥をこねて作った龍。

④應龍…中国の神話に出てくる龍で四靈の一種。翼を持ち飛んで天地を行き来し、雨を降らせる。

⑤燕石…中国の燕山から出る、玉に似てるが玉ではない石。

⑥璞鼠…鄭の人は磨いていない玉を璞と言ひ、周の人は干からびたネズミを璞と言う（松長有慶『訳注 秘藏宝鑰』）。

⑦長爪・長爪梵志 (Dirgha=makha)。本名「コッティラ Kottila (クチラ)」。外道から釈尊の弟子になった、爪を長く延ばした修行者。

【私訳】

もしもの喩え話であるが、そもそも鉛の刀は結局のところわざがない（よく切れない）。泥をこねて作った龍などに中国の神話に出てくる翼を持ち天地を行き来して雨を降らせる応龍のような能力はない。中国の燕山から出る玉に似ているが玉ではない石を玉と混同し、中国の鄭では磨いていない玉を璞と言ひ、周では干からびたネズミを璞と言っている。名称と實際が混同されていることは、その由來をたどると昔からである。であるから、（外道の）ヴァーシーシエーシカ学派（勝論派）とかサーンクヤ学派（数論派）が言う（真理という意味の）諦という名称も、梵天や那羅延天を仏のように言う名号も、長爪梵志が言う実相も、犢子部が言う絶言も、解脱の智慧を得るのに徒勞を重ねていて、未だ涅槃に到る根本がわかっていない。

【原文】

是故大覺世尊說此羊車。拔出三途之極苦解脱八苦之業縛。其爲教也。三藏廣張四諦普觀。三十七品爲道助四向四果即人位。言識唯六無七八。告成三生六十劫防非則二百五十。修善即四念八背。半月說罪持犯立顯。一夏隨意凡聖乍別。禿頭割衣鐵杖。鋼孟。行則安徐護虫。坐則低頭數息。斯則身之標儀。言殺言收即知淨之語。行雲迴雪即死尸之想。斯乃心口之灰屑。塚間閉目白骨在心。聚落分衛餽飯吐想。樹葉遮雨誰願聖室。糞掃防風何必執綺。生空三昧知神我之幻影。無生盡智斷煩惱之後有其通也則虧蔽日月顛覆天地。目徹三世身現十八。石壁無礙虚空能飛。其德也則輪王頂接釋梵歸依。八部供承四衆欽仰。遂乃厭五蘊之泡露惡三途之塗炭。欣等持之清涼。廓同大虛湛然無爲。何其樂乎。尚身智之灰滅。乘之爲趣大體如此存法故唯蘊。遮人故無我。簡持爲義故唯。

【書き下し】

是の故に、大覺世尊は此の羊車を説き、三途の極苦を拔出して八苦の業縛を解脱す。其の教たるは、三藏廣く張り四諦普く觀ず。三十七品は道の助けたり、四向・四果は即ち人の位なり。識を言うに唯だ六にして七・八無し。成を告ぐに三生・六十劫。非を防ぐは則ち二百五十、善を修するは即ち四念・八背なり。半月に罪を説いて持犯立ちどころに顯われ、一夏意に隨つて凡聖乍ちの別る。禿頭割衣して鐵杖鋼盂す。行けば則ち安徐して虫を護り、坐れば則ち低頭數息す。斯れ則ち身の標儀なり。殺を言い收を言へば即ち知淨の語なり。行雲迴雪なれば即ち死尸の想なり。斯れ乃ち心口の灰屑なり。塚間に目を閉じて白骨に心を在く。聚落到分衛して鉢飯想を吐く。樹葉雨を遮す、誰か聖室を願わん。糞掃風を防ぐ、何ぞ必ず紬綺ならん。生空三昧に神我の幻影を知り、無生盡智に煩惱の後有を断つ。其の通は則ち日月を虧蔽し天地を顛覆す。目に三世を徹し身に十八を現ず。石壁無礙にして虚空に能く飛ぶ。其の徳は則ち輪王頂接し、釋梵歸依し、八部供承し、四衆欽仰す。遂に乃ち五蘊の泡露を厭い、三途の塗炭を惡み、等持の清涼を欣い、身智の灰滅を尚ぶ。廓大虚に同じ、湛然として無爲なり。何ぞ其れ樂なるや。乗の趣たること大體此くの如し、法を存するが故に唯蘊なり。人を遮するが故に無我なり。簡持を義と爲るが故に唯なり。

【註記】

①羊車：『法華經』「譬喻品」で説かれる「三車」の喩え。声聞のこと。緣覺は鹿車、菩薩は牛車。

②八苦…「生」「老」「病」「死」「愛別離苦」「怨憎会苦」「求不得苦」「五蘊盛苦」。

③四諦…「苦」「集」「滅」「道」。

④三十七品…三十七道品・三十七菩提分法。アビダルマが説くサトリを得るための修行法。四念住・四正断・四神足・五根・五力・七覚支・八正道からなる。

四念住（四念処）…「身念住」「受念住」「心念住」「法念住」。

四正断（四正勤）…「已生悪断」「未生悪令不生」「未生善令生」「已生善令増長」。

四神足（四如意足）…「欲」「精進」「念」「思惟」。

五根…「信根」「精進根」「念根」「定根」「慧根」。

五力…「信力」「精進力」「念力」「定力」「慧力」。

七覚支…「念」「択法」「精進」「喜」「軽安」「定」「捨」。

八正道…「正見」「正思惟」「正語」「正業」「正命」「正精進」「正念」「正定」。

⑤四向・四果…部派仏教が説く修行位。「預流向・預流果」「一來向・一來果」「不還向・不還果」「阿羅漢向・阿羅漢果」。

⑥三生…前生・今生・後生。

⑦六十劫…四十三億二千万年の六十倍の時間。

⑧四念…四念処。

⑨八背…八背捨・八解脱。「有色觀諸色解脱」「内無色想觀外諸色解脱」「淨解脱身作証具足住解脱」「空無辺処解脱」「識無辺処解脱」「無所有処解脱」「非想非非想処解脱」「想受滅身作証具足住解脱」。

⑩銅盂…鉄鉢。

⑪行雲迴雪…雲が風に吹かれて動き、雪が風に飛び散る。美人の喩え。

⑫塚間…墓地。

⑬聚落…集落・村落・部落。

⑭分衛…托鉢。

⑮聖室…白壁の部屋または家。

⑯糞掃…糞掃衣。不要になったボロ布を洗って、重ね合わせて作った袈裟。

⑰紈綺…しろぎぬとあやぎぬ。美しい服。

⑱生空三昧…人我は五蘊所生の故に空と観じる観想。

⑲無生盡智…阿羅漢の段階で得られる尽智と無生智。

⑳虧蔽…蔽い隠す。

㉑十八…阿羅漢の十八身。

㉒釋梵…帝釈天と梵天。

㉓八部…「天」「龍」「夜叉」「乾達婆」「阿修羅」「迦楼羅」「緊那羅」「摩睺羅伽」の天龍八部衆。

㉔四衆…比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷。

㉕簡持…扱び出す。

【私訳】

であるから、仏世尊は『法華経』『譬喻品』に「三車の喩え」を説き、そのうちの（羊車に喩えによって、声聞乗は地獄・餓鬼・畜生の「三途」のきびしい苦から抜け出て、生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五蘊盛苦の「八苦」という宿業の束縛から解脱することをお明かしたのである。その教えとは何かと言えば、経・律・論の「三蔵」を広く学修し、苦・集・滅・道の「四諦」を残らず観想し、「三十七道品」の修行法をサトりに到る道の助けとし、「四諦」を観想して煩惱を断じて（預流向）、「三途」の苦しみを受けなくなる（預流果）などの四向・四果を修行者の段階とし、「識」を言うにはた

だ第六識だけで第七識・第八識はなく、サトリの成就までに前生・今生・後生の三生とか六十劫という永遠に等しい時間がかかり、修行者としての非を防ぐために二百五十の戒（具足戒）を定め、善を行じるために「四念処」「八背捨（八解脱）」を修習する。半月ごとに（懺悔を行う布薩会で）自ら罪を説いて犯したことがすぐ表に出、ひと夏（九十日の夏安居）が終わると自恣によって凡夫と聖者のちがいがはっきりわかり、剃髪して法衣を着け錫杖と鉄鉢を持ち、歩く時は虫を驚かせないように静かに歩き、坐る時は頭を低くして息を数え、これを身だしなみとしている。殺生を言い金銭の收受を言う時は（そのものずばりではなく）智慧の効いたきれいな言葉（知浄語）を使い、美女を前にした時は死体を思い浮かべる。それが心や口の災いを燃やした残りである。墓地では目を閉じて白骨を心中に思い、村落では托鉢して粗末な食べ物に想いを寄せ、樹木の葉で雨を避け、誰も（立派な）白壁の家を望まない。不要になったボロ布を洗って、重ね合わせて作った袈裟だつて風を防ぎ、美しい服などは要らない。人我は五蘊所生の故に空と観じる観想によって靈魂は実在でなく幻影であることを知り、阿羅漢の段階で得られる尽智と無生智によって煩惱があとに残ることを断つ。その神通力は太陽や月を覆い天地を顛覆するほどである。目では過去・現在・未来の「三世」を見通し、身には阿羅漢の十八身を現わす。石壁も妨げなく通り抜け虚空に飛ぶこともできる。その徳は、金輪王も頭頂を声聞の足につけて礼拝し、帝釈天も梵天も帰依し、「天龍八部衆」の護法神も供承し、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の「四衆」も敬い仰ぎ見る。結果、泡や露のような五蘊の集りを嫌い、「三途」の塗炭の苦しみを離れ、瑜伽観法の清々しい境地を求め、身体や世間智がすべて滅することを重んじる。広大な虚空と同じで、寂として動かず作爲がない。どのようにすればこんな安樂があるうか。声聞乗の趣旨はだいたい以上の通りである。「五蘊」の色・受・想・行・識の五法は実在なので唯蘊と言う。人我を否定するので無我と言う。「五蘊」だけ扱ひ出したという意味であるから唯なのである。

【原文】

憂國公子問玄關法師曰。今聞聲聞乘人及法。既知道妙人天人超釋輪六通具足三明圓滿。人天所仰福田是憑。理誠可然。所以

前來聖帝賢臣。廣建伽藍安置僧人。割萬戸而鳴鐘開千頃而斷食。憑仰非他。只在鎮押國家利濟黎元。然今所在僧尼。剃頭不剃欲染衣不染心。戒定智慧乏於鱗角。非法濫行爵於龍鱗。日夜經營叩頭臣妾之履。朝夕苞苴屈膝僕隸之足。釋風因茲陵替。佛道由之毀廢。早滌滄至疫癘年起。天下版盪公私塗炭。職此之由也。不若一切停度絕供。若有羅漢得道者屈身頂敬傾國供給而已。

【書き下し】

憂國公子、玄關法師に問うて曰わく、「今、聲聞乘の人及び法を聞く。既に道の人天より妙、人の釋輪より超えたるを知る。六通具足し三明圓滿せり。人天の仰ぐ所、福田是れ憑みあり。理誠に然るべし。所以に前來の聖帝賢臣、廣く伽藍を建てて僧人を安置す。萬戸を割いて鐘を鳴らし、千頃を開いて鼎食す。憑み仰ぐこと他に非ず。只だ國家を鎮押し黎元を利濟するに在り。然れば今、所在の僧尼、頭を剃つて欲を剃らず、衣を染めて心を染めず。戒定智慧は鱗角よりも乏しく、非法濫行は龍鱗よりも爵なり。日夜に經營して頭を臣妾の履に叩き、朝夕に苞苴して膝を僕隸の足に屈す。釋風茲に因つて陵替し、佛道之に由つて毀廢す。早滌滄に至り疫癘年々に起る。天下の版盪公私の塗炭。職として此の由なり。若し一切に度を停めて供を絶たんには、若し羅漢得道の者有らば身を屈して頂敬し、國を傾けて供給せんのみ」と。

【註記】

①憂國公子…宗祖大師の『三教指歸』に出てくる儒家。

②玄關法師…『三教指帰』に出てくる仏者。

③釋輪…帝釈天と金輪王。

④六通…六神通。前出。

⑤三明…宿命知・生死知・漏尽知。

⑥福田…仏。福德を生じる田。

⑦千頃…広い田。頃は百畝。

⑧鎮押…鎮護。

⑨黎元…冠を付けない黒髪の人。庶民、人民。

⑩鱗角…麒麟の角。

⑪龍鱗…龍のウロコ。数が多い喩え。

⑫苞苴…わいろ。

⑬僕媿…僕は男の下僕、媿は女の召し使い。

⑭陵替…次第に衰える。

⑮旱澇…干ばつと水浸し。

⑯版盪…政治の乱れ。

【私訳】

儒家の憂國公子が、仏者の玄關法師に問うて言うに、「今、声聞乗の修行者とその教えについて聞いた。声聞道は人界や天界よりもすぐれていて、声聞道の修行者が帝釈天や金輪王を超えた存在であることを知った。「六神通」を具有して、宿命知・生死知・漏尽知の「三明」も成就している。人界の人や天界の神々も仰ぎ見る所で、福德をもたらす田、すなわち仏で頼み

にされていて、道理そのものである。だから、過去の徳のある帝王や賢明な臣下は、広く伽藍を建てて僧尼をそこに住ませ、万戸を養うほどの田畑を分けて寺院に寄進し、梵鐘を鳴らし、広大な田を開墾し、鼎を連ねて食事を供する。（僧尼を）頼りとして仰ぎ見ることは他には見られない。ただ國家を鎮護し、人々を利他拔済するのである。ところが今は、知る限りの僧尼は、頭を剃つても煩惱を剃らず、染められた法衣を着ても心を仏法で染めない。戒・定・慧の「三学」はキリンの角よりも乏しく、非法乱行は龍のウロコよりも多い。日夜に俗事金品に手を出し、家臣やその妾の履物に頭を屈し、朝な夕なにワイロを使つて膝を下僕や召し使いの女の足にからませている。釈尊の遺風はこんなことで衰退し、仏道はこれによって壊れる。干ばつと水浸しがしきりに起り疫病が毎年発生する。天下の治世の乱れや公私の別なき塗炭の苦しみは、主にこの理由からである。（僧尼への）一切の助けを止めて供えを絶つにしても、もし阿羅漢道を得た者がいたら、身体を曲げて頂礼し、国を挙げて援助すべきである」と。

【原文】

師曰。善哉斯問多有益。宜子開伶倫之聰耳借顔子之敏心。諦聽善思。且舉一二褻子之迷。夫螭螟不見大鵬之翼。蠓蚋何知難陀之鱗。蝸角不得衝穹昊之頂。焦僥何能踐溟渤之底。生盲不見日月躡駘不聞雷鼓。愚少之分蓋如此乎。又夫物有善惡人殊賢愚。賢善者希愚惡者多。騏驎鸞鳳禽獸之奇秀者也。摩尼金剛金石之靈異者也。人之挺粹者賢聖。帝之稱首者堯舜。后美文母。臣歎元凱。麟鳳一見則天下太平。摩剛一目則萬物應聲。聖君出世四海無爲。賢臣輔機一人垂拱。雖然聖君希遇。千載一御。賢佐難得。五百一執。摩尼空聞名。麟鳳誰見實。然則不見麟鳳不可絕羽毛之族。不得如意不可拋金玉之類。堯舜再生天下之主何無。元凱不更出率土之臣豈休。孔麟既摧好儒之輩每邦連袂。李牛已西求道之徒每縣側肩。代無扁華醫道何不絕。時絕羿養武術誰可廢。師鍾感天絲綺義獻應仙龍管。其人既往其術誰得。然猶所以彈指聒耳書札汗目。並皆不得罷爲之猶賢。然則羅漢聖果一生難得。是故鈍根六十劫利智則三生。修練苦行乃證聖位。雖無回果之賢聖。其道何絕哉。

【書き下し】

師曰わく、「善い哉、斯の問。多く利益有り。宜しく子、伶俐の聰耳を開き、顔子の敏心を借りて、諦らかに聴き善く思え。

且つ一二を擧げて子の迷を褰げん。夫れ蠅螟は大鵬の翼を見ず。蠃蜒何ぞ難陀の鱗を知らん。蝸角は穹昊の頂を衝くこ

とを得ず。焦僥何ぞ能く溟渤の底を踐まん。生盲は日月を見ず。聾聵は雷鼓を聞かず。愚少の分、蓋し如此くの如し。

又、夫れ物に善惡有り、人に賢愚殊なり。賢善の者は希、愚惡の者多し。騏驎鸞鳳は禽獸の奇秀たる者なり。摩尼金剛は金

石の靈異たる者なり。人の挺粹たるは賢聖、帝の稱首たるは堯舜、后の美なるは文母、臣の欺ぜらるるは元凱。麟鳳一た

び見れば則ち天下大平なり。摩剛一たび目ゆれば則ち萬物聲に應ず。聖君世に出れば四海無爲なり。賢臣機を輔れば一人

垂拱す。然りと雖も、聖君は遇うこと希なり。千載に一たび御す。賢佐は得難し。五百に一たび執る。摩尼は空しく名を聞

く。麟鳳誰か實を見ん。然れば則ち麟鳳を見ざれども羽毛の族を絶つべからず。如意を得ざれども金玉の類を抛べからず。

堯舜再び生まれざれども天下の主、何ぞ無からん。元凱更に出ざれども率土の臣、豈に休せんや。孔麟既に摧かるるとも、

好儒の輩、邦毎に袂を連れ、李牛已に西に行けども求道の徒、縣毎に肩を側たつ。代に扁華無けれども醫道何ぞ絶えざるや。時に羿養を絶つとも武術誰か廢るべき。師鍾天の絲綺に感じ義獻仙の龍管に應ず。其の人既に往くに其の術誰か得ん。然れども猶、彈指耳に 聴く書札目を汗す所以は、並びに皆罷むことを得ずして之を爲すこと猶賢ければなり。然れば則ち、羅漢の聖果は一生に得難し。是の故に鈍根は六十劫、利智は則ち三生なり。修練苦行して乃ち聖位を證す。向果の賢聖無しと雖も、其の道何ぞ絶えんや」と。

【註記】

①伶倫：中国古代の伝説の黄帝の臣下で音楽を司った楽人。音感がよく、鳳凰の声をもとに十二律を定め、雄鳥の声を六律、雌鳥の声を六呂とした（松長有慶『訳注 秘蔵宝鑑』）。

②顔子：顔回。孔子の弟子。

③蟪蛄：架空の小さな虫。蚊のまつ毛に巢食うという。微細なものの喩え。

④蝓蜒：やもり。

⑤蝸角：カタツムリの触角。

⑥穹昊：大空・天空。

⑦僬僥：中国古代の伝説上の小人。

⑧溟渤：はてしなく広い海。

⑨生盲：生まれつき盲目の人。

⑩聾駭…耳の聞こえが悪く知能も劣る人。

⑪挺粹…拔きんでてすぐれている人。

⑫稱首…第一人者。最もすぐれている人。

⑬堯舜…中国古代の伝説の理想の天子、堯帝と舜帝。

⑭文母…周の文王の母。

⑮元凱…八元と八凱。八元は中国古代の伝説の皇帝・豊高辛氏の八人の俊才。八凱は同じく中国古代の伝説の皇帝・高陽氏の八人の俊才。

⑯摩剛…摩尼と金剛。

⑰垂拱…手をこまねいて何もしない。

⑱率土…広大な地。国土。

⑲孔麟…キリンに喩えられた孔子。

⑳李牛…李は老子。老師が牛に乗って西に去ったこと。

㉑扁華…扁は黄帝の名医の扁鵲、華は後漢の外科医の華陀。

㉒羿養…羿は中国の神話に登場する弓の名手。養は春秋時代の楚の弓の名手・養由基。

㉓師鍾…師は春秋時代の晋の琴の名人・師曠。鍾は同じく春秋時代の楚の琴の名手・鍾子期。

㉔絲綺…絲は誤字で正しくは緑。緑綺は漢の司馬相如が持っていた名琴。

㉕義獻…義が王義之。獻は息子の王献之。著名な書家。

㉖仙の龍管…中国の晋時代に筆仙が作った名筆。

㉗彈指…琴の音。

【私訳】

玄関法師が言うに、「その問いかけはまことにけつこうで有益である。あなたは、中国古代の伝説の黄帝の臣下で音楽を司つた伶倫のように、音をよく聴き分ける耳を広げ、孔子の弟子の顔回のような明敏な心をもつて、しっかりと聞いてよく考えてみるがよい。これから一つ二つ例を挙げてあなたの迷いを明らかにしてみようと思う。そもそも、蚊のまつ毛に巢食うような小さな虫は、大きなおおとりの翼を見ることができない。ヤモリはどうして難陀龍王のウロコがわかるだろうか。カタツムリの柔らかい触角は天空の頂きを突くことはできない。中国古代の伝説上の小人は、どうしてはてしなく深く深い海の底を踏むことができるか。生まれながら盲目の人は太陽や月を見ることができない。耳が聞こえず知能も劣る人は雷鳴が聞こえない。未熟で能力の小さな人は、だいたい以上のようなことである。またそもそも、ものごとには善悪があり、人は賢者と愚者と異にする。賢くて人柄のよい人は少なく、未熟で悪質な人は多い。キリンや鸞鳳は獣でも貴重なものであり、摩尼宝珠や金剛石は鉱物でも珍重なものである。人のなかで抜きん出てすぐれた人は賢人・聖人であり、帝王で最もすぐれた人は堯帝と舜帝である。皇后で最も素晴らしいのは周の文王の母である、臣下でほめられるのは、中国古代伝説の八元と八凱、すなわち、皇帝嚳高辛氏の八人の俊才と皇帝高陽氏の八人の俊才である。キリンやおおとりが一度姿を現わせば天下泰平となる。摩尼宝珠や金剛石が一たび人の目に触れれば、万物は人々の声に応じて現れる。徳の高い君主が世に出れば、天下は為すべきこともなくなる。賢しい臣下が機に応じて補佐すれば一人手をこまねいていても問題ない。しかし、とは言え、徳の高い君主が現れることは稀である。千年に一人お出ましになる程度である。賢しい補佐の臣下も得難い。五百年に一度現われるかどうかである。摩尼宝珠はその名は聞くがめつたに見ることはできない。キリンやおおとりもその實際を誰か見たらどうか。しかしながら、キリンやおおとりを見ないと言つても、鳥獣の種族を絶やしてはならない。如意宝珠は簡単に見られないと言つても、鉱物の類を投げ捨ててはならない。堯帝や舜帝は二度と生まれないけれども、天下を治める君主はどうしていなくなるであらうか。八元や八凱はもう世に出ないけれども、国土を治める臣下をどうして休ませることができようか。キリンの如き孔子はすでにいないけれども、儒家の思想を好んで学ぶ人たちは国中に列をなし、老子はす

でに牛に乗って西方に行ったけれども「道」を求める学徒は果中で肩を寄せ合っている。黄帝の扁鵲や後漢の華陀のような名医はなかなか代々世にいないものだが、医術の道はどうして絶えるだろうか。羿や養由基のような弓の名人はもういなくなっても、武術を誰が廃れさせるだろうか。春秋時代の師曠や鍾子期のような琴の名手はいなくなっても、天から聞こえる名琴の音に感じ、王羲之・王獻之はいなくても筆仙の名筆に應じて作品が多く残っている。その人はすでにこの世を去ってもういないが、その術は誰かが得ているものである。琴の音は耳にやかましいほどであり、書き付けは目をよこすほどであるのは、みな止むことなくこれらを行うことが賢いことであるからである。然るに、阿羅漢の果位は一生のうちに得難いものである。であるから、根機の劣る者は六十劫を要し、すぐれた智慧に恵まれた者は三生である。修練苦行を重ねてやっと聖者の段階を成就するのである。サトリに向って修行する者と修行の報果を得てある境地の段階に到った賢聖が今はいないとしても、そのサトリへの道がどうして絶えるであろうか」と。

【付記】十四問答の第一「僧尼の非法」

ここから、憂国公子と玄関法師による十四問答が挿入される。憂国公子と玄関法師とは言うまでもなく、宗祖大師の代表作『三教指帰』に登場する儒家の思想家である憂国公子と仏教僧である玄関法師であるが、なぜこの『秘蔵宝鑰』の第四住心に、二人のけつこう長い問答が挿入されたのか、その意味内容からしても声聞乗の本質的な問題を問答しているとも思えず、私には不可解である。

しかし、それはそれとして、二人の問答は仏教の僧尼の非法からはじまる。

先ず憂国公子が「声聞乗のことはわかったが、私の知る限り、頭を剃っても煩惱を剃らず、染められた法衣を着ても心を仏法で染めない。戒・定・慧の「三学」は麒麟の角よりも乏しく、非法乱行は龍のウロコよりも多い。日夜に俗事・金品に手を出し、家臣やその妾の履物に頭を屈し、朝な夕なにワイロを使って膝を下僕や召し使いの女の足にからませている」と、最近の僧尼の非法を批判する。

これに對して玄關法師が答えるに、

「徳の高い君主が現れることは稀である。千年に一人お出ましになる程度である。賢しい補佐の臣下も得難い。五百年に一度現われるかどうかである。摩尼宝珠はその名は聞くがめつたに見ることはできない。キリンやおおとりもその實際を誰か見たらうか。しかしながら、キリンやおおとりを見ないと言つても、鳥獸の種族を絶やしてはならない。如意宝珠は簡単に見られないと言つても、鉢物の類を投げ捨ててはならない。堯帝や舜帝は二度と生まれないけれども、天下を治める君主はどうしていなくなるであらうか」。

「キリンの如き孔子はすでにいないけれども、儒家の思想を好んで学ぶ人たちは国中に列をなし、老子はすでに牛に乗つて西方に行ったけれども「道」を求める学徒は県中で肩を寄せ合つてゐる。黄帝の扁鵲や後漢の華陀のような名医はなかなか代々世にいないものだが、医術の道はどうして絶えるだらうか。羿や養由基のような弓の名人はもういなくなつても、武術を誰が廃れさせるだらうか。春秋時代の師曠や鍾子期のような琴の名手はいなくても、天から聞こえる名琴の音に感じ、王羲之・王獻之はいなくても筆仙の名筆に應じて作品が多く残つてゐる。その人はすでにこの世を去つてもういないが、その術は誰かが得てゐるものである。琴の音は耳にやかましいほどであり、書き付けは目をよこすほどであるのは、みな止むことなくこれらを行うことが賢いことであるからである」。

「阿羅漢の果位は一生のうちに得難いものである。であるから、根機の劣る者は六十劫を要し、すぐれた智慧に恵まれた者は三生である。修練苦行を重ねてやつと聖者の段階を成就するのである。サトリに向つて修行する者と修行の報果を得てある境地の段階に到つた賢聖が今はいないとしても、そのサトリへの道がどうして絶えるであらうか」と。

すなわち、仏者の玄關法師は、非法の僧尼が目立つ批判に對して、声聞のようなすぐれた修行者は稀であり、そのような人が今いないとしてもサトリへの道がなくなるわけではない、と一見はぐらかしのような応答をしている。

【原文】

公子曰。賢聖難遇誠其然也。持戒智慧何其未聞思。師曰。時有増減法有正像。増劫之日人皆思十善。減劫之年家好十惡。正法千年内持戒得道者多。像法千載外護禁修徳者少。當今時は濁惡人根劣鈍。依倚其道。髣髴其風。妙道難鑽輕毛隨風。斯乃蒼天西傾群星何東。黄輿震裂草木何靜。

【書き下し】

公子曰わく、「賢聖遇い難きこと誠に其れ然なり。持戒智慧は何ぞ其れ未だ聞思せざるや」。師曰わく、「時に増減有り、法に正像有り。増劫の日は人皆十善を思い、減劫の年は家ごとに十惡を好む。正法千年の内には持戒得道の者多く、像法千載の外には護禁修徳の者少し。今に當つて時は是れ濁惡にして人根劣鈍なり。其の道に依倚たり。其の風に髣髴たり。妙道鑽り

難く輕毛風に隨う。斯れ乃ち蒼天西に傾く、群星何ぞ東ぜん。黄輿震裂す、草木何ぞ靜かならん」と。

【註記】

- ①増劫…人の寿命が十才から毎年、百年に一才ずつ増して八万四千才まで増加していく過程。
- ②減劫…人の寿命が八万四千才から毎年、百年に一才ずつ減って十才まで減少していく過程。
- ③護禁修徳…禁戒を護り仏徳を修する。
- ④依倚…ぼんやりとはつきりしない。
- ⑤黄輿震裂…大地が振動して裂ける。

【私訳】

憂国公子が言うに、「賢人聖人に出会うことが稀なことは当然である。（一方で）戒を保ち智慧を持つ僧尼のことはどうしてまだ聞いたり考えたりできないのか」。玄関法師が言うに、「時には増減があり、法にも正法と像法がある。人の寿命が十才から毎年、百年に一才ずつ増して八万四千才まで増加していく増劫の過程では、人はみな「十善戒」を思い浮べ、人の寿命が八万四千才から毎年、百年に一才ずつ減って十才まで減少していく減劫の過程では、家ごとに「十惡」を好んで犯す。正法千年の間には戒を保ちサトリを得る者が多く、像法千年の外では禁戒を護り仏徳を修する者は少い。今の時代は濁世で人の機根は劣化して鈍根である。仏道に無知であり、その影響にも無関心である。仏道は知り難く輕薄な空氣になびきやすい。天空が西に傾くのに、群がるような多くの星がどうして東に傾くだろうか。大地が震動し裂けているのに、草木がどうして静かであろうか」と。

【付記】十四問答の第二「五濁惡世の末世と鈍根」

憂国公子が「賢人聖人に出会うことが稀なことは当然であるが、（一方で）戒を保ち智慧を持つ僧尼のどうなのか」と問うと、玄関訪ソが答えるに、ここで正法・像法・末法を言い出し、五濁惡世の今は鈍根で、「天空が西に傾くのに、群がるような多くの星がどうして東に傾くだろうか。大地が震動し裂けているのに、草木がどうして静かであろうか」とかわす。

【原文】

公子曰。若如還答時根所牽逆流猶難。若然者五濁惡世定無持戒定慧人乎。師曰。何爲必其然乎。夫雖圓蓋西轉日月東流。南斗隨運北極不移。冬天盡殺松柏不彫。陰氣凍水。潮酒不氷。紂民編戶可戮然猶三人稱仁。堯戸比屋可封。然猶四凶受殛。火曰燒物布鼠遊中。水能溺人龍鼈泳內。以此觀之。雖云有同者亦有不和者。由此而言。時雖濁濫何無其人乎。

【書き下し】

公子曰わく、「若し還り答うるが如きは、時根に牽かるる所、逆流猶難し。若し然らば、^{ごじよくあくせ}五濁惡世には定んで持戒定慧の人無からんや」と。師曰わく、「何爲れど必ず其れ然らんや。夫れ、^{えんがい}圓蓋は西に轉ずと雖も、日月は東流す。^{なんじゆ}南斗は隨い運れども北極は移らず。冬天は盡き殺せども松柏は彫まず。^{しほ}陰氣水を凍らせども潮酒は氷らず。^{ちゆうみん}紂民戸を編んで戮すべし、然れども猶、三人は仁と稱せらる。^{ぎようこ}堯戸屋を比べて封ずべし。然れども猶、^{まいと}四凶は殛を受く。火は日に物を焼けども布鼠中に遊ぶ。水は能く人を溺らせども龍鼈内に泳ぐ。此れを以つて之を觀ずれば、同じ者有りと云うと雖も亦た和せざる者有り。此れに由つて言わば、時は濁濫なりと雖も何ぞ其の人無からんや。

【註記】

- ①五濁惡世…末法の世の五つの濁り。「劫濁」「見濁」「煩惱濁」「衆生濁」「命濁」。
- ②圓蓋…天空。
- ③南斗…伝統教学によれば、夏と秋に南の空に見える北斗七星（松長有慶『訳注 秘蔵宝鑑』）。私は南十字星。
- ④紂民…中国の殷王朝最後の紂王治世下の民。紂王は酒色にふけり忠臣を殺すなど暴君として有名。
- ⑤三人…微子・箕子・比干の三臣。
- ⑥堯戸…中国古代の伝説の堯帝治世の封戸。
- ⑦四凶…驩兜・共工・鯀・三苗。

⑧布鼠・火鼠。中国の伝説の怪物、不尽木（不灰木）という燃え尽きない木のなかに棲み、その毛を織って布にすると焼けばなおきれいな布（火浣布）になるという。

【私訳】

公子曰わく、「もし、あなたが今まで言ったようなことであれば、時代の根幹にかかわる問題で、時流に逆らうことは容易ではない。もしそうであれば、劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁の五濁の末法の時代には、戒を保ち観想を修し智慧を持った人はどこにもいないということになるのではないか」と。玄闍法師が言うに、「どうして決ったようにそうなるだろうか。そもそも、天空は西に移動するが、太陽や月は東に移動する。南十字星は天の運行に随って西に移るが、北極星は移らない。冬の天気は樹木の葉が枯れてなくなるが常緑の松柏は萎まない。冷氣が水を凍らせるが海の水や酒は凍らない。暴君として名高い殷王朝の紂王治世の民は（君主に似て悪人ばかりなので）集めて殺してもいいのだが、それでも微子・箕子・比干の三臣下は仁者として称えられる。（また）中国古代の伝説の堯帝治世の封戸は（君主に似て善人ばかりなので）比べて与えるのがよいくらいだが、それでも驩兜・共工・鯀・三苗という四人の極悪人がいて罪を受けた。火は物を焼くけれども、火鼠という怪物は火のなかで遊ぶ。水はよく人を溺れさせるが龍やスポンはそのなかで泳ぐ。そういう点から見れば、時流に和する者もいれば和しない者もいる。こうしてみると、時代が末世であっても然るべき人がいないわけではない」と。

【付記】十四問答の第三「然るべき人がいないではないか」

憂国公子が、「ならば五濁悪世の末世には、戒を保ち観想を修し智慧を持った人はどこにもいないことになる」と問い詰めると、玄闍法師は、「時流に和する者もいれば和しない者もいる。こうしてみると、時代が末世であっても然るべき人がいないわけではない」と苦しい弁明を強いられる。

【原文】

公子曰。既知有人其人安在乎。師曰。大方無隅大音希聲。大白若辱大直若屈。大成若缺大盈若冲。玄德玄同非聖孰知。知人之病古聖亦難。

【書き下し】

公子曰わく、「既に人有ることを知る。其の人安んか^{いずく}在るや」と。師曰わく、「大方は隅無し、大音^{だいいん}は聲希なり。大白は辱れたるが若し。大直^{くじ}は屈けたるが若し。大成は缺けたるが若し。大盈^{たいえい}は冲^{むな}しきが若し。玄德玄同なり。聖に非ずんば孰^{だれ}か知らん。人を知るの病^{かた}きこと古聖亦た難し」と。

【註記】

- ①大方.. 大きな方形。
- ②大音.. 大音響。
- ③大白.. 真っ白の白。
- ④大直.. まっすぐ。
- ⑤大成.. 大成功。
- ⑥大盈.. 大満足。
- ⑦玄德玄同.. 隠れた徳をもつ人は相對二律を離れて無為自然の境地にある。「大方」から『老子道德經』の引用。

⑧古聖：古い時代からの聖人。

【私訳】

憂国公子が言うに、「すでに然るべき人がいることは知った。では、その人はいったいどこにいるのか」と。玄関法師が言うに、「大きな方形は（大きいために）四つの角が見えず、大音響は人の声を聴きにくく、真つ白は逆に汚れているように見え、まっすぐは曲つたように見え、大成功にはどこか欠けるものがあり、大満足はかえって虚しさが残る。隠れた徳をもつ人は、二律対立を離れて無為自然の境地で隠れている。聖人でなければ誰も気付かない。人を知る難しさは、古い時代からの聖人でも難しい」と。

【付記】十四問答の第四「然るべき人はどこにいるのか」

憂国公子が、「では、然るべき人はどこにいるのか」と問うと、玄関法師が答えて言うに、「大きな方形は（大きいために）四つの角が見えず、大音響は人の声を聴きにくく、真つ白は逆に汚れているように見え、まっすぐは曲つたように見え、云々」「隠れた徳をもつ人は、二律対立を離れて無為自然の境地で隠れている。聖人でなければ誰も気付かない。人を知る難しさは、古い時代からの聖人でも難しい」と。然るべき人は、その辺に隠れていてわからないと言わんばかりの弁解に終始して直接答えない。

【原文】

公子曰。和光同塵抑有前聞。然猶山藏玉而草木茂。嶽收劍而光彩衝。尋躅知形見煙悟火。有智有行何必難知。師曰。物無心故現相。人含心故叵辨。

【書き下し】

公子曰わく、「和光同塵は抑おさへ前聞有り。然れども猶、山は玉を藏かくして草木茂り、嶽は劍を收めて光彩衝く。躅あとを尋ねて形を知り、煙を見て火を悟る。有智有行、何ぞ必ず知ること難からん」と。師曰わく、「物は心無きが故に相を現ず。人は心を含むが故に辨わきまえがた直し」と。

【註記】

①和光同塵…自分のすぐれた学識や徳を隠して世間と交わること。

【私訳】

憂国公子が言うに、「自分のすぐれた学識や徳を隠して世間と交わることはそもそも前から聞いている。それでも、山は玉を隠しておく（そこに）草木が茂り（『劉子』の故事）、けわしい山は劍を埋めておく（そこから）光が出てくる（『晋書』の故事）とも言ふ。足跡を観察して身体の大小を知り、煙を見て火の在処を悟るものである。智慧があり修行に精進する人を、知することは決まって難しいと、どうして言えるのか」と。玄関法師の言うに、「物は心がないから（隠すことなく）姿・かたちを現わす。人には心があるから隠す。だから見分けがつきにくいのである」と。

【付記】 十四問答の第五「然るべき人の難しい見分け」

憂国公子が、「然るべき人の見分けが難しいとどうして言えるのか、足跡を観察して身体の大小を知り、煙を見て火の在処を悟るものではないか」と問い詰めると、玄関法師は「物は心がないから（隠すことなく）姿・かたちを現わす。人には心が

あるから隠す。だから見分けがつきにくいのである」とまた詭弁を弄する。

【原文】

公子曰。既聞聖賢不易辨。然猶佛法蠹國僧人蠶食。其益安在乎。師曰。有益無益後更陳答。且舉大綱示道俗之損益。今聞子問不思佛法流傳。只在憂國家之損益。並忠臣義士誠可然也。夫所以建國設職樹君御民。本非爲宰天下而供君王屠海內而給臣佐。當以爲與天下之父。母濟萬民之塗炭。然則御馬之法非鑣策不能。馭人之道非教令不得。是故垂五常之法導四海之人。五經三史示其正路。金科玉條防其邪逸。若使主上行之則天下無爲。黎下遵之則宇內無事。君臣父子之禮有序。上和下睦之義無缺。然今誦詩者無溫惠淳和之心。讀禮者忘恭儉揖讓之志。懲惡勸善春秋所宗。潔靜精微周易攸尊。舉代披誦誰契孔丘之誠合周公之勸。能誦能言鸚鵡能爲。言不行何異猩猩。又夫百工代天九牧馭人。七道五畿之長三百六十之守。縣縣令尉鄉鄉里正。家家父子門門百姓。其數無量貴賤無邊。然猶行仁義者幾何。修忠孝者幾許。慎守禮信者有幾。不犯律令者幾人。並皆上下讀文不愼其行。貴賤口是心行悉非。諺曰。擎孝經打母頭。蓋斯之謂也。不曾顧自己乖越法教。還談毀他人違犯經法。所謂蔽己臃脚發他腫足者也。如公子所論天下所有百工令長並皆乖法者多。率土所有元元忠孝希聞。三教皆是一人之所弘傳。何以釋縑違犯吹毛求瑕。儒素邪非含弘不紉。又夫諸寺封戶不出一萬。僧尼啜粒不過一鉢。讀經禮佛報國家之恩。觀念坐禪答四恩之德。然今俗素衣食。或食萬戶之侯或費千乘之國。百里之宰三公職。尸坐溪壑碩鼠尾閭。空食人祿徒受人官。八元之美五臣之德。伊尹負鼎公望垂釣。張良三略陳平六奇。如是之功如此之德何以不聞。若責僧尼之一鉢何不撿俗素之多費。

【書き下し】

公子曰わく。「既に聖賢の辨え易からざるを聞く。然れども猶、佛法國に蠹^{のむ}じたり。僧人蠶^{さんしよく}食す。其の益安にか在らんや」と。師曰わく。「有益無益は後に更に更に陳答せん。且らく大綱を擧げて道俗の損益を示さん。今、子の問を聞くに、佛法の流傳

を思わず。只だ國家の損益を憂うるに在り。並びに忠臣義士は誠に然るべきなり。夫れ、國を建て、職を設け、君を樹て、民を御する所以は、本、天下を幸つかさどつて君王に供し、海内を屠ほふつて臣佐に給せんが爲に非ず。當に天下の父母と與に萬民の塗炭を濟わんと以爲おもう。然れば則ち、馬を御するの法、鑣策ひょうさくに非ざれば能わず。人を馭むるの道、教令に非ざれば得ず。是の故に、五常の法を垂れて四海の人を導く。五經・三史其の正路を示す。金科玉條、其の邪逸を防ぐ。若し主上之を行えば則ち天下無爲なり。黎下れいか之に遵えば則ち宇内無事なり。君臣父子の禮、序有り。上和し下睦むの義、缺くること無し。然れども今、詩を誦する者、溫惠淳和の心無く、禮を讀む者、恭儉揖讓の志を忘る。惡を懲らしめ善を勸むるは春秋の宗とする所、潔靜精微は周易の尊ところぶ攸なり。代を舉こぞつて披誦すれども、誰か孔丘の誠に契い、周公の勸に合うや。能く誦し能く言うは鸚鵡も能く爲す。言つて行ぜずんば何ぞ猩猩ししうに異ならん。又、夫れ、百工はつこう天に代り九牧人を馭おさむ。七道五畿の長、三百六十の守、縣縣の令尉れいい、郷郷の里正りせい、家家の父子、門門の百姓、其の數無量にして貴賤無邊なり。然れども猶、仁義を行う者幾何ぞ。忠孝を修する者幾許ぞ。慎んで禮信を守る者幾か有る。律令を犯さざる者幾くの人か。並びに皆、上下文を讀めども其の行を慎まず。貴賤口に是とすれど心行悉く非なり。諺に曰わく、「孝經きやうけいを撃うて母の頭を打つ」と。蓋し斯の謂か。

曾て自己の法教に乖越けおつすることを顧みず、還つて他人の經法に違犯だんきすることを談毀す。所謂、己の臙脚うみあしを蔽して他の腫足はれあしを發あらわす者なり。公子の論する所の如くは、天下のあらゆる百工・令長並びに皆法そむに乖そむく者多く、率土のあらゆる元元忠孝は聞くこと希なり。三教さんしうは皆、是れ一人の弘く傳うる所なり。何を以つてか、釋しやくし繙の違犯を毛を吹いて瑕きずを求め、儒素じゆその邪非を含弘がんこうして紕たださざるや。又、夫れ、諸寺の封戸は一萬を出ず。僧尼の噉粒せつりゆうは一鉢に過ぎず。經を讀み、佛を禮して國家の恩に報じ、觀念坐禪して四恩の徳に答う。然るに今、俗素の衣食は或いは萬戸の侯を食み、或いは千乘の國を費やす。百里の宰、三公の職、尸坐溪壑しざけいがくし碩鼠尾閭せきそびりよたり。空しく人祿を食み、徒らに人官を受く。八元の美、五臣の徳、伊尹鼎を負い、公望鈞を垂る。張良の三略、陳平の六奇、是くの如くの功、此の如くの徳、何を以つてか聞こえざる。若し僧尼の一鉢を責むれば、何ぞ俗素の多くの費を撿えざらん」と。

【註記】

- ①蠶…内部から害する。
- ②蠶食…内部から食いつぶす。
- ③鑣策…くつばみやムチ。
- ④五經…『詩經』『書經』『易經』『礼記』『春秋』。
- ⑤三史…『史記』『漢書』『後漢書』。

- ⑥金科玉條…黄金や珠玉のように善美を尽くした法律や規則。絶対的な拠り所。
- ⑦黎下…臣下。万民。
- ⑧温惠淳和…他人に対して温かく恵みを与えまごころをもつてなごむ。
- ⑨恭儉揖讓…うやうやしくつつましくへりくだって譲る。
- ⑩潔靜精微…清廉潔白で思慮深い。
- ⑪披誦…書を披いて読誦する。
- ⑫百工…文武百官。官人。
- ⑬九牧…九つの州の長官。
- ⑭七道…東海道・東山道・北陸道・山陽道・山陰道・南海道・西海道。
- ⑮五畿…大和・山城・摂津・河内・和泉。
- ⑯令尉…令は一万戸以上の県の長官。尉は武官。
- ⑰里正…県より小さいのが郷。郷より小さいのが里。里の長官。
- ⑱孝經…儒家の思想の「孝」を説く経書。
- ⑲乖越…背く、違える。
- ⑳談毀…非難する。
- ㉑釋縑…釈尊を学ぶ黒衣。仏教の僧尼。
- ㉒儒素…儒家の思想を学ぶ白絹。儒家の思想を学ぶ学徒。
- ㉓含弘…罪を飲み込んで心が広いこと。寛大。
- ㉔噉粒…すする粒。食事。
- ㉕千乘…百里四方。

②6 尸坐溪壑…屍のように無能な者が官職につき禄を食み欲張っている。

②7 碩鼠尾閭…食欲に飽きない大鼠(国王)は大海の海水を漏らす穴である。

②8 五臣…舜帝の臣下。禹・禪・契・皋・陶・伯益。

②9 伊尹…夏末から殷(商)にかけての政治家で料理人。

③0 張良の三略…秦末から前漢初期の戦略家張良が、太公望が書いた『三略』で漢の高祖の軍師となった故事。

③1 陳平の六奇…漢の軍師陳平が六回も奇策を用いて漢の高祖に仕えた故事。

【私訳】

憂国公子が言うに、「すでに聖人賢人の見分けがつきにくいことを聞いた。けれども、仏法は国の内部から毒している。僧尼は国の内部から食いつぶしている。僧尼の益する所はどこにあるのか」と。玄闕法師が言うに、「有益無益についてはあとで答えるとして、少しの間概括的に出家在家の損益を明かそうと思う。今、あなたの問いかけを聞くと、仏法が広く流布していることに関心がなく、ただ国家にとって仏教が損か得かを気にしている。そういう点では、忠臣や義士は実にそうあるべきである。そもそも、国を建国し、官職を設け、君主を立て、民を統治する理由は、もともと、天下を統治して君王に仕えたり、周囲の国を破って臣民に与えるためではない。まさに、天下の父母とともに万民の苦しみを救うためである。そうであれば、馬を御するにはくつばみやムチがなければ不可能で、人を治めるには教えや戒めや命令でなければならぬ。だから、仁・義・礼・智・信の五常の道理を示して国中の人を導き、『詩経』『書経』『易経』『礼記』『春秋』の『五経』や『史記』『漢書』『後漢書』の『三史』がその正しい道すじを示している。絶対的な拠り所として金科玉條が、人々がまちがった方向に逸れるのを防いでいる。もし、君主がこれらを実行すれば天下はやることもなく、万民がこれを遵守すれば天下は無事である。君臣や父子の間の礼に秩序があり、上も和し下も睦み合う意味にも欠けるところがない。しかし、今、『詩経』を声を出して読む人に、『詩経』が説く「溫柔敦厚」のような他人に対して温かく恵みを与えまことをもってなごむ心がなく、

『礼記』を読む人は『礼記』が説く「恭儉莊敬」のような）うやうやしくつつましくへりくだって他人に譲る考えを忘れて
いる。悪を懲らしめ善を勧めるのは『春秋』の主題であり、清廉潔白で思慮深いのは『周易』が尊ぶ根本である。世の人々
はこぞってそれらを披いて読誦するが、孔子の誠めに契い、周公旦の勧める教えに適う人が誰かいるだろうか。よく唱え、
よくしゃべるのはオウムでもできる。口にして実行しなければオランウータンのような猿と変らない。またそもそも、文武
百官は天子に代り、九つの州の長官は人民を治める。東海道・東山道・北陸道・山陽道・山陰道・南海道・西海道の七道と
大和・山城・摂津・河内・和泉の五畿内の長官、三百六十洲の守衛、県ごとの長官・武官、郷ごとの里の長官、家々の親子、
門ごとの百姓は、その数は数えきれないほど多く、富めるも貧するもはてしない。しかしながら、思いやり（仁）や正義（義）
の徳目を実行する者はどれくらいいるだろうか。国への忠誠や親への孝行を実行する者がどれくらいいるだろうか。慎しみ
深く礼義（礼）や誠実（信）の徳目を守る者がいるのだろうか。国の律令に違反しない者がどのくらいいるのか。同時に、
みな、位が上の人も下の人も経書を読んでもそこに説かれている実践を慎もうとはしない。富める人も貧する人も、口では
そう言うが心と行動はことごとくそうではない。諺に「（親孝行を説く）『孝経』の本を持ち上げて母の頭を打つ」と言うの
は、そういうことを言っているのだろうか。かつては自分自身が仏法に背いたことを顧みず、逆に他人が仏法に違背するの
を非難する。いわゆる、自分の膿をもった足を隠して他人の腫れた足をあばくようなものである。あなたが言おうとしてい
るような問題は、天下のあらゆる文武百官や令や長に軒並み法に背く者が多く、国のなかのあらゆる元から忠孝の人は稀に
しか聞かない、ということである。儒家の思想・仏教・道教の「三教」はみな、国王一人のおかげで広く伝わっているもの
である。どうして、仏教の僧尼（黒衣）が仏法に背くことを体毛を吹くようにして傷を探し、儒家の思想を学ぶ人（白絹）
の邪道・非道にはゆるく寛大でこれを糺さないのか。また、そもそも、諸々の寺の認められた数は一万に満たない。僧尼の
食事は一つの鉢に過ぎない。（それでも）経典を読誦し、仏を拝礼して、国家の恩に報じ、心を集中して坐禅し、父母・国王・
衆生・三宝の「四恩」の徳に答えている。然るに、今、俗世の人々の衣食は、あるいは万戸を有する諸侯の生活に恵まれ、
あるいは百里四方の領地を持っている。百里の宰官も、司徒・司空・大尉の三公の官職も、屍のように無能な者が官職につ

き禄を食み欲張っているし、食欲に飽きない大鼠（国王）は大海の海水を漏らす穴であり（やたら官吏を増やして浪費している）、むなしく人は禄を食み、いたづらに人は官職を受ける。八元の美風や、禹・禪・契皐・陶・伯益の五臣の徳、夏末から殷（商）にかけての政治家で料理人の伊尹は食器の鼎を背負い、太公望は釣糸を垂れ、秦末から前漢初期の戦略家張良は、太公望が書いた『三略』で漢の高祖の軍師となり、同じ時代の軍師陳平は六回も奇策を用いて漢の高祖に仕えた。このような功績、このような徳は、なぜ世に聞こえないのか。もし、僧尼の一鉢を責めるのなら、どうして人々の多くの浪費を調べ糾さないのか」と。

【付記】十四問答の第六「僧尼はどんな利益を世間にもたらすのか」

憂国公子が話を転じて「仏法は国の内部から毒している。僧尼は国の内部から食いつぶしている。僧尼の益する所はどこにあるのか」と迫る。玄闕法師が答えるに、「あなたが言おうとしているような問題は、天下のあらゆる文武百官や令や長に軒並み法に背く者が多く、国のなかのあらゆる元から忠孝の人は稀にしか聞かない、ということである。儒家の思想・仏教・道教の「三教」はみな、国王一人のおかげで広く伝わっているものである。どうして、仏教の僧尼（黒衣）が仏法に背くことを体毛を吹くようにして傷を探し、儒家の思想を学ぶ人（白絹）の邪道・非道にはゆるく寛大でこれを糾さないのか。また、そもそも、諸々の寺の認められた数は一万に満たない。僧尼の食事は一つの鉢に過ぎない。（それでも）経典を誦誦し、仏を拝礼して、国家の恩に報じ、心を集中して坐禅し、父母・国王・衆生・三宝の「四恩」の徳に答えている。然るに、今、俗世の人々の衣食は、あるいは万戸を有する諸侯の生活に恵まれ、あるいは百里四方の領地を持っている。百里の宰官も、司徒・司空・大尉の三公の官職も、屍のように無能な者が官職につき禄を食み欲張っているし、食欲に飽きない大鼠（国王）は大海の海水を漏らす穴であり（やたら官吏を増やして浪費している）、むなしく人は禄を食み、いたづらに人は官職を受ける。八元の美風や、禹・禪・契皐・陶・伯益の五臣の徳、夏末から殷（商）にかけての政治家で料理人の伊尹は食器の鼎を背負い、太公望は釣糸を垂れ、秦末から前漢初期の戦略家張良は、太公望が書いた『三略』で漢の高祖の軍師となり、同じ

時代の軍師陳平は六回も奇策を用いて漢の高祖に仕えた。このような功績、このような徳は、なぜ世に聞こえないのか。もし、僧尼の一鉢を責めるのなら、どうして人々の多くの浪費を調べ糾さないのか」と。日本の国会の大臣答弁並みの随分な官僚答弁である。すぐれた僧尼がいらないことを責めるのなら、人々の多くの浪費を糾弾してからにしろと言わんばかりで、玄關法師は終始問題をはぐらかしている。

【原文】

於是公子忙然無言喟然良久曰。俗官俸祿官位所當。加以星出星入櫛風沐雨。日夜在公何以辭讓。至如僧尼讀經禮佛。堂上宴坐任意修行。何能諷一卷之般若禮一佛之名號。報國家之鴻恩答四恩之廣德乎。師曰。公子之言雖似是。然未知妙。夫法名諸佛之師。佛則傳法之人。一句妙法億劫難遇。一佛名字憂曇非喻。是故雪童投身精進剥皮。滿界財寶不如一句之法。恒沙身命不比四句之偈。輪王爲床喜言燒身。良有以也。稱一佛名號消無量重罪。讚一字眞言獲無邊功德。何況一鉢龜飯四種恩德何以不酬。

【書き下し】

是に於いて、公子忙然として言うこと無し。喟然^{きぜん}として良久^{やや}しくして曰わく、「俗官の俸祿は官位の當る所なり。加^{しか}以^{のみならず}、

星に出て星に入り、風に櫛^{くしけず}り雨に沐^{ゆあみ}して、日夜公に在り。何を以ってか辭讓せん。僧尼の經を讀み佛を禮するが如きに至つては、堂上に宴坐^{えんざ}して意に任せて修行す。何ぞ能く一卷の般若^{はんにや}を諷じ一佛の名號を禮し、國家の鴻恩に報じ四恩の廣徳に答えんや」と。師曰わく、「公子の言、是^ぜに似ると雖も、然れども未だ妙を知らず。夫れ、法は諸佛の師と名づく。佛は則ち

傳法の人なり。一句の妙法は億劫に遇い難く、一佛の名字は憂曇うどんも喩えるに非ず。是の故に、雪童は身を投げ、精進して皮を剥ぐ。満界の財寶は一句の法に如かず。恒沙の身命は四句の偈に比せず。輪王は床と爲り喜見は身を焼く。良まことに以有るなゆえり。一佛の名號を稱して無量の重罪を消し、一字の眞言を讀じて無邊の功德を獲。何ぞ況んや一鉢の麤飯、四種の恩徳、何を以ってか酬いざらん」と。

【註記】

①喟然…ため息をついて。

②宴坐…坐禪。

③般若…『般若經』。

④憂曇…憂曇華。伝説上の花で三千年に一度咲き、その時金輪王が現世に出現するという。

⑤雪童…雪山童子。『涅槃經』に説かれる「無常偈」（諸行無常・是生滅法・生滅滅已・寂滅為樂）の後半二句を学ぶため、羅刹（鬼）に身を投じた説話で知られる。

⑥精進…精進波羅蜜。『大智度論』に説かれる、樂法梵志がバラモンの言葉に従い、自分の皮膚を剥いで紙とし、骨を筆とし、血を墨として、法を聞く用意をしたという説話。

⑦満界の財寶…『法華經』「藥王品」に説かれる、三千世界に満載の財宝。

⑧恒沙の身命…『金剛般若經』に説かれる、ガンジス川の砂数ほどの身命。

⑨輪王は床と爲り…『法華經』「提婆達多品」に説かれる、ある仙人が持つ『法華經』を聞くために、仙人の下僕となり床と
なつた説話。

⑩喜見・喜見菩薩。『法華經』『藥王品』に説かれる、自分の身を焼いて灯明とし、日月淨明德仏を供養した説話。

【私訳】

ここにおいて、憂国公子は忙然としてしばらく言うことが無かった。ため息をつきしばらくして言うに、「官吏の俸給は官位に応じている。そればかりでなく、朝早くから夜おそくまで、風が吹いても雨が降ってもそれにもめげず、日夜公務に精励している。どうして俸給を遠慮したり辞退する必要があるだろうか。僧尼が經典を誦誦し仏を拝礼すると言っても、仏堂の上で（風雨を避けて）坐禅し、自分の意志で修行できる。どうして（そんな楽なこと）で、一巻の『般若經』を誦誦し、一仏の名号を称えるくらいで、国家の鴻恩に報い、四恩の広い徳に答えられるのか」と。玄闍法師が言うに、「あなたの言うことはごもつともものであるが、未だ問題の深いところがわかっていない。そもそも、仏法は諸仏の師である。仏はその仏法を伝えてきた人である。たった一句でも仏法は億劫の年月をかけても遭遇するのは難しく、一仏の名号はめったに咲かない憂曇華の花にも喩えられない。であるから、雪山童子は「無常偈」（諸行無常・是生滅法・生滅滅已・寂滅為樂）の後半二句学ぶために羅刹（鬼）に身を投げ（『涅槃經』）、樂法梵志はバラモンの言葉に従い、自分の皮膚を剥いで紙とし、骨を筆として、法を聞く用意をした（『大智度論』）のである。三千世界に満ちる財宝（『法華經』）はたった一句の教法にも及ばないし、ガンジス川の砂数ほどの身命は無数（『金剛般若經』）だと言っても「無常偈」の四句には比べものにもならない。金輪王は仙人が持つ『法華經』を聞くために仙人の床となり、喜見菩薩は自分の身を焼いて灯明とした（『法華經』）のである。実に深い所以があるのである。一仏の名号（南無阿弥陀仏）を称えてはてしないほどの重罪を帳消しにし（『觀無量壽經』）、一字の真言を誦じれば限りない功德が得られる（『一字奇特頂眞經』『大日經疏』）のだ。ましてや、一鉢の粗飯、四種の恩徳に、どうして報われないことがあるのか」と。

【付記】十四問答の第七「官吏と僧尼のちがい」

ここまでで、憂国公子は玄闍法師の自己保身のような詭弁に辟易し黙ってしまったが、しばらくして氣をとり直し、また玄闍法師に「官吏の俸給は官位に応じている。そればかりでなく、朝早くから夜おそくまで、風が吹いても雨が降ってもそれにもめげず、日夜公務に精勵している。どうして俸給を遠慮したり辞退する必要があるだろうか。僧尼が經典を誦誦し仏を拝礼すると言つても、仏堂の上で（風雨を避けて）坐禪し、自分の意志で修行できる。どうして（そんな楽なこと）で、一巻の『般若經』を誦誦し、一仏の名号を称えるくらいで、国家の鴻恩に報い四恩の広い徳に答えられるのか」と問うた。痛烈である。これに対し玄闍法師は仏法の廣大無辺な功德を説くだけで説得力がない。

【原文】

公子曰。此言迂誕未足信受。吾師孔李不曾吐言。若誦經爲功禮佛爲績。吾亦誦五經三史之文禮周旦孔丘之像。與此何別。又五經之文三藏之字。文字是同誦持何異。師曰。公子之言乍聞似是。熟思天殊。深義乍難信且以譬說之。夫勅詔官符與臣下往來。文字是同功用太別。如勅書一命則天下奉行。施賞施罰百姓喜懼。如來經法亦復如是。菩薩聲聞天龍八部何人失信。當知外書如百姓之文。佛經如天子之勅。是故釋帝誦之摧修羅之軍。閻王跪之禮受持之人。未有誦五經而消罪讀三史而拔災。

【書き下し】

公子曰わく、「此の言、うたん迂誕なり。未だ信受するに足らず。吾が師孔李、曾て言を吐かず。若し經を誦すを功と爲し佛を禮す

るを績いさおと爲さば、吾も亦た五經・三史の文を誦し周旦・孔丘の像を禮す。此と何ぞ別ならん。又、五經の文・三藏の字、文

字は是れ同じくして、誦持の何ぞ異ならん」と。師曰わく、「公子の言うこと乍ちに聞かば、是せに似たるも、熟思つらつらえば天はるかに

殊なり。深義乍ちに信じ難し、且らく譬を以って之を説かん。夫れ、勅詔の官符と臣下の往來と、文字は是れ同じくして功用は太別なり。^{はなはだ}勅書の一命の如きは則ち天下奉行して賞を施し、罰を施すに百姓は喜懼す。^{きく}如來の經法、亦た復た是くの如し。菩薩・聲聞・天龍・八部、何人か信ぜざらん。當に知るべし、^{げしよ}外書は百姓の文の如く、佛經は天子の勅の如し。是の故に釋帝之を誦して修羅の軍を摧き、閻王^{ひやます}之に跪いて受持の人を禮す。未だ五經を誦して罪を消し、三史を讀んで災を拔くこと有らず」と。

【註記】

- ① 迂誕：大げさでウソが多いこと。
- ② 孔李：孔子と老子。
- ③ 五經三史：前出。
- ④ 周旦・孔丘：前出。
- ⑤ 往來：手紙、通信。
- ⑥ 外書：儒家の思想や同科の思想を説く經書。
- ⑦ 釋帝：帝釈天。
- ⑧ 修羅：阿修羅。アスラ。
- ⑨ 閻王：閻魔大王。

【私訳】

憂国公子が言うに、「あなたの言うことは大げさでウソが多い。まだ信じて受け容れることはできない。私の師である孔子や老子もそのようなことを言うことはなかった。もし、經典を読誦することが功德になり、仏を拝礼することに効能があるとすれば、私も「五經」「三史」の文を読誦し、周公旦や孔子の像を拝礼する。これとどこがちがうのか。また、「五經」の文や「三藏」の文は、文字には変わりはなく読誦するにどこがちがうのか」と。玄関法師が言うに、「あなたの言うことをにわかに聞けば、ごもつものように聞こえるが、よくよく考えれば、まだよくわかっておらず、はるかにちがっている。深い意味はただちに信じ難いので、しばらく譬え話によって説いて聞かせよう。そもそも、勅詔の官符と臣下の手紙とは、文字は同じでも功用は大きく異なる。勅書はたった一つの命令が天下に広く実行されて、あるいは賞を与え、あるいは罰を命じて人々は喜んだり恐れたりする。經典に説かれている如來の教法もまた同じである。菩薩・聲聞・天龍・八部衆の誰がその教法を信じないであろうか。まさに知るべきである、儒家の思想を説く經書は人々の文と同じで、仏教經典は君主の勅勅と同じである。であるから、帝釈天はこれを読誦して阿修羅（アスラ）の軍を破り、閻魔大王はこれにひざまずいて仏教經典を受持する人を拝礼した。いまだに「五經」を読誦して罪を消し、「三史」を読んで災を防いだことはないのである」と。

【付記】 十四問答の第八「仏教の經典と儒家の經書の深淺」

憂国公子は玄関法師のはぐらかすような応答にいらだち、「あなたの言うことは大げさでウソが多い」と言い放ち、「まだ、信じて受け容れることはできない。私の師である孔子や老子もそのようなことを言うことはなかった。もし、經典を読誦することが功德になり、仏を拝礼することに効能があるとすれば、私も「五經」「三史」の文を読誦し、周公旦や孔子の像を拝礼する。これとどこがちがうのか。また、「五經」の文や「三藏」の文は、文字には変わりはなく読誦するにどこがちがうのか」と糾弾する。それに対して玄関法師は「あなたはまだわかっていない」と応酬し、「譬え話によって説いて聞かせよう。そもそも、勅詔の官符と臣下の手紙とは、文字は同じでも功用は大きく異なる。勅書はたった一つの命令が天下に広く実行

されて、あるいは賞を与え、あるいは罰を命じて人々は喜んだり恐れたりする。經典に説かれている如來の教法もまた同じである。菩薩・聲聞・天龍・八部衆の誰がその教法を信じないであろうか。まさに知るべきである、儒家の思想を説く經書は人々の文と同じで、仏教經典は君主の詔勅と同じである。であるから、帝釈天はこれを読誦して阿修羅（アスラ）の軍を破り、閻魔大王はこれにひざまずいて仏教經典を受持する人を拝礼した。いまだに「五經」を読誦して罪を消し、「三史」を読んで災を防いだことはないのである」と譬え話ではぐらかす。憂国公子にとっては現実離れした浮世話のようで納得いかない。

【原文】

公子曰。釋迦辨而說功德。孔丘謙而不自伐。師曰。莫違斯言。孔甫自稱禮西方之聖。李老亦復吐吾師之談。大聖不妄語謗即墮深坑。

【書き下し】

公子曰わく、「釋迦は辨にして功德を説く。孔丘は謙にして自ら伐^{ほこ}らず」と。師曰わく、「導^いうこと莫れ、斯の言。孔甫自ら西方の聖を稱禮し、李老亦た復た吾師の談を吐く。大聖は妄語せず、謗すれば即ち深坑に墮つ。

【註記】

①孔甫…孔子。甫は老齡者への敬語。

②李老…老子。李は本名。老は老齡者への敬語。

【私訳】

憂国公子が言うに、「釈尊は多弁で（自分の教えの）功德を口にする。孔子は謙虚で自分（の教え）を自慢しない」と。玄闕法師が言うに、「そんなことを言うものではない。孔子は自ら釈尊のことを西方の聖人として称讃し（法淋『破邪論』）、老子もまた釈尊をわが師と言っている（老子『西昇経』）。偉大な聖人はウソをつかない、他人を非難すれば深い穴に墮ちるものである」と。

【付記】十四問答の第九「釈尊と孔子」

まだ納得しない憂国公子は「釈尊は多弁で（自分の教えの）功德を口にする。孔子は謙虚で自分（の教え）を自慢しない」と言う。これに対して玄闕法師は「孔子は自ら釈尊のことを西方の聖人として称讃し（法淋『破邪論』）、老子もまた釈尊をわが師と言っている（老子『西昇経』）」と反論する。しかし、法淋の『破邪論』は傳奕（道教）の排仏論に対する仏教擁護・道教批判の書で、釈尊を称讃するのは当然であり、老子の『西昇経』は初期道教經典で老子がかいたものではない。研究者によれば、旧訳時代の仏教受容の波に影響されたもので、釈尊を尊んでも不思議ではない。

【原文】

公子曰。作十惡五逆者理可填地獄。謗人謗法何由可然。師曰。子未聞療病之法乎。治身病必資三法。一醫人。二方經。三妙藥。病人若敬醫人信方藥至心服餌疾即除愈。病人若罵醫人不信方藥不服妙藥病疾何由得除。如來治衆生心病亦復如是。佛如醫王教如方經理如妙藥。如理思惟猶如服藥。依法服藥滅罪證果。然今重罪愚人謗人謗法重罪何脫。法資人弘人待法昇。人法一體不得別異。是故謗人則法毀法則人。謗人謗法定墮阿鼻獄更無出期。世人不知斯義任舌輒談不顧深害。寧可日夜作十惡五逆。一言一語不合謗人法。行殺盜者現得衣食之利。謗人法者於我何益。

【書き下し】

公子曰わく、「十惡五逆を作す者、理は地獄に墮つべし。人を謗り法を謗る、何に由つてか然るべき」と。師曰わく、「子、未だ療病の法を聞かざるや。身病を治すに必ず三法に資る。一に醫人、二に方經、三に妙藥なり。病人若し醫人を敬い、方藥を信じ、至心に服餌すれば、疾やまい即ち除愈す。病人若し醫人を罵り、方藥を信ぜず、妙藥を服さざれば、病疾何に由つてか除くことを得ん。如來の衆生の心病を治すこと亦た復た是くの如し。佛は醫王の如く、教は方經の如く、理は妙藥の如し。理の如く思惟すれば猶し藥を服するが如し。法に依つて藥を服すれば罪を滅し果を證す。然るに今、重罪の愚人は人を謗り法を謗る。重罪何ぞ脱れん。法は人に資つて弘まり人は法を待つて昇る。人法一體にして別異なることを得ず。是の故に、人を謗るは則ち法、法を毀そしるは則ち人なり。人を謗り法を謗れば定んで阿鼻獄に墮ち更に出る期無し。世人は斯の義を知らずして舌に任せて輒たやすく談じ深害を顧みず、寧ろ日夜に十惡五逆を作すべくも、一言一語も人法を謗るべからず。殺盜を行う者は現に衣食の利を得。人法を謗る者は我れに於いて何の益あらん」と。

【註記】

①十惡五逆…前出。

②阿鼻獄…阿鼻地獄。五逆・誹法を犯した者が間斷なく責苦を受ける地獄。八大地獄の一つ。

【私訳】

憂国公子が言うに、「十惡五逆を犯す人は地獄に墮ちるのが道理である。しかし、人を誹謗し仏法を誹謗するくらいで、どう

して地獄に墮ちることになるのか」と。玄闍法師が言うに、「あなたは、まだ病氣を治療する方法を聞いたことがないのだろうか。身体の病を治すには必ず三つの方法によるものである。一つは医者、二つは処方、三つは良薬である。病人がもし、医者を敬い、処方信じ、ちゃんと薬を飲めば、病は除かれ治癒する。病人がもし、医者を罵り、処方を信ぜず、薬を飲まなければ、病をどうして除くことができるだろう。如來が凡夫・衆生の心の病を治すこともまた同じである。仏は医王と同じく、教えは処方と同じく、道理は良薬と同じである。道理の通りに考えれば、薬を飲むことと同じである。教えに随って薬を飲めば宿罪が消え仏果を得ることができる。しかし今、重罪を犯した愚者は、人を謗り仏法を謗る。重罪をどうやって償うのか。仏法は人によって広まり、人は仏法によって高まるのである。人と仏法は一体であり別々なのではない。であるから、人を謗るのは仏法を謗ることであり、仏法を謗るのは人を謗ることと同じである。人を謗り仏法を謗れば必ず、五逆・誹法を犯した者が間斷なく責苦を受ける阿鼻地獄に墮ち、さらにそこから出る機会はない。世の人たちはこの意味を知らず、口にまかせて安易に議論し、深刻な害があるのも気にせず、たとい日夜に十惡五逆を犯すことになっても、一言も人や仏法を謗ってはならない。殺生や盜みを行う人は、たしかに衣食の利益を得るかもしれない。しかし、人や仏法を謗る人は、自分自身にどんな利益があるのだろうか」と。

【付記】十四問答の第十「人や仏法への誹謗」

憂国公子が「十惡五逆を犯す人は地獄に墮ちるのが道理である。しかし、人を誹謗し仏法を誹謗するくらいでどうして地獄に墮ちることになるのか」と問うと、玄闍法師は「仏は医王と同じく、教えは処方と同じく、道理は良薬と同じである。道理の通りに考えれば、薬を飲むことと同じである。教えに随って薬を飲めば宿罪が消え仏果を得ることができる。しかし今、重罪を犯した愚者は、人を謗り仏法を謗る。重罪をどうやって償うのか。仏法は人によって広まり、人は仏法によって高まるのである。人と仏法は一体であり別々なのではない。であるから、人を謗るのは仏法を謗ることであり、仏法を謗るのは人を謗ることと同じである。人を謗り仏法を謗れば必ず、五逆・誹法を犯した者が間斷なく責苦を受ける阿鼻地獄に墮ち、

さらにそこから出る機会はない」と応答するが、「十惡五逆を犯したのではなく、人や仏法を誹謗したくらいでどうして地獄に墮ちるのか」という疑問の核心に答えていない。「身体の病を治すには必ず三つの方法によるものである。一つは医者、二つは処方、三つは良藥である。病人がもし、医者を敬い、処方を信じ、ちゃんと藥を飲めば、病は除かれ治癒する。病人がもし、医者を罵り、処方を信ぜず、藥を飲まなければ、病をどうして除くことができるだろう。如來が凡夫・衆生の心の病を治すこともまた同じである」という譬え話も説得力がない。

【原文】

公子曰。謹承示南而自今以後不敢違犯。公子曰。既承不可謗人法。然未委人法有幾種。爲當有深淺乎。師曰。大而論之有二種。一顯教法。二密教法。顯教中又二。言一乘三乘別故。一乘者如來他受用身從十地至初地所現報身所說一乘法是也。三乘者應化釋迦爲二乘及地前菩薩等所說經是也。密教者自性法身大毘盧遮那如來與自眷屬自受法樂故所說法是也。所謂眞言乘者是也。如是諸經法契當其機根並皆妙藥。隨其經教菩薩造論人師作疏。末代弟子依斯經論讀誦修行。斯乃人法差別也。淺深福罰如十住心論。

【書き下し】

公子曰わく、「謹しんで示南を承んぬ。今自り以後敢えて違犯せじ」と。公子曰わく、「既に人法を謗るべからざることを承んぬ。然れども、未だつまひらか委ならず、人法に幾種か有る。爲當深淺有るや」と。師曰わく、「大いに之を論ずるに二種有り。

一は顯教の法、二は密教の法なり。顯教の中に又、二あり。言わく、一乘と三乘は別なるが故に。一乘とは、如來の他受用身、十地從り初地に到るまで現ずる所の報身所說の一乗の法、是れなり。三乘とは、應化の釋迦、二乗及び地前の菩薩等の爲に説く所の經、是れなり。密教とは、自性法身大毘盧遮那如來が自眷屬と自受法樂の故に説く所の法、是れなり。いわゆ

る眞言乗とは是れなり。是くの如く、諸々の經法は其の機根に契當して並びに皆妙藥なり。其の經教に隨つて菩薩は論を造り人師疏にんじを作る。末代の弟子は斯の經論に依つて讀誦し修行す。斯れ乃ち人法の差別なり。淺深福罰は十住心論の如し。

【註記】

- ①示南…教示。
- ②他受用身…前出。
- ③自受法樂…自らのサトリを楽しむ。
- ④自性法身…眞實そのものの法身。
- ⑤自眷屬…仏・美冊に付き従う諸尊。脇侍など。
- ⑥人師…師・先生。
- ⑦疏…註釈書。
- ⑧十住心論…「十住心」を説いた宗祖大師の代表作『秘密曼荼羅十住心論』、『秘藏宝鑰』の広本。

【私訳】

憂国公子が言うに、「謹しんでご教示を承った。これからは決して違背しないようにしようと思う」と。憂国公子がさらに言うに、「すでに人や仏法を誘つてはならないことを承った。しかしまだ、人や仏法に何種あるかを聞いていない。また、人や仏法に深いものと浅いものがあるのだろうか」と。玄関法師が言うに、「大きく分けて議論するのに二種がある。一つは顕教の法、二つは密教の教法である。顕教のなかにまた、二つある。一乗と三乗とは別々なものだから。一乗とは、如來の他受用身で、第十地から初地に現われる報身が説く一乗の教法がそれである。三乗とは、応化身、すなわち歴史上の釈尊と、

声聞・縁覺の二乗と十地以前の菩薩などのために説かれた經典である。密教とは、真実そのものの法身大毘盧遮那如來が從者たちとともに自らのサトリを樂しむために説く教法である。いわゆる真言乘とはこれである。このように、さまざまな經典の教法は学ぶ人の機根にうまくあてはめて、誰にも効き目がある良薬なのである。その經典の教法に従って、菩薩は論を造り師となる人は註釈を作る。末代の弟子は、この經論に依って經典を讀誦し修行するのである。以上が、人や仏法のちがいである。意味が深いとか浅いとかのちがいは、福德があるか罰があるかのちがいは、『十住心論』（第九住心）に説かれている通りである」と。

【付記】十四問答の第十一「人や仏法の種類・深淺」

ここで憂国公子はいったん銚をおさめ、「すでに人や仏法を謗ってはならないことを承った」として、「人や仏法に何種あるか。また、人や仏法に深淺があるのか」と問う。これに答えて、玄闍法師は「人や仏法には顯教と密教の二種があり、顯教にはまた一乗と三乗とがある。これは学ぶ人の機根に応じてそうなっている。意味や功德のちがいは『十住心論』の「第九住心」に説かれているから、それを見るように」と説く。

【原文】

公子曰。今聞師説已知人法之別。然今造諸論疏者皆破他立自。不成謗法耶。師曰。菩薩用心皆以慈悲爲本以利他爲先。能住斯心破淺執入深教利益尤廣。若挾名利心執淺教破深法不免斯尤。

【書き下し】

公子曰わく、「今、師の説を聞く。已に人法の別なることを知りぬ。然るに今、諸論疏を造る者は皆、他を破して自を立つ。謗法と成らずや」と。師曰わく、「菩薩の用心は皆、慈悲を以つて本と爲し利他を以つて先と爲す。能く斯の心に住して淺執

を破し深教に入るは利益尤も廣し。若し名利の心を挾んで淺教を執し深法を破すれば斯の尤とがを免れず。

【私訳】

憂国公子が言うに、「今、あなたの考えを聞いて、人や仏法にちがいがあることを知った。しかし、諸々の論疏を著わす人はみな、他説を否定して自説を立てる。謗法にはならないのだろうか」と。玄関法師が言うに、「菩薩で肝心なことは、慈悲を根本とし、にすることである。よくこの慈悲の心に住し、あさはかな執着を否定し深い教えに入るとは人に益する所が最も広大である。もし名誉や利得の心をさしはさんで、あまり意味のない教えに執着し、奥深い教えを否定するならこの咎を免れられない」と。

【付記】十四問答の第十二「論疏の自説は他説の誹謗か」

憂国公子が改めて「人や仏法にちがいがあることを知った。しかし、諸々の論疏を著わす人はみな、他説を否定して自説を立てる。それは謗法にはならないのだろうか」と問う。それに対し玄関法師は「菩薩で肝心なことは、慈悲を根本とし、利他を最優先にすることである。よくこの慈悲の心に住し、あさはかな執着を否定し深い教えに入るとは、人に益する所が最も広大である。もし名誉や利得の心をさしはさんで、あまり意味のない教えに執着し、奥深い教えを否定するならこの咎を免れられない」と答える。憂国公子が問うているのは「論疏」の著者が自説を立てるのは、他説への誹謗にならないかということなのに、玄関法師は菩薩の慈悲・利他で答えてはぐらかし、「論疏」の自説を「あまり意味のない教えに執着し、奥深い教えを否定するもの」とでも言いたげである。なぜここに菩薩の慈悲・利他を持ち出して、「論疏」の著者の自説は他説の誹謗にならないかと言う問いの答えにするのか、文脈がよくわからない。

【原文】

公子曰。既蒙提撕心霧忽消。然猶有心中未決者。何者既承雖無得道者其道不可絶。具戒慧者若辱若昧。然今見世間逃役者衆。姦盜者多。御代聖皇佐時賢臣。見斯獼猴不能默忍。佛教王法相和如何。師曰。此有二種。一悲門二智門。大悲之門開而無遮。大智之門制而無開。制門如涅槃薩遮等經。悲門如十輪等經。相和與奪坐臧斷而已。又人王法律法帝禁戒事異義融。任法控馭利益甚多。枉法隨心罪報極重。世人不知斯義。不細王法不訪佛法。隨愛憎而浮沈任貴賤而輕重。以此馭代後報何免。不可不慎不可不慎。

【書き下し】

公子曰わく、「既に提撕ていせいを蒙り心の霧忽ちに消ゆ。然れども猶、心中に未だ決せざる者有り。何とならば、既に得道の者無しと雖も其の道絶うるべからず。戒慧を具する者は辱の若く昧の若しと承わる。然るに今、世間を見るに逃役ちやうえきの者衆く姦盜かんとうの者多し。代を御する聖皇、時を佐くる賢臣、斯みじうの獼猴を見て默し忍ぶこと能わず。佛教と王法と相和すること如何」と。師曰わく、「此れに二種有り。一に悲門、二に智門なり。大悲の門には開ひらくして遮すること無し。大智の門には制して開すること無し。制門は涅槃・薩遮さつしゃ等の經の如し。悲門は十輪等の經の如し。相和に與奪あり、坐臧ざざうをも斷るのみ。又、人王の法律と法ほの禁戒と、事異にして義融ぜり。法に任せて控馭くわうごすれば利益甚だ多し。法を枉まげ心に随えば罪報極めて重し。世人は斯の

義を知らず。王法を細くせず佛法を訪らわす。愛憎に随つて浮沈し、貴賤に任せて輕重^{きようじゆう}す。此を以て代を馭む、後報何ぞ免れん。慎しまずんばあるべからず、慎しまずんばあるべからず。

【註記】

- ①提撕…教導すること。
- ②逃役…つらい仕事から逃れる。
- ③姦盜…邪淫や盗み。
- ④獼猴…大猿。
- ⑤薩遮…『大薩遮尼乾子所說經』。說法主・薩遮尼乾子が嚴熾という王に、王のなすべき徳目を問答形式で説く。
- ⑥十輪…『大乘大集地藏十輪經』。仏が地藏菩薩のために、衆生済度のための十種の轉法輪を説く。
- ⑦坐贓…ワイロを受ける罪。
- ⑧控馭…思うように人を動かす。

【私訳】

憂国公子が言うに、「すでに教導を受け心の霧がたちまち消えた。しかしなお、心のなかにまだ決着しないものがある。なぜならば、サトリを得た者はないけれども仏道を絶やしてはならない、(また)戒・定・慧の「三学」を合せ持する者は(それを表に出さず)恥ずかしそうにして愚か者のようだと(前に)聞かされた。だが今、世間を見ると、つらい仕事から逃れる(ために出家した)者が多く、邪淫や盗みを犯すものも多い。時代の世を治める徳の高い皇帝や、それを補佐するすぐれた臣下は、このような大猿(ずるがしこい人)を見て黙って我慢することはできない。仏教と君子の治世(王法)と

が互いに調和することができのだろうか」と。玄闍法師が言うに、「それに答えるのに二通りある。一つは大悲による方法、二つは智慧による方法である。大悲による方法は、寛容にして否定せず、大智による方法は命じて抑え許さないことである。制する方法は『涅槃經』や『薩遮尼乾子經』などに説かれ、大悲による方法は『地藏十輪經』などに説かれている。仏法と王法とが相和するにも寛容と厳格がある。（厳格（王法）だけなら、）ワイロを受け取る罪を斷罪するのみである。また、人としての帝王の法律と法としての仏法の戒律と、定める事項はちがってもその意図は共通である。法に従って人を動かせば利益はとて多いし、法を曲げて邪心に盲従すれば罪の報いは極めて重い。世間の人はこの意味を知らない。王法を詳しく知らず仏法を知ろうともしない。愛憎によって人の浮沈が決り、貴賤によって罪の輕重が決る。このように世を治めると、後の報いは免れることができない。慎みずにいられようか、慎みずにいられようか」。

【付記】十四問答の第十三「仏法と王法」

憂国公子の僧尼不信は続き、「今、世間を見ると、つらい仕事から逃れる（ために出家した）者が多く、邪淫や盜みを犯すものも多い。時代の世を治める徳の高い皇帝や、それを補佐するすぐれた臣下は、このような大猿（ずるがしい人）を見て黙って我慢することはできない。仏教（仏法）と君子の治世（王法）とが互いに調和することができないのか」と追及する。玄闍法師はこれに対し、先ず「それに答えるのに二通りある。一つは大悲による方法、二つは智慧による方法である。大悲による方法は、寛容にして否定せず、大智による方法は命じて抑え許さないことである」と前置きし、「仏法と王法とが相和するにも寛容と厳格がある。（厳格（王法）だけなら、）ワイロを受け取る罪を斷罪するのみである。また、人としての帝王の法律と法としての仏法の戒律と、定める事項はちがってもその意図は共通である。法に従って人を動かせば利益はとて多いし、法を曲げて邪心に盲従すれば罪の報いは極めて重い」「愛憎によって人の浮沈が決り、貴賤によって罪の輕重が決る。このように世を治めると、後の報いは免れることができない」と答える。憂国公子は、「僧尼」の墮落を徳の高い皇帝とか臣下たちは黙って看過できないから、仏教（仏法）の僧尼は破戒・邪淫などの墮落をやめなければ、仏法と王法とは調和でき

ないと訴えているのに、玄関法師は「帝王の法律と法としての仏法の戒律と、定める事項はちがってもその意図は共通である。法に従って人を動かせば利益はとも多いし、法を曲げて邪心に盲従すれば罪の報いは極めて重い」などとはぐらかし答弁に終始している。

【原文】

又公子先所談旱澇疫癘天下版盪僧人之所招者。此亦不然。子未見大道妄吐斯言。今當攬秦鏡臨子面。若災由非法之僧尼者。堯代九年之水湯時七載之旱。如是旱澇由誰僧而興。彼時無僧何必由僧。夏運顛覆殷祚夷滅。周末絕廢秦嗣旱亡。並皆禍起三女運隨天命。其日無僧豈預佛法。夫災禍之興略有三種。一時運。二天罰。三業感。時運者。所謂陽九百六。堯水湯旱當之。是故聖帝出震見機逆備。滅劫五濁亦是。天罰者。由教令乖理天即罰之。孝婦不雨之誅忠臣降霜之囚。如是之類是也。業感者。惡業衆生同生惡時業感故招如是災。如是之論具如歷代五行志等。及守護國經王法正論經等。子不曾知斯義。橫吐狂言理不可當。

【書き下し】

「又、公子の先に談ずる所の旱澇疫癘^{かんろうえきれい}、天下の版盪^{はんどう}は僧人の招く所とならば、此れ亦た然らず。子、未だ大道を見ずして妄りに斯の言を吐く。今當に、秦鏡^{しんけい}を攬^とつて子の面に臨むべし。若し、災は非法の僧尼に由るとなれば、堯代九年の水、湯の時の七載の旱、是くの如くの旱澇、誰の僧に由つてか興る。彼の時に僧無し、何ぞ必ず僧に由らん。夏の運顛覆^{そい}し、殷の祚夷^{そい}滅し、周末絶廢し、秦の嗣早く亡せしこと、並びに皆禍三女より起り、運天命に隨う。其の日、僧無し、豈に佛法に預け

んや。夫れ、災禍の興りに略して三種有り。一に時の運、二に天の罰、三に業感なり。時の運とは、謂わゆる、陽九百六、堯の水、湯の旱、之に當る。是の故に、聖帝震に出て機を見て逆備す。滅劫の五濁亦た是れなり。天の罰は、教令理に乖くそむに由つて天即ち之を罰す。孝婦雨ふらさざるの誅、忠臣霜を降らすの囚、つみ是くの如くの類、是れなり。業感とは、惡業の衆生同じく惡時に生れて業感の故に是くの如き災を招く。是くの如くの論は具に歷代の五行志等、及び守護國經、王法正論經等の如し。子、曾て斯の義を知らずして横さまに吐狂言を吐く。理當るべからず」と。

【註記】

- ①旱澇：干ばつと洪水。
- ②疫癘：疫病。
- ③版盪：政治が乱れること。
- ④秦鏡：秦の始皇帝の内臓まで映したという鏡。
- ⑤祚夷：統治や平定。
- ⑥業感：業報。
- ⑦陽九百六：一元（四五六〇年）の間に、陽厄（干ばつ）が四回、陰厄（洪水）が五回、合計九回起るといふ俗信を陽九といふ。黄帝から数えて百六十年に陽厄が興つたので百六と言ふ（松長有慶『訳注 秘藏宝鑑』）。
- ⑧聖帝震に出て：中国の古代神話の帝王で洪水神話で有名な伏羲は、易によつて災禍を予知したといふ。伏羲は震（東方）の出で、八卦を發明した易の創始者とされている。

⑨ 滅劫…人間の寿命が減っていく劫の過程。

⑩ 孝婦雨ふらさざる…『漢書』の故事。東海の寡婦が姑によく仕えていたが、姑の娘の讒言によって死罪になったため、三年間干ばつが続いたという。

⑪ 忠臣霜を降らす…『淮南子』の故事。燕の忠臣鄒衍が讒言によって投獄され、天を仰いで慨嘆したため、夏なのに霜が降りたという。

⑫ 五行志…『五行志』。中国正史のなかの志の一つ。天災地変の解釈書。

⑬ 王法正論經…『佛爲優填王說王法政論經』。

【私訳】

「また、公子がさつき言ったように、干ばつや洪水や疫病や天下の政が乱れることは僧尼（の非行）が招くことだとするならば、それはそうではない。あなたは、まだ仏教の根本の道理がわからないまま、みだりにそのようなことを口にしていて。今まさに、秦の始皇帝の内臓まで映したという鏡を持って、あなたの顔を映してあげよう。もし、天災地変が非法の僧尼のせいでは起るならば、堯帝の時代に九年続いた洪水や、殷の湯王の時に七年続いた干ばつなど、このような干ばつ・洪水は、どんな僧尼のせいでは起るのか。その時代には僧などおらず、どうして必ず僧のせいになるのか。夏の国運が顛覆したり、殷の統治・平定が滅亡したり、周の末裔が絶えてなくなったり、秦の後継者が早く亡んだりしたこと、一様に皆その災禍は天子による美女の寵愛から起り、運が天命に随ったままである。その時代僧尼はいなかった。どうして仏法のせいになるのか。そもそも、災禍が起るには略して三通りの理由がある。一つは時運、二つは天罰、三つに業感である。時運とは、いわゆる、陽九百六、堯帝の時代の洪水、湯王の時代の干ばつが、これに当る。であるから、中国の古代神話の帝王で洪水神話で有名な伏羲は、震（東方）から出て八卦を発明し、易によって災禍を予知し未然に防いだ。人間の寿命が減っていく滅劫の五濁惡世もこの時運である。天罰は、上位の者が発する教示や命令が道理に背いていれば、天はこれに罰を与える。姑孝行だっ

た寡婦が姑の娘の讒言で死罪になったため、三年間雨が降らなかった罰や、燕の忠臣鄒衍が讒言によって投獄され、天を仰いで慨嘆したため、夏なのに霜が降った罰など、この類が天罰である。業感とは、悪い宿業を持つ衆生が同じ悪世に生まれ、業報によってこのような災を招くこと。このような論述は具体的に歴代の『五行志』など、及び『守護国界経』や『王法正論経』などに説かれている。あなたは、かつてこの意味を知らないで、不当にもまちがった見解を述べた。道理になっていないはずがない」と。

【付記】十四問答の第十三「玄闍法師の僧尼擁護」

玄闍法師のはぐらかし答弁が続き、「あなたは、また仏教の根本の道理がわからないまま、みだりにそのようなことを口に出している」と高姿勢を続け、さらに「もし、天災地変が非法の僧尼のせいで起るならば、堯帝の時代に九年続いた洪水や、殷の湯王の時に七年続いた干ばつなど、このような干ばつ・洪水は、どんな僧尼のせいで起るのか。その時代には僧などおらず、どうして必ず僧のせいになるのか」とまた詭弁を弄する。さらにまた、「夏の国運が顛覆したり、殷の統治・平定が滅亡したり、周の末裔が絶えてなくなったり、秦の後継者が早く亡んだりしたこと、一様に皆その災禍は天子による美女の寵愛から起り、運が天命に随ったまでである。その時代僧尼はいなかった。どうして仏法のせいになるのか」等々。そして最後に、「あなたは、この意味を知らないで不当にもまちがった見解を述べた。道理になっていないはずがない」と。完全に開き直っている。

【原文】

師曰。有益無益後當陳答者。夫無病則無藥有障則有教。妙藥悲病而興佛法愍障而顯。是故聖人出世必由慈悲。大慈與樂大悲拔苦。拔苦與樂之本不如防源。防源之基非教不得。疾有輕重藥則強弱。障有厚薄教則淺深。增劫病輕輪王御人。減劫障厚如來垂教。五濁惡世衆生疾重。三毒鬱興八苦迫身。福德薄少貧病極多。斯即前世惡因之報感。遂乃嗜味者殺生命而填腹。貪財

者奪他物而衣食。耽色飛蛾拂炎滅身。好酒猩猩瓮邊被縛。如是邪見行不可勝計。此生作惡業後當墜三途。三途之苦經劫難免。如來慈父見此極苦說其因果。說惡因果拔其極苦。示善因果授其極果。修其教者略有二種。一出家二在家。出家者剃頭染衣比丘比丘尼等是也。在家者戴冠絡繆優婆塞優婆夷等是也。上達天子下及凡庶。持五戒十善等歸依佛法者皆是也。言菩薩者如是在家人持十善戒修六度行者是也。出家發大心者亦是。斷惡故離苦修善故得樂。下從人天上至佛果。皆是斷惡修善之所感得。爲示斯兩趣。大聖設教。佛教既存弘行在人。是故知法者出家傳燈。仰道者入道改形。經云。若有國王父母放人民男女等令出家入道所得功德無量無邊。有僧尼故佛法不絕佛法存故人皆開眼。眼明而行正道。遊正路故至涅槃。加以經法所在諸佛護念諸天守衛。如是利益不可勝計。

【書き下し】

師曰わく、「有益無益は後に當に陳答すとは、夫れ、病無ければ則ち藥無し。障有れば則ち教有り。妙藥は病を悲しんで興り、佛法は障を慫んで顯わる。是の故に、聖人の世に出るは必ず慈悲に由る。大慈は樂を與え大悲は苦を抜く。拔苦與樂の本、源を防ぐに如かず。源を防ぐ基、教に非ざれば得ず。疾に輕重有らば藥則ち強弱なり。障に厚薄有らば教え則ち淺深あり。

増劫に病輕ければ輪王人を御し、減劫に障厚ければ如來教えを垂る。五濁惡世に衆生の疾重く、三毒さかん鬱ふさんに興つて八苦身に迫る。福德は薄少にして貧病極めて多し。斯れ即ち前世の惡因の報感なり。遂に乃ち味を嗜しなむ者は、生命を殺して腹を

填たし、財に食する者は他の物を奪つて衣食す。色に耽る飛蛾は炎を拂つて身を滅し、酒を好む猩猩はほとぎ瓮の邊に縛らるる。

是くの如く、邪見の行、勝あげて計うべからず。此の生に惡業を作し、後に當に三途に墜おつべし。三途の苦は劫を経て免れ難し。如來の慈父は此の極苦を見て其の因果を説く。惡因果を説いて其の極苦を抜き、善因果を示して其の極果を授く。其

の教を修する者に略して二種有り。一に出家、二に在家なり。出家とは、頭を剃り衣を染むる比丘・比丘尼等、是れなり。

在家とは、冠を戴きえい まじ纓を絡える優婆塞・優婆夷等、是れなり。上は天子に達し、下は凡庶に及ぶ。五戒・十善等を持し、佛

法に歸依する者皆、是れなり。菩薩と言うは、是くの如き在家の人、十善戒を持し、六度の行を修する者、是れなり。出家し大心を發する者、亦た是れなり。惡を斷つが故に苦を離れ、善を修するが故に樂を得。下は人天從り上は佛果に到るまで、皆是れ斷惡修善の感得する所なり。斯の兩趣を示さんが爲に大聖教を設けたり。佛教既に存し弘く行ぜらるるは人に在り。

是の故に、法を知る者は出家して燈を傳え、道を仰ぐ者は入道して形を改む。經に云わく、「若し、國王父母有りて人民男女等を放し出家入道たらしめ、得る所の功德は無量無邊なり」と。僧尼有るが故に佛法は絶えず。佛法存するが故に人皆開眼す。眼明かにして正道を行ず。正路に遊ぶが故に涅槃に至る。加以、しかのみならず經法の在る所は諸佛護念して諸天守衛す。是くの如く、利益を勝て計うべからず」と。

【註記】

①瓮：神酒を入れる酒樽。

②纓：冠の紐。

③經：『賢愚因緣經』。仏の本生譚。

【私訳】

玄關法師が言うに、「有益無益についてはあとの問答で述べると言ったのは、そもそも、病気がなければ薬はいらない。心にさしさわりがあるから仏教がある。良薬は病の苦を悲しんでさかんに使われるようになった、仏法は心のさしさわりを哀れ

んで説かれた。であるから、聖人が世に出るのは必ず慈悲によってである。大慈は安樂を人に与え大悲は心の苦を抜いてくれる。この拔苦与樂の本は、苦の根源を防ぐことが肝要である。その基は、教法でなければほかにない。病氣に軽い重いがあるから薬に強弱がある。心のさしさわりに厚い薄いがあるから教法に浅い深いがある。増劫の時期には病氣は軽いから、転輪王は人を化導し、減劫の時期には心のさしさわりが厚いから、如来が教法を説く。五濁の惡世には衆生の病氣は重く、貪・瞋・痴の「三毒」がさかんに流行して「生」「老」「病」「死」などの「八苦」が身辺に迫る。福德が薄くて少ないから、貧しくして病めることがとても多い。これは前世の惡業が原因の報果である。結果、美味を好む者は、他の命を殺して腹を満たし、金品を貪る者は他の物を奪って生活する。淫欲に溺れる者は、飛ぶ蛾のように、火中に飛び込んで身を滅し、酒に酔うのが好きな人は、猩猩のように、神酒を入れる酒樽のまわりをうろついて縛られる。このような、邪しまな考えによる行いは、悉く数える必要もない。今生において惡業を重ね、のちに「三途」に墜ちるのは必定である。「三途」の苦は、永遠に近い長い時間をかけても脱することはできない。慈悲深い父たる如来は、この厳しい極苦を見てその原因と結果とを説く。（すなわち）惡因惡果を説いて極苦を抜き、善因善果を明かして極樂を授ける。その（如来の）教法を修行する者に、略して二通りある。一に出家、二に在家である。出家とは、剃髪して黒衣を身につける比丘・比丘尼などがそれで、在家とは、頭に冠を付け冠の紐を身にまとう優婆塞・優婆夷などがそれである。上は天子に達し、下は庶民に及ぶ。「五戒」「十善戒」を保ち、仏法に帰依する者は皆、これである。菩薩とは、このような在家の人で、「十善戒」を保ち、「六波羅蜜」の修行を實踐する者である。出家して凡夫・衆生の心を發揮する者も、菩薩である。惡を断つから苦から離れ、善を修するから安樂を得る。下は人間界や天界に生まれる果報から上は仏に生まれる果報まで、みな断惡修善の報いとして感じ悟られるものである。この善惡二つの趣旨を示すために如来は教法を用意したのである。仏教はすであつて広く行われている。それは人によるのである。であるから、教法を知る者は出家して法灯を伝え、仏道を仰ぐ者は出家してその姿を改める。『賢愚因縁經』に言う、「もし、国王・父母があつて、人民・男女などに出家・入道を許し、その得る所の功德は無量無辺である」と。僧尼がいるから仏法は絶えない。仏法があるから人はみな（眞實を見抜く）眼を開く。眼が明かだから正道が行じられる。正道

を行じるから涅槃に至る。そればかりか、經典に説かれる教法の在処は諸仏が護念し諸天が守っている。このようにして、利益は多く、悉く数えても意味がない」と。

【付記】十四問答の第十三「玄闍法師の仏教擁護論」

玄闍法師の弁解は続き、「邪しみな考えによる行いは、悉く数える必要もない。今生において悪業を重ね、のちに「三途」に墜ちるのは必定である。「三途」の苦は、永遠に近い長い時間をかけても脱することはできない。慈悲深い父たる如来は、この厳しい極苦を見てその原因と結果とを説く。（すなわち）悪因悪果を説いて極苦を抜き、善因善果を明かして極楽を授ける」「僧尼がいるから仏法は絶えない。仏法があるから人はみな（真実を見抜く）眼を開く。眼が明かだから正道が行じられる。正道を行じるから涅槃に至る。そればかりか、經典に説かれる教法の在処は諸仏が護念し諸天が守っている」と、仏教論をまくしたてるが、とうとう憂国公子に突っ込まれた僧尼の墮落の問題についてまともに答えていない。

【原文】

公子曰。知法弘道者利益灼然。無法非經者何其滿國乎。師曰。大山德廣禽獸爭歸藥毒雜生。深海道大魚鼈集泳龍鬼並住。寶珠之邊必有惡鬼圍遶寶藏之側定有盜賊窺竄。美女不招好醜之男爭逐。醫門不召疾病之人投歸。腥肉集蟻臭屍聚蠅。聖王不言萬國競歸王。巨壑不思千流各朝宗。富人不呼貧人集。智者默之童朦聚。明鏡瑩淨妍蚩之像現之。清水澄湛大小之相影之。大虛無心萬有容之。大地無念百草出之。堯子不肖父聖。舜父欲殺子孝。孔子門徒其數三千。達者則七十其餘則不註。釋尊弟子無量無數。六群天授善星比丘濫行極多。如來在日不得純善。何況末代之裔乎。然猶如來慈悲三界爲父。賢愚善惡何不喁喁。物理如是何足怪乎。雖然變毒爲藥化鐵爲金。堯戸可封桀民可誅。斯乃時運之所致皇風之所染。迦葉如來明説所由。事見守護國經。文煩不抄要覽者閱耳。

【書き下し】

公子曰わく、「知法弘道の者は利益灼然たり。無法非經の者、何ぞ其れ國に滿つるや」と。師曰わく、「大山徳廣ければ禽獸
争い歸し藥毒雜り生う。深海道大いなれば魚鼈集まり泳ぎ龍鬼並に住む。寶珠の邊に必ず惡鬼有つて圍遶し、寶藏の側に定
んで盜賊有つて窺竊す。美女は招かれざるも好醜の男争い逐い、醫門は召されざるも疾病の人投歸す。腥肉は蟻を集め臭屍
は蠅を聚めり。聖王は言わざるも萬國競つて王に歸し、巨壑思わざるも千流各々朝宗す。富める人は呼ばざるも貧する人集
まり、智者は之を默すも童蒙聚まる。明鏡瑩いて淨ければ妍蚩の像之に現じ、清水澄み湛うれば大小の相之に影る。大虚は
心無けれども萬有之に容る。大地は念無けれども百草之に出ず。堯の子は不肖なるも父は聖なり。舜の父は殺さんと欲する
も子は孝なり。孔子の門徒は其の數三千なれども、達する者は則ち七十、其餘は則ち註さず。釋尊の弟子は無量無數なれ
ども、六群・天授・善星比丘は濫行極めて多し。如來在しし日にも純善たるを得ず。何ぞ況んや末代の裔においてをや。
然れども猶、如來の慈悲は三界の父爲り。賢愚善惡何ぞ喁喁せざらん。物の理は是くの如し、何ぞ怪しむに足らんや。

然りと雖も、毒を變じて藥と爲し鐵を化して金と爲す。堯戸封ずべく桀民誅すべし。斯れ乃ち時運の致す所、皇風の染むる所なり。迦葉如來明らかに所由を説く事、守護國經に見ゆ。文煩わしくして抄せず。要覽者は関かんのみ。

【註記】

- ①灼然：明らか、著しい、あらたか。
- ②窺竄：スキをねらう。
- ③腥肉：生臭い肉。
- ④巨壑：大海。
- ⑤朝宗：多くの河川が有無に名が流れ込むこと。
- ⑥妍蚩：美しいことと醜いこと。
- ⑦六群：悪事や非法を犯し、釈尊や弟子たちを困らせた六人の比丘。六群比丘。
- ⑧天授：「Devadatta」の漢訳。『法華經』で有名な、釈尊に背を向け教団を出た提婆達多。
- ⑨善星比丘：釈尊の子と言われる。四禪を成就して四禪比丘と言われたが、のちに釈尊の教えを誹謗した。
- ⑩喁喁：仰ぎ慕うこと。
- ⑪迦葉：過去七仏（毘婆尸・尸棄・毘舍浮・拘留孫・拘那含牟尼・迦葉・釈迦）の六番目。

【私訳】

憂国公子が言うに、「仏法を知り仏道を広める者が世間を利益することは明らかであるが、仏法を知らず經典の教法に

背く者がどうして国中に満ちているのか」と。玄関法師が言うに、「大きな山は自然の恵みの徳が広大なので、鳥や獸は競つて山に棲み、藥草も毒草も入り雜じつて繁茂する。深い海はあらゆるものを受け容れる道が廣大で、魚や龜が集まつて泳ぎ、龍や鬼も住んでいる。如意宝珠のまわりには必ず悪い鬼がいてこれを取り囲み、宝の藏の近辺には決つて盜賊がいてスキをねらっている。美女は招かなくても好い男も醜い男も争つて追いかけ、医者イサナの門の前には呼ばなくても病人が頼つてくる。生臭い肉は蠅を集め、悪臭を放つ死体は蠅を集める。徳の高い帝王は多弁を弄さなくても多くの国が競つて王に従い、巨大な海は意図しなくても多くの河川カヘンがそれぞれ流れ込む。富む人には呼ばなくても貧しい人が集まり、智慧のある人には黙つていても子供のように未熟な人が集まつてくる。曇りのない鏡はみがいて汚れがなければ美しいものと醜いものがハッキリ映り、清らかな水が澄んで満ちていれば大小の姿・かたちがそれを映し出す。広大な虚空には心はないけれども万物はそこに受け容れられている。大地には念ずることはないけれども多くの草がそこから生える。堯帝の子は未熟だったが父は徳の高い君子だった。舜帝の父は舜を殺そうとしたが舜帝は父に孝行した。孔子の門弟は三千人もいたが、孔子の教えを究めた人は七十人で、その他の人は記録されなかった。釈尊の弟子は数えきれないほどであるが、悪事や非法を犯し釈尊や弟子たちを困らせた六人の比丘や、釈尊に背を向け教団を出た提婆達多や、釈尊の教えを誹謗した善星比丘は、乱行が極めて多い。釈尊在世の時にも純粹な心を持ち善行を修する弟子ばかりではなかった。況んや末世の弟子においてをや、である。しかしながら、如來の慈悲は欲界・色界・無色界の「三界」の父である。賢者・愚者、善人・惡人の別なく、仰ぎ慕わないことがどうしてあろうか。物の道理は以上のようなことで、どうして怪しむ必要があるだろうか。そうではあるが、毒は藥に変わり、鉄は金に変わる。堯帝の世の家には領土を与えて領主にするべきなのもあり、桀帝の世の民には罰すべき者もいる。これはすなわち、時の運がそうさせていて、皇帝の治世の在り方によるものである。迦葉仏が『守護国界經』でその理由を明らかに説いている。經文も煩雜なのでここには抜き書きしない。閱覽したい人は『守護国界經』を直接開いて見るにしくはない」と。

【付記】 十四問答の第十四「毒は薬に変わり、鉄は金に変わる」

最後に、憂国公子から「仏法を知り仏道を広める者が世間を利益することは明らかであるが、仏法を知らず經典の教法に背く者がどうして国中に満ちているのか」と問われた玄関法師は、それに答えて、「釈尊在世の時にも純粋な心を持ち善行を修する弟子ばかりではなかった。況んや末世の弟子においてをや、である。しかしながら、如來の慈悲は欲界・色界・無色界の「三界」の父である。賢者・愚者、善人・悪人の別なく、仰ぎ慕わないことがどうしてあろうか。物の道理は以上のようなことで、どうして怪しむ必要があるだろうか。そうではあるが、毒は薬に変わり、鉄は金に変わる。堯帝の世の家には領土を与えて領主にするべきなのもあり、桀帝の世の民には罰すべき者もいる。これはすなわち、時の運がそうさせていて、皇帝の治世の在り方によるものである。迦葉仏が『守護国界経』でその理由を明らかに説いている」と。玄関法師は憂国公子の疑問に終始一貫まともに答えなかった。

改めて、宗祖大師が『三教指帰』を思わせるような儒家と仏者の問答をこの第四住心「唯蘊無我心」に挿入したのか、儒家と仏者の問答の内容がこの第四住心にふさわしいのか、私には不可解である。

【原文】

頌曰

建立與無淨	雖深未斷煩	空談内外我	輪轉生死樊
大聖開羊乘	修觀得涅槃	五停四念處	六十三生觀
二百五十戒	持之離八難	人空無漏火	滅智身心殫
儼遇如來警	迴心菩薩寬		

【書き下し】

頌に曰わく、

建立と無淨と、深いと雖も未だ煩を斷ぜず。空しく内外の我を談じ、生死の樊に輪轉す。

大聖は羊乗を開く。觀を修すれば涅槃を得。五停・四念處、六十三生に觀ず。

二百五十戒、之を持すれば八難を離る。人空無漏の火、滅智身心を殫す。

儼如來の警めに遇う、菩薩の寛に迴心す。

【註記】

①建立：『大日經』「住心品」外道段に説かれる建立外道（常見外道）。

②無淨：同じく、不建立外道（斷見外道）。

③羊乘：羊車＝声聞乘。

④五停：五停心觀。不淨觀・慈悲觀・因緣觀・界分別觀・數息觀。

⑤四念處：四念處。身念處・受念處・心念處・法念處。

⑥八難：地獄・餓鬼・畜生の三惡道と、長寿天・辺地・盲聾瘡癰・世智弁聰・仏前仏後。

⑦無漏：煩惱がないこと。

【私訳】

『大日經』「住心品」外道段に説かれる）建立外道（常見）と不建立外道（斷見）は、深い意味をもっているがまだ煩雜なところがある。内の我（靈魂）とか外の我（創造神）とか空論を主張し、生死の垣根のなかでさまよっている。

仏世尊は羊車に喩えられる声聞乗を明らかにし、（この声聞乗において）觀法を修習すれば涅槃に至ることができる。不淨觀などの「五停心觀」や身念處などの「四念處」を六十劫または三生の間修習し、

二百五十の具足戒を保てば、「三途」などの「八難」から遁れられる。（煩惱などの）人我は無自性・空であるという煩惱なき智慧の火は、迷妄の智を消滅させ、身心（の煩惱を）を焼き尽くす。

たまたま如來の教勅に遭遇すれば、菩薩の慈悲心に心を向けるようになる。

【原文】

問此心亦依何經論建立耶。答。大日經菩提心論。彼經論何說。經云。謂如是解唯蘊無我根境界淹留修行。又云。聲聞衆住有緣地識生滅除二邊。極觀察智得不隨順修行因。是名聲聞三味道。又云。若聲聞所說眞言一句安布。菩提心論證文與下文心雜舉。故不別抄。行相臨下可知

【書き下し】

問う、「此の心は亦た、何の經論に依つて建立するや」と。答う、「大日經・菩提心論なり」と。（問う）「彼の經論に何をか説く」と。（答う）「經に云わく、「謂わく、是くの如く唯蘊無我^げを解し、根境界^{えんる}に淹留修行す」と。又、云わく、「聲聞衆は有緣地に住して生滅を識り、二邊を除いて極觀察智^げもて不隨順修行の因を得。是れを聲聞の三味道と名づく」と。又、云わ

く「若し聲聞所説の眞言は一一の句安布す」と。菩提心論の證文は下の文と心雜^{まじ}え擧ぐ。故に別に抄せず。行相下に臨んで知るべし」と。

【註記】

- ①唯蘊無我…五蘊だけが実在で、私たちはその五蘊の集りに過ぎないから自我というものはない。
- ②根境界…六根・六境・六識。
- ③淹留…留まる・滞る。
- ④二邊…生と滅・有と無・一と多など、相對二律・對立二項。
- ⑤有緣地…因緣所生の見解。
- ⑥極觀察智…最上の觀察智。
- ⑦不隨順修行…生死をさまよう煩惱に左右されない修行。
- ⑧眞言…宗祖大師の挿入語。
- ⑨安布…ただ並べる。

【私訳】

問う人が言うに、「この第四住心は、どのような經論をもとに説いているのか」と。答えて言う、「『大日經』と『菩提心論』である」と。（問う）「その經論に何が説かれているのか」と。（答う）『『大日經』『具緣品』に、「このように（第四住心において）『唯蘊無我』の見解に達しているが、六根（感覺器官）と六境（感覺器官の對象）と六識界（認識作用）にばかりとどまって修行している」と説かれ、また、同じく「聲聞の人たちは因緣所生の見解に住して諸法の生滅（の理）を識り、相對

二律を排して最上の觀察智によつて生死にさまよわない修行の基本を得た。これを声聞の三味道と言う」と。また、同じく、「もし声聞が説く真言は、一つ一つの句をただ並べるだけである（一言一句に多くの意味を含まない）」と。『菩提心論』の証拠となる文は、次の醍醐住心に紹介する文と意味するところが同じなので、ここできくに書き抜きしない。その在り様は次の第五住心において知ることができる」と。

■第五 拔業因種心

【原文】

拔業因種心者。麟角之所證部行之所行。觀因緣於十二厭生死乎四五見彼華葉覺四相之無常。住此林落證三昧於無言。業惱株杌猶此而拔。無明種子因之而斷。爪犢遙望不近。建聲何得窺窬。游泳湛寂之潭優遊無爲之宮。自然尸羅無授而具。無師智慧自我而獲。三十七品不由他悟。蘊處界善不待藍色。身通度人不用言語。大悲闕無方便不具。但自盡苦證得寂滅。故經云。拔業煩惱株杌無明種子生十二因緣。又云。是中辟支佛復有小差別。謂三昧分異淨除於業生。

【書き下し】

拔業因種心とは、麟角りんかくの所證、部行の所行なり。因緣を十二に觀じ生死を四五に厭う。彼の華葉を見て四相の無常を覺り、此の林落に住して三昧を無言に證す。業惱ごうのうの株杌しゅこつ此れに猶つて抜き、無明の種子之に因つて斷ず。爪てつ、犢どく遙かに望むも近からず。建こん、聲しょう、何ぞ窺窬きよすることを得ん。湛寂たんじくの潭に游泳し無爲の宮に優遊す。自然の尸羅しらか授かること無くして具し、無師の智慧、我自り獲う。三十七品は他に由らずして悟り、蘊處界善は藍を待たずして色あり。身、通以つて人を度し言語を用いず。大悲の闕けて無ければ方に便具せず。但し、自ら苦を盡して寂滅を證得す。故に經に云わく、「拔業煩惱の株杌、無明の種子の十二因緣を生ずるを抜く」と。又、云わく、「是の中に、辟支佛は復た小なる差別有り。謂く三昧分異にして業生を淨除す」と。

【註記】

- ① 麟角…縁覚・独覚。麒麟の角のように独り修行し成長すること。
- ② 部行…修行仲間と部のように集まって修行すること。
- ③ 四五…四は四大（地・水・火・風）、五は五蘊（色・受・想・行・識）。
- ④ 四相…生・住・異・滅。
- ⑤ 業惱…宿業の煩惱。
- ⑥ 株杌…切り株の残り。煩惱の種子。
- ⑦ 爪…長爪梵志。「四大」説の順世外道を学ぶ。
- ⑧ 犢…ブドガラ（人格主体）説を説く部派仏教の犢子部。
- ⑨ 建…建立外道（常見）。
- ⑩ 聲…声論外道。ミーマーンサー学派。
- ⑪ 戸羅…戒律。
- ⑫ 蘊處界…五蘊・十二処・十八界。
- ⑬ 辟支佛…縁覚・独覚。

【私訳】

（第五住心の）拔業因種心とは、麒麟の角のように、独りで覚る独覚のサトリと、修行の仲間と集まって修行する縁覚の修行のことである。十二因縁を順逆に観じ、生死をくり返す現実世界を地・水・火・風の「四大」や色・受・想・行・識の「五蘊」から成っている自我のない世界として否定する。向うの花や葉を見ては生・住・異・滅の「四相」の無常を覺り、こちらの山林・村落に住んで瞑想行を黙って成就する。宿業の煩惱の切り株の残り（煩惱の種子）はこれによつて抜かれ、「無

明」の種子は消滅する。長爪梵志や犢子部といった外道も、遠くから縁覺の道を望んでいるが近づけず、建立外道や声外道（ミーマーンサー学派）も窺い知ることができない。（無我の）静寂な境地に遊泳し、法爾自然の宮殿に楽しく遊ぶ。受戒しなくてもさながらに戒を具有し、師僧がいなくても智慧を自分から身に付けている。三十七道品は独りで悟り、五蘊・十二処・十八界は教えられなくても独り会得し、その身は神通をもつて凡夫・衆生を済度するが、言葉を使つて説法はしない。大悲心が欠けているため利他の具体的実践がないのである。ただし、自ら苦を滅して涅槃の境地にはある。だから『大日経』「住心品」に、「宿業の煩惱の切り株の残りである「無明」の種子が十二因縁を生み出すのを抜き取る」と説かれ、また同じく「具縁品」に、「このうち、辟支仏（縁覺・独覺）には（「無明」を取り除くのと「無明」の種子も取り除く）小さな区別がある。それぞれの瞑想の境地が異なつていて、（縁覺・独覺は）宿業の報いが生じることを除く」と説かれている。

【原文】

釋云。謂十二因縁者。守護國經云。復次善男子。如來於一切靜慮解脫等持等至伏滅煩惱生起因縁皆如實知。佛云何知。謂知衆生煩惱生起以何因生以何縁生。滅惑清淨何因能滅何縁能滅。此中煩惱生因縁者謂不正思惟。以此爲其因無明爲縁。無明爲因行爲縁。行爲因識爲縁。識爲因名色爲縁。名色爲因六處爲縁。六處爲因觸爲縁。觸爲因受爲縁。受爲因愛爲縁。愛爲因取爲縁。取爲因有爲縁。有爲因生爲縁。生爲因老死爲縁。煩惱爲因業爲縁。見爲因貪爲縁。隨眠煩惱爲因現行煩惱爲縁。此是煩惱生起因縁。云何衆生滅諸煩惱所有因縁。有二種因有二種縁。云何爲二。一者從他聞種種隨順法聲。二者内心起於正念。復次有二種因有二種縁。能令衆生清淨解脫。謂奢摩他心一境故毘鉢舍那能善巧故。復次有二種因有二種縁。不來智故。如來智故復有二種因縁。微細觀察無生理故。近解脫故。＊復有二種因縁。具足行故。智慧解脫現在前故。復有二種因縁。謂盡智故。無生智故。復有二種因縁。隨順覺悟眞諦理故隨順獲得眞諦智故。此是衆生除滅煩惱清淨因縁。如來悉知。復次善男子煩惱因縁無有數量。解脫因縁亦無有數量。或有煩惱能與解脫以爲因縁觀實體故。或有解脫能與煩惱以爲因縁生執著故。

【書き下し】

釋して云わく、謂わく、十二因縁とは、守護國經に云わく。「復た次に、善男子、如來は一切の靜慮・解脫・等持・等至に於いて、煩惱を伏滅し生起する因縁皆、實の如く知る。佛云何が知る。謂わく、衆生の煩惱の生起するは何の因を以つてか生じ、何の縁を以つてか生じ、惑を滅して清淨なるは何の因によつて能く滅し、何の縁によつて能く滅するを知る。此の中に、煩惱の生ずる因縁とは、謂わく不正思惟なり。此れを以つて其の因と爲し無明を縁と爲す。無明を因と爲し行を縁と爲す。行を因と爲し識を縁と爲す。識を因と爲し名色を縁と爲す。名色を因と爲し六處を縁と爲す。六處を因と爲し觸を縁と爲す。觸を因と爲し受を縁と爲す。受を因と爲し愛を縁と爲す。愛を因と爲し取を縁と爲す。取を因と爲し有を縁と爲す。有を因

と爲し生を縁と爲す。生を因と爲し老死を縁と爲す。煩惱を因と爲し業を縁と爲す。見を因と爲し貪を縁と爲す。隨眠煩惱ずいみん

を因と爲し現行煩惱げんぎょうを縁と爲す。此れは是れ、煩惱の生起する因縁なり。云何が衆生の諸々の煩惱を滅する所有の因縁とな

らば、二種の因有り、二種の縁有り。云何が二と爲す。一には、他に從つて種種の隨順の法聲を聞く。二には、内心に正念を起すなり。復た次に、二種の因有り、二種の縁有り。能く衆生をして清淨に解脫せしむ。謂わく、奢摩他シャマタ、心一境なるが

故に、毘鉢舍那ビハッサナ、能善巧のうぜんぎょうなるが故に。復た次に、二種の因有り、二種の縁有り。不來智の故に、如來智の故に。復た二種の

因縁有り。微細に無生の理を觀察するが故に、解脫に近き故に。復た、二種の因縁有り。具足行の故に、智慧もて解脫現在前するが故。復た、二種の因縁有り。謂わく、盡智の故に、無生智の故に。復た、二種の因縁有り。隨順して眞諦の理を覺悟する故に、隨順して眞諦の智を獲得するが故に。此れは是れ、衆生の煩惱を除滅する清淨の因縁なり。如來は悉く知る。復た次に、善男子、煩惱の因縁に數量有ること無ければ。解脫の因縁も亦た數量有ること無し。或いは、煩惱有つて能く解

脱の與に以って因縁と爲る、實體を觀するが故に。或いは解脱有って能く煩惱の與に以って因縁と爲る、執著を生じるが故に。

【註記】

- ① 靜慮… dhyāna。禪定。趺坐して手印を結び、呼吸を調え、心を落ち着け、ある対象に一点集中した境地。心一境性。
- ② 等持… samādhi。三昧・三摩地・定。一点集中した対象と不二平等になった境地。
- ③ 等至… samāpatti。等持に同じ。
- ④ 惑… 煩惱。
- ⑤ 正思惟… 出離（離欲）・無瞋・無害（不殺生）を思惟すること。
- ⑥ 無明… 以下、十二因縁。
無明（自己保存欲）・行（宿業）・識（識別・選択）・名色（名称と形色）・六処（六根）・触（外界との接触）・受（感受）・愛（妄執）・取（執着）・有（實在）・生（生まれる）・老死（老いることと死ぬこと）。
- ⑦ 隨眠… まだめざめない・潜在的な。
- ⑧ 現行… 現実に顯われている。
- ⑨ 正念… 四念処（身念処・受念処・心念処・法念処）の觀想を怠らないこと。
- ⑩ 奢摩他… シヤマタ (samatha) ・止。
- ⑪ 毘鉢舍那… ヴィパシユヤナー (vipaśyanā) ・觀。
- ⑫ 能善巧… 善巧は衆生をよく化導するとういうみであるが、ここは「よく觀察する」となる。
- ⑬ 不來智… 本来具有の本覺の智慧。
- ⑭ 如來智… 修行の報果としての智慧。

⑮具足行…「六波羅蜜」などの行を具足していること。

⑯盡智…煩惱が尽きてなくなった智慧。

⑰無生智…不生不滅の智慧。

⑱眞諦…眞俗二諦のうちの眞諦。絶対空の眞実・サトリの世界。

【私訳】

(このことについて) 解釈すると、すなわち、十二因縁とは、『守護国界主陀羅尼經』「如来不可思議甚深事業品」に以下のように説かれている。「また次に、善男子よ、如来はあらゆる靜慮・解脱・等持・等至などの瞑想行において、煩惱を抑滅し、(煩惱が) 生じる因と縁をみな如実に知っている。仏(如来) はどのようにして(煩惱の因と縁を) 知っているのかと言えば、衆生の煩惱が生じるのは何を因や縁とするのか、煩惱を抑滅して清浄な身心となるのは何を因や縁とするのか、知っていて、そのうちの、煩惱が生じる因と縁とは、まず正思惟をしないことである。それを因とし無明を縁とする。そして無明を因とし行を縁とする。また、行を因とし識を縁とする。次に、識を因とし名色を縁とする。続いて、名色を因とし六処を縁とする。六処を因とし触を縁とする。触を因とし受を縁とする。受を因とし愛を縁とする。愛を因とし取を縁とする。取を因とし有を縁とする。有を因とし生を縁とする。生を因とし老死を縁とする。(このように) 煩惱を因とし宿業を縁とし、見を因とし食を縁とし、まだめざめない煩惱を因とし現実に顕われている煩惱を縁とする。これが、煩惱の生じる因と縁である。(次に) 衆生の煩惱を滅する因と縁はどうかと言えば、

1、二種の因と縁がある。二とは何かと言えば、一つは、智者に従ってさまざまに聞くべき説法を聞くこと。二つは、内心に正念(四念処を怠らないこと)を思い起すことである。

2、また次に、二種の因と縁がある。よく衆生を身心清浄にして解脱させること。すなわち「止」(奢摩他)、一点集中と、「観」

(毘鉢舍那)、よく(空の立場で)観察することである。

- 3、また次に、二種の因と縁がある。本来具有の本覚の智慧と修行の報果としての智慧。
- 4、また、二種の因と縁がある。こここまかに不生不滅の道理を観察すること、(煩惱を滅し)解脱に近づくこと。
- 5、また、二種の因と縁がある。「六波羅蜜」などの行を具足していることと、智慧によって解脱が現前すること。
- 6、また、二種の因と縁がある。すなわち、煩惱を滅し尽くした智慧と、不生不滅の智慧。
- 7、また、二種の因と縁がある。覚るべくして絶対空の真実の法理を覚ることと、得るべくして絶対空の真実の智慧を得ること。

これは、衆生の煩惱を除き滅する身心清浄の因と縁である。如來はこれを知っている。また次に、善男子よ、煩惱の因と縁に数量がなければ。解脱の因と縁もまた数量はない。あるいは、煩惱が解脱の因や縁となることもある。煩惱の实体をよく観察したからである。あるいは解脱が煩惱の因や縁となることもある、解脱に執着するからである」と。

【原文】

頌曰

縁覺鹿車無言說 部行麟角類不同 因縁十二深觀念 修習百劫具神通
拔業煩惱及種子 灰身滅智如虛空 湛然久醉臥三昧 蒙警迴心一如宮

【書き下し】

頌に曰わく、

縁覺の鹿車^{ろくしゃ}は言説無し 部行と麟角、類同じからず。

因縁の十二を深く觀念し、百劫に修習して神通を具す。
業と煩惱及び種子を抜き、灰身滅智して虚空の如し。

湛然として久しく三昧に醉臥^{すいが}し、警めを蒙り^{いまし}一如の宮に迴心す。

【註記】

①鹿車：『法華經』「譬喻品」に説かれる「三車」の喩え。縁覺・獨覺のこと。

②部行と麟角：修行仲間と集つて修行する部行（縁覺）と、独りで修行する麟角（獨覺）。

③類：似た者。

④灰身滅智：身心を焼き尽くして煩惱を滅する智慧。

⑤醉臥：酒に酔つて横たわる。

⑥一如：相對二律の一如。真俗一如・生仏一如。

【私訳】

（『法華經』で鹿車に喩えられる）縁覺は独り覺つて無言でいる 修行仲間と集つて修行する部行（縁覺）と、独りで修行する麟角（獨覺）は、互いに似た者同士である。

（すなわち）十二因縁を深く觀想し、百劫の間その觀想を修習して神通を身に付けている。
宿業と煩惱と煩惱の種子を除き、身心を焼き尽くして煩惱を滅し、虚空のようである。

静寂にして久しく三昧に浸り、如来の警めを受けて相對一如の宮殿に心を向ける。

【原文】

問。此住心亦依何經論說耶。答。大日經菩提心論。彼經論何說。經云。緣覺拔業煩惱株杌無明種子生十二因緣。離建立宗等。如是湛寂一切外道所不能知。先佛宣說離一切過。又云。緣覺深觀察因果住無言說法不轉無言說。於一切法證極滅語言三昧。是爲緣覺三昧道。又云。祕密主若住緣覺聲聞所說眞言摧害於諸過。又云。聲聞所說眞言一句安布。是中辟支佛復有少差別。謂三昧分異淨除於業生。

【書き下し】

問う、「此の住心は亦た何れの經論に依つて説くや」と。答う、「大日經、菩提心論なり」と。(問う)「彼の經論に何んが説く」と。(答う)「經に云わく、『緣覺は業煩惱の株杌、無明の種子の十二因緣を生ずるを抜く。建立宗等を離れたり。是くの如く、湛寂は一切の外道の能く知らざる所なり。先佛は一切の過を離れたりと宣説す』と。又、云わく、『緣覺は深く因果を観察し、無言説の法に住し無言説を轉ぜず。一切法に於いて極滅語言三昧を證す。是れを緣覺の三昧道と爲す』と。又、云わく、『祕密主、若し、緣覺・聲聞所説の眞言に住すれば、諸過を摧害す』と。又、云わく、『聲聞所説の眞言は一一の句安布す。是の中に、辟支佛復た少しの差別有り。謂わく、三昧分異にして業生を淨除す』と。

【註記】

①經に云わく…『大日經』「住心品」三劫段。

②極滅語言三昧…無言に徹する三昧。

【私訳】

問う人が言うに、「この第五住心は、どのような経論をもとに説いたのか」と。答えて言うに、『大日経』と『菩提心論』である」と。（また問うて言うに）「その経論にどんなことが説かれているのか」と。（答えて言うに）『大日経』『住心品』の三劫段に、「縁覚は宿業の煩惱の切り株の残り、すなわち「無明」の種子である「十二因縁」が生ずるをを除く。建立外道などから離れている。このように、（縁覚の）寂靜の境地はあらゆる外道が知らない境地である。三世の諸仏もあらゆる罪過を離れていると言っている」と説かれている。

また、『大日経』『具縁品』に、「縁覚は深く「十二因縁」を観察し、その内容を口にしない方法を取り、無言に徹している。極端な無言の三昧によって一切法を觀想している。これが縁覚の三昧道である。」と説かれている。また、同じく「具縁品」に、「秘密主よ、もし縁覚・声聞が説くものに住すれば、諸々の罪過を碎き除く」と説かれている。また、同じく、「声聞が説くことは、一つ一つの句をただ並べるだけである（一言一句に多くの意味を含まない。そればかりではなく、辟支仏（縁覚・独覚）には（「無明」を取り除くのと、「無明」の種子も取り除く）小さな区別がある。それぞれの瞑想の境地が異なっている、（縁覚・独覚は）宿業の報いが生じることを除く」と説かれている。

【原文】

龍猛菩薩菩提心論云。又二乘之人聲聞執四諦法縁覺執十二因縁。知四大五蘊畢竟磨滅。深起厭離破衆生執。勤修本法剋證其果。趣本涅槃已爲究竟。眞言行者當觀。二乘之人雖破人執猶有法執。但淨意識不知其他。久久成果位以灰身滅智趣其涅槃。如太虛空湛然常寂。有定性者難可發生。要待劫限等滿方乃發生。若不定姓者無論劫限。遇縁便迴心向大。從化城起以爲超三界。謂宿信佛故乃蒙諸佛菩薩加持力而以方便遂發大心。乃從初十信下遍歷諸位。經三無數劫難行苦行然得成佛。既知聲聞縁覺智慧狹劣亦不可樂。十住論云。若墮聲聞地及辟支佛地。若爾者是大衰患。如助道法中說。若墮聲聞地及辟支佛地。是名菩薩死。則失一切利。若墮於地獄。不生如是畏。若墮三乘地。即爲大怖畏。墮於地獄中。畢竟得至佛。若墮三乘地。畢竟遮佛。

道。佛自於經中解説如是事。如人貪壽者斬首則大畏。菩薩亦如此。於聲聞地及辟支佛地。應生大怖畏。

【書き下し】

龍猛菩薩の菩提心論に云わく、「又、二乗の人、聲聞は四諦の法を執り、縁覺は十二因縁を執る。四大・五蘊の畢竟磨滅するを知り、深く厭離を起して衆生執を破す。本法を勤修して其の果を剋證し、本涅槃に趣くを究竟と已爲。おもえり眞言行者は當に觀

ずべし。二乗の人は人執を破すと雖も猶法執有り。但し意識を淨めて其の他を知らず。久久に果位を成じ灰身滅智を以つて

其の涅槃に趣く。太虚の空の如く湛然常寂たり。定性有る者は發生すべきこと難し。かなら要ず劫限等の滿つるを待つて方に乃ち

發生す。若し不定性の者は劫限を論すること無し。縁に遇えば便ち迴心向大す。化城從り起つて三界を超えたりと以爲。おも謂

わく、宿、むかし佛を信ずるが故に、乃ち諸佛・菩薩の加持力を蒙つて、方便を以つて遂に大心を發す。乃ち、初め十信從り下は

遍く諸位を歴て、三無數劫を経て難行・苦行し、然して成佛するを得。既に聲聞・縁覺の智慧の狹劣なるを知り、亦た樂う

べからず」。十住論に云わく、「若しは聲聞地及び辟支佛地に墮す。若し爾らば、是れ大衰患なり。すいげん助道法の中に説くが如し。

若しは聲聞地及び辟支佛地に墮する。是れを菩薩の死と名づく。則ち一切の利を失す。若しは地獄に墮する。是くの如くの畏れを生ぜず。若しは二乗の地に墮する。即ち大怖畏と爲す。地獄の中に墮する。畢竟じて佛に至るを得。若しは二乗の地に墮する。畢竟じて佛道を遮す。佛自ら經中に於いて是くの如き事を解説す。「人の壽を貪る者は斬首を則ち大いに畏るが

如く、菩薩も亦た此くの如し。聲聞地及び辟支佛地に於いて、應に大怖畏を生ずべし」と。

【註記】

①衆生執…凡夫・衆生が持つ靈魂などの人我の我執。

②本法…声聞は「四諦」、緣覺・独覺は十二因縁。

③其の果…有余涅槃・

④本涅槃…無余涅槃。

⑤定性・不定性…定着性・不定着性。

⑥十信…菩薩の五十二位のうち初位から十位。「願心」「戒心」「廻向心」「護法心」「不退心」「定心」「慧心」「精進心」「念心」「信心」

⑦三無數劫…三阿僧祇劫。菩薩が五十二位の修行位を経る時間の長さ。「十信」「十住」「十行」「十廻向」が第一阿僧祇劫、「十地」の最初「歡喜地」から第七「遠行地」が第二阿僧祇劫、第八「不動地」から第十「法雲地」が第三阿僧祇劫。

⑧十住論…『十住毘婆沙論』。

⑨助道法…不明。

⑩辟支佛地…緣覺・独覺の段階。

【私訳】

龍猛菩薩の『菩提心論』に、「また、声聞・緣覺の二乗の人であるが、声聞は「四諦」の教法に固執し、緣覺は「十二因縁」に固執している。「四大」や「五蘊」から成るものは所詮、すり減ってなくなることを知り、深くそれを嫌い離れようとす、凡夫・衆生が持つ人我の我執を破砕する。「四諦」と「十二因縁」を觀想してその行果（有余涅槃）を確かに成就し、本涅槃

（無余涅槃）に至るのを究極だと思っている。真言行者はまさに（以下のことを）よく観察するべきである。二乗の人は、人我の我執を破砕すると言ってもなお、法我の我執がある。ただし、意識を含む六識から我執を除こうとしているが、その他の第七識（「末那識」）や第八識（「阿ーラヤ識」）を知らない。長い時間をかけて果位（有余涅槃）に至り、身心を火で焼いて煩惱を焼き尽くす灰身滅智によってその涅槃（無余涅槃）に趣き、広大な虚空のように静寂な境地にあるが、（二乗の段階に）定着性の強い人は、人法二空の大乗の段階へと心を発起することは難しく、かならず永遠に近い長い時間的期限が満了にならないと発起しない。（二乗の段階に）定着性のない人は、永遠に近い長い時間的期限を論する必要もなく、機会にさえ遭遇すればたちまち心を大乘に向けることができる。（実体のない）幻の城（乾達婆城）（の迷い）から出て、欲界・色界・無色界の「三界」を超えたと自負している。（そういう人も）すなわち、過去に仏を信じていたが故に、諸仏・諸菩薩の加持力のおかげで、方便によつて大乘に向う心を発起する。初め「願心」「戒心」などの「十信」から下は菩薩の五十二位を歴て、三阿僧祇劫という途方もない長い時間を経て難行・苦行し、その果てにやつと成仏するのである。すでに声聞・縁覚の智慧が狭くまた劣っているのを知つて、（真言行者は彼ら二乗を）理想に思つてはならない」と説かれている。

『十住毘婆沙論』には、「もし声聞地や縁覺地に墮ちたならば、それは修行者として大いなる衰退と過患である。『助道法』という経軌のなかに説かれている通りである。もし声聞地や縁覺地に墮ちたならば、これを菩薩の死と言ひ、あらゆる自利・利他の利益を失くす。仮に地獄に墮ちても、このような畏れは生じない。しかし、もし二乗の段階に墮ちたならば、それは大きな恐怖となる。仮に地獄に墮ちても、畢竟仏になることはできる。もし二乗の段階に墮ちたら、畢竟仏道は終りである。仏は、自ら經典のなかでこのようなことを説いている。「長寿に執着する人が首を切られて死ぬことを大いに恐れるように、菩薩も同じである。（菩薩が）声聞地や縁覺地に墮ちれば、大きな恐怖を生じるのは確實である」と。」と説かれている。

■「秘藏宝鑰」(巻下) 原文・書き下し・註記・私訳・付記

■第六 他縁大乘心

【原文】

粵有大士法樹號他縁乘。越建爪而高昇超聲縁而廣運二空三性洗自執塵四量四攝濟他利行。思惟陀那深細專注幻焰似心。

【書き下し】

粵に、大士の法有り。樹てて他縁乗と號す。建・爪を越えて高く昇り、聲・縁を超えて廣く運ぶ。二空・三性は自執の塵を洗ひ、四量・四攝は他利の行を濟う。陀那の深細を思惟し幻焰の似心に專注す。

【註記】

①大士…菩薩。

②他縁乘…他者を縁として大悲利他の心を發起する修行位。

③建・爪…建立外道と長爪梵志。

④三性…唯識で言う「遍計所執性」「依他起性」「円成実性」。

⑤四量…四無量心。「慈」「悲」「喜」「捨」。

⑥四攝…四摂法。「布施」「愛語」「利行」「同事」。

⑦陀那…阿陀那識。唯識で言う第八識・アラーヤ識。

⑧似心…三界唯心。万法はすべて心から生じるから、心に似ている。

【私訳】

ここに、菩薩の教法がある。（その教法を）樹立して他縁乘（他者を縁として大悲利他の心を発起する修行位）と言う。建立外道や長爪梵志を越えて高い段階に進み、声聞・縁覺を超えて広く（凡夫・衆生をサトリへと）運ぶ。人法二空や「遍計所執性」などの「三性」によって我執の妨げを除き、四無量心や四摂法によって利他行に励む。深層意識のアーラヤ識の深く微細なはたらきを思惟し、諸法は、心の現象態であって、実体のない幻や焰のようなもので、心に似ている、という境地に専念している。

【原文】

於是芥城竭而還滿。巨石磷而復生。三種練磨策初心之欲退。四弘願行仰後身之勝果。築等持城安唯識將。征魔旬仗陣伐煩惱賊帥。整八正軍士縛以同事繩。走六通精騎殺以智慧劍。封勞績以五等爵。冊心王以四徳都。

【書き下し】

是に於いて、芥城^{けじょう}竭きて還つて滿ち、巨石^{ひすい}磷いで復た生ず。三種の練磨は初心の退かんと欲するを策^{はけ}まし、四弘願行は後身の勝果^{しょうこ}を仰ぐ。等持の城を築いて唯識の將を安んじ、魔旬^{まじゆん}の仗陣^{じやうじん}を征して煩惱の賊帥を伐つ。八正の軍士を整え、縛るに同事の繩を以つてす。六通の精騎を走らせ、殺すに智慧の劍を以つてす。勞績を封ずるに五等の爵を以つてす。心王^{かしん}を冊くに四徳の都を以つてす。

【註記】

①芥城：百由旬四方の広さの城。芥子粒がそこに充滿していること。百年かけて運び出してもなくならない。『大智度論』に説かれる無限に近い時間の長さ。芥子劫（松長有慶『訳注 秘藏宝鑑』）。

②巨石：百由旬四方の大きさの岩石。百年に一度天使が舞い降りてその衣でこすっても擦り減らない。大智度論』に説かれる無限に近い時間の長さ。盤石劫（前掲書）。

③三種の練磨：唯識が説く五段階の修行位の最初「資糧位」において、陥りやすい三種の退心の克服。

④魔旬：欲界の第六天「他化自在天」の魔王「破旬」。

【私訳】

このようにして、百由旬四方の広さの城に充滿した芥子粒がまた満ち、百由旬四方の大きさの岩石がすり減ってまた生ずるほどの、はてしない時間をかけて、

先ず、唯識が説く五段階の修行位の最初「資糧位」において、陥りやすい三種の怠りの心の克服練磨は、初心者の怠りの心を励まし、「四弘誓願」の修行によって、修行後に勝れた果報が得られるよう仰ぎ願う。

次に「加行位」において、一点集中の三昧に入り、唯識（「三界唯心」）の道理で身を固め、

次に「通達位」において、「他化自在天」の魔王「破旬」の軍勢を征服して煩惱の賊軍の将を征伐する。

次に「修習位」において、「八正道」の軍力を整え、魔軍の煩惱を縛るにも大悲同事の縄で縛り、「六神通」の精銳が騎馬を走らせ、煩惱を断ち切るのに智慧の利剣を使う。

次に「究竟位」において、世間の叙勲で言う五等爵位の最高位であり、「六識」に末那識・アーラヤ識を加えた「八識」に従属する心所はそのまま、「常」「楽」「我」「浄」の「四徳」を具有するサトリの都に住している。

【原文】

勝義勝義致太平之化。廢詮談旨扇無事之風。垂拱一眞之臺無爲法界之殿。三大僧祇之庸於是稱帝。四智法王之號本無今得。爾乃藏海息七轉之波。蘊落斷六賊之害。無分正智等眞常函。後得權悲遍諸趣類。製三藏法令化三根有情。造十善格式導六趣衆生。言乘即三談識唯八。五性有成不三身即常滅。百億應化同汎六舟。千葉牟尼等授三駕。

【書き下し】

勝義勝義、太平の化を致し、廢詮談旨、無事の風を扇ぐ。一眞の臺うてな すいきように垂拱し、法界の殿に無爲たり。三大僧祇ともがらの庸、是に於いて帝と稱せらる。四智法王の號、本無くして今得る。爾れば乃ち、藏海に七轉の波を息め、蘊落に六賊の害を斷つ。

無分の正智は眞常の函に等しく、後得の權悲は諸趣の類に遍す。三藏の法令を製つくつて三根の有情を化し、十善の格式を造つて六趣の衆生を導く。乗を言えば即ち三、識を談ずれば唯だ八なり。五性に成と不と有り、三身は即ち常と滅となり。百億の應化は同じく六舟うかを汎べ、千葉の牟尼は等しく三駕を授く。

【註記】

①勝義勝義…いわゆる「眞俗二諦説」で、唯識系の『瑜伽師地論』は俗諦（世俗諦）に「世間世俗」「道理世俗」「証得世俗」「勝義世俗」を説き、『成唯識論』は眞諦（勝義諦）に「世間勝義」「道理勝義」「証得勝義」「勝義勝義」を説く、中国の法相宗はこれを四真四俗の「四重二諦」（窺基『大乘法苑義林章』第二「二諦義林」）とした。そのうち最上の「勝義勝義」。言語を超えた言亡慮絶の境地。

② 廢詮談旨…サトリの世界は言語を超えた言亡慮絶の境地。

③ 垂拱…何もやることはない。

④ 一眞…真如。

⑤ 庸…功・手柄・努力・骨折り。

⑥ 藏海…アーラヤ識（藏識）。

⑦ 七轉…「前六識」と「末那識」。

⑧ 蘊落…「五蘊」から成る身体。

⑨ 六賊…「六境」。

⑩ 無分…「無分別」。

⑪ 眞常の函…智慧の蓋と眞実常住の函とがぴったり合う、の意。

⑫ 權悲…大悲利他の心。

⑬ 三根…「三乗」。

⑭ 五性…凡夫・衆生の五種の種姓。「声聞定性」「縁覚定性」「菩薩定性」「不定性」「無生有情」

⑮ 六舟…「六波羅蜜」行。

⑯ 千葉…『梵網經』が説く葉上の釈迦。伝統教学によれば、ここに説かれる受用身の釈迦は『梵網經』の釈迦とは同体でない（松長有慶『訳注 秘藏宝鑰』）。

⑰ 三駕…「三乗」。

【私訳】

（唯識の境地にある菩薩は）法相が言う「四重二諦」の最上の勝義諦、すなわち言語を超えた言亡慮絶の境地にあつて、心

は深い寂靜と化し、真如を言葉で言い表せない離言の境地にあつて、何事もない。真実法如の高台に坐して何もやることなく、真如法界の宮殿で法爾自然のままにある。永遠とも言うべき三天阿僧祇劫という長い時間に積み重ねた努力によつて、仏教の王として称えられる。「大円鏡智」「平等性智」「妙觀察智」「成所作智」の「四智」を有する法王の称号が、前例なく今はじめて得られた。であるから、あらゆる心意識を内包する「アーラヤ識（蔵識）」のなかに「六識」と「末那識」の七識の転変が収まり、「五蘊」から成る身体は「六境」への我執を斷つ。虚亡分別のない正しい智慧は真実常住の函にぴつたりの蓋に等しく、サトリのあとに自覺する大悲利他の心は「六道」にさまよう凡夫・衆生にあまねく及ぶ。經・律・論の「三蔵」の教法によつて声聞・緣覺・菩薩という「三根」の凡夫・衆生を化導し、「十善戒」の戒めによつて「六道」の凡夫・衆生を教導する。乗で言えば声聞・緣覺・菩薩の「三乗」、識で言えば「六識」と「末那識」「アーラヤ識」の八識である。「声聞定性」「緣覺定性」「菩薩定性」「不定性」「無生有情」の五種の種姓（「五性」）に成る者と成らない者がある。「三身」のうち、「自性身」は常住であり、「受用身」「応化身」は生滅をくり返す。百億の應化身は、（声聞・緣覺に説法するのと）同じく、（菩薩のために）「六波羅蜜」を説き、千葉の釈迦牟尼は（「六波羅蜜」と）同じく「三乗」に説法する。

【原文】

緣法界有情故他緣。簡聲獨羊鹿故大名。運自他乎圓性故曰乘。此乃君子之行業菩薩之用心。此北宗大綱蓋如此乎。

【書き下し】

法界の有情を緣とするが故に他緣なり。聲獨の羊鹿に簡くはぶるが故に大の名なり。自他を圓性に運ぶが故に乘と曰う。此れ乃ち君子の行業、菩薩の用心なり。此れ北宗の大綱蓋し此くの如し。

【註記】

①北宗：揚子江の北側に展開した仏教。の意。法相宗のこと。

【私訳】

法如の現象態である現実世界のあらゆる凡夫・衆生を（大悲利他の）対象とするので他縁である。声聞・独覺の羊車・鹿車（二乗）と比べて、大と言う。自利利他円満の境地に運ぶので乗と言う。これは（世間的には）君子の行いであり、（仏教的には）菩薩の心がけである。また、法相宗の大綱はおよそ以上の通りである。

【原文】

頌曰

心海湛然無波浪 識風鼓動爲去來 凡夫眩著幻男女 外道狂執蜃樓臺
不知自心爲天獄 豈悟唯心除禍災 六度萬行三劫習 五十二位一心開
煩惱所知已斷淨 菩提涅槃是吾財 四三點德今具足 不覺外求甚悠哉
言忘慮絶遍法界 沈滓一子尤可哀

【書き下し】

頌に曰わく、

心海湛然として波浪無けれども、識風鼓動して去來を爲す。

凡夫は幻の男女に眩著^{けんじゃく}し、外道は蜃の樓臺に狂執す。

自心の天獄たるを知らず、豈唯心の禍災を除くことを悟らんや。
六度萬行は三劫に習い、五十二位は一心に開く。

煩惱所知、已に斷じ淨ければ、菩提涅槃、是れ吾が財なり。

四三點の徳、今具足す、覺らずして外に求むるは甚だ悠なる哉。

言忘慮絶、法界に遍す。沈萍ちんぺいの一子、尤も哀れむべし。

【註記】

①心海…アーラヤ識。

②蜃の樓臺…蜃氣樓の城。乾達婆城。

③唯心…三界唯心。唯識。

④所知…所知障。認識対象への我執。法我。

⑤四三點…「常」「樂」「我」「淨」の「四徳」と「法身」「般若」「解脱」の「三點」。

⑥沈萍…浮沈する。

【私訳】

頌に言う、

アーラヤ識は静寂で妨げるものがないが、「六境」は我執の生滅をくり返す。

凡夫・衆生は幻のような男と女の姿態に目がくらんで執着し、外道は実体のない蜃氣樓の城（乾達婆城）に固執する。
自心のなかに天国も地獄もあることを知らず、ましてや、三界唯心こそが我執の災禍を除くことを悟るだろうか。

六波羅蜜など数多くの菩薩行を三劫というはてしない時間をかけて修習するもの、

菩薩の修行の五十二段階も、すべてわが一つの心のなかに収まる。

本能的な煩惱も認識対象への我執も、すでに除いて清浄であれば、

菩提や涅槃といったサトリの境地は、私の財宝である。

「常」「楽」「我」「淨」の「四徳」や「法身」「般若」「解脱」の「三点」の徳を今具足し、

それを覺らずに外に真実を求めるのは、甚だ悠長なことである。

サトリの真実は世間の言葉や思考を超えて、真如法界に遍満する。「六道」輪廻に沈んだり浮いたりをくり返す凡夫・衆生は、ほんとうに哀れむべきである。

【原文】

問。此住心亦依何經論建立。答。大日經菩提心論等。彼經等何說。答。大日經云。祕密主大乘行。發無緣乘心法無我性。何以故。如彼往昔如是修行者觀察蘊阿賴耶。知自性如幻陽焰影響旋火輪乾闥婆城。龍猛菩薩菩提心論云。又有衆生發大乘心行菩薩行。於諸法門無不遍修。復經三阿僧祇劫修六度萬行。皆悉具足然證佛果。久遠而成斯由所習法教致有次第。

【書き下し】

問う、「此の住心は亦た何れの經論に依つてか建立す」と。答う、「『大日經』『菩提心論』等なり」と。(問う)彼の經等に何んが説く」と。答う、「大日經に云わく、祕密主、大乘の行あり。無緣乘の心を發し法に我性無し。何を以つての故に。彼往昔に、是くの如く修行する者の如きは、蘊の阿賴耶を觀察して自性の幻・陽焰・影・響・旋火輪・乾闥婆城の如きを知る」と。龍猛菩薩の菩提心論に云わく。又、衆生有つて大乘の心を發し菩薩行を行ず。諸々の法門に於いて遍修せざること無し。

復た、三阿僧祇劫を経て六度萬行を修し、皆悉く具足して然して佛果を證す。久遠にして成ずるは斯れ由所習の法教、致次^{むね}第有るに由つてなり」と。

【註記】

①『大日經』に云わく…『大日經』「住心品」三劫段。

②無緣乘…「六境」がない教法。

③阿羅耶…拋り所。

【私訳】

問う人が言うに、「この住心はまた、どんな経論をもとに説いたのか」と。答えて言うに、『大日經』と『菩提心論』である」と。(問う)「この経論にどんなことが説かれているのか」と。答えて言う、『大日經』「住心品」三劫段に、「秘密主よ、大乘の菩薩行があつて、「六境」のない教法を自覺しているので法無我の立場を取る。なぜかと言うと、昔、このように修行した者が「五蘊」の拋り所を觀想して、その自性(実体)は幻・陽焰・影・響・旋火輪・乾闥婆城のようだったということを、菩薩は知っている」と説かれている。また、龍猛菩薩の『菩提心論』には、「また、ある衆生が大乘の心を發起して菩薩行を行ふなら、さまざまな法門の教法を遍く学修する。また、三阿僧祇劫というはてしなく長い時間をかけて「六波羅蜜」行などを実践し、それらをみな具足し、然るのちサトリを成就する。長い時間をかけて成就するのは、学すべき教法に、厳格な順序次第があるからである」と説かれている」と。

【原文】

問。斷二障證四德如此沒駄爲究竟耶。如是行處未致本源。何以得知。龍猛菩薩說。一切行者斷一切惡修一切善。超十地＊致無上地。圓滿三身具足四德。如是行者無明分位非明分位。今依此證文。此住心之佛未致心原。但遮心外之迷無開祕藏之寶

【書き下し】

問う。「二障を斷じて四德を證する、此の如くの沒駄^{ほだ}を究竟と爲んや」と。(答う)「是くの如くの行處は未だ本源に致らず」と。(問う)「何を以ってか知ることを得る」と。(答う)「龍猛菩薩の説けり。「一切の行者は、一切の惡を斷じ、一切の善を修し、十地を超え、無上地に致り、三身を圓滿し、四德を具足す。是くの如くの行者は無明の分位にして明の分位に非ず」と。今、此の證文に依り、此の住心の佛、未だ心原に致らず。但し、心外の迷を遮し祕藏の寶を開くこと無し。

【註記】

- ①二障：煩惱と所知。
- ②沒駄：ブツダ（仏陀）。覺者。
- ③行處：修行の境地。
- ④本源：究極のサトリ。
- ⑤龍猛菩薩の説けり：『釈摩訶衍論』第五の「五重問答」の第一。
- ⑥十地：菩薩の五十二位のうちの「十地」。聖位。
- ⑦無上地：菩薩の五十二位の最高位。「十地」を超えた「等覺」「妙覺」のうちの「妙覺」。
- ⑧佛：ブツダ（仏陀）。覺者。

【私訳】

問う人が言うに、「(すでに) 煩惱障と所知障の二障を除き、「常」「樂」「我」「淨」の「四徳」を成就した、このような(瑜伽唯識の) 覺者を究極とするのか」と。(答えて言うに)「このような境地はまだ、究極のサトリには至っていない」と。(問うて言うに)「どうしてそれがわかるのか」と。(答えて言うに)「龍猛菩薩が『釈摩訶衍論』第五の「五重問答」の第一に、「一切の行者は、あらゆる惡行を斷ち、あらゆる善行を行い、菩薩の「十地」を超え、妙覺位(無上地)に至り、「法身」「受用身」「応化身」の「三身」が備わり、「四徳」を具現している。このような行者でも、まだ「無明」のレベルにあつて「明」のレベルにはない」と説かれている。今、この『釈論』の証文により、この住心の覺者はまだ究極のサトリに至っておらず、ただ心の外の迷妄を斷つたに過ぎないので、密教の深秘の宝庫を開いたわけではない。

■第七 覺心不生心

【原文】

夫大虚寥廓含万象越一氣。巨壑泓澄孕千品爰一水。誠知一爲百千之母。空即假有之根。假有非有而有有森羅。絶空非空而空空不住。色不異空建諸法而宛然空。空不異色泯諸相而宛然有。是故色即是空空即是色。諸法亦爾何物不然。似水波之不離。同金莊之不異。不一不二之號立。二諦四中之稱顯。

【書き下し】

夫れ、大虚は寥廓りようかくとして万象を（越）こんき一氣に含み、巨壑きよかくは泓澄おうとうとして千品せんびんを（爰）一水に孕はらむ。誠に知る、一は百千の母、空は即ち假有けうの根たり。假有は有に非ざるも有有として森羅なり。絶空せんは空に非ざるも空空として不住なり。色は空に異ならざれば、諸法を建てて宛然えんぜんとして空なり。空は色に異ならざれば、諸相しんを泯みんじて宛然として有なり。是の故に、色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。諸法も亦た爾しかなり、何物か然らざらん。水と波の離れざるに似たり。金と莊しょうの異ならざるに同じ。不一不二の號立なち、二諦四中の稱顯しんけんわる。

【註記】

①寥廓：広大で果てしない。

②一氣…混氣。混沌。虚空の別称。

③巨壑…大きな海。

④泓澄…水が深く澄んでいる、の意。

⑤千品…万象。

⑥假有…龍樹の『中論』に説かれる「空・仮・中」の「仮」。「仮設」「仮有」。無自性・空の故に実体のない存在。

⑦絶空…絶対空。

⑧宛然…そのまま。

⑨四中…四種の「中道」。「対偏中」「尽偏中」「絶待中」「成仮中」。

【私訳】

そもそも、大虚空は広大で、果てしなくあらゆる事物・事象を混沌のなかに内包され、大海は深く澄んだ水を湛え、万象を一すくいの水のなかに含む。よく知っているように、一は百千という数の母であり、空は仮有の根本である。仮有は実有ではないが有のまた有として天地の間に数多く存在している。絶対空は空ではないが空のまた空として常住ではない。（『般若心経』が説くように）色は空に異ならないから、諸法を見てもそのまま空である。空は色に異ならないから、諸法の姿・形は無自性・空だとしてもそのまま有である。であるから、色は即ち空であり、空は即ち色なのである。諸法もまたその通りであり、そうでないものが何かあるだろうか。水と波が不即不離であることに似ているし、金と金の宝具が一体であることと同じである。（それ故）不一や不二という言い方や、「（真俗）二諦」や「四中」という言い方があるのである。

【原文】

觀空性於無得。越戲論於八不。于時四魔不戰面縛三毒不殺自降。生死即涅槃更無階級。煩惱即菩提莫勞斷證。雖然無階之階

級不壞五十二位。階級之無階不礙一念成覺。一念之念經三大而勤自行一道之乘馳三駕而勞化他。

【書き下し】

空性を無得に觀じ、戲論を八不に越ゆ。時に四魔戰わずして面縛し、三毒殺さずして自降す。生死即ち涅槃にして更に階級無し。煩惱即ち菩提にして斷證を勞すること莫し。然りと雖も、無階の階級にして五十二位を壞せず。階級の無階にして一念の成覺を礙せず。一念の念に三大を経て自行を勤め、一道の乘に三駕を馳せて化他を勞す。

【註記】

①無得：『般若心經』に説かれる「無智亦無得」の「無得」。「智・得」を「能觀（智）・所觀（サトリ）」とするのが中村元博士・紀野一義博士の解釈であるが（『般若心經 金剛般若經』岩波文庫）、ここは、「諸法の結びついたり集ったりするはたらき」というアビダルマの法分析という解釈（宮坂宥洪師）に同意である。

②四魔：「煩惱魔」「陰（蘊）魔」「死魔」「天魔」。

③階級：修行位。階位。

④五十二位：菩薩の修行位。「十信」「十住」「十行」「十廻向」「十地」「等覺」「妙覺」。

⑤三大：三大阿僧祇劫。

⑥一道の乘：菩薩道の一乘。

⑦三駕：「声聞」「緣覺」「菩薩」の三乘。

【私訳】

（諸法が）空性であることを、諸法が結びついたり集ったりするはたらきがない（無得の）觀想で觀察し、言葉による概念

仮構を「不生不滅」などの「八不（中道）」の観想によつて越える。そうになると、「煩惱魔」などの「四魔」は戦わずに両手を縛られ顔面を前にさらけ出し、「貪」などの「三毒」も殺さなくても自ら投降する。凡夫・衆生の生死は即ち涅槃であつて、それ以上の修行の階位はない。煩惱は即ち菩提であるから断つたり成就したりする労力も要らない。ただし、階位なき階位にあるので菩薩の五十二位を否定しない。階位があつても階位なき境地にあるので、一念のうちにサトリを得ることを妨げない。一念の念に、はてしなく長い三大阿僧祇劫の時を経て（「六波羅蜜」の）修行に精励し、菩薩道の一乗に（声聞などの）「三乗」を乗せて利他行に励む。

【原文】

悲唯蘊之迷無性。歎他緣之阻境智。心王自在得本性之水。心數客塵息動濁之波。權實二智證圓覺乎一如。眞俗兩諦得教理乎絶中。悟心性之不生知境智之不異。斯乃南宗之綱領也。

【書き下し】

唯蘊の無性に迷うを悲しみ、他縁の境智を阻つを歎く。心王は自在にして本性の水を得、心數は客塵にして動濁の波を息む。權實の二智は圓覺を一如に證し、眞俗の兩諦は教理を絶中に得。心性の不生を悟り境智の不異を知る。斯れ乃ち南宗の綱領なり。

【註記】

①唯蘊：第四住心の「唯蘊無我」。

②無性：人空法我。

③他縁：第六住心の「他縁大乘」。

④心王：アーラヤ識。

⑤心數：アーラヤ識以外の認識作用。

⑥權實：方便とサトリ。

⑦眞俗の兩諦：眞俗二諦。

⑧絶中：絶對的中道。

⑨南宗：揚子江の南側に展開した三論宗。

【私訳】

（この住心は、第四住心の）「唯蘊無我」説が「人空法我」の理に迷うのを悲しみ、（第六住心の）「他縁大乘」が認識対象（境）と認識智（智）を隔てる相對關係を嘆く。アーラヤ識（心王）は自在にして本性清淨の水のようであり、その他の認識作用（心數）は我執に染まり動いたり濁ったりする波を止める。方便とサトリの二智は、完全なサトリにおいて權實一如を成就し、眞俗の二諦は教理において絶對的中道を会得する。心の本性が「不生不滅」であることを悟り、認識対象と認識智とが「不二不異」であることを知る。これは三論宗の要諦である。

【原文】

故大日尊告祕密主言。祕密主。彼如是捨無我。心主自在覺自心本不生。何以故。祕密主心前後際不可得故。釋曰。心主即心王也。以不滯有無故心無罣礙。所爲妙業隨意能成。故云心主自在。心主自在明即是淨菩提心更作一轉開明。倍勝於前劫也。心王猶如池水性本清淨。心數淨除猶如客塵清淨。是故證此性淨時即能自覺心本不生。何以故。心前後際俱不可得故譬如大海波浪以從縁起故。即是先無後無。而水性不爾。波浪從縁起時水性非是先無。波浪因縁盡時水性非是後無。心王亦復如是。無前後際。以前後際斷故。雖復遇境界風隨縁起滅。而心性常無生滅。覺此心本不生是漸入阿字門。如是無爲生死縁因生壞等義。

如勝鬘經實性佛性論等中廣明。

【書き下し】

故に、大日尊、祕密主に告げて言わく、「祕密主、彼、是くの如く無我を捨て、心主は自在にして自心の本不生を覺る。何を以つての故に。祕密主、心は前後際の不可得なるが故に」と。釋して曰わく、「心主は即ち心王なり。有無に滞とどまらざるを以つての故に心に罣礙無く、所爲の妙業、意に隨つて能く成ず。故に、心主自在と云う。心王は自在とは、即ち是れ淨菩提心の更に一轉の開明を作して、前劫に倍勝するを明かすなり。心王は猶し池水の性の本より清淨なるが如し。心數の淨除は猶し客塵の清淨なるが如し。是の故に、此の性の淨を證する時、即ち能く自ら心の本不生を覺る。何を以つての故に。心は前後際に不可得なるが故に。譬えば、大海の波浪の縁從り起るを以つて故に、即ち、是れ先に無く後に無く、而も水の性は爾らず、波浪の縁從り起る時水の性は是れ先に無きに非ず、波浪の因縁の盡くる時水の性は是れ後に無きに非ざるが如く、心王亦た復た是くの如し、前後際無し。前後際の斷するを以つての故に、復た、境界の風に遇い縁に隨つて起滅すると雖も、而も心性は常に生滅無し。此の心の本不生を覺るは、是れ漸く阿字門に入るなり。是くの如く、無爲生死の縁因生壞等の義は、勝鬘經・實性・佛性論等の中に廣く明かすが如し」と。

【註記】

- ①前劫…第六住心の三劫。
- ②境界…認識対象。
- ③阿字門…阿字本不生。
- ④無爲…法爾自然。

⑤勝鬘經…『勝鬘獅子吼一乘大方便方広経』。

⑥寶性…堅慧作・勒那摩提訳『究竟一乘宝性論』。

⑦佛性論…世親作・真諦訳『仏性論』。

【私訳】

それ故、大日如来が『大日経』『住心品』で秘密主に告げて言うに、「秘密主よ、彼（真言行者）は、このような（相對二項を否定する中道の）無我を捨て、心本体は自在であり、自心は本来無自性・空であって生じたり滅したりしない「本不生」を覚る。なぜかと言えば、秘密主よ、無自性・空の心には前後という際限がないからである」と。

これを『大日経疏』が解釈して言うに、「心の本体（心主）とは心王のことである。（真言行者は）諸法の有や無に捉われなから心に障礙がなく、為すべき修行は思った通りに成就する。なので「心主自在」と言う。「心王自在」とは、本有菩提心がさらに一段階深化して、前の第六住心（三劫）に倍して勝れていることを言っている。心王はあたかも池水の本性がもともと清浄なものと似ている。心王以外の認識作用を除き清めることは、我執が清浄なと同じである。であるから、心の本来清浄なことが会得できた時、自心の本不生を覚えることができる。なぜかと言えば、心は前や後という際限がとみにないからである。例えば、大海の波浪は縁（風や地形など）によって生ずるからで、縁の前に波浪があるのでもなく後にあるのでもなく、しかし水の本性はそうではない、波浪が縁によって生じる時水の本性が先にはないわけではなく、波浪の原因が尽きる時水の本性が後にはないわけではない、心王もまたその通りで、前や後という際限がない。前や後という際限が断たれているから、認識対象の風に当り風（縁）に吹かれて生滅するとしても、心の本性には常に生滅がない。この心の本来不生を覚えることは、すなわち「阿字本不生」の世界に入ることである。このように、本来法爾自然である凡夫・衆生の生死の縁・因・生・壊のことは、『勝鬘経』『宝性』『仏性論』などのなかに広く明かされている通りである」と。

【原文】

謂本不生者兼明不生不滅不斷不常不一不異不去不來等。三論家舉此八不以爲究極中道。故吉藏法師二諦方言佛性等章盛談此義。

【書き下し】

本不生と謂うは、兼ねて不生不滅・不斷不常・不一不異・不去不來等を明かす。三論家は此の八不を擧げて以つて究極の中道と爲す。故に吉藏法師の二諦・方言・佛性等の章に盛んに此の義を談ず。

【註記】

①八不：龍樹の『中論』（觀因緣品）の冒頭に説かれる「不生不滅」「不斷不常」「不一不異」「不去不來」。生と滅・断と常・一と異・去と来という相對二項（二辺）を挙げ、彼（生）があるから此（滅）がある、彼（生）がないと此（滅）もない、という相依相待の關係の空を説き、従つて二項の相待關係で成り立つ諸法は仮の存在（仮・仮有・仮設）であつて、その空はまた相依關係の中間であるから、すなわち中であるとする（「空・仮・中の三諦」）。

②吉藏法師：唐初期の三論宗を大成した論師。嘉祥大師。『大乘玄論』『三論玄義』『二諦義』など。

【私訳】

「本不生」というのは、（龍樹の『中論』が説く）「不生不滅」「不斷不常」「不一不異」「不去不來」の「八不」を全部含めてゐる。三論宗はこの「八不」を以つて究極の中道とする。だから、嘉祥大師吉藏の『大乘玄論』に説かれる二諦・方言・仏性の章では盛んに「八不」の意味を論じてゐる。

【原文】

頌曰

因縁生法本無性 空假中道都不生
波浪滅生但是水 一心本自湛然澄
色空不壞智能達 眞俗宛然理分明
八不利刀斷戲論 五邊面縛自降平
心通無礙入佛道 從此初門移心亭

【書き下し】

頌に曰わく、

因縁生の法は本より無性なり。空假中道は都て不生なり。
波浪の滅生は但だ是れ水なり。一心は本自り湛然として澄む。
色空は不壞にして智能く達す。眞俗宛然として理分明なり。
八不利の利刀は戲論を斷つ。五邊は面縛して自ら降り平かなり。
心通無礙にして佛道に入る。此の初門從り心亭に移る。

【註記】

- ①空假中道…「空・假・中の三諦」。
- ②色空…色と空。『般若心経』の「色即是空・空即是色」。
- ③眞俗…「眞俗二諦」。

④五邊…「生」「滅」「不生不滅」「亦生滅亦不生滅」「非生滅亦非生滅」。

【私訳】

頌に曰わく、

因縁によつて生滅する諸法はそもそも無我であり、空・仮・中の「三諦」はみな（生滅を超え）不生不滅である。

波浪は滅したり生じたりをくり返すが、ただ水に過ぎない。心はもともと静寂で澄んでいる。

色即是空・空即是色は意味が堅固で、その智慧はよく真実に達する。「真俗二諦」はそのまま道理が明らかである。

「八不」の鋭利な刀は概念化された言葉の仮構を断つ。「生」「滅」「不生不滅」「亦生滅亦不生滅」「非生滅亦非生滅」の五辺は両手を縛られ顔を突きだして自ら降伏し乱れることがない。

心は融通無礙となつて仏の境地に入る。この初門から次の第八住心（心亭）に移る。

【原文】

經云。祕密主。彼如是捨無我心主自在覺自心本不生。何以故。祕密主。心前後際不可得故。如是知自心性。是超越二劫瑜祇行。菩提心論云。當知一切法空。已悟法本無生心體自如不見身心。住於寂滅平等究竟眞實之智令無退失。忘心若起知而勿隨。若忘息時心源空寂

【書き下し】

經に云わく、「祕密主、彼、是くの如く無我を捨て、心主自在にして自心の本不生を覺る。何を以つての故に。祕密主、心は前後際不可得なるが故に。是くの如く、自心の性を知る。是れ二劫を超越する瑜祇行なり」と。菩提心論に云わく、「當に知るべし、一切の法は空なり。已に法の本無生を悟らば、心體自如にして身心を見ず。寂滅・平等・究竟・眞實の智に住して、

退失無からしむ。忘心若し起らば知って隨うこと勿れ。若し忘息む時は心源空寂なり」と。

【註記】

①經に云わく…『大日經』『住心品』三劫段。

【私訳】

『大日經』『住心品』三劫段に言う、「秘密主よ、彼（真言行者）は、このように無我を捨て、心の本体は自在であり自心の本不生を覚る。どうしてかと言えば、秘密主よ、心には前や後という際限がないからである。このように自心の本性を知る。これは第二劫を超越する瑜伽行である」と、『菩提心論』にも言うに、「まさに知るべきである、一切の法は空であることを。すでに諸法の本不生を悟れば、心の本体は法爾自然にして身心を分別しない。寂滅・平等・究竟・真実の智慧に住し、初心を忘れることなきようにする。忘心がもし起つたら、その原因を知ってそれに従つてはならない。もし忘心がなくなった時は心の本源は静寂なものである」と。

【原文】

問。絶諸戲論寂靜無爲。如是住心致極底否。那伽羅樹那菩薩説。清淨本覺從無始來。不觀修行 非得他力。性徳圓滿本智具足。亦出四句亦離五邊。自然之言不能自然。清淨之心不能清淨。絶離絶離。如是本處無明邊域非明分位

【書き下し】

問う。「諸々の戲論を絶ち寂靜無爲なり。是くの如くの住心は極底に致るや否や」と。（答う）「那伽羅樹那菩薩の説くに、「清

淨本覺は無始從り來、修行を觀たず、他力を得るに非ず。性徳圓滿にして本より智具足す。亦た四句を出て亦た五邊を離れり。自然の言は自然たること能わず、清淨の心は清淨たること能わず、絶離絶離せり。是くの如く。本處は無明の邊域にして明の分位に非ず」と。

【註記】

①那伽羅樹那菩薩…ナガアルジュナ菩薩。インド大乘中觀派の龍樹。ナーガールジュナ (Nāgārjuna)。

【私訳】

問う人が言うに、「(第七住心は) 諸々の概念化された言葉の仮構を絶ち静寂で法爾自然の境地である。このような住心は究極のサトリの境地に到ったのか、ちがうか」と。(答えて言うに)「龍樹菩薩が『釈摩訶衍論』第五で説くに、「(自心の本不生を覺った) 清淨な本覺は、始めのない昔から、自ら修行することを要せず、他力で得るものでもない。本性がもとと仏徳を身に付けていて、また「有」「無」「亦有亦無」「非有非無」の「四句」や「五辺」の相對二項を離れている。自然という言葉は不自然に對しであり、清淨な心は不淨に對してのもので、(ここに言う第七住心の本覺は、相對二項と) まったく絶離している。とは言え、心の本源はまだ「無明」の支配する所で「明」の次元ではない」と。

■第八 如實一道無爲心 第八如實一道無爲心又名如實知心又名空性無境心

【原文】

若夫孔宣出震旦述五常乎九洲。百會誕華胥開一乘乎三草。於是狂醉黎元住而不進。癡闇黔首往而不歸。七十達者頗昇其堂。萬千羅漢乃信金口。度内五常方圓不合。界外一車大小不入。是故三七觀樹四十待機。初轉四諦方等洗人法之垢穢。後灑一雨圓音霑草木之芽葉。至如入蓮華三昧觀性德不染。放白毫一光表修成遍照。會三歸一讚佛智之深多。指本遮末談成覺之久遠。寶塔騰踊二佛同座。娑界震裂四唱一處賜髻珠獻瓔珞。利智鷺子疑吾佛之變魔。等覺彌勒怪子年之過父。一實之理吐本懷於此時。無二之道得滿足於今日。爾乃羊鹿獐而露牛疾。龍女出而象王迎。

【書き下し】

若し夫れ、孔宣こうせん、震旦に出て五常を九洲に述べ、百會ひやくえ、華胥かしよに誕れて一乘を三草に開かんか。是に於いて、狂醉の黎元は住して進まず、癡闇ちんくの黔首きんしゅは往いて歸らず。七十の達者は頗る其の堂に昇り、萬千の羅漢は乃ち金口きんくを信ず。度内の五常は方圓かな合かいわず、界外かいげの一車は大小入らず。是の故に、三七に樹を觀じ、四十に機を待つ。初めに四諦・方等を轉じ、人法の垢穢しゅつじようを洗い、後に一雨の圓音えんのんを灑そそいで、草木の芽葉を霑うるおす。蓮華三昧に入つて性德の不染を觀じ、白毫の一光を放つて修成の遍照を表するが如くに至つては、會三歸一えさんきいつして佛智の深多を讚え、指本遮末して成覺の久遠を談ず。寶塔騰踊とうゆして二佛同

座し、娑界震裂して四唱ししやう一處なり。髻珠けいじゆを賜い瓔珞を獻ず。利智じゆしの鷺子じゆしは吾が佛の魔に變ずるを疑い、等覺の彌勒は子の年の父に過ぎたるを怪しむ。一實の理、本懷を此の時に吐き、無二の道、満足を今日に得。爾れば乃ち、羊鹿斃れても露牛疾く、龍女出ても象王迎える。

【註記】

①孔宣…孔子。諡が宣王。

②九洲…中国全体の呼称。

③百會…釈尊。

④華胥…インド。

⑤三草…上草（菩薩）・中草（声聞・縁覺）・下草（人天乘）。『法華經』「藥草喻品」に説かれる。

⑥黎元…黎は黒、元は頭。冠を付けない黒髪の人。人々・庶民。

⑦黔首…黎元に同じ。黔は黒。

⑧七十…孔子の門弟三千人にうち、すぐれた者は七十二人。

⑨金口…釈尊の説法。金色は仏の口。

⑩度内…孔子が度する国内。中国。

⑪界外の一車…城外の大白牛車。『法華經』「譬喻品」に説かれる「三車」の牛車（菩薩）を第四の車「大白牛車」と言い、

天台の法華一乗を意味する。

⑫方等…大乘經典のこと。

⑬蓮華三昧…『法華經』「序品」に説かれる「六瑞（相）」の第一の「入定」。「無量義処三昧」。

⑭白毫：同じく、『法華経』「序品」に説かれる「六瑞（相）」の最後の「放光」。釈尊の眉間の中間にある白い巻き毛。

⑮修成：仏陀。

⑯會三歸一：『法華経』「方便品」に説かれる、声聞などの「三乗」を法華一乗に内包すること。

⑰指本遮末：『法華経』「如来寿量品」に説かれる、ゴータマ・ブッダ（歴史上の釈尊）は、遠い遠い過去にすでに成仏をはたした久遠実成の釈迦牟尼仏がこの世に現れた化現であること。

⑱騰踊：『法華経』「從地涌出品」に説かれる、無量千万億の菩薩が地中から涌き出ること。

⑲四唱一處：同じく「從地涌出品」に説かれる、四唱は「上行」「無辺行」「淨行」「安立行」の四人の菩薩（唱導師）。

⑳髻珠：『法華経』「安樂行品」に説かれる、

㉑鷲子：舍利弗。

㉒一實：法華一乗。唯一の眞実の教え。

㉓羊鹿・露牛：羊は羊車（声聞）・鹿は鹿車（縁覺）、露牛は大白牛車（仏乗、法華一乗）。

【私訳】

そもそも、孔子が中国に出現して「仁」「義」などの「五常」を中国全体に広め、釈尊がインドに生まれて『法華経』一乗を「上草（菩薩）」「中草（声聞・縁覺）」「下草（人天乗）」の「三草」に説いた。しかしそうであるが、酒に酔って正氣を失くしているような愚かな人々はそのままで孔子に学ぼうとせず、無知蒙昧の仏弟子たちはその説法処から出ていつて帰ってはこなかった。（孔子の弟子三千人のうち、たった）七十二人だけがすぐれた弟子で、熱心に教えの講堂に上り、一万三千人の阿羅漢たちは釈尊の説法を信じた。しかし、（孔子の教えが民を度すべき）中国国内の「五常」は、四角形と円形のように、人々と合致せず、『法華経』「譬喻品」の（城外の大白牛車（法華一乗）は、大乘も小乗もこれに入れない。であるから、釈尊は、二十一日間、菩提樹の下で瞑想修行し、四十年間、『法華経』を説法する機縁を待った。はじめに「苦」「集」「滅」

「道」の「四諦」や初期仏教で大乘經典と言われる「方等」を説き、人我・法我の我執を洗い清め、そのあとで慈雨のような法華一乗の心地よい円教を説き注いで、凡夫・衆生（草木）の心（芽葉）を潤おした。

『法華経』で言えば、

「序品」で「六瑞（相）」を説き、先ず最初の「入定」では、釈尊が蓮華三昧（無量義処三昧）に入り（蓮の花のように）生ある者が具え持つ本来清浄の徳を觀想し、（最後の「放光」では）眉間の中ほどにある白い巻き毛（白毫）から一筋、中道の光明を放ち、その光明から無数の仏陀が生まれ説法する様子を照らし出し、

「方便品」で「声聞などの「三乗」を法華一乗に歸一して仏智の深く多重であることを讃え、

「如来寿量品」で「ゴータマ・ブッダ（歴史上の釈尊）は、遠い遠い過去にすでに成仏をはたした久遠実成の釈迦牟尼仏がこの世に現れた化現であることを説き、

「見宝塔品」では）釈尊が靈鷲山で説法しているさなか、そこに多宝塔が地中から湧き出て、なかに坐していた多宝如来が『法華経』を説く釈尊をほめ讃え、一尊が並んで座したことを述べ、

「從地涌出品」では）釈尊の説法中に娑婆世界の三千大千国土に激震が走り、大地が裂け、その地中から無量千萬億の金色の菩薩が湧き出て、そのうち「上行」など四菩薩が唱導して、「世尊よ、少病・少悩にして安樂に行じておられるか、否か。度すべき所の者は教を受けることが容易であるか、否か。世尊に疲労を生じさせてはいないか」などと釈尊に問うたことを明かし、

「安樂行品」では）ある国王が部下の戦勲に対し財宝などの褒美を与えたが、自分の髻髪のにかに結いこめてある宝珠だけは誰にも与えなかった。転輪聖王（釈尊）が『法華経』だけは容易に説かないのは、国王の髻珠と同じであることを説き、

「普門品」では）無尽意菩薩から瓔珞を供された觀世音菩薩が、その瓔珞を二つに分け、片方を釈尊に、片方を多宝如来に献じたことを言い、

「譬喻品」で）釈尊の弟子で智慧第一の舍利弗が、師である釈尊が『法華経』を説く時、魔王にでもなったかと思うくらい

の未曾有の様子に、ただならぬ疑いを感じたことを述べ、

〔「從地涌出品」で〕等覺位にあつた弥勒菩薩が、地中から涌出した無量千万億の菩薩は、久遠よりこの方無量無辺の諸仏の所で菩薩道を実践したのだが、それはこの世間ではとても信じがたいことで、まるで二十五才の若者（釈尊）が百歳の老人（久遠実成の釈迦牟尼仏）を私の子だと言い、百歳の老人が二十五才の若者を私の父だと言っているようなものだ、と釈尊に言つた挿話を明かし、

〔「方便品」で〕『法華經』が説く唯一の真実の教え（法華一乘）こそ久遠実成の釈迦牟尼仏の本懷であると説き、この二つとない教法によつて、今、満足を得るのである、と述べ、

〔「譬喻品」で〕羊車（声聞）・鹿車（縁覺）が使えなくなつても、露牛（大白牛車、仏乘）は成仏が速疾であると言ひ、

〔「提婆達多品」で〕女人には五つの障礙があつて速やかに成仏できないのであるが、ある龍女が宝樹を仏に捧げたところ、仏はそれを受け取つた。それがすばやかだったので、龍女が智積菩薩・舍利弗に言うに、「私の成仏はもつと速いから見えてない」と。すると、龍女は男の姿となつて菩薩行を行い、南方の無垢世界で宝蓮華に坐し、サトリを得て十方の凡夫・衆生に『法華經』を説いた。すなわち象王と言われる釈尊が『法華經』の説法処に來た龍女（女人）を出迎え、そこで女人成仏が可能になつたことを説いている。

【原文】

一 種行處宿身心之室宅。十箇如是安止觀之宮殿。寂光如來融境智而知見心性。應化諸尊顧行願而分身隨相。寂而能照。照而常寂。似澄水之能鑒。如瑩金之影像。濕金即照影。照影即金水。即知境即般若般若即境。故云無境界。即此如實知自心名爲菩提。

【書き下し】

二種の行處は身心の室宅に宿り、十箇の如是は止觀の宮殿に安んず。寂光の如來は境智を融じて心性を知見し、應化の諸尊は行願を顧みて分身相に隨う。寂にして能く照らし、照らして常に寂たり。澄水の能く鑒かんがみるに似たり。瑩金の影像の如し。濕金即ち照影、照影即ち金水なり。即ち知りぬ、境は即ち般若、般若は即ち境なり。故に無境界と云う。即ち此れ實の如く自心を知る、名づけて菩提と爲す。

【註記】

- ①「二種の行處」『法華經』『安樂行品』に説かれる、「行處」（日常の行動規範）と「親近處」（身近に感じて守るべき軌範）。
- ②十箇の如是『法華經』『安樂行品』に説かれる有名な「十如是」。「如是相」「如是性」「如是体」「如是力」「如是作」「如是因」「如是縁」「如是果」「如是報」「如是本末究竟等」。
- ③止觀：「止（シヤマタ samatha）」はある対象に一点集中・心一境性。「觀（ヴィパシユヤナー vipassyanā）」はある対象を空の見地で達觀すること。
- ④行願：修行と誓願。
- ⑤分身：応化、化現。
- ⑥瑩金：みがいた金。
- ⑦實の如く自心を知る『大日經』『住心品』に説かれる、自心の本来清淨や本有菩提心を如実に知ること。

【私訳】

（『法華經』『安樂行品』に説かれる）「行處」と「親近處」の二種の「行處」（を守ること）は、わが家にいるように身心が安樂であり、（同じく「方便品」に説かれる）「十如是」は觀想行（止觀）の宮殿にいるように安らかである。（『見宝塔品』

に説かれる）常寂光淨土に住する多宝如来と釈迦如来は、認識対象と認識智が一如になった心の本性を知見し、久遠実成の釈迦牟尼仏の化現である諸尊は、多宝如来の自利利他（行願）を顧てその化現（分身）としての相好に従う。

（天台の止観行により）心は寂靜にしてよく智慧の光を照らし、照らしつとも常に寂靜である。澄む水が周囲の景色をよく映し出すのに似ているし、みがいた金に映る影像のようである。澄んだ水やみがいた金はすなわち映った影や照る光と一如であり、照る光や映った影はすなわちみがいた金や澄んだ水と一体である。ここで知られるべきことは、認識対象（境）はすなわち空（般若）であり、空（般若）はすなわち認識対象（境）である。だから無境界と言う。これは、『大日経』「住心品」が説く「実の如く自心を知る」であり、「菩提」のことである。

【原文】

故大日尊告秘密主云。秘密主。云何菩提。謂如實知自心。秘密主。是阿耨多羅三藐三菩提乃至彼法少分無有可得。何以故。虛空相是菩提。無知解者亦無開曉。何以故。菩提無相故。秘密主。諸法無相。謂虛空相。爾時金剛手復白佛言。世尊誰尋求一切智。誰爲菩提成正覺者。誰發起彼一切智智。佛言。秘密主自心尋求菩提及一切智。何以故。本性清淨故。心不在内不在外。及兩中間心不可得。秘密主。如來應正等覺非青非黃。非赤非白非紅非紫非水精色。非長非短非圓非方。非明非暗非男非女非不男女。秘密主。心非欲界同性非色界同性非無色界同性。非天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人趣同性。秘密主。心不住眼界不住耳鼻舌身意界。非見非顯現。何以故。虛空相心離諸分別無分別。所以者何。性同虛空即同於心。性同於心即同菩提。如是秘密主。心虛空界菩提三種無二。此等非爲根本方便波羅蜜滿足。是故秘密主。我說諸法如是。令彼諸菩薩衆菩提心清淨知識其心。秘密主。若族姓男族姓女。欲識知菩提當如是識知自心。秘密主。云何知自心。謂若分段或顯色或形色或境界若色若受想行識。若我若我所若能執若所執。若清淨若界若處。乃至一切分段中求不可得。秘密主。此菩薩淨菩提心門名初法明道。

【書き下し】

故に、大日尊、祕密主に告げて云わく、「祕密主。云何が菩提とならば、謂わく、實の如く自心を知る、なり。祕密主、是の阿耨多羅三藐三菩提は、乃至、彼の法として少分も得べきこと有ること無し。何を以つての故に。虚空の相は是れ菩提なり。

知解ちげの者も無く、亦た開曉かいぎょうも無し。何を以つての故に。菩提は無相なるが故に。祕密主、諸法は無相なり。謂わく、虚空

の相なり」と。爾の時、金剛手復た佛に白して言さく。「世尊、誰か一切智を尋求する。誰か菩提の爲に正覺を成ずる者。誰か彼の一切智智を發起す」と。佛の言わく、「祕密主、自心に菩提及び一切智を尋求す。何を以つての故に。本性は清淨なるが故に。心は内に在らず外に在らず。及び兩中間にも心は不可得なり。祕密主、如來の應正等覺は青に非ず、黄に非ず。赤に非ず、白に非ず、紅に非ず、紫に非ず、水精色に非ず。長に非ず、短に非ず、圓に非ず、方に非ず。明に非ず、暗に非ず、男に非ず、女に非ず、不男女に非ず。祕密主、心は欲界と同性に非ず、色界と同性に非ず、無色界と同性に非ず。天龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人の趣と同性に非ず。祕密主、心は眼界に住せず、耳・鼻・舌・身・意の界に住せず。見に非ず、顯現に非ず。何を以つての故に。虚空の相は心諸々の分別・無分別を離れたり。所以は何んとならば、性、虚空に同じなれば即ち心に同じなり。性、心に同じなれば即ち菩提に同じなり。是くの如く、祕密主、心と虚空界と菩提の三種は無二なり。此等は悲を根本と爲し、方便波羅蜜滿足す。是の故に、祕密主、我れ諸法を説くことは是くの如し。彼の諸々の菩薩衆をして菩提心清淨にして其の心を知識せしむ。祕密主、若し、族姓の男、族姓の女、菩提を識知せんと欲せば、當に是くの如く自心を識知すべし。祕密主、云何が自心を知るとなれば、謂わく、若しは分段、或いは顯色、或いは形色、或いは境界、若しは色、若しは受想行識、若しは我、若しは我所、若しは能執、若しは所執、若しは清淨、若しは界、若しは處、乃至一切の分段の中に求むるは不可得なり。祕密主、此れ菩薩の淨菩提心門にして初法明道と名づく」と。

【註記】

- ①法…ここは自性・属性と考えた。
- ②知解…言葉や思考力で覚ること。禪の知解。
- ③開曉…言葉や思考力を超えて覚ること。禪の見解。
- ④方便波羅蜜…「十波羅蜜」の一つ。
- ⑤分段…分段身。宿業によつて「三界」「六道」にさまよう身体。「入胎」「出生」「老」「病」など（松長有慶『訳注 秘藏宝鑰』）。
- ⑥初法明道…密教へはじめて明かされた道。

【私訳】

なので、『大日経』『住心品』で「大日如来が秘密主に言うには、「秘密主よ、菩提とは何かと言えば、すなわち「実の如く自心を知る」ことである。秘密主よ、この阿耨多羅三藐三菩提は、さらに、その属性がわずかで認識することができない。なぜかと言うと、虚空の姿・かたちが菩提であり、言葉や思考力で覚る人はいないし、言葉や思考力を超えて覚る人もない。なぜかと言うと、菩提は認識できる姿・かたちがないからである。秘密主よ、諸法も姿・かたちがない。いわば、虚空の姿・かたちである」と。その時、金剛手菩薩（秘密主）がまた大日如来（仏）に言うに、「世尊よ、誰が「一切智」を尋ね求めるのか。誰が菩提のために正等覚をめざす者なのか。誰がその一切智を自心に発起させるのか」と。大日如来（仏）が答えて言うに、「秘密主よ、（誰かではなく）自心に菩提及び一切智を尋求するのである。なぜなら、自心の本性は清浄だからである。自心は内なる「六根」にもなく、外なる「六境」にもないし、その中間にもない。秘密主よ、如来の正等覚は、青・黄・赤・白・紅・紫・水精色ではなく、長・短・圓・方でもなく、明・暗・男・女・不男女でもない。秘密主よ、心は欲界・色界・無色界と同じ本性ではなく、天龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人の類と同じ本性には

ない。秘密主よ、心は眼・耳・鼻・舌・身・意の識界にはなく、見えるでもなく、顯現するでもない。どうしてか。虚空の姿・かたちは心の諸々の分別・無分別から離れている。何んとなれば、本性が虚空に同じならば心と同じであり、本性が心と同じならば菩提と同じであるからである。このように、秘密主よ、心と虚空界と菩提の三種は無二体である。これらは、大悲を根本として、方便波羅蜜を成就する。であるから、秘密主よ、私が種々の教法を説くのは、このように、諸々の菩薩たちに菩提心は本来清浄であり、自心は相對二項を超えた空であることを知らしめるためである。秘密主よ、もし、族姓が男であれ女であれ、菩提を知りたいと願うなら、まさにこのように自心を（如実に）知るべきである。秘密主よ、どのようにして自心を知るかと言えば、すなわち、あるいは「入胎」「出生」「老」などの分段身、あるいは青や赤の顯色、あるいは方や円などの形色、あるいは「六境」の境界、あるいは色・受・想・行・識の「五蘊」、あるいは我・我所・能執・所執・清浄、あるいは「十八界」、あるいは「十二処」、さらには、（外道が説く）あらゆる分段身のなかに自心を求めるのは不可能である。秘密主よ、これが菩薩の浄菩提心の道であり、（密教への初めての）初法明道と言う」と。

【原文】

釋曰。無相虚空相及非青非黄等言。並是明法身眞如一道無爲之眞理。佛説此名初法明道。智度名入佛道初門。言佛道者指金剛界宮大曼荼羅佛。於諸顯教是究竟理智法身。望眞言門是則初門。大日尊及龍猛菩薩並是皆明説不須疑惑。又下文云。所謂空性離於根境無相無境界。越諸戲論等同虚空。離有爲無爲界離諸造作離眼耳鼻舌身意者。亦是明理法身。無畏三藏説。行者住此心時即知釋迦牟尼淨土不毀。見佛壽量長遠本地之身與上行等從地涌出諸菩薩同會一處。修對治道者雖迹隣補處然不識一人。是故此事名祕密。證此理佛亦名常寂光土毘盧遮那。

【書き下し】

釋して曰わく、「無相・虚空相及び非青・非黄等」を言うは、並びに是れ法身・眞如・一道無爲の眞理を明かす。佛此を説

いて初法明道と名づく。智度には入佛道初門と名づく。佛道と言うは金剛界宮大曼荼羅の佛を指す。諸々の顯教に於いては是れ究竟の理智法身なるも、眞言門に望めば是れ則ち初門なり。大日尊及び龍猛菩薩並びに是れ皆明らかに説く。疑惑すべからず。又、下文に云う「謂わゆる空性は、根境を離れ無相・無境界なり。諸々の戲論等を越え虚空に同じなり。有爲・無爲界を離れ、諸々の造作を離れ、眼・耳・鼻・舌・身・意を離れる」とは亦た是れ理法身を明かす。無畏三藏説かく、「行者この心に住する時、即ち釋迦牟尼の淨土毀せざるを知り、佛の壽量長遠本地の身、上行等の從地涌出の諸々の菩薩と同會一處なりと見る。對治道を修する者は、迹、補處に隣りあうと雖も、然れども一人をも識らず」と。是の故に、此の事祕密と名づく。此の理を證する佛を亦た、常寂光土の毘盧遮那と名づく。

【註記】

- ①智度…龍樹の『大智度論』。
- ②金剛界宮…金剛界の大日如来が住する法界宮。
- ③理智法身…顯教の理智一体の法身。
- ④大日尊及び龍猛菩薩…『大日經』「住心品」と『菩提心論』。
- ⑤有爲・無爲界…因縁によつて生滅する現象態（有爲法）と、因縁を超えた不生不滅の眞實態（無爲法）。
- ⑥理法身…一切皆空の眞實態としての法身。
- ⑦無畏三藏…『大日經』の漢訳者で、『大日經疏』の口述者の善無畏三藏。
- ⑧壽量長遠本地の身…『法華經』「如來壽量品」が説く、久遠実成の本地身、釈牟尼仏。
- ⑨上行等の從地涌出の諸々の菩薩…『法華經』「從地涌出品」が説く、上行菩薩など地涌の菩薩たち。
- ⑩對治道…煩惱を断ち解脱をめざす修行。
- ⑪補處…弥勒菩薩。

⑫常寂光土…久遠実成の釈迦牟尼仏（顕教の法身）が住する浄土。

【私訳】

（今の『大日経』の文を）解釈して言う、「無相・虚空相、及び非青に非ず黄に非ず」と言っているのは、（天台が言う）法身や真如や一道無為といった真理を説いたものであるが、仏はこれを説いて初法明道、つまり密教への初めて明かされた道と名づけたのである。『大智度論』では入仏道初門、すなわち仏道に入る最初の門と言っている。仏道と言うのは金剛界の法界宮の大曼荼羅の仏尊を指す。さまざまな顕教においては、これを究極の理智法身とするが、真言密教で見れば初歩の門である。大日如来及び龍猛菩薩がともにこれを明らかにしている。疑ったり戸惑ったりするべきでない。また、（今の『大日経』の文の）下の文に、「いわゆる空性は「六根」「六境」を離れていて、「六根」の姿・かたちも「六境」の認識対象もない。（だから）さまざまな言葉の概念化された仮構を越えていて虚空に等しい。因縁によって生滅する現象態（有為法）も因縁を超えた不生不滅の真実態（無為法）とも離れ、諸々の有為・無為（造作）も離れ、眼・耳・鼻・舌・身・意の「六根」を離れる」と言っているのは、理法身を明かしたものである。善無畏三藏が『大日経疏』の第二で言うに、「（顕教の）行者がこの初法明道の心に住する時、釈迦牟尼の浄土であるこの世界は壊れないことを知り、久遠の壽命を持つ本地身の久遠実成の釈迦牟尼仏は、上行菩薩など地涌の菩薩たちとともに同じ説法処にいるのを見る。「加行道」「無間道」「解脱道」「勝進道」の対治道を修行して煩惱を断じ解脱をめざす者は、あとで弥勒菩薩と隣り合うとはいえ、地湧菩薩の一人も知らなかった」と。であるから、この事を秘密と言ひ、この道理を覚った仏を常寂光土の毘盧遮那と言う」と。

【原文】

大隋天台山國清寺智者大師。依此門修正觀得法花三昧。即以法花中論智度爲所依構一家義。此乘之趣大體如此。

【書き下し】

大隋の天台山國清寺の智者大師、此の門に依つて止觀を修し法花三昧を得。即ち法花・中論・智度を以つて所依と爲し一家の義を構えたり。此の乗の趣、大體此くのごとし。

【註記】

①天台山國清寺…天台山は中国天台宗の中心拠点。國清寺はその中核寺院。日本からは、最澄をはじめ円珍・円載・重源・栄西・成尊らが留学している。

②智者大師…中国天台宗の教義を大成した智顗。慧文・慧思について第三祖とされるが実質的開祖。『法華玄義』『法華文句』『摩訶止觀』（三大部）ほか著書多数。天台大師・智者大師。

③法花三昧…法華三昧。天台宗で行われる四種三昧のうち、半行半坐三昧の法華三昧。『法華經』の読誦を中心に坐禪と行道を二十一日間くり返す修行。

【私訳】

隋の時代、天台山國清寺の智顗（智者大師）は、この法門によつて「止觀」行を修習し、「法華三昧」を成就した。すなわち、『法華經』・『中論』・『大智度論』を所依の經論とし、天台宗一宗の教義を大成した。この天台宗の趣旨のおおよそは以上の通りである。

【原文】

頌曰

前劫菩薩作戲論 此心正覺亦非眞

無爲無相一道淨 非有非無不二陳
心境絶泯常寂土 語言道斷遮那寶
身心也滅大虚等 隨類影現變化仁

【書き下し】

頌に曰わく、

前劫の菩薩は戲論を作す。此の心の正覺も亦た眞に非ず。
無爲無相にして一道淨く、非有非無にして不二陳せり。

心境絶泯して常寂の土なり。語言道斷するも遮那の寶なり。
身心また滅して大虚に等し。隨類影現して變化の仁なり。

【註記】

- ①前劫…前の第六・第七住心。
- ②無爲…法爾自然。さながら。
- ③無相…姿やかたちがない。
- ④一道…法華一道。
- ⑤不二…非有非無の不二中道。
- ⑥遮那…大日如来。
- ⑦變化の仁…凡夫・衆生の機根に応じて化導する變化身の慈悲。

【私訳】

頌に言うに、

第六住心や第七住心の菩薩は概念化された仮構の言葉を口にする。この第八住心のサトリも真のレベルではない。

（この住心は）法爾自然・姿なくかたちなく、法華一筋の清き道で、有でもなく無でもなく、有無不二の中道を説く。認識するもの（心）と認識されるもの（境）は絶えてなくなり、常寂光の浄土である。（しかし）言語道断はするも大日如来の外客である。

身心ともに我が滅して大虚空に等しい。（しかし）凡夫・衆生の機根に応じて姿を変え、変化身として化導の慈悲あり。

【原文】

問。如是一法界一道眞如之理爲究竟佛。龍猛菩薩説。一法界心非百非背千是。非中非中背天背天。演水之談足斷而止。審慮之量手亡而住。如是一心無明邊域非明分位

【書き下し】

問う。「是くの如くの一法界・一道・眞如の理を究竟の佛と爲すや」と。（答う）「龍猛菩薩の説かく、「一法界の心は百非に非ず千是に背く。中に非ず、中に非されば天に背く。天に背けば演水の談、足斷つて止まり、審慮の量、手亡くして住す。是くの如くの一心は無明の邊域にして明の分位に非ず。

【註記】

①中::「空・仮・中」の「中」。

②演水::押し広がる水の流れ。

③ 審慮：詳らかに考えること。

【私訳】

問う人が言うに、「このような、非有非無不二の一法界や法華一道などの真如の道理を、究極の久遠実成の釈迦牟尼仏（法身）とするのか」と。（答えて言うに）「龍猛菩薩が『釈摩訶衍論』の第五で説いている、「一法界の心は百回の否定でもなく千回の肯定でもない。中でもなく、中でなければ第一義（天）でもない。第一義（天）でなければ、流暢な水の流れのような談論も話の足が断たれて止まってしまい、詳らかな考えも思慮の手を失くして留まってしまふ。このような一道心は、まだ「無明」の辺域にあつて「明」のレベルではない」と。

■第九 極無自性心

【原文】

極無自性心。今釋此心有二種趣。一顯略趣。二祕密趣。顯略趣者。夫甚深也者麼嘯。峻高也者蘇迷。廣大也者虛空。久遠也者芥石。雖然芥石竭磷虛空可量。蘇迷十六萬麼嘯八億那。近而難見我心。細而遍空我佛。我佛難思議我心廣大。巧藝心迷擲竿。離律眼盲休見。禹名舌斷夸步足則。聲緣識不識薩埵智不知。奇哉之奇絕中之絕其只自心之佛歟。迷自心故六道之波鼓動。悟心原故一大之水澄一淨。澄淨之水影落萬像一心之佛靈知諸法。衆生迷此理輪轉不能絕。蒼生太狂醉自心不能覺。

【書き下し】

極無自性心とは、今此の心を釋するに二種の趣有り。一つは顯略趣、二つは祕密趣なり。顯略趣とは、夫れ、甚深なるは麼嘯、峻高なるは蘇迷、廣大なるは虛空、久遠なるは芥石けしやくなり。然りと雖も、芥石も竭きて磷ひすらぎ、虛空も量りぬべし。蘇迷は十六萬、麼嘯は八億那なり。近くして見ることに難きは我が心、細にして空に遍ずるは我が佛なり。我が佛は思議し難く、我が心は廣亦た大なり。巧・藝、心迷つて竿さんを擲なげ、離・律、眼盲にして見ることを休む。禹の名舌を斷ち、夸くわの歩みも足を削きる。聲・縁の識も識らず、薩埵の智も知らず。奇哉の奇、絶中の絶、其れ只だ自心の佛か。自心に迷うが故に六道の波鼓動し、心原を悟るが故に一大の水澄淨なり。澄淨の水は萬像を影落し、一心の佛は諸法かんちを靈知す。衆生は此の理に迷い、輪轉絶えること能わず、蒼生は太だ狂醉にして自心覺ること能わず。

【註記】

①麼嚧：「水」という意味のサンスクリット「varuṇa」の音訳。ここは深い海の水、の意。

②蘇迷：スメール（須弥山）。サンスクリット「Sumeru」の音訳。

③芥石：芥子劫と盤石劫。四方が一由旬の鉄城に芥子粒を満たし、百年に一度一粒取り除いて、全部なくなっても終わらないのが芥子劫。四十里四方の石を百年に一度柔らかい布で拭き、その石が全部磨滅しても終わらないのが盤石劫。

④十六萬：十六万由旬。

⑤八億那：八億由旬。那は「由旬」と漢訳されるサンスクリット「yojana ヨージャナ」の最後の「ナ」。

⑥巧：巧曆・巧歴。『莊子』「斉物論」に説かれる天文・曆法・算数に通じている。

⑦藝：衆藝。『華嚴經』「入法界品」に説かれる、善哉童子がたずねる三千四百人の善智衆藝童子。文字・算術・医薬・呪術。占術・地政学に長けている。

⑧竿：数える・計算。

⑨離：離朱。『淮南子』に説かれ、視力にすぐれ百歩向うの針の穴を見えると言う。

⑩律：釈尊の十大弟子の一人、天眼第一の阿那律（Anuruddha）。

⑪禹：『山海経』でさまざまなものに名前をつけたと言われる。

⑫夸：夸父。『列子』に説かれる健脚（松長有慶『訳注 秘蔵宝鑑』）。太陽を追いつこうと隅谷のあたりまで駆け、ノドが渇いて死んだという故事。

⑬一大：広大。

【私訳】

極無自性心と言うのは、この住心を解説するのに二通りの考え方があある。一つは顕教の考え方（顕略趣）、もう一つは密教考

え方（秘密趣）である。頭教の考え方を言えば、そもそも、極めて深いのは深い海の水であり、けわしく高いのはスメール（須弥山）であり、広大なのは虚空であり、永遠なのは芥子劫と盤石劫である。しかし、芥子劫や盤石劫も尽きたりうすくなったりし、虚空は量ることができる。スメールは十六萬、深い海の水は八億由旬である。（だが）近くにあつて見ることが難しいのは自分の心であり、細かくて虚空に遍満するのは自心のなかの仏である。自心のなかの仏は言葉や思考の及ぶものではなく、自心は広くて大きい。『莊子』『齊物論』に説かれ曆法に通じた巧曆や、『華嚴經』『入法界品』に説かれ算術にも長けた衆藝は、心迷って計り知ることを捨て、『淮南子』に説かれる、視力にすぐれ百歩向うの針の穴を見る離朱や、釈尊の弟子で天眼第一の阿那律は、（自慢の）眼も見えないのに等しく見ることをやめる。『山海經』で、さまざまなものに名前をつけた夏の禹王も名前を口にするのをやめ、『列子』が説く、太陽に追いつこうと駆け、ノドが渴いて死んだという夸父も、足を切られたように、自分の心は見るができない。声聞も縁覚も認識できず菩薩の智慧でもわからない。不思議のなかの不思議、絶のなかの絶、それが自心のなかの仏である。自心（の仏に気がつかず）に迷うから「六道」にさまよい、心の源底を悟るから心の広大な水は澄んで浄らかなのである。澄んで浄らかな水は万物の影を映し、心中の仏は諸法を鏡に映し出すようにして知る。衆生はこの道理を知らないで迷い「六道」に輪転してやまず、凡夫は酒に泥酔しているかのようにして自心を悟ることができない。

【原文】

大覺慈父指其歸路。歸路五百由旬。此心則都亭。都亭非常舍隨緣忽遷移。遷移無定處是故無自性。諸法無自性故去卑取尊。故有真如受熏之極唱。勝義無性之祕告。驚一道於彈指覺無爲於未極。等空之心於是始起。寂滅之果果還爲因。是因是心望前顯教極果。於後祕心初心。初發心時便成正覺宜其然也。初心之佛其德不思議。萬德始顯一心稍現。證此心時知三種世間即我身。覺十箇量等亦我心。

【書き下し】

大覺の慈父、其の歸路を指すとも、歸路は五百由旬、此の心は則ち都亭なり。都亭は常の舍に非ず、縁に随つて忽ち遷移す。遷移は定まれる處無し、是の故に無自性なり。諸法は無自性の故に、卑を去け尊を取る。故に眞如受熏の極唱、勝義無性の祕告有り。一道を彈指に驚かし、無爲を未極に覺る。等空の心、是に於いて始めて起り、寂滅の果、果還つて因と爲す。是の因、是の心、前の顯教に望むれば極果なり。後の祕心に於いては初心なり。初發心の時、便ち正覺を成ずること宜しく其の然りなり。初心の佛、其の徳不思議なり。萬徳始めて顯れ、一心稍現ややず。此の心を證する時、三種世間は即ち我身なるを知る。十箇の量等は亦た我心なるを覺る。

【註記】

①都亭…休憩所・宿屋。

②眞如受熏の極唱…

③勝義無性の祕告…唯識が説いた「三無性」の「勝義無自性」。「三性」の「円成実性」（無自性そのもの）への執着を離れること。祕告は秘密仏の告示。

④十箇の量…仏が正覺を得る時、十三種の徳を得る。十三を十に約す。

【私訳】

慈父のような大日如来が、自心の源底へ歸る路を指さしている。歸る路は五百由旬で、第八住心は途中の休憩場所である。休憩所はいつも住んでいる家ではなく、縁によつていろいろ移り変わる。移り変わるといふことは一定の決つた場所ということではない。であるから無自性・空である。諸法は無自性・空であるから、（この第九住心は）第八住心の法華一乗を超え、

第十住心の秘藏へと向かう。それ故（この住心では、その中間の）真如法界を説くのだが、「無明」の熏習を受けている顕教究極の談論とか、唯識が説く「三性」の「円成実性」（無自性そのもの）への執着を離れる「勝義無性」が、如来の告示として説かれる。法華一乗を指ではじいて驚覚し、無自性・空が究極の段階でないことを覚るのである。虚空に等しい広大な心がここではじめて起り、寂滅の果報がひるがえって（この住心の）因となる。この（住心の）因や心は、前の（第八住心のほか）顯教に比べれば究極の報果であるが、後の秘藏の（第十）住心においては初心である。（『華嚴經』の第八に）「初めて菩提心を発起した時、たちまちにサトリを成就する」とあるのは、まさにこのことである。初心時のサトリは、その仏徳が不思議で、万徳がはじめて顯現し、真如心がようやく現出する。この心を成就した時、「衆生世間」「器世間」「智正覺世間」の「三種世間」が我が身であることを知り、十三の仏徳を具す仏身もまた我が心であることを覚るのである。

【原文】

盧舍那佛始成道時第二七日與普賢等諸大菩薩等廣談此義。是即所謂花嚴經也。爾乃苞花藏以爲家範法界爲國。七處莊座八會開經。入此海印定觀法性圓融。照彼山王機示心佛不異。攝九世於剎那舒一念於多劫。一多相入理事相通。帝網譬其重重錠光喻其隱隱。遂使就覺母以發心歸普賢而證果。三生練行百城訪友一行行一切一斷斷一切。雖云初心成覺十信道圓。因果不異經五位而馳車。相性不殊渾十身而同歸。斯則花嚴三昧之大意。

【書き下し】

盧舍那佛、始め成道の時、第二七日に、普賢等の諸大菩薩等と廣く此の義を談ず。是れ即ち、謂わゆる花嚴經なり。爾れば乃ち、花藏を苞^かねて以って家と爲し法界を範めて國と爲す。七處に座を莊^{かさ}り八會に經を開く。此の海印定に入り法性の圓融

を觀じ、彼の山王せんおうの機を照らし心佛の異らざるを示す。九世くせを刹那に攝し一念を多劫に舒ぶ。一多相入し理事相通ず。帝網を其の重重に譬え錠光を其の隱隱に喩う。遂使ついんじて、覺母に就いて以つて發心し普賢に歸して果を證す。三生に練行し百城に友を訪う。一行に一切を行じ一斷に一切を斷ず。初心に成覺し十信に道の圓なるを云うと雖も、因果は異らず五位を経て車を馳せ、相と性は殊ならずして十身を渾ひたたげて同歸す。斯れ則ち花嚴三昧の大意なり。

【註記】

①盧舍那佛：『華嚴經』が説く「蓮華藏世界」の主尊。

②花嚴經：ブツダバドウラ（佛駄跋陀羅）訳、六十卷『華嚴經』。通称『六十華嚴』。

③花藏：蓮華藏世界。蓮華台藏世界海。汚泥（世間＝我執）のなかに根を張り、その汚泥に染まらず、清浄な花（サトリ）を咲かせる蓮華を内蔵している世界。万象が混じり合つて溶け合うも本来清浄で障礙のない海の世界。

④七處：七カ所の説法處。菩提樹下・普光法堂・給孤独園（人間界）、忉利天・夜摩天・兜率天・他化自在天（天界）。

⑤八會：八カ所の集会。寂滅道場會（菩提樹下）・普光法堂會・忉利天宫會・夜摩天宮會・兜率天宫會・他化自在天宫會・普光法堂會・逝多林會（給孤独園）。

⑥海印定：海印三昧。寂靜で円融無礙の深い仏慧の海に、一切法の真実が、印で押したように、ハッキリ映し出される觀法。

⑦山王：機根の最もすぐれた聴衆。

⑧九世：過去・現在・未來の三世の三倍。

⑨帝網：帝釈天宮に飾られた網。結び目に宝石がちりばめられている。オリジナルは、ヒンドウではインドラ天（仏教では

護法神の帝釈天)の網のような稲光。

⑩錠光・燃灯。

⑪覺母・文字菩薩。

⑫三生・『華嚴經』が説く修行の段階。「見聞位」「解行位」「証果位」。

⑬百城・善哉童子が訪ね歩く百十一の都城。

⑭五位・菩薩の修行位。「十信」「十住」「十行」「十廻向」「十地」。

⑮車・仏乗・華嚴。

⑯十身・菩薩の修行結果の十の仏身。

⑰花嚴三昧・華嚴世界の境地。

【私訳】

『華嚴經』が説く「蓮華藏世界」の教主盧舎那仏は、はじめてサトリを開いてから十四日目に、普賢菩薩など諸々の菩薩衆とともに、広く究極の無自性・空の意味を議論した。それが、いわゆる『華嚴經』(『六十華嚴』)である。すなわち、蓮華藏世界を家とし真如法界を国とした。七カ所の説法処に法座を設け、八カ所の集会で『華嚴經』を説いたのである。その時、仏は、寂靜で円融無礙の深い仏慧の海に、一切法の真実が、印で押したように、ハッキリ映し出される「海印三昧」に入つて事事無礙(法性)の円融を觀察し、機根のすぐれた聴衆に光を放射し、自心と仏が異らないことを示した。過去・現在・未来の三世が三重に重なる九世を一刹那に内包し、一念を永遠の時間に伸ばし広げ、一は多に、多は一に相入し、理と事は相通じて妨げがない。帝釈天宮の宝網を重々無礙の譬えとし、燃灯の火の光を隠々約々の喩えとする。最後(「入法界品」)には、善哉童子が文殊菩薩を師として発心し、最後に普賢菩薩に帰依をしてサトリを得る。(善哉童子は)『華嚴經』が言う「見聞位」「解行位」「証果位」の三段階の修行位それぞれに修練し、百十一の都城に善友を訪ねる。一つの行に一切の行を

兼ねて行じ、一断に一切の煩惱を含めて断じる。(華嚴の立場では) 初発心時にサトリを得、「十信」の最後に仏道を円満すると言うが、因と果は異らず、菩薩の修行過程の「五位」を経て仏乘(華嚴)の車を走らせ、諸法の姿・かたち(相)と無自性・空の本質(性)とは一如であり、菩薩の修行結果の十の仏身を集めて毘盧舍那仏に帰一する。以上、『華嚴経』が説く華嚴世界の境地の大要である。

【原文】

故大日如來告祕密主言。所謂空性離於根境無相無境界。越諸戲論等同虛空。離有爲無爲界離諸造作離眼耳鼻舌身意極無自性心生。善無畏三藏說。此極無自性心一句悉攝花嚴教盡。所以者何花嚴大意原始要終明眞如法界不守自性隨緣之義。

【書き下し】

故に大日如來、祕密主に告げて言わく、「謂わゆる空性は根境を離れて相も無く境界も無し。諸々の戲論等を越えて虚空に等同なり。有爲・無爲界を離れ、諸々の造作を離れ、眼・耳・鼻・舌・身・意を離れ、極無自性心生ず」と。善無畏三藏の説かく、「此の極無自性心、一句に悉く花嚴教を攝し盡す」と。所以は何んとなれば、花嚴の大意は始めを原ね、終りを要むる^{たずもと}に眞如法界・不守自性。隨緣の義を明かす。

【私訳】

故に、『大日経』「住心品」で「大日如來が祕密主に告げて言うに、「いわゆる空性は「六根」「六境」を離れていて、「六根」の姿・かたちも「六境」の認識対象もない。(だから)さまざま言葉の概念化された仮構を越えていて虚空に等しい。因縁によって生滅する現象態(有爲法)も因縁を超えた不生不滅の眞実態(無爲法)とも離れ、諸々の有爲・無爲(造作)をも

離れ、眼・耳・鼻・舌・身・意の「六根」を離れ、極無自性心生ず」と。善無畏三藏が（『大日経疏』に）説くには、「この極無自性心は、一句に悉く華嚴の教法をすべて含んでいる」と。どうしてかと言えば、『華嚴経』はおおよそ、諸法の始め（生）も終り（滅）も、そうなるべくしてそうなっている法爾自然にして法性の法界にあり、自性を立てない因縁所生・隨縁無作の道理を明かしているからである。

【原文】

杜順和上依此法門造五教花嚴三昧法界觀等。弟子智儼相續。智儼弟子法藏法師又廣五教作旨歸綱目及疏。即此花嚴宗之法門一一義章。

【書き下し】

杜順和上は此の法門に依つて、五教花嚴三昧・法界觀等を造り、弟子の智儼、相續し、智儼の弟子法藏法師、又五教を廣め、旨歸・綱目及び疏を作る。即ち此れ花嚴宗の法門の一一の義章なり。

【註記】

①杜順：中国華嚴宗第一祖。有教無觀と言われる華嚴宗で『修大方広仏華嚴法界觀門』は華嚴宗の觀法の根本論書。ほかに『華嚴五教止觀』があるが、杜順の名を使つて觀法を強調した疑いがある。

②五教：華嚴宗の教相判釈。「小乗」「大乘始教」「大乘終教」「円教」。

③智儼：中国華嚴宗第二祖。「十玄門」（「十玄縁起無礙法門」）など華嚴教学の事実上の始祖。『華嚴五教章』『華嚴経搜玄記』『華嚴一乘十玄門』。

④法藏：中国華嚴宗第三祖。「新十玄門」など華嚴教学の大成者。『華嚴五教章』『華嚴経探玄記』。

⑤義章…釈義と論章。

【私訳】

(中国華嚴宗の初祖) 杜順和上は、この『華嚴經』の法門に基づき『華嚴五教止觀』『修大方広華嚴法界觀門』などを著わし、弟子の第二祖智儼はこれを受け継ぎ、智儼の弟子で第三祖の法藏法師が五教の教法を広め、『華嚴經旨歸』『華嚴經文義綱目』及び『華嚴經』の註釈『華嚴經探玄記』を残した。これらは華嚴宗の法門のそれぞれの釈義・論章である。

【原文】

頌曰

風水龍王一法界	眞如生滅歸此岑	輪花能出體大等	器衆正覺極甚深
緣起十玄互主伴	吞流五教海印音	重重無礙喻帝網	隱隱圓融錠光心
花嚴三昧一切行	果會十尊諸剎臨	雖入此宮初發佛	五相成身可追尋

【書き下し】

頌に曰わく

風水・龍王は一法界なり。眞如・生滅は此の岑みねに歸す。輪花は能く體大等を出す。器・衆・正覺は極めて甚深なり。

緣起の十玄は互いに主伴たり。五教を吞流どんるするは海印の音なり。重重無礙は帝網に喩う。隱隱圓融は錠光の心なり。

花嚴三昧は一切の行なり。果會の十尊は諸剎に臨む。此の宮に入ると雖も初發の佛なり。五相成身は追って尋ぬべし。

【註記】

①風水・龍王…「出生光明」と「出生風水」という二龍。「出生光明」は淨光明を放ち、純淨の法を意味し、「出生風水」は頭から水を尾から風を起し、染淨の法を意味する（松長有慶『訳注 秘藏宝鑰』、『釈摩訶衍論』に説かれる）。

②輪花…輪多梨華という花。漢訳で明耀珠。鏡のようにあらゆるものを明淨に映し出す。本覺清淨の喩え。

③器・衆・正覺…「器世間」「衆生世間」「智正覺世間」の「三種世間」。

④十玄…智儼・法藏・澄觀が説く「十玄縁起門」。

⑤五相成身…『金剛頂經』に説かれる「五相成身」觀。「通達菩提心」「修菩提心」「成金剛心」「証金剛身」「仏身円満」。

【私訳】

頌に曰わく、

（頭から水を、尾から風を起す）「出生風水」龍王（染法）と（光明に依拠する）「出生光明」龍王（淨法）の二龍は、ともに一つの海に棲んでいて、染法・淨法妨げなく無尽一法界にある。真如門と生滅門も（妨げなく）一法界に帰一する。本覺清淨の輪多梨華という珠（法身）は、よく本体（体）・姿かたち（相）・はたらき（用）を生み出す。「器」「衆生」「智正覺」の「三種世間」（の仏身）は極めて甚深である。

「十玄縁起」はそれぞれ主であり従である。「五教」を飲み込む円教（華嚴）は海印三昧に聞こえる融通無礙の音である。重々無尽を帝釈天宮の飾り網の結び目にちりばめられた宝珠に喩え、隠々約々の円融は燃灯の光たる仏心である。

華嚴三昧は一行に一切の行を含む。サトリの境地の十身は諸々の仏国土に現われる。この極無自性心に入るといつても、初発心の仏である。（『金剛頂經』に説かれるように、一切如来の驚覺により）「五相成身」觀にこのあと進むべきである。

【原文】

經云。離有爲無爲界離諸造作離眼耳鼻舌身意極無自性心生。等虛空無邊一切佛法依此相續生祕密主如是初心佛說成佛因。於業煩惱解脫而業煩惱具依。

【書き下し】

經に云わく、「有爲・無爲界を離れ、諸造作を離れ、眼・耳・鼻・舌・身・意を離れ、極無自性心生ず。等虛空無邊の一切の佛法は、此れに依つて相續し生ず。祕密主、是くの如くの初心、佛は成佛の因と説く。業煩惱に於いて解脫するも業煩惱の具依なり。

【註記】

①經に云わく…『大日經』「住心品」。

②具依…抛り所。

【私訳】

『大日經』「住心品」に言うに、「因縁によつて生滅する現象態（有爲法）も因縁を超えた不生不滅の眞実態（無爲法）とも離れ、諸々の有爲・無爲（造作）をも離れ、眼・耳・鼻・舌・身・意の「六根」を離れて、極無自性心が生ず。虚空に等しく廣大無辺の一切の仏法（第十住心）は、これ（第八住心）から相次ぎ（第九住心が）生じる。祕密主よ、このような極無自性心は（密教では）初心であるが、（華嚴が言う）仏は成仏の因位だと言う。（しかし）宿業や煩惱から解脫しても宿業や煩惱が未だ抛り所となっている。

【原文】

金剛頂經説。薄伽梵大菩提心普賢大菩薩住一切如來心。時如來滿此佛世界猶如胡麻。爾時一切如來雲集。於一切義成就菩薩坐菩提場。往詣示現受用身。咸作是言。善男子云何證無上正等覺菩提。不知一切如來眞實忍諸苦行。時一切義成就菩薩。由一切如來警覺。即從阿娑婆那伽三摩地起。禮一切如來白言。世尊如來教示我。云何修行。云何是眞實。如是説已。一切如來異口同音告彼菩薩言。善男子當住觀察自心三摩地。以自性成就眞言自恣而誦。

【書き下し】

金剛頂經に説かく、「薄伽梵、大菩提心普賢大菩薩、一切如來の心に住す。時に如來、此の佛世界に滿つること猶し胡麻の如し。爾の時、一切如來雲集し、一切義成就菩薩の菩提場に坐すに於いて、往詣して受用身を示現し、咸く是の言を作す。「善男子よ、云何が無上正等覺菩提を證す。一切如來の眞實を知らざれば諸々の苦行を忍ぶや」。時に一切義成就菩薩、一切如來の警覺に由つて、即ち阿娑婆那伽三摩地あさばな從り起ち、一切如來に禮し白して言さく、「世尊如來よ、我に教示したまへ。云何が修行せんや。云何が是れ眞實なるや」。是くの如く説き已り、一切如來は異口同音に彼の菩薩に告げて言わく、「善男子よ、當に觀察自心三摩地に住し、自性成就の眞言を以つて自恣しいままに誦すべし」と。

【註記】

- ①大菩提心普賢大菩薩…ここは、大菩提心を具する堅固ですぐれた大菩薩・金剛薩埵ととつた。
- ②一切如來…複数の「一切如來」たち。大日如來の受用身。
- ③菩提場…菩提樹下の菩提道場。
- ④受用身…大日如來の受用身。傳統教學に自受用・他受用・變化の三身説がある（松長有慶『訳注 秘藏宝鑰』）。

⑤ 警覺…はつと気がつく。

⑥ 阿婆婆那伽三摩地…サンスクリットで「asvāsa-sphāṇakasamādhi」。無識身定。深い呼吸でほとんど無意識状態になった境地。

⑦ 觀察自心三摩地…自心を觀察する三摩地。「五相成身」觀の第一、通達菩提心。

⑧ 自性成就の眞言…唱えればその内容が具現する眞言。ここは、通達菩提心の眞言を指す。「オーム チッタ プラティヴェー
ダム カローミ Om citta-praṭivedhaṁ karomi」。「オーン、私は（本有の菩提）心に通達しています」

【私訳】

『金剛頂經』に説いて言うに、「大菩提心を具する堅固ですぐれた聖なる大菩薩、すなわち金剛薩埵は、一切如来たち（大日如来の受用身）の心に住していた。時に一切如来たちは、この仏世界に、胡麻がぎっしり詰まっているように遍満していた。その時、一切如来たちが雲集し、一切義成就菩薩（釈尊の密教名）が修行して坐している菩提樹下の菩提道場に往き、（大日如来の）受用身の姿となり、口をそろえて次のように言った。「善男子よ、どのようにして無上の正等覺というサトリを成就するのか。一切如来たちの眞実知らないでいろいろな苦行に耐えられるのか」と。そこで一切義成就菩薩は、一切如来たちの言葉にはつと気がつき、たちまち「無識身定」から出て、一切如来たちに礼拝し言った。「世尊如来よ、私に教示したまえ。どう修行すればよいか。どうしてこれが眞実なのか」と。このように言うとき、一切如来たちは異口同音にこの菩薩に言った。「善男子よ、まさに自心を觀察する三摩地（「五相成身」觀の第一、通達菩提心）に住し、唱えればその内容が具現する自性成就の眞言「オーム チッタ プラティヴェーダム カローミ」を何度でも唱えることである」と。

【原文】

守護國經云。爾時釋迦牟尼佛言。祕密主。我於無量無數劫中修集如是波羅蜜多。至最後身六年苦行。不得阿耨多羅三藐三菩提。毘盧遮那。坐道場時無量化佛猶如油麻遍滿虛空。諸佛同聲而告我言。善男子云何求成正覺。我白佛言。我是凡夫未知

求處。唯願慈悲爲我解說。是時佛同告我言。善男子諦聽當爲汝說。汝今宜應當於鼻端想月輪。於月輪中作唵字觀。作是觀已於後夜分得成阿耨多羅三藐三菩提。善男子十方世界如恒河沙三世諸佛。不於月輪作唵字觀得成佛者無有是處。何以故。唵字即是一切法門。亦是八萬四千法門寶炬關鎖。唵字即是毘盧遮那之眞身。唵字即是一切陀羅尼母。從此能生一切如來。從如來生一切菩薩。從菩薩生一切衆生。乃至生少分所有善根此。

【書き下し】

守護國經に云わく、「爾の時、釋迦牟尼佛言わく、「祕密主。我、無量無數の劫の中に於いて、是くの如くの波羅蜜多を修集し、最後の身に至つて六年苦行するも、阿耨多羅三藐三菩提を得て毘盧遮那に成らざり。道場に坐せし時、無量の化佛の猶し油麻の如く虚空に遍満し、諸佛は聲を同じくして我に告げて言わく。「善男子、云何が成等正覺を求むるや」と。我、佛に白して言わく、「我、是れ凡夫なり、未だ求むる處を知らず。唯、慈悲もて我が爲に解説せんことを願う」と。是の時、佛、同じく我に告げて言わく、「善男子、諦らかに聽け、當に汝の爲に説くべし。汝、今、宜しく當に鼻端に於いて月輪を想い、月輪の中に於いて唵字の觀を作すべし」と。是の觀を作し已つて、後夜分に於いて阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得。「善男子、十方世界の恒河沙の如き三世の諸佛、月輪に於いて唵字の觀を作さず、成佛を得るは是の處有ること無し。何を以つての故に。唵字は即ち是れ一切の法門なり。亦た是れ八萬四千の法門の寶炬關鎖なり。唵字は即ち是れ毘盧遮那の眞身なり。唵字は即ち是れ一切の陀羅尼の母なり。此れ従り能く一切如來を生ず。如來従り一切の菩薩を生ず。菩薩従り一切の衆生を生ず。乃至、少分所有の善根を生ず」といふ此れなり」と。

【註記】

①守護國經…『守護国界主陀羅尼經』『陀羅尼功德品』。

②波羅蜜多…「六波羅蜜」行の意にとった。

③最後の身…何度も生まれ変わる無量無数の劫での最後の生身。

④毘盧遮那…伝統教学には「大毘盧遮那」という解釈があるようだが（松長有慶『訳注 秘蔵宝鑰』）、ここは文脈からも顕教の「毘盧遮那仏」と考えた。

⑤道場…菩提樹下の「菩提道場」。

⑥油麻…護摩の一粒に油が充滿していること。

⑦月輪…満月のように円い月のイメージ。本有の浄菩提心の象徴。

⑧唵字…**ॐ**（オーン）字。「唵（おん）」[Om（オーン）]。ヒンドウ・仏教に共通の聖音「オーム」。

⑨後夜分…明け方。

⑩恒河沙…ガンジス河の砂数ほどの多さ。恒河はガンジス河。

⑪寶炬關鎖…宝庫のかがり火と扉を開く鍵。

⑫眞身…真実身。

【私訳】

『守護国主陀羅尼經』『陀羅尼功德品』に説くに、「その時、釈迦牟尼仏が言うに、「秘密主よ、私は永遠に近い長い時間をかけて、「六波羅蜜」行を修習して実績を集め、最後に生まれ替りの身になって六年間苦行したが、無上のサトリを得て毘盧遮那仏になれなかった。菩提道場に坐って瞑想行を行っていた時、数えきれないほどの応化仏が、まるで油が充滿した胡麻粒のように、虚空に満ちあふれ、諸仏は異口同音に私に言ったものである。「善男子よ、どのようにサトリを求めているのか」と。私は仏にこう言った。「私は、凡夫であり、まだ求める境地がどんなものかわからない。ただ、慈悲をもって私のために説いていただきたい」と。その時、仏は同様に私に言うに、「善男子よ、よく聴きなさい、まさにあなたのために（どのよう

に修行するべきか）説いて聞かせよう。あなたは、今、鼻端に月輪を想い浮かべ、その月輪の中に「𑖀（オーン）字」を觀想しなさい」と。（私は）その觀想を修し終ると、その夜の明ける頃に、無上のサトリを成就することができたのである。「善男子よ、十方世界の、ガンジス河の砂数のように、無数の三世の諸仏が、月輪の中に「𑖀（オーン）字」を觀想せず、成仏を得るなど、そんな処し方はない。どうしてかと言え、𑖀（オーン）字」は一切の法門であり、八万四千の法門の宝庫のかがり火であり扉を開く鍵である。（また）「𑖀（オーン）字」は毘盧遮那仏の眞実身である。（さらに）「𑖀（オーン）字」は一切の陀羅尼の母である。これから一切如来を生み出し、一切如来から一切の菩薩を生み出し、菩薩から一切の衆生を生み出し、はたまた、あらゆる善根を生み出す」と、こうであつた」と。

【原文】

龍猛菩提心論云。夫迷途之法從妄想生。乃至展轉成無量無邊煩惱輪迴六趣。若覺悟已妄想止除種種法滅。故無有自性。復次諸佛慈悲從眞起用救攝衆生。應病與藥施諸法門。隨其煩惱對治迷津。遇筏達於彼岸法已應捨無自性故。乃至妄若息時心源空寂。萬德斯具妙用無窮。但具此心者能轉法輪自他俱利。

【書き下し】

龍猛の菩提心論に云わく、「夫れ、迷途の法は妄想從り生ず。乃至、展轉して無量無邊の煩惱を成じ六趣に輪迴す。若し覺悟し已れば、妄想は止除し種種の法滅す。故に自性有ること無し。復た次に、諸佛の慈悲は眞從り用^{ゆう}を起し、衆生を救攝^{くしやう}す。

病に應じて藥を與え諸法門を施し、其の煩惱に隨つて迷津^{めいしん}を對治す。筏に遇つて彼岸に達し法已に捨つべし。自性無きが故に。乃至、妄の若し息む時は心源空寂なり。萬德を斯に具し妙用無窮なり。但し、此の心を具す者、能く法輪を轉じ自他俱

に利す」と。

【私訳】

龍猛の『菩提心論』に言うに、「そもそも、道に迷うモノゴトは我執に染まる迷妄の想いから生じる。かつて転変して広がり数えきれないほどの多くの煩悩を生み出して「六道」に輪廻する。もしサトリを得ていれば、妄想は抑滅され種種の迷いの事象は消滅する。だから、妄想自体に自性などないのである。また次に、諸仏の慈悲は真如がはたらきを発起して、衆生を救済し仏道に引き入れる。病に应じて薬を与えるように諸々の法門を説き、その煩悩に应じて我執の迷いに対処療法する。（「六波羅蜜」の）筏に出あつて彼岸に達すれば、教法は捨てるべきである。自性はないから。かつては、我執の迷妄がもしも止滅したら、自心の源底は虚空のように静寂であり、万徳を内包してそのはたらきは窮まりがない。ただし、この慈悲の心を具有する者だけが、よく教法を説き自他ともに利益する」と。

【原文】

又云。性淨本覺三世間中皆悉不離熏習彼三而爲一覺。莊嚴一大法身之果。是故名爲因熏習鏡。云何名爲三種世間。一者衆生世間二者器世間。三者智正覺世間。衆生世間者謂異生性界。器世間者謂所依止土。智正覺世間者謂佛菩薩。是名爲三。此中鏡者謂輪多梨花鏡。如取輪多梨花安置一處周集諸物。由此花熏一切諸物皆悉明淨。又明淨物花中現前皆悉無餘。一切諸物中彼花現前亦復無餘。因熏習鏡亦復如是。熏一切法爲清淨覺令悉平等

【書き下し】

又、云わく、「性淨本覺は三世間の中に皆悉く離れず、彼の三を熏習して一覺と爲し、一大法身の果を莊嚴す。是の故に、

名づけて因熏習鏡いんくんじゅうきょうと爲す。云何が名づけて三種世間と爲すや。一は衆生世間、二は器世間、三は智正覺世間なり。衆生世

間とは、謂わく異生性界いしょうじょうかいなり。器世間とは謂わく依止する所の土なり。智正覺世間とは謂わく佛・菩薩なり。是れを名づけ

て三と爲す。此の中の鏡とは謂わく輪多梨花鏡りんたりげきようなり。輪多梨花を取つて一處に安置し、周ねく諸物を集むるに、此の花の熏に由つて一切の諸物皆悉く明淨なり、又、明淨の物、花の中に現前して皆悉く餘り無く、一切の諸物の中に彼の花の現前して亦た復た餘り無きが如く、因熏習鏡も亦た復た是くの如し。一切の法を熏して清淨の覺りと爲し、悉く平等ならしむ。」と

【註記】

①性淨本覺…本性が無垢清淨である「本来成仏」。

②熏習…香しい香の薫りが衣服に沁み付くこと（移り香）。香しい香の薫りを唯識では「現行（法）」、衣服に沁み付いた薫りを「習氣（じつけ）」と言う。唯識では、行動や言葉や思考の「現行（法）」のすべてが根本意識（アーラヤ識）に「種子」や「習氣」を残すと言う。

③因熏習鏡…「三種世間」が互いにその薫りを熏じ合い、鏡のように互いを映し出す。

④異生性界…凡夫・衆生ほか生ある者すべての世界。

⑤輪多梨花鏡…漢訳で明耀珠。鏡のようにあらゆるものを明淨に映し出す輪多梨華という花、本覺清淨の喩え。

【私訳】

また、（同じ『釈摩訶衍論』）に言う、「本性が無垢清淨である「本来成仏」（本覺）は、「衆生」「器」「智正覺」の「三世間」

に共通で、この三つが互いにその薫りを薫じ合うように一つの覺りとし、一つの法身の仏徳（果）を飾っている。なので、これを因熏習鏡と言う。何を「三種世間」と言うかというと、一に衆生世間、二に器世間、三に智正覺世間と言ひ、衆生世間とは凡夫・衆生ほか生ある者すべての世界、器世間とはその異生類が生きている土地、智正覺世間とは仏や菩薩である。これらを三と言ひ、先ほどの鏡というのは輪多梨花鏡のことである。輪多梨花を取って一ヶ所に置き、周囲のいろいろな物を集めてそばに置くと、この花の薫りがあらゆるものに移ってことごとく明るく清らかになる。また、明るく清らか物は、鏡の如き花のなかに映し出されてことごとく明るく清らかになり、またあらゆるもののなかにその花が映し出され、明るく清らかになる。因熏習鏡もまたこれと同じである。一切諸法（の清浄な薫りを）を薫じて清浄な覺りとし、ことごとく平等にする」と。

【原文】

問。如是一心本法至極住心。龍猛菩薩說。三百一心法。一不能一假能入一。心不能心假能入心。實非我名而曰於我。亦非自唱而契於自。如我立名而非實我。如自得唱非實自。玄玄又玄遠遠又遠。如是勝處無明邊域非明分位

【書き下し】

問う。「是くの如くの一心の本法は至極の住心なるや」と。（答う）「龍猛菩薩の説かく、「三百一心の法は、一は一なること能わず、能入の一を假る。心は心なること能わず、能入の心を假る。實に我が名に非ざれども我に曰う。亦た自の唱に非ざれども自に契う。我の如く名を立つれども實の我に非ず。自の如く唱を得れども實の自に非ず。玄玄としてまた玄、遠遠としてまた遠なり。是くの如くの勝處しやうじよは無明の邊域にして明の分位に非らず」と。

【註記】

- ①三百一心：自己の「体」「相」「用」の三つを具えた唯一絶対の心（松長有慶『訳注 秘蔵宝鑑』）。
- ②玄玄としてまた玄：玄の又玄。奥深いこと。『老子』の有名句。
- ③勝處：すぐれた境地。

【私訳】

問う人が言うに、「このような唯一絶対の心（第九住心）の本覚の教法は究極の住心なのか」と。（答えて言うに）「龍猛菩薩の（『釈摩訶衍論』）に説く、「三百一心」の（真如世界の）教法は（言葉を超えているから、一というの（真如世界では）一ではありえず、仮に言葉で表現して一と言う。（同じく）心というの（心でありえず、仮に言葉で表現して心と言っているに過ぎない。（すなわち）我れという名ではないのに我れと言ひ、また、自分だと唱しているのではないのに自分だと決めつけている。我れのように名づけるがほんとうの我れではなく、自分のように唱するがほんとうの自分ではない。玄の又玄、遠の又遠で、奥が深くまたはるか遠い（教法である）。このようなすぐれた境地でも、まだ「無明」の辺域であつて、「明」の領域ではない」と。

■第十 秘密莊嚴心

【原文】

九種住心無自性	轉深轉妙皆是因	眞言密教法身說	祕密金剛最勝眞
五相五智法界體	四曼四印此心陳	刹塵渤駄吾心佛	海滴金蓮亦我身
一二字門含萬像	一刀金皆現神	萬德自性輪圓足	一生得證莊嚴仁

【書き下し】

九種の住心は自性無し、轉深轉妙にして皆是れ因なり。

眞言密教は法身の説、祕密金剛は最勝の眞なり。

五相・五智・法界體、四曼・四印は此の心に陳ず。

刹塵の渤駄は吾が心の佛、海滴の金蓮は亦た我が身なり。

一二字門は萬像を含み、一刀の刀金は皆神を現ず。

萬德の自性は輪圓にして足れり、一生に莊嚴の仁を證することを得べし。

【註記】

①無自性…それぞれ個別的な本性があるわけではない。

②法界體…「六大（体大）」。

③渤駄…仏陀。

④佛…次の文の「金蓮」からして仏部ととつた。

⑤金蓮…金剛部と蓮華部。

⑥字門…梵字・悉曇の母音と子音。

⑦刀金…剣や金剛杵。仏尊の象徴物。

⑧神…威神力。

⑨輪圓…輪円具足。マンドラ（輪円）のように一切の功德を円満に具足している。

⑩莊嚴の仁…秘密莊嚴の仏。

【私訳】

九種類の住心はそれぞれ個別的な本性があるわけではなく、段階的に深妙になり、各住心は次の住心の基になっている。

（第十住心の）真言密教は法身大日如來の説法であり、根機にない人には秘せられている堅固な教法で、最もすぐれた真実の教えである。

「五相成身」「五智」「法界の「六大体大」「四種曼荼羅」「四智印」は、この住心に明かされている。

国土を埋め尽くす微細な塵のように無数の仏部諸尊は、皆私の心のなかの仏たちであり、海の水を水滴にしたほどの無数の金剛部・蓮華部の諸尊はまた私の身体である（大曼荼羅）。

（「阿字」などの）一つ一つの字門はそれぞれの字義（万象）を含み（法曼荼羅）、一つ一つの剣や金剛杵など仏尊の象徴物はみな威神力を現わす（三昧耶曼荼羅）。

本来私たちに具わっている仏徳の本性は、マンドラ（輪円）のように一切の功德を円満に具足している。（であるから）一生のうちに秘密莊嚴の仏となることができるであろう。

【付記】

伝統教学によれば、「萬徳自性輪圓足」を「羯磨曼荼羅」と見る説があるようだが、「羯磨曼荼羅」は他の三マンドラに具

されていると見る説（松長有慶『訳注 秘藏宝鑰』）にここは従った。

【原文】

經云。復次祕密主。眞言門修行菩薩行諸菩薩。無量無數百千俱胝那𑖀多劫積集無量功德智慧。具修諸行無量智慧方便皆悉成就。解云。此歎初入眞言菩薩功德。又云。爾時毘盧遮那世尊。入於一切如來一體速疾力三昧。說自證法界體性三昧言。我覺本不生。出過語言道。諸過得解脫。遠離於因緣。知空等虛空。如實相智生。已離一切暗。第一實無垢。解云。此頌文約義廣言淳心深。非面難說。又有百字輪十二字等眞言觀法三摩地門。及金剛界三十七尊四智印三摩地。即是大日如來極祕密三昧。文廣不能具述

【書き下し】

經に云わく、「復た次に、祕密主、眞言門に菩薩行を修行する諸々の菩薩は、無量無數百千俱胝那𑖀多劫に積集する無量の功德・智慧と、具に諸行を修する無量の智慧方便と、皆悉く成就す」と。解して云わく、「此れ初めて眞言に入る菩薩の功德を歎ず」と。又、云わく、「爾の時、毘盧遮那世尊、一切如來一體速疾力三昧に入つて、自證の法界體性三昧を説いて言わく、「我れ、本不生を覺り、語言の道を出過し、諸過解脫することを得。因縁を遠離し、空の虚空に等しきを知り、如實相の智生ず。已に一切の暗を離るれば、第一實無垢なり」と。解して云わく、「此の頌は、文約にして義廣く、言浮んで心深し。面に非ずんば説き難し」と。又、百字輪・十二字等眞言・觀法・三摩地門、及び金剛界三十七尊・四種智印の三摩地有り。即ち是れ大日如來の極祕密三昧なり。文廣くして具に述ぶること能わず。

【註記】

①經に云わく…『大日經』「住心品」。

- ②無量無數百千俱胝那庾多劫・無量無數、百千俱胝、那庾多、劫。いずれも果てしなく長い時間、の意。
- ③一切如來一體速疾力三昧・一切如來たちと凡夫・衆生とが無二体であることが速疾に現前する觀想。
- ④法界體性三昧・法界の眞実そのものであることを觀想する觀法。
- ⑤本不生・阿字本不生。
- ⑥如實相・眞如・法性・法爾自然。
- ⑦百字輪・百字眞言法、百字の字輪觀。
- ⑧十二字・「阿字」ほか悉曇の母音十二字。
- ⑨四種智印・「大智印」「三昧耶智印」「法智印」「羯磨智印」。

【私訳】

『大日經』「住心品」に説くに、「また次に、秘密主よ、眞言の法門において菩薩行を行ずる菩薩たちは、果てしなく永遠に近い無時間的に長い時間に積み集めた数限りない功德や智慧と、現実にさまざまな修行を修習する、量ることができないほどの智慧と方便を、ことごとく成就している」と。解説して言うに、「これは初めて眞言の法門に入った菩薩の功德をほめ讃えたものである」と。また、『大日經』「具緣品」に説くに、「その時、毘盧遮那世尊（大日如來）が、一切如來一體速疾力三昧に入り、自ら成就した法界體性三昧を次のように説いた、「私は「本不生」を覺り、言語表現の世界を越え、諸々の過ちから解脱することができた。因と縁からも遠く離れ、無自性・空が、虚空のように、廣大無辺であることを知り、法爾自然の眞実相の智慧を得た。すでに一切の痴暗を離れているから、無上の第一であり、眞実であり、無垢清淨である」と。（これを）解説して言うに、「この頌は、文は簡略ながら意味は広く、言葉で軽々しく言えずその心は深い。直接面談して話すのであれば説くことは難しい。また（『大日經』に）、百字輪・十二字等の眞言や觀法といった三摩地法門があり、（『金剛頂經』には）金剛界の三十七尊や四智印といった三摩地法門がある。これらは大日如來の極秘の觀法である。經文が広範にわたる

ため具に述べるができない。

【原文】

又龍猛菩提心論云。第三言三摩地者。眞言行人如是觀已。云何能證無上菩提。當知法爾應住普賢大菩提心。一切衆生本有薩埵。爲貪瞋癡煩惱之所縛故。諸佛大悲以善巧智說此甚深祕密瑜伽。令修行者於內心中觀日月輪。由作此觀照見本心。湛然清淨猶如滿月光遍虛空無分別。亦名無覺了。亦名淨法界。亦名實相般若波羅蜜海。能含種種無量珍寶三摩地。猶滿月潔白分明。何者爲一切有情悉含普賢之心。我見自心形如月輪。何故以月輪爲喻。爲滿月圓明體則與菩提心相類。

【書き下し】

又、龍猛の菩提心論に云わく、「第三に三摩地と言うは、眞言行人是くの如く觀じ已つて、云何が能く無上菩提を證す。當に知るべし、法爾に普賢大菩提心に住すべし。一切の衆生は本有の薩埵なるも、貪瞋癡の煩惱の縛るる所の爲なるが故に、諸佛の大悲善巧智を以つて此の甚深祕密の瑜伽を説き、修行者をして內心の中に於いて日月輪を觀ぜしむ。此の觀を作すに由つて本心を照見するに、湛然として清淨なること、猶し滿月の光虛空に遍し分別無きが如し。亦是無覺了と名づけ、亦是淨法界と名づけ、亦是實相般若波羅蜜海と名づく。能く種種無量の珍寶三摩地を含むこと、猶し滿月の潔白分明なるが如し。

何となれば、爲く、一切の有情悉く普賢の心を含む。我れ、自心を見るに、形、月輪の如し。何が故にか月輪を以つて喩と爲す。爲く、滿月圓明の體は則ち菩提心と相類せり」と。

【註記】

①實相般若波羅蜜海…法界の眞実相を藏する智慧の海

②珍寶三摩地…珍しい宝を含む三摩地。

【私訳】

また、龍猛の『菩提心論』に説くに、「第三に、三摩地と言うのは、真言行者はこのように（勝義と行願の菩提心を）観想し終わって、どのようにして無上菩提を成就するのかと言えば、こう知るべきである。（すなわち）そうなるべくしてそうなるように普賢の大菩提心に住するがよい。一切の衆生は本来、普賢の大菩提心を持つ金剛薩埵であるが、貪・瞋・痴の煩悩に縛られているので、諸々の仏が大慈悲の利他方便の智慧を以ってこの奥深い祕密の瑜伽を説き、修行者の心の中に（菩提心の象徴である）日輪・月輪を觀想させるのである。この觀想を行じて心の本源を照らし見ると、静寂にして清浄なことが、ちやうど満月の光が虚空を明るく照らし、相対的な二律の分別がない光景のようである。あるいは覺るものもない境地（無覺了）と言い、あるいは無垢清浄の法界と言い、あるいは法界の眞実相を蔵する智慧の海（実相般若波羅蜜海）とも言う。よくさまざまで数えきれないほどの珍しい宝を含む三摩地は、まるで満月が白く清らかに光って種々のものをハッキリ映し出しているのに似ている。なぜならば、一切の有情はことごとく堅固な菩提心を具有していて、私も、自心を見ると、形が月輪と同じだからである。なぜ月輪を喩とすることかと言えば、満月の円く明るい在り様は菩提心と似ているからである。

【付記】

ここに説かれた『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』（通称『菩提心論』）の引用部分（「第三三摩地…與菩提心相類」）は、灌頂などの秘儀（事作法）に言及するので、伝統教学では「不読段」とする。

【原文】

凡月輪有一十六分。喻瑜伽中金剛薩埵至金剛拳有十六大菩薩者。於三十七尊中。五方佛位各表一智也。東方阿閼佛由成大圓

鏡智。亦名金剛智也。南方寶生佛由成平等性智。亦名灌頂智也。西方阿彌陀佛由成妙觀察智。亦名蓮花智。亦名轉法智。北方不空成就佛由成所作智。亦名羯磨智也。中方毘盧遮那佛由成法界智爲本。已上四佛智出生四波羅蜜菩薩焉。四菩薩即金寶法業也。三世一切諸賢聖生成養育之母。於是印成法界體性中流出四佛也。四方如來各攝四菩薩。東方阿閼佛攝四菩薩。金剛薩埵。金剛王。金剛愛。金剛善哉。爲四菩薩也。南方寶生佛攝四菩薩。金剛寶。金剛光。金剛幢。金剛笑。爲四菩薩也。西方阿彌陀佛攝四菩薩。金剛法。金剛利。金剛因。金剛語。爲四菩薩也。北方不空成就佛攝四菩薩。金剛業。金剛護。金剛牙。金剛拳。爲四菩薩也。四方佛各四菩薩爲十六大菩薩也。於三十七尊中。除五佛四波羅蜜及後四攝八供養。但取十六大菩薩爲四方佛所攝也。又摩訶般若經中。內空至無性自性空亦有十八義。

【書き下し】

凡そ月輪に一十六分有り。瑜伽の中の金剛薩埵より金剛拳に至るまで十六大菩薩有るに喩えるは、三十七尊の中に於いて、五方の佛位に各々一智を表わす。東方の阿閼佛は大圓鏡智を成ずるに由つて、亦た金剛智と名づく。南方の寶生佛は平等性智を成ずるに由つて、亦た灌頂智と名づく。西方の阿彌陀佛は妙觀察智を成ずるに由つて、亦た蓮花智と名づく。亦た轉法智と名づく。北方の不空成就佛は成所作智を成ずるに由つて、亦た羯磨智と名づく。中方の毘盧遮那佛は法界智を成ずるに由つて、本と爲す。已上の四佛智は四波羅蜜菩薩を出生す。四菩薩は即ち金・寶・法・業なり。三世一切諸賢聖生成養育の母なり。

是に於いて、印成せし法界體性の中より四佛を流出す。四方の如來に各々四菩薩を攝す。東方の阿閼佛に四菩薩を攝す。金剛薩埵・金剛王・金剛愛・金剛善哉を四菩薩と爲す。南方の寶生佛に四菩薩を攝す。金剛寶・金剛光・金剛幢・金剛笑を四菩薩と爲す。西方の阿彌陀佛に四菩薩を攝す。金剛法・金剛利・金剛因・金剛語を四菩薩と爲す。北方の不空成就佛に四菩薩を攝す。金剛業・金剛護・金剛牙・金剛拳を四菩薩と爲す。四方佛の各々四菩薩を十六大菩薩と爲す。三十七尊の中に於いて、五佛・四波羅蜜及び後の四攝・八供養を除いて、但だ十六大菩薩の四方佛の攝する所たるを取る。又、摩訶般若經の

中に、内空より無性自性空に至るまで亦た十六の義有り。

【註記】

①月輪に一十六分…月の満ち欠けに十六分あり、晦日の夜から満ちはじめて十六日目の十五日の夜に満月の月輪となる。

②瑜伽…不空訳『金剛頂瑜伽經』。

③十六大菩薩…金剛界の東西南北の四方の四仏に侍する各四菩薩。

④三十七尊…『金剛界三十七尊』。

⑤五方の佛位…中央の大日如来・東方の阿閼如来・南方の宝生如来・西方の阿弥陀如来・北方の不空成就如来の「五仏」。

⑥大圓鏡智…東方の阿閼如来の智慧。ほか南方の宝生如来の平等性智、西方の阿弥陀如来の妙觀察智、北方の不空成就如来の成所作智、中央の大日如来の法界体性智。「五智」。

⑦四波羅蜜菩薩…大日如来に近侍する金剛・宝・法・業の女菩薩。

⑧印成せし法界體性…根本印（智拳印）を結んでいる法界体性の太日如来。

⑨『摩訶般若經』…羅什訳『二万五千頌般若經』（通称『大品般若經』）、あるいは同じ羅什訳の『八千頌般若經』（通称『小品般若經』）。

【私訳】

およそ、月の満ち欠けに十六分あり、晦日の夜から満ちはじめて十六日目の十五日の夜に満月の月輪となる。『金剛頂瑜伽經』のなかで金剛薩埵から金剛拳に至る十六大菩薩に喩えられているけれども、（それを以下に説明すると、先ず）金剛界三十七尊中心の、五方の仏位（五仏の境地）にそれぞれ一つの智慧を持たせている。東方の阿閼如来は大圓鏡智を具有するので、金剛智とも言われ、南方の宝生如来は平等性智を具有するので、灌頂智とも言われ、西方の阿弥陀如来は妙觀察智を具有す

るから、蓮花智や轉法輪智とも言われ、北方の不空成就如来は成所作智を具有するから、羯磨智とも言われる。中央の毘盧遮那如来は法界体性智を具有するので、根本とされている。以上の四仏智は四波羅蜜菩薩を出生する。四菩薩とは、金剛・宝・法・業の波羅蜜菩薩で、三世の一切の賢聖を出生し養育する母である。ところで、（四波羅蜜菩薩を出生する）四仏は、根本印（智拳印）を結んでいる法界体性の大日如来から流出している。その四仏は各々四菩薩を侍らせている。東方の阿閼如来は、金剛薩埵・金剛王・金剛愛・金剛善哉の四菩薩を、南方の宝生如来には、金剛寶・金剛光・金剛幢・金剛笑の四菩薩を、西方の阿弥陀如来には金剛法・金剛利・金剛因・金剛語の四菩薩を、北方の不空成就如来には、金剛業・金剛護・金剛牙・金剛拳の四菩薩を侍らせ、四仏に各々四菩薩で十六大菩薩とする。三十七尊のなかで、五仏・四波羅蜜及び後の四摂菩薩・八供養菩薩を除いて、十六大菩薩を四仏が侍らせる所であることを考慮したのである。また、『摩訶般若經』のなかに、内空から無性自性空に至るまで十六の空が説かれている。

【原文】

一切有情於心質中有一分淨性衆行皆備。其體極微妙皎然明白。乃至輪迴六趣亦不變易。如月十六分之一。凡月其一分明相。若當合宿之際。但爲日光奪其明性。所以不現。後起月初日日漸加至十五日圓滿無礙。

【書き下し】

一切の有情の心質の中に於いて、一分の淨性有り、衆行皆備われり。其の體は極微妙にして皎然明白きようねんみょうびやくなり。乃至、六趣に輪迴するも亦た變易せず。月の十六分の一の如し。凡そ、月の其の一分の明相は、若し合宿の際に當らば、但だ日光の爲に其の明性を奪わる。所以に現われず。後に起つ月の初めより日に漸く加して、十五日に至り圓滿無礙なり。

【註記】

- ①心質…心の本質。
- ②一分…ごくわずか。
- ③衆行…さまざまない。
- ④皎然明白…明るく清く純白。
- ⑤月の十六分の一…有情の心の本質の明るさが、十六日かかって満月になるその十六分の一の明るさと同じだ、という意。
- ⑥合宿…太陽と月が重なり合うこと。

【私訳】

凡夫・衆生ほかあらゆる生ある者の心の本質は、ごくわずかながら本来清浄の本性を有していて、それに基づくさまざまな清い行いが備わっている。その本体は極めて微妙ながら明るく清く純白である。はたまた、「六道」に輪廻してもそれは変らない。月の十六分の一の如し。およそ、月のそのわずかな明るさは、月が太陽と重なり合っている時は、太陽の光によってその明るさが奪われてしまうので現われない。のちに、月の初めから毎日に次第に明るさを加え、十五日になると真ん丸で欠けたりするところなくなる。

【原文】

所以觀行者。初以阿字發起本心之中分明。只漸令潔白分明。證無生智。夫阿字者一切諸法本不生義准毘盧舍那經疏。釋阿字具有五義。一者阿字（短聲）是菩提心。二阿字（引聲）是菩提行。三暗字（短聲）是證菩提義。四惡字（短聲）是般涅槃義。五惡字（引聲）是具足方便智義。又將阿字配解法花經中開示悟入四字也。開字者開佛知見雙開菩提心。如初阿字。是菩提心義也。示字者示佛知見。如第二阿字。是菩提行義也。悟字者悟佛知見。如第三暗字。是證菩提義也。入字者入佛知見。如第四惡字。是般

涅槃義。總而言之具足成就第五惡字。是方便善巧智圓滿義也即讚阿字是菩提心義頌曰

八葉白蓮一肘間 炳現阿字素光色 禪智俱入金剛縛 召入如來寂靜智

夫會阿字者皆是決定觀之。當觀圓明淨識。若纔見者則名見眞勝義諦。若常見者則入菩薩初地。若轉漸增長則廓周法界量等虛空。卷舒自在當具一切智。

【書き下し】

所以に、觀行者は初め阿字を以つて本心の中の分明を發起し、只し漸く潔白分明ならしめ、無生の智を證す。夫れ、阿字とは、一切諸法本不生の義なり。（毘盧舍那經疏に准すれば、阿字を釋すに具に五義有り。一つには、阿字（短聲）は是れ菩提心なり。二つには、阿字（引聲）は是れ菩提行なり。三つには、暗字（短聲）は是れ證菩提の義なり。四つには、惡字（短聲）は是れ般涅槃の義なり。五つには、惡字（引聲）は是れ具足方便智の義なり。又、阿字を將つて法花經の中の開示悟入の四字に配解すれば、開の字は佛知見を開き雙びに菩提心を開く。初めの阿字の如し。是れ菩提心の義なり。示の字は佛知見を示す。第一の阿字の如し。是れ菩提心の義なり。悟の字は佛知見を悟る。第三の暗字の如し。是れ證菩提の義なり。入の字は佛知見に入る。第四の惡字の如し。是れ般涅槃の義なり。總じて之を言へば、具足成就の第五の惡字なり。是れ方便善巧智圓滿の義なり。）即ち、阿字は是れ菩提心の義なるを讚して頌に曰わく、

八葉白蓮一肘の間に、阿字素光の色を炳現す。禪智俱に金剛縛に入れ、如來の寂靜智を召入す。

夫れ、阿字に會う者は皆、是れ決定して之を觀ず。當に圓明の淨識を觀ずべし。若し纔に見れば則ち眞勝義諦を見ると名づけ、若し常に見れば則ち菩薩の初地に入る。若し轉た漸く増長すれば則ち廟法界に周く、量虛空に等し。卷舒自在にして當に一切智を具すべし。

【註記】

- ①本心…心の本源。
- ②無生…不生不滅。
- ③一切諸法本不生…あらゆるものはもともと因縁所生であつて、不生不滅の無自性・空である。
- ④毘盧舍那經疏…『大日經疏』。
- ⑤法花經…『法華經』『方便品』。
- ⑥開示悟入…『法華經』『方便品』に說かれる「四仏知見」。
- ⑦方便善巧智圓滿…利他方便（説法）の智慧が成就している。
- ⑧第四の惡字…**𠀤**（アク）字。
- ⑨第五の惡字…**𠀤**（アーク）字
- ⑩八葉白蓮…月輪のなかに映し出されている八葉の白蓮華。
- ⑪一肘の間…肘と中指の先までの長さ。約五十cm。この長さの意味について伝統教學に、「白蓮華と行者との距離」「月輪の大きさ」「白蓮華の大きさ」「阿闍梨に聞くこと（不答）」などの諸説がある（松長有慶『訳注 秘藏宝鑰』）。私は「白蓮華の大きさ」と解した。
- ⑫素光…白い光。

⑬ 禪智… 禪は右手の太指（親指）、智は左手の太指。

⑭ 金剛縛… 金剛合掌して外縛。

⑮ 菩薩の初地… 「十地」の初地「法雲地」。差別即平等・平等即差別の境地。

⑯ 舒… 伸縮。

【私訳】

その故に、観法を修する行者は、初めに「阿字」を観じて心の本源のわずかな明るさを呼び起し、だんだんそれを明るくして純白にし、不生不滅（無自性・空）の智慧を得るのである。そもそも「阿字」とは、「一切諸法本不生」の意味である。

『大日経疏』第十四によれば、「阿字」を解釈して五つの意味を説く。一つに「𑖀（ア）字」（短声）は菩提心、二つに「𑖀（アー）字」（引声）は菩提行、三つに「𑖀（アム）字」（短声）は証菩提、四つに「𑖀（アク）字」（短声）は般涅槃、五つに「𑖀（アーク）字」（引声）は具足方便智の意味である。また、「阿字」をもつて『法華経』「方便品」に説かれる「開・示・悟・入」の四字に当てはめれば、「開」の字は仏知見を開き、同時に菩提心を開く。初めの「ア字」と同様である。これは菩提心の意味である。「示」の字は仏知見を示す。第二の「アー字」と同じである。これは菩提行の意味である。「悟」の字は仏知見を悟る。第三の「アム字」と同じである。これは證菩提の意味である。「入」の字は仏知見に入る。第四の「アク字」と同じである。これは般涅槃の意味である。総じてこれらを言えば、具足成就の第五の「アーク字」である。これは方便善巧智圓滿の意味である。すなわち、「阿字」は菩提心の意味であることを讃嘆して、頌に言う。

八葉の白蓮華の直径、肘から中指の先までの長さ約五十cmの間に、「阿字」が白い光を明るく放つ（のを観想すべし）。金剛縛（外縛）に右手の太指（親指）と左手の太指を入れ、如來の寂靜智を（我が心に）召き入れる（べし）。

そもそも、「阿字」の意味に通じる人はみな、決ってこの観想を修する。まさに円く明るい月輪のなかの清らかな「阿字」に一点集中して観想するべきである。もしわずかにでも「阿字」と無二体になれば、真の勝義諦を観得したことに等しく、もしずっと「阿字」と無二体になれば、菩薩の「十地」の初地、すなわち差別即平等・平等即差別の「法雲地」に入る。もしもっと進んで「阿字」との無二体が増長すれば、(行者の心は)広く法界に遍満し、その量は虚空を満たすほどになる。伸縮自在にしてまさに一切智を具すことになる。

【原文】

凡修習瑜伽觀行人。當須具修三密行證悟五相成身義也。所言三密者。一身密者。如結契印召請聖衆是也。二語密者如密誦眞言令文句了了分明無謬誤也。三意密者如住瑜伽相應白淨月圓滿觀菩提心也。次明五相成身者。一是通達心。二是成菩提心。三是金剛心。四是金剛身。五是證無上菩提獲金剛堅固身也。然此五相具備方成本尊身也。

【書き下し】

凡そ、瑜伽觀行を修習する人は、當に須く具に三密行を修し五相成身の義を證悟すべし。言う所の三密とは、一に身密とは、契印を結んで聖衆を召請するが如き、是れなり。二に語密とは、密かに眞言を誦して文句を了了分明ならしめ、謬誤無きが如し。三に意密とは、瑜伽に住して白淨月の圓滿に相應し、菩提心を觀じるが如きなり。次に五相成身を明さば、一に是れ通達心、二に是れ成菩提心、三に是れ金剛心、四に是れ金剛身、五に是れ無上菩提を證し金剛堅固の身を獲るなり。然して此の五相具に備わらば、方に本尊の身を成ず。

【註記】

①三密行…手に印を結び、口に眞言を唱え、心に仏尊を觀じ、仏尊の身・口・意と二体になる觀法。

②五相成身…「五相成身觀」。『初会金剛頂經』『金剛界品』に説かれる五段階の心品転昇による「即身成仏」の觀法。「通達菩提心」「修菩提心」「成金剛心」「証金剛身」「仏身円満」。

③本尊…大日如来。

【私訳】

およそ、「止觀」（瑜伽行）による觀法を修習する人は、まさにすべからく、如法に「三密行」を修習し、「五相成身」の意味を悟るべきである。今、言「三密」とは、一に身密で、（仏・菩薩などを象徴する）印を結んで仏・菩薩などをわが身のなかに召き入れること、これである。二に語密で、ひそかに（仏・菩薩などの）真言を誦唱して、真言の文や句を明了にし誤りなきように唱えること。三に意密で、「止觀」の「觀」において白淨の「月輪」が円くて欠けるところがないことに応じて、白淨菩提心を觀じることである。次に、「五相成身」觀を説けば、一に通達菩提心、二に修菩提心、三に成金剛心、四に証金剛身、五に無上のサトリを得て金剛石のように堅固な（一切如来たちと同じ）仏身を成就することである。然るに、これら五段階を一つ一つ成就すれば、本尊（大日如来）の仏身となる。

【付記】

「五相成身觀」の實際を付記しておく。

典拠は『初会金剛頂經』（サンスクリット原典『*Sarva-tathāgata-tva-saṅgrahaṃ nama mahāyāna-sūtram*』（一切如来の眞実の撰集と名づけられた大乘の經典）、漢訳…不空訳『金剛頂一切如来眞実撰大乘現証大教王經』（『眞実撰經』）の「金剛界品」。

以下、サンスクリット原文の私訳であるが、原文は堀内寛仁博士の『梵藏漢対照 初會金剛頂經の研究』（梵本校訂篇（上））を参照させていただいた。

● 第一の段階、通達菩提心

そこで、一切義成就菩薩（釈尊の密教における菩薩名）というすぐれた行者は、一切の如来たちによって驚覚され、驚いて、その不可動三昧から出て、一切の如来たちに頂礼し、呼びかけて、次のように言った。

尊き如来たちよ、お教えください、私はどのようにすれば、どのような真実に通達するのでしょうか。

そのように言われて、一切の如来たちは、その菩薩に口々に次のように言った。

通達しなさい、善男子よ、自心を観察する三昧によって、本質的に成就している（＝唱えればその唱えたことが成就する）真言を、思う（回数）だけ読誦することによって、と。

「オーム チッタ・プラティヴェーダム カローミ」

（オーム、私は（自）心（の本源）に通達することに努めます）。

すると、（その）菩薩は、一切の如来たちに次のように言った。

私へのご教示がありました。尊き如来たちよ、私は自分の心臓（の上）に月輪の姿形を見ています。

一切の如来たちが言った。

善男子よ、その心月輪は本来的に明浄である。それはあたかも浄化されたように、そのように（明浄なものとして）あるのである。白い衣服を赤で染めても、（もともとは白いのと）同じなのである、と。

●第二の段階、修菩提心

そこで、一切の如来たちは、心が本質的に明浄である智慧を盛んにさせるために、再びその菩薩に、

「オーム ボーディ・チッタム ウットウ パーダヤーミ」

（オーム、私は菩提心を発起します）。

という、本質的に成就しているこの真言によつて、（本来自心のなかに具えている）菩提心を発起せしめた。

すると、菩薩は再び、一切の如来たちの教えによつて、菩提心を発起して言った、

この月輪の姿・かたちをしたものを、私は月輪そのものと見ています。

●第三の段階、成金剛心

一切の如来たちが言った。

あなたの（この菩提心）は、一切如来の心である。普賢（菩薩の大菩提）心の発起であり、

（あなたは）敬礼されるものとなった。それ（大菩提心）はよく通達されなければならない。（そこで）一切如来の普賢心の発起を堅固なものにするために、この真言によって、自分の心の月輪のなかに金剛（杵）の影像を思念せよ。

「オーム ティシユタ ヴァジュラ」

（オーム、立て、金剛（杵）よ）。

菩薩は言った。

尊き如来たちよ、私は（心の）月輪のなかに金剛（杵）を見ています。

● 第四の段階、証金剛身

一切の如来たちが言った。

あなたは、この真言によって、一切如来の普賢心の金剛（杵）を堅固にしなさい。

「オーム ヴァジュラ・アートマコーアハム」

（オーム、私は金剛（杵）を本性としています）。

その時、一切虚空界に遍満するほどの、一切如来の身・語・心（三密）の金剛界は、一切の如来たちの加持によって、

その薩埵（菩薩）金剛（杵）のなかに入った。そこで、一切の如来たちによって、かの、尊き一切義成就大菩薩は、「金剛界なり」と金剛名灌頂によって灌頂された。

●第五の段階、仏身円満

そこで、金剛界大菩薩（一切義成就菩薩）は、その一切の如来たちに次のように言った。

尊き如来たちよ、私は私自身が一切の如来たちの身体であると見ています。

一切の如来たちが言った。

然らば、実にすぐれた行者よ、本質的に成就しているこの真言を、思う（回数）だけ誦すことによって、あらゆる最勝の姿形を具備し、仏の影像を有する薩埵（菩薩）の金剛（杵）を、自身であると観想しなさい。

「オームヤターサルヴァ・タターガタースタターアハム」

（オーム、一切の如来たちがあるように、そのように私はある）。

すると、このように言われて、金剛界大菩薩（一切義成就菩薩）は、自身が如来であると現等覺して、彼ら一切の如来たちに頂礼し、次のように言った。

私を加持してください、尊き如来たちよ、そしてこの現等覺を堅固ならしめてください。

そのように言われて、一切の如来たちは金剛界如来（一切義成就菩薩）のその薩埵（菩薩）の金剛（杵）に入った。

その時、尊き金剛界如来（一切義成就菩薩）は、その刹那に、一切の如来たちと平等性の智慧によって現等覺した、一切の如来たちと金剛（堅固）において平等な智慧によって、印契の秘密の三昧耶に証入した、一切の如来たちと法において平等な智慧に通達することによって、自性において清浄ならしめられた、一切の如来たちとすべてに完全に平等なことによって、本性清浄な智慧の源となった。如来・阿羅漢・正等覺者となった。

【原文】

其圓明普賢身也。亦是普賢心也。與十方諸佛同之。亦乃三世修行證有前後。及達悟已無去來今。凡人心如合蓮華佛心如滿月。此觀若成。十方國土若淨若穢。六道含識三乘行位。及三世國土成壞衆生業差別。菩薩因地行相三世諸佛悉於中現。證本尊身滿足普賢一切行願。故大毘盧舍那經云。如是眞實心故佛所宣說。

【書き下し】

其の圓明は普賢の身なり。亦た是れ普賢の心なり。十方の諸佛は之に同じ。亦た乃ち、三世の修行は證に前後有れども達悟に及び已って去來すること今無し。凡人の心は合蓮華の如く、佛心は滿月の如し。此の觀、若し成ずれば、十方の國土の、若しは淨、若しは穢、六道の含識、三乗の行位、及び三世の國土の成壞、衆生の業の差別、菩薩の因地の行相、三世の諸佛悉く中に於いて現じ、本尊の身を證して普賢の一切の行願を滿足す。故に大毘盧舍那經に云わく、「是くの如くの眞實心は故佛の宣說する所なり」と。

【註記】

- ①普賢…伝統教学にはこれを「大日如来」とする解釈があるようだが、私は「堅固な菩提心」の意味で普賢菩薩ととった。
- ②合蓮華…つぼみの蓮華。未敷蓮華。
- ③含識…衆生・有情。
- ④因地…因は因位、すなわち修行位。
- ⑤行願…普賢行願。『華嚴經』『入法界品』によく説かれる、普賢菩薩の利他行と利他の誓願。
- ⑥大毘盧舍那經…『大日經』『成就悉地品』。
- ⑦眞實心…菩提心。

【私訳】

その「月輪」「白淨菩提心」が円く欠けるところがないことは普賢菩薩の仏身であり、また普賢菩薩の心である。十方の諸仏と同じである。すなわち、過去・現在・未来（三世）にわたる修行は、サトリに至るのに速いとか遅いとかがあるが、サトリに達したあとは時が去来することはない。凡人の心はつぼみの蓮華であり、仏心は満月と同じである。この「五相成身」觀をもし成就すれば、十方の国土の淨・不淨、「六道」に輪廻する凡夫・衆生ほか、声聞・縁覺・菩薩（三乗）の行位、及び過去・現在・未来（三世）の国土の安否、衆生の宿業の差別、菩薩の修行位の在り様など、三世の諸仏はことごとくそれらを「月輪」のなかに現わし、本尊大日如来の仏身を成就して普賢菩薩のあらゆる行願を満足させる。その故に、『大日經』『成就悉地品』に説くに、「このような眞實心（菩提心）は古くから諸仏が説いてきた所である」と。

【原文】

問。前言二乘之人有法執故不得成佛。今復令修菩提心三摩地者云何差別。答。二乘之人有法執故久久證理沈空滯寂。限以劫數然發大心。又乘散善門中經無數劫。是故足可厭離不可依止。今眞言行人既破人法上執。雖能正見眞實之智。或爲無始間隔

未能證於如來一切智智。故欲求妙道修持次第從凡入佛位者。即此三摩地者能達諸佛自性悟諸佛法身。證法界體性智成大毘盧舍那佛自性身受用身變化身等流身。爲行人未證故理宜修之。故大毘盧舍那經云。悉地從心生。如金剛頂瑜伽經說。一切義成就菩薩初坐金剛座取證無上道。遂蒙諸佛授此心地然能證果。凡今之人若心決定如教修行。不起于座三摩地現前。應是成就本尊之身。故大毘盧舍那經供養法次第云。若無勢力廣增益住法但觀菩提心。佛說此中具萬行滿足淨白純淨法也。

【書き下し】

問う、「前に、二乗の人は法執有るが故に成佛を得ずと言えり。今、復た、菩提心を修せしむる三摩地とは云何が差別なるや」と。答う、「二乗の人は法執有るが故に久久に理を證し、空に沈み寂に滯う。限るに劫數を以つてし、然して大心を發す。又、散善門の中に乘じて無數劫を経る。是の故に、厭離すべきに足り、依止すべからず。今、眞言行人は既に人法の上執を破し、能く眞實の智を正しく見ると雖も、或いは無始の間隔の爲に、未だ如來の一切智智を證すること能わず。故に、妙道を欲求し次第を修持して、凡從り佛位に入る者なり。即ち此の三摩地は、能く諸佛の自性に達し諸佛の法身を悟り、法界體性智を證し、大毘盧舍那佛の自性身・受用身・變化身・等流身を成ず。爲く、行人未だ證せざるが故に、理宜しく之を修すべし。故に、大毘盧舍那經に云わく、「悉地心從り生ず」と。金剛頂瑜伽經に説くが如し。「一切義成就菩薩、初めて金剛座に坐し、無上道を取證し、遂に諸佛の此の心地を授くを蒙つて、然して能く果を證す」と。凡そ、今の人、若し心決定して教の如く修行すれば、座を起たずして三摩地現前し、是に本尊の身を成就すべし。故に大毘盧舍那經の供養法次第に云わく、「若し、勢力の廣く増益すること無ければ、法に住して但だ菩提心を觀すべし。佛此の中に萬行を具して、淨白純淨の法を満足すと説く」と。

【註記】

①法執…人我法我のうち、人我は因縁所生の空とし、法我に執着する我執。声聞・緣覺のレベル。

②菩提心を修せしむる三摩地…「五相成身」觀。

③大心…大乘に向う心。

④散善門…散漫な心のままに修行すること。その反対が定善門。

⑤依止…拠り所とする、頼りにする。

⑥無始の間隔…他の参考資料により、「始めのない太古からの仏と修行者の隔たり」とした。

⑦妙道…すぐれた成就法。

⑧次第…觀法の修習次第。ここは「五相成身」の次第。

⑨大毘盧舍那經…『大日經』「悉地出現品」。

⑩一切義成就菩薩…修行の釈迦（シッタールタ）の密教名。「成就」＝「シッダ」、「（一切）義」＝「アルタ」。

⑪大毘盧舍那經の供養法次第…『大日經』「供養法次第法」。

【私訳】

問う人が言うに、「以前 声聞・縁覺の二乗の人は、法我の我執があるため成仏することができなと言っていた。今、本有の堅固な「菩提心」をさらに堅固にする「五相成身」觀など「有相」の三摩地を説くが、法我の「有相」とどうちがうのか」と。答えて言うに、「声聞・縁覺の人は、法我の我執があるため、長い時間かかって無我の道理を覺るのではあるが、今度は無我・空に浸って寂靜の境地に滞ったきりで、果てしない長い時間を費やし、やっと大乘に向う心を發起する。また、散漫な心のままに修行していて、数えきれないほどの長い長い時間がかかる。だから、二乗は厭離すべきであり、依止すべきではないのである。ひるがえって、真言行者は、すでに人我法我の我執を破摧し、よく真実の智慧を正しく見極めるのであるが、あるいは始めのない太古からの仏と修行者の隔たりの故に、まだ如來の一切智慧を成就することができない。なので、すぐれた成就法を求め、「五相成身」の次第を修習して、凡夫から仏位に入るのである。すなわち、この「五相成身」の觀法

は、よく諸仏の本性に通じ、諸仏のサトリの身体（法身）を悟り、法界体性智を覚り、法身大日如來の自性身・受用身・變化身・等流身という四種の仏身を成就する。まだサトリを得ていない真言行者は、この道理をよく心して「五相成身」觀を修習しなければならない。故に、『大日經』「悉地出現品」に「修行の成就は本有の菩提心から生じる」と説かれている。また、『金剛頂瑜伽經』には「二切義成就菩薩、初めて菩提道場の金剛座に坐し、無上のサトリを開く觀法を會得し、ついに諸仏（一切如來たち）がこの「五相成身」の境地を授けてくれ、よく果位を成就した」と説かれている。およそ、今の人も、もし心を決めて教軌の通りに修習すれば、座を起つことなく「五相成身」觀が現前し、本尊大日如來の仏身を成就するのである。故に、『大日經』の「供養法次第法」に説かれている。「もし、真言行者の利他の力が広く世間を益することがなければ、觀法に専念して本有の菩提心を觀じるべきである。仏はこの觀法のなかにあらゆる修行を内包し、純白清淨の觀法を実現すると説く」と。

【原文】

此菩提心能包藏一切諸佛功德法故。若修證出現則爲一切導師。若歸本則是密嚴國土。不起于座能成一切佛事。讚菩提心曰。
若人求佛慧 通達菩提心 父母所生身 速證大覺位

【書き下し】

此の菩提心は、能く一切諸佛の功德の法を包藏するが故に、若し修證し出現すれば則ち一切の導師と爲る。若し本に歸すれば則ち是れ密嚴國土なり。座を起たずして能く一切の佛事を成ず。菩提心を讚じて曰わく、

若し人佛慧を求めて 菩提心に通達すれば、父母所生の身に 速やかに大覺位を證す。

【註記】

- ①密嚴國土…大日如來の加持力が遍滿している淨土。
- ②佛事…慈悲利他。衆生化導。
- ③佛慧…仏智・一切智。

【私訳】

この「菩提心」は、よく一切諸佛の仏徳の教法を内包しているから、もし、（この「五相成身」觀を）修習して成就し、その成就が現実のものとなれば、一切の觀法の指南者となる。もし、その成就を本に帰せば、一切如來たち金剛身の密嚴國土である。座を起つことなくよくあらゆる利他行を成就する。菩提心を讃嘆して言うに、

もし、人あつて、仏智を求めて「菩提心」に通達すれば、父母から生れたこの生身に、速やかに無上のサトリの境地が現前する。

【原文】

問。已聞頌詞請說其義。答。眞言經法一一聲字一一言名。一句義一一成立。各具無邊義歷劫難窮盡。又一字具二義。所謂聲字實相。又具二義字相字義是。一句具淺略深祕二義。帥爾難談。若如實說者小機致疑生謗。定爲一闡提無間之人。是故應化如來祕而不談傳法菩薩置而不論。意在此乎。故金剛頂經說。此毘盧舍那三摩地法。向未灌頂者不得說一字。若本尊儀軌眞言。縱令雖同法行者不得輒說。若說者現前中天招殃。後墮無間獄云云

【書き下し】

問う、「已に頌の詞を聞く。其の義をとくことを請う」と。答う、「眞言經法は一一の聲字、一一の言名、一一の句義、一一の成立に、各々無邊の義を具す。劫を歷るも窮盡し難し。又、一一の字に三義を具す。謂わゆる、聲字實相なり。又、二義を具す。字相・字義。是れなり。一一の句に淺略・深祕の二義を具す。帥爾しめつじに談じ難し。若し實の如く説かば、小機は疑いを致して謗を生じ、定んで「闡提、無間の人と爲らん。是の故に、應化の如來は祕して談ぜず、傳法の菩薩は置いて論ぜず。意、此れに在り。故に金剛頂經に説く、「此の毘盧舍那三摩地の法は、未灌頂の者に向つて一字も説くことを得ざれ。若し、本尊儀軌・眞言を、縦たとい同法の行者と雖も輒たやすく説くことを得ざらしむべし。若し説かば、現前には天あたに中り殃を招き、後に無間獄に墮す」と云云。

【註記】

- ①帥爾…にわかに・軽々しく。
- ②一闡提…仏法を信じないで誹謗し。成仏に縁のない人。
- ③無間…無間地獄。
- ④應化の如來…釈尊。
- ⑤金剛頂經…不空訳『一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』。
- ⑥天…夭折・若死。
- ⑦殃…災い。

【私訳】

問う人が言うに、「すでに頌の言葉はお聞きした。その意味をお説き願いたい」と。答えて言うに、「真言の教法は、一つ一つの声や文字、一つ一つの言葉、一つ一つの語句の意味、一つ一つのその成り立ちに、それぞれ限らない意味を含んでいて、とてもなく長い時間をかけても極めつくすことは難しい。また、一つ一つの文字に三通りの意味がある。いわゆる声・字・実相である。また、二通りの意味がある。字相と字義である。（また）一つ一つの語句に、浅略と深秘の二つの意義がある。（だから）にわかには語ることができない。もし、如実に説けば、根機の小さな人は疑って謗り、決って、仏法を信じないで誹謗し。成仏に縁のない人や、無間地獄に堕ちる人になるだろう。だから、応化身の如來（釈尊）は黙して語らず、仏法を受法した菩薩たちもそのままにして論じなかった。ほんとうの意味はそこにあるのである。その故に『金剛頂經』（『一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』に次のように説いている。「この大日如來の觀法は、未灌頂の者に一字たりとも説いてはならない。もし本尊の儀軌や真言を、たとい同門の行者であつても安易に説いてはいけない。もし説いたら、若死や災いを目の当たりにし、それで済まなければ無間地獄に堕ちる」と。

【原文】

謹承勸誠不敢違越。重請示說初頌文。云九種住心無自性。轉深轉妙皆是因者。此二句遮前所說九種心皆非至極佛果。言九種者異生羝羊心乃至極無自性心是也。就中初一舉凡夫一向行惡行不修微少善。次一顯人乘。次一表天乘。即是外道。下厭下界上欣生天。願樂解脫遂墮地獄。已上三心皆是世間心未名出世。第四唯蘊已後名得聖果。出世心中唯蘊拔業是小乘教。他緣以後大乘心。大乘前二菩薩乘後二佛乘。如此乘乘自乘得佛名望後作戲論。前前皆不住故名無自性。後後悉不果故皆是因轉轉相望各各深妙所以深妙。眞言密教法身說者。此一句顯眞言教主。極無自性以外七教皆是他受用應化佛所說。眞言密教兩部祕藏。是法身大毘盧*舍那如來與自眷屬四種法身。住金剛法界宮及眞言宮殿等。自受法樂故所演說。十八會指歸等其文分明不更引誠證。祕密金剛最勝眞者。此一句示眞言乘教超於諸乘究竟眞實也。

建保六年八月三五未剋書於高野山金剛峯寺如形書寫畢 心蓮院信嚴

【書き下し】

(問う)「謹んで勸誡を承れり。敢えて違越せじ。重ねて請う、初めの頌文を示説せんことを」と。(答う)云わく、「九種の住心は自性無し、轉深轉妙にして皆是れ因なり」とは、此の二句は、前に説く所の九種の心は皆至極佛果に非ずと遮す。九種と言うは、異生羶羊心より極無自性心に至るまで、是れなり。就中、初めの一は凡夫の一向行・惡行・不修微少善を擧げ、次の一は人乗を顯わし、次の一は天乗を表わす。即ち是れ外道なり。下は下界を厭い上は天に生まれるを欣い、解脱を願樂するも遂に地獄に墮す。已上の三心は皆、是れ世間心にして未だ出世と名づけず。第四の唯蘊已後は聖果を得と名づく。出世の心の中、唯蘊拔業は是れ小乗教、他縁以後は大乗心なり。大乘の前の二は菩薩乘、後の二は佛乘なり。此の如くの乗、自乘に佛の名を得るも、後に望んで戲論を作す。前前は皆不住なるが故に名無自性と名づく。後後は悉く不果なるが故に皆是れ因と言う。轉轉相望するに各々深妙なり。所以に深妙と言う。「眞言密教は法身の説」とは、此の一句は眞言の教主を顕わす。極無自性以外の七教は皆是れ他受用應化佛の説く所なり。眞言密教兩部の祕藏は、是れ法身大毘盧舍那如來と自眷屬との四種法身の、金剛法界宮及眞言宮殿等に住し、自受法樂の故に演説する所なり。『十八會指歸』等に其の文分明なれば更に誠證を引かず。「祕密金剛是最勝の眞」とは、此の一句に眞言乘教の諸乗を超えて究竟眞實なるを示す」と。

【註記】

①四種法身…通常は「自性身」「受用身」「變化身」「等流身」。ここはあとに「説法」を言うので「自受用」「他受用」「變化」「等流」と言ったものと解した。

②十八會指歸…不空訳『金剛頂經瑜伽十八會指歸』。

③誠證…經証。

④諸乘…仏教他宗。

【私訳】

(問う人が言うに)「真言の教法(第十住心)の深い意味についての教誡は謹んで聞かせていただいた。まちがっても違背しないように心がけよう。(そこで)重ねてのお願いであるが、初めに説かれた頌文について、もう少し教示願いたい」と。(答えて)言うに、「九種の住心は自性無し、轉深轉妙にして皆是れ因なり」と言ったのは、この二句で、前に説いた九種の住心がみな、究極の仏位ではないと否定したものである。九種とは、第一住心「異生羝羊心」から第九住心「極無自性心」までである。このうち、初めの第一住心は凡夫・衆生ほか生ある者の偏った行動や悪行やわずかな善行も行わないことを挙げ、次の第二住心は人倫の道(人乘)を説き、次の第三住心は天乘の神々を言ったのである。すなわち、外道のことである。下界の人間界以下を避け天上界に生まれるを願ひ、解脱を求めるがとうとう地獄に墮ちてしまう。以上の三住心は煩惱具足の世間心であつて、まだ出世間とは言えない。第四住心の「唯蘊無我」以後は仏果を得たと言える。出世間の住心のなかで、第四住心「唯蘊無我心」と第五住心「拔業因種心」は、これは小乗の教法であり、第六住心「他縁大乘心」のあととは大乘の住心である。大乘の前の二住心、すなわち「他縁大乘心」と第七住心「覺心不生心」は菩薩乘で、あとの二住心、すなわち第八住心「一道無為心」と第九住心「極無自性心」は仏乘である。

以上の各々の住心は、その住心において仏果を得て仏の名を得ているが如くであるが、あとの住心においてはそれはまだまだ「無明」の辺域での言葉の遊びに過ぎない。各々前の住心はそこに留まるステージではないので無自性と言ひ、あとの住心はみな究極の仏果ではないので因位と言ひるのである。心品転昇して前の住心と比べるとそれぞれが意味深くすぐれているのであるから深妙と言う。

「真言密教は法身の説」というのは、この一句で真言教主大日如來のことを言つたのである。第九住心「極無自性心」以外の七つの住心は、みな他受用身あるいは応化身が説く教である。真言密教の金胎兩部の秘法は、法身大日如來が、自眷属

である自受用・他受用・変化・等流の四種の法身とともに、金剛法界宮及び真言宮殿などに住し、自受法樂の故に説いたものである。『十八会指帰』などにその經文は明らかに説かれているので、さらに経証は引用しない。

「祕密金剛是最勝の眞」と言つたのは、この一句に真言密教が他の諸宗を超えて究極の眞実であることを示しているのである」と。

■あどがき

『秘蔵宝鑰』を解読しながら、宗祖大師にお聞きしてみたいことがたびたび頭をよぎった。失礼千万を承知でそれを略記し「あどがき」に代えたいと思う。私の疑問・質問は当然、浅学非才ならではの浅略釈であり、宗祖大師の深秘釈に学びたいのである。

●第一異生羴羊心

食欲と性欲に代表される煩惱のままに我執を生きる私たち人間の日常を、宗祖大師は異生（凡夫・衆生）と言い、羴羊（牡羊）に喩えた。その凡夫・衆生をまた宗祖大師は再三愚者と言うが、その實際を禽獸に求めるまでもなく、私たち人間の画集を生きる日常こそが愚者である。その愚者にとって最も深刻な問題は「生命が生命を食べて生きている」こと。すなわち人間は殺生をして生きていることである。仏教が殺生を戒め、戒律の最初に「不殺生戒」を説くのは、人間にとつては最も深刻な生の命題だからである。私は、慈雲尊者（江戸時代の真言律僧・悉曇学僧）がその『十善法語』において、人間によつて殺され食べられる禽獸に慈悲心を向けて哀れむことが不殺生戒だと言っているのにあきれたことがあるが、愚者も聖者も同じく「生命が生命を食べて生きている」この異生羴羊レベルの本能的生。宗祖大師はこの問題にはふれることなく、ただ「凡夫は狂醉して吾が非を悟らず。但し姪食を念うこと彼の羴羊の如し」と言うのみである。姪食を非と言つてかたづける前に、宗祖大師は「生命が生命を食べて生きている」問題をどうするかお聞きしてみたい。

さらに、この第一住心の最後に、インドの「六派哲学」の一部や「六師外道」やヴェーダの神や「ブドガラ」を説く小乗の「犢子部」も、このケモノに等しい「異生羴羊心」に入れられている。また同じことが第三・第四住心でも「外教」「外道」としてくり返される。インドの「六派哲学」「六師外道」やヴェーダの神や「ブドガラ」を説く小乗の「犢子部」はケモノのレベルか、その真意をお聞きしてみたい。

●第二愚童持齋心

煩惱のままに我執を生きる私たち人間が、「仁」（他者への思いやり）を最初に説く儒家の「五常」や、「布施」（他者への施し）を最初に説く仏教の「十善戒」を守り、節食して他者に施食する「持齋」を行い、他者を先にすることで我執を抑える、そういう社会道德や宗教倫理が芽生える人間のレベルでも、宗祖大師は子供のように未熟な愚童だと言う。宗祖大師は「外の因縁に由つて、忽ち節食を思う。施心萌動して、穀の縁に遇うが如し」と言つたが、「仁」「布施」「節食」を実践して社会道德や宗教倫理に励むことは私には大人の善行だと思えるが、なぜまだ子供のようにな未熟な愚童のレベルなのかお聞きしてみたい。

●第三嬰童無畏心

我執に生きる人間の日常にも宗教心が芽生え、それが高まつて神を意識し、実際に神に祈り、神の棲む天上界に生まれることを求めようとする。宗祖大師はこれを幼な子（嬰童）の次元と言つた。宗祖大師の密教の目から見ると、まだよちよち歩きの幼児に見えるのだろう。しかし、この『秘蔵宝鑑』に説かれた幼な子（嬰童）とは、ヴェーダの聖典やヴェーダに登場するヒンドウの神々である。宗祖大師はこれを「外道は天に生れて暫く蘇息を得。彼の嬰兒と犢子の母に隨うが如し」と言つた。しかし、周知の通り、ヒンドウこそがインドの宗教の主流であり仏教は亜流である。主流の神々を亜流に取り入れて護法善神としておきながら、これを幼な子（嬰童）と片づけていいのだろうか。ヒンドウは客観的に見て立派な世界レベルの宗教である。また、中国の道教はどうなのか。若い頃、山林修行でお世話になつた道教をどう言うのだろうか。さらに、宗祖大師には大変失礼ながら、ご遺誠で、ご入定の後、この第三住心が説く「六欲天」の一つ「兜率天」に往生して、弥勒尊の近くに侍したいと言っている。第十住心の密教世界にあった宗祖大師が第三住心の「兜率天」に死後住するのである、これをどう理解したらいいかお聞きしてみたい。

●第四唯蘊無我心

凡夫・衆生のレベルだった人間の日常を棄てて仏道に入り、修行を重ねて「五蘊皆空」を覺り「人無我」は納得できても「諸法皆空」の「法無我」を覺れない声聞乗の段階。「眼」「耳」「鼻」「舌」「身」「意」の「六根」が無自性・空であっても、その対象である「色」「声」「香」「味」「触」「法」の「六境」が実有では「無我」にはならない。宗祖大師は「唯し、法有を解し、我と人とを皆遮す。羊車の三藏は、悉く此の句に攝す」と言ったが、問題は声聞のレベルの修行者が「人法二空」のレベルに達するのに、何回生れ替ればいいのか、果てしなく長い永遠の時間を修行しなければならない。不可能と言うべきであろう。

一方で、宗祖大師はこの住心に「外道」を説く。ヒンドウの「六波哲学」や部派仏教の「犢子部」である。しかしである、『ヨーガ・スートラ』が説く「八支のヨーガ」やプルシャ・プラクリティのサーンクヤ思想や、ヴェーダーンタ学派が説くブラフマン・アートマン（「梵我一如」）、ミーマンサー学派のバルトリハリが説く「スポータ」、ヴァイシェーシカ学派の六種の「パダ・アルタ」の方が、インドのヒンドウ社会では正統哲学であり釈尊の仏教は異端である。さらに、「犢子部」の「ブドガラ」説は仏教外の「外教」「外道」だろうか。これらはたしかに「有我」「法有」説であるが、ヒンドウでも仏教でも正統の学説である。それを「彼の嬰兒と犢子の母に隨うが如し」と片づけていいのだろうか。お聞きしてみたい。

また、この住心の途中、突如『三教指帰』を思わせる「憂国公子と玄関法師の十四問答」が挿入され、世間的な倫理道德を説く儒家の立場から仏教僧の玄関法師に対して、僧尼の墮落など痛烈な仏教批判が飛ぶのだが、玄関法師は質されている問題には直接答えず、はぐらかし答弁に終始している。なぜ、この住心の途中に、この問答が挿入されるのか。おそらく、南都仏教の現状に照らし、世上僧尼への批判があることを認めつつ、仏教は世間の倫理道德とは次元を異にし、国家にとつては必要不可欠の鎮護国家ツールであることを明かしておきたかったのかと思うが、なぜ憂国公子が質することに玄関法師はまともに答えないのか、なぜこの住心に説かれるのか、これもお聞きしてみたい。

●第五拔業因種心

釈尊が説いた「十二因縁」を追観想して「無明」「宿業」を克服した縁覚（独覚）を、宗祖大師は「身に十二を修し無明種を拔す。業生は已に除き無言の果を得」と言ったが、しかし、黙して語らず自利だけで慈悲利他がないことよりも、私には、「十二因縁」の「無明」の解釈の方がより重要である。

「無明」の原語「アヴィドヤー avidyā」を仏教術語としてよく「無知」と和訳するが、「avidyā」は単に「モノゴトを知らない」とか「知識がない」という意味ではない。私は、自我意識や我執によつて正しくモノゴトを判断できないこと、さらに「煩惱による蒙昧」「生命欲の業火」などと解釈しているが、縁覚（独覚）は独り何によつて「無明」を超克するのか、観想なのかお聞きをしてみたい。

●第六他縁大乘心

「三界唯心」「唯識無境」を説く大乘の瑜伽行唯識を、宗祖大師は「無縁に悲を起して大悲初めて發る。幻影に心を觀じて唯識、境を遮す」と言ったが、肝心の第八識「アーラヤ識」（藏識）のことは何も言わない。とくに「アーラヤ識」は空か有かの問題。さらに瑜伽行の本体である「止（シャマタ）」と「觀（ヴィパシュヤナー）」について。法相を得意としたはずの宗祖大師としたことが、瑜伽唯識を説くのに「化城」などの幻想程度で、「現行」も「習氣」も「種子」も説かずである。なぜなのか、お聞きしてみたい。

●第七覺心不生心

「八不」を説く『中論』は、ほかに「空・仮・中の三諦」や「真俗二諦」を説くが、『中論』が説く「空」は「此れあるが故に彼あり」「彼なければ此れなし」という有名な相對二律の「相依相待」論理で、二律そのものを「空」と言うのではない。宗祖大師は「八不に戲を絶ち、一念に空を觀ず。心原は空寂にして、無相安樂なり」と言うが、「空・仮・中」の「仮」は諸

法の「仮有」「仮設」で、中観派の説く「空」は「一念に空を觀ず。心原は空寂にして、無相安樂」ではない。あらためて、宗祖大師に、『中論』や『般若灯論』が説く中観思想についてお聞きしてみたい。

●第八如實一道心

宗祖大師は、伝教大師最澄の天台宗を「法華一乘」と強調する。この住心では『法華經』が具に説かれ、その「一乘」に声聞・縁覺・菩薩の「三乘」が帰一する。宗祖大師は「一如は本淨にして、境智を俱に融す。此の心性を知るを、號して遮那と曰う」と言うが、「止觀」や「大乘戒」や最澄の「四宗兼學」については言わない。ついでだが、ここに言われる「遮那」とは「盧舍那仏」のことと思われるが、『法華經』に「久遠実成の釈迦牟尼仏」は説かれるが、法身「盧舍那仏」は出てこない。「三車」や「開示悟入」や「多宝塔」もいいが、なぜ「久遠実成の釈迦牟尼仏」と法身の關係が説かれないのか、お聞きしてみたい。

●第九極無自性心

『華嚴經』及び華嚴教學は、「真如」「無礙法界」「海印三昧」「蓮華藏世界」、そして「一即多」「多即一」を説くが、宗祖大師は華嚴の無自性・空を「水は自性無く、風に遇いて即ち波だつ。法界は極まるに非ず、譬を蒙つて忽に進む」と言つて「仮有」と見ている。『即身成仏義』では有名な「重々帝網」に依拠した「即身」を言っているが、法界はまだ極っていないのである。宗祖大師は若い頃、東大寺などで華嚴を相当に学んだはずだし、長安の般若三藏のもとで最新の華嚴學も聞いたはずである。この華嚴が説く「無礙法界」を觀法で觀想したのが禪と密教である。華嚴は「有教無觀」と擲揄されたように觀法をもたなかった。宗祖大師は留学先の長安からの帰路、至るところで禪の抬頭をこの目で具に見たはずであるが、なぜ中国本場の禪を知っていてこれには目もくれなかったのか。宗祖大師の目に禪はどう映っていたのか、お聞きしてみたい。

●第十秘密莊嚴心

満を持しての真言密教の世界であるが、「八葉蓮台」「十六大菩薩」「五相成身」「月輪」「菩提心」もいいが、私は『大日経』『金剛頂経』ばかりでなく『理趣経』にも言及してほしかった。すなわち、第一住心で私が氣にした「生命が生命を食べる」に同じく、『理趣経』の初段に説かれる「十七清浄句」も男女の性愛という生命史・生命論のテーマだからだ。

かつて、『十住心論』を読んだ時、納得する現代文の解説書が見当たらなかったのも、僭越至極を覚悟で独自の「十住心論」を著わしたことがあった（『空海の仏教総合学』ノンブル社）。伝統教学では、この『秘藏宝鑰』を真言僧必修の「十卷章」に入れ、そのためか、あるいは同じ内容の簡略本のためか、巷間、『秘藏宝鑰』の研究や出版の方が『十住心論』よりも多く見られるのは私の錯覚だろうか。今回あらためて『秘藏宝鑰』を一言一句解説してみても、『秘藏宝鑰』には問題が多いように感じた。それはひとえに私の浅学菲才の故であるが、あるいは当らずとも遠からずで、学術や識者の間で言われている問題もあるかも知れない。私は『秘密曼荼羅十住心論』こそが、宗祖大師の遺言だったと思っている。

令和七年 弥生三月

草学道人

長澤弘隆